

京都府遺跡調査報告集

第137冊

1. 河守北遺跡第8次
2. 長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7)・井ノ内遺跡
3. 長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4)・
友岡遺跡・伊賀寺遺跡
4. 京都第二外環状道路関係遺跡
5. 長岡京跡右京第971次(7ANSID-5)・松田遺跡
6. 長岡京跡右京第974次(7ANSID-6)・松田遺跡
7. 女谷・荒坂横穴群第10・11次

2010

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査報告集』として、平成20・21年度に実施した発掘調査のうち、京都府建設交通部、京都府乙訓土木事務所、国土交通省近畿地方整備局、西日本高速道路株式会社関西支社の依頼を受けて実施した、河守北遺跡第8次、長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡、長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡、京都第二外環状道路関係遺跡、長岡京跡右京第971次・松田遺跡、長岡京跡右京第974次・松田遺跡、女谷・荒坂横穴群第10・11次に関する発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、福知山市教育委員会、長岡京市教育委員会、八幡市教育委員会、大山崎町教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

河守北遺跡第8次

長岡京跡右京第952次（7ANGYT-7）・井ノ内遺跡

長岡京跡右京第941次（7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区）・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

京都第二外環状道路関係遺跡

長岡京跡右京第971次（7ANSID-5）・松田遺跡

長岡京跡右京第974次（7ANSID-6）・松田遺跡

女谷・荒坂横穴群第10・11次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 河守北遺跡第8次	福知山市大江町河守	平成21年4月30日～6月16日	京都府建設交通部	柴暁彦
2. 長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡	長岡京市井ノ内横ヶ端・今里5丁目	平成20年9月24日～平成21年1月29日	京都府建設交通部	竹井治雄・高野陽子
3. 長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	長岡京市下海印寺伊賀寺・下内田	平成20年4月24日～10月31日	京都府乙訓土木事務所	増田孝彦・黒坪一樹
4. 京都第二外環状道路関係遺跡	長岡京市奥海印寺荒堀・高山・駿河田、下海印寺菩提寺・方丸・尾流・西条・上内田・下内田・柳井、調子2丁目	平成20年6月17日～平成21年2月26日	国土交通省近畿地方整備局	戸原和人・中川和哉・石尾政信・岡崎研一・村田和弘
5. 長岡京跡右京第971次・松田遺跡	乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁目	平成21年4月21日～6月10日	京都府建設交通部	石尾政信
6. 長岡京跡右京第974次・松田遺跡	乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁目	平成21年6月1日～7月31日	西日本高速道路株式会社関西支社	石尾政信
7. 女谷・荒坂横穴群第10・11次	八幡市大字美濃山荒坂	平成21年1月28日～2月26日、7月10日～平成22年2月25日	西日本高速道路株式会社関西支社	村田和弘・松尾史子

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 河守北遺跡第8次発掘調査報告	1
2. 長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7)・井ノ内遺跡発掘調査報告	11
3. 長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡 ・伊賀寺遺跡発掘調査報告	39
4. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20年度発掘調査報告	117
5. 長岡京跡右京第971次(7ANSID-5)・松田遺跡発掘調査報告	181
6. 長岡京跡右京第974次(7ANSID-6)・松田遺跡発掘調査報告	189
7. 女谷・荒坂横穴群第10・11次発掘調査報告	199

付表目次

3. 長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	
付表1 石器観察表	111
4. 京都第二外環状道路関係遺跡	
付表2 平成20年度第二外環状道路建設に伴う調査一覧表	118

挿図目次

1. 河守北遺跡第8次	
第1図 調査地位位置図および周辺遺跡分布図	1
第2図 調査トレンチ配置図	2
第3図 調査地土層図	3
第4図 検出遺構平面図	4
第5図 溝S D01・02・18~20実測図	6
第6図 ビット断面実測図	7
第7図 出土遺物実測図(1)	8
第8図 出土遺物実測図(2)	9
2. 長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7)・井ノ内遺跡	
第1図 調査地位位置図	11

第2図	トレンチ配置図	12
第3図	第1トレンチ遺構図	14
第4図	第1トレンチ土層断面図	14
第5図	第1トレンチ溝S D01・25実測図	15
第6図	第2トレンチ遺構図	16
第7図	第2トレンチ土層断面図・井戸跡S E01実測図	18
第8図	第2トレンチ竪穴式住居跡S H12-A・S H12-B・S H26実測図	19
第9図	第2トレンチ掘立柱建物跡S B03・04実測図	20
第10図	第2トレンチ掘立柱建物跡S B05実測図	21
第11図	第2トレンチ掘立柱建物跡S B06実測図	22
第12図	第2トレンチ掘立柱建物跡S B07実測図	22
第13図	第3・4トレンチ遺構図	23
第14図	第3・4トレンチ土層断面図	24
第15図	第3トレンチ溝S D44実測図	24
第16図	第4トレンチ溝S D04実測図	25
第17図	第5トレンチ配置図	25
第18図	出土遺物実測図(1)	27
第19図	出土遺物実測図(2)	28
第20図	出土遺物実測図(3)	29
第21図	出土遺物実測図(4)	31
第22図	出土遺物実測図(5)	32

3. 長岡京跡右京第941次(7ANOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

第1図	調査地位置図	39
第2図	トレンチ配置図	40
第3図	土層柱状図	41
第4図	上層遺構平面図	42
第5図	溝S D368・369平・断面図	43
第6図	溝S D368・369出土遺物実測図	44
第7図	土坑S K347平・断面図、出土遺物実測図	45
第8図	竪穴式住居跡S H340実測図	46
第9図	竪穴式住居跡S H345実測図、出土遺物実測図	47
第10図	竪穴式住居跡S H350実測図、出土遺物実測図	48
第11図	竪穴式住居跡S H370実測図、出土遺物実測図	49
第12図	竪穴式住居跡S H370実測図、出土遺物実測図	50

第13図	竪穴式住居跡 S H373実測図、出土遺物実測図	51
第14図	竪穴式住居跡 S H380実測図、出土遺物実測図	52
第15図	竪穴式住居跡 S H384実測図、出土遺物実測図	53
第16図	掘立柱建物跡 S B490実測図、出土遺物実測図	54
第17図	柱穴・包含層出土遺物実測図	55
第18図	下層遺構平面図	56
第19図	竪穴式住居跡 S H450・500-1・2実測図	57
第20図	竪穴式住居跡 S H440・520実測図	58
第21図	竪穴式住居跡 S H400・550実測図	59
第22図	竪穴式住居跡 S H590実測図	59
第23図	土坑 S P503、墓 S T545、不明遺構 S X570実測図	60
第24図	土坑 S K637、柱穴 S P437・436、不明遺構 S X346実測図	61
第25図	土坑 S K507・530・540・588実測図	62
第26図	墓 S T554・555・620、土坑 S K609・697-1・2実測図	64
第27図	出土遺物実測図(1) 縄文土器	66
第28図	出土遺物実測図(2) 縄文土器	67
第29図	出土遺物実測図(3) 縄文土器	69
第30図	出土遺物実測図(4) 縄文土器	70
第31図	出土遺物実測図(5) 縄文土器	72
第32図	出土遺物実測図(6) 縄文土器	73
第33図	出土遺物実測図(7) 縄文土器	74
第34図	出土遺物実測図(8) 土製品	75
第35図	出土遺物実測図(9) 石鏃	77
第36図	出土遺物実測図(10) 石鏃	79
第37図	出土遺物実測図(11) 石鏃	81
第38図	出土遺物実測図(12) 石鏃	83
第39図	出土遺物実測図(13)	84
第40図	出土遺物実測図(14)	86
第41図	出土遺物実測図(15)	87
第42図	出土遺物実測図(16)	88
第43図	出土遺物実測図(17)	89
第44図	出土遺物実測図(18)	90
第45図	出土遺物実測図(19)	91
第46図	出土遺物実測図(20)	92
第47図	出土遺物実測図(21)	94

第48図	出土遺物実測図(22)	96
第49図	出土遺物実測図(23)	97
第50図	出土遺物実測図(24)	98
第51図	出土遺物実測図(25)	99
第52図	出土遺物実測図(26)	100
第53図	出土遺物実測図(27)	102
第54図	出土遺物実測図(28)	103
第55図	出土遺物実測図(29)	104
第56図	出土遺物実測図(30)	106

4. 京都第二外環状道路関係遺跡

第1図	調査地及び主要遺跡分布図	119
第2図	調査地位置図	120
第3図	上内田地区調査トレンチ配置図	121
第4図	上内田地区遺構配置図	122
第5図	上内田地区出土縄文土器	123
第6図	上内田-1地区流路S D1001土層断面図	123
第7図	上内田-2地区流路S D2001土層断面図	124
第8図	上内田-1地区土坑S K05・07・1009～1015実測図	125
第9図	上内田-2地区溝S D2002～2004実測図	126
第10図	上内田-1地区中世耕作溝群実測図	126
第11図	上内田地区出土遺物実測図(1)	127
第12図	上内田地区出土遺物実測図(2)	128
第13図	上内田地区出土遺物実測図(3)	129
第14図	上内田地区出土遺物実測図(4)	130
第15図	伊賀寺地区・樽井地区調査トレンチ配置図	131
第16図	伊賀寺地区・樽井地区遺構配置図	132
第17図	伊賀寺地区土層断面図	133
第18図	土坑S K03・竪穴式住居跡S H05・掘立柱建物跡S B06実測図	134
第19図	伊賀寺地区出土遺物実測図(1)	135
第20図	伊賀寺地区出土遺物実測図(2)	136
第21図	樽井地区(東壁)土層断面図	138
第22図	樽井地区(北壁)土層断面図	139
第23図	樽井地区出土遺物実測図	139
第24図	下内田地区トレンチ配置図	140

第25図	下内田地区土層断面図	141
第26図	方丸・尾流・菩提寺地区トレンチ配置図	143
第27図	方丸地区平面図	143
第28図	方丸地区土層断面図	144
第29図	菩提寺地区平面図	144
第30図	菩提寺地区土層断面図	145
第31図	駿河田地区トレンチ配置図	145
第32図	駿河田地区平面図	145
第33図	駿河田地区土層断面図	146
第34図	駿河田地区トレンチ配置図	147
第35図	駿河田地区土層断面図	147
第36図	尾流地区平面図	148
第37図	方丸地区平面図	148
第38図	尾流・方丸地区土層断面図	148
第39図	方丸地区出土遺物実測図	149
第40図	西条地区トレンチ配置図	150
第41図	西条地区土層断面図(1)	151
第42図	西条地区土層断面図(2)	153
第43図	荒堀・高山地区トレンチ配置図	155
第44図	荒堀地区土層断面図(1)	156
第45図	荒堀地区土層断面図(2)	157
第46図	荒堀地区第4・6トレンチ平面図	157
第47図	高山地区土層断面図	158
第48図	高山地区トレンチ平面図	159
第49図	西条地区調査トレンチ配置図	160
第50図	西条地区遺構配置図	161
第51図	西条-1地区土層断面図	162
第52図	西条-1地区不明遺構 S X95702・95704・95710実測図	162
第53図	西条-1地区掘立柱建物跡・柵列実測図	163
第54図	西条-1地区溝SD95701実測図	164
第55図	西条-2地区土層断面図	164
第56図	西条地区出土遺物実測図	165
第57図	尾流地区調査トレンチ配置図	167
第58図	尾流地区遺構配置図	167
第59図	尾流地区土層断面図	168

第60図	尾流地区土坑 S K 80・97・105・106実測図	169
第61図	尾流地区竪穴式住居跡 S H 58・土坑 S K 93・94実測図	170
第62図	尾流地区掘立柱建物跡 S B 06・60、櫛列 S A 15実測図	171
第63図	尾流地区掘立柱建物跡 S B 45実測図	172
第64図	尾流地区土坑 S K 05実測図	172
第65図	尾流地区中・近世溝群実測図	172
第66図	尾流地区出土遺物実測図(1)	173
第67図	尾流地区出土遺物実測図(2)	174
第68図	尾流地区出土遺物実測図(3)	175
第69図	尾流地区出土遺物実測図(4)	177
第70図	尾流地区出土遺物実測図(5)	178

5. 長岡京跡右京第971次(7ANSID-5)・松田遺跡

第1図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	181
第2図	調査地土層図	182
第3図	調査地平面図	183
第4図	竪穴式住居跡 S H 02実測図	184
第5図	土坑 S K 05・S K 06実測図	185
第6図	出土遺物実測図(1)	185
第7図	出土遺物実測図(2)	186
第8図	周辺調査における遺構配置	188

6. 長岡京跡右京第974次(7ANSID-6)・松田遺跡

第1図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	189
第2図	調査地土層図	190
第3図	調査地平面図	191
第4図	竪穴式住居跡 S H 01実測図	192
第5図	竪穴式住居跡 S H 10実測図	193
第6図	土坑 S K 08実測図	193
第7図	出土遺物実測図	194
第8図	周辺調査における遺構配置	197

7. 女谷・荒坂横穴群第10・11次発掘調査報告

第1図	調査地及び周辺遺跡分布図	199
第2図	調査地トレンチ配置図	200

第3図	検出遺構配置図	201
第4図	A・B地区土層断面図	203
第5図	第1トレンチ土層図	204
第6図	横穴S X 1実測図	206
第7図	横穴S X 1遺物出土状況図	207
第8図	横穴S X 1出土遺物実測図	208
第9図	横穴S X 2実測図	209
第10図	横穴S X 2遺物出土状況図	210
第11図	横穴S X 2墓道内遺物出土状況図	211
第12図	横穴S X 2出土遺物実測図	212
第13図	土坑S K 6実測図	213
第14図	土坑S K 6出土遺物実測図	213
第15図	第2トレンチ土層実測図	214

図版目次

1. 河守北遺跡第8次

- 図版第1 (1)河守城跡からの遠景(南西から)
(2)調査前の状況(北から)
(3)掘削前の状況(北から)
- 図版第2 主要遺構全景(南西から)
- 図版第3 上層遺構近景(北東から)
- 図版第4 (1)土層堆積状況(北西から)
(2)土層堆積状況(北西から)
(3)土層堆積状況(北西から)
- 図版第5 (1)溝SD02検出状況近景(北西から)
(2)調査地全景(南西から)
(3)溝・ピット検出状況(南西から)
- 図版第6 (1)溝SD01(右)および溝SD02掘削状況(北東から)
(2)検出遺構近景(北東から)
(3)溝SD19検出状況(南東から)
- 図版第7 (1)溝SD19および溝SD20検出状況(南東から)
(2)溝SD18検出状況(南東から)
(3)溝SD18蓋板検出状況(南東から)

- 図版第8 (1)溝SD18蓋石・蓋板除去後(南東から)
(2)溝SD19(中央)および溝SD20(左)の状況(南東から)
- 図版第9 (1)溝SD01杭列の状況(南東から)
(2)溝SD01杭列の状況(北西から)
(3)溝SD02完掘状況(北東から)
- 図版第10 (1)溝SD20断面状況(南東から)
(2)溝SD03掘削状況(北西から)
(3)溝SD02南半部の状況(北東から)
- 図版第11 (1)溜め榊全景(北西から)
(2)溜め榊近景(南西から)
(3)溝SD02屈曲部近景(南西から)
- 図版第12 出土遺物

2. 長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7)・井ノ内遺跡

- 図版第1 (1)第1・5トレンチ調査前風景(東から)
(2)第1トレンチ全景(西から)
(3)第1トレンチ溝SD01(西三坊大路西側溝、南から)
- 図版第2 (1)第1トレンチ溝SD01(西三坊大路西側溝)土器出土状況(上が東)
(2)第1トレンチ溝SD01(西三坊大路西側溝)土層堆積状況(北から)
(3)第1トレンチ溝SD25(宅地内溝)検出状況(南から)
- 図版第3 (1)第1トレンチ溝SD25(宅地内溝)完掘状況(北から)
(2)第1トレンチ土坑SK18土層堆積状況(北から)
(3)第1トレンチ溝SD01偶蹄動物足跡
- 図版第4 (1)第2トレンチ調査前全景(西から)
(2)第2トレンチ西区西半部全景(東から)
(3)第2トレンチ掘立柱建物跡SB05(北東から)
- 図版第5 (1)第2トレンチ西区東半部全景(西から)
(2)第2トレンチ西区掘立柱建物跡SB06(東から)
(3)第2トレンチ西区掘立柱建物跡SB06-P3検出状況(上が西)
- 図版第6 (1)第2トレンチ中区全体(西から)
(2)第2トレンチ中区井戸SE01・柱穴群検出状況(西から)
(3)第2トレンチ中区井戸SE01完掘状況(東から)
- 図版第7 (1)第2トレンチ東区全体(西から)
(2)第2トレンチ東区掘立柱建物跡SB03・04検出状況(東から)
(3)第2トレンチ東区掘立柱建物跡SB03・04完掘状況(西から)

- 図版第8 (1)第2トレンチ東区掘立柱建物跡SB03-P24検出状況(上が北)
 (2)第2トレンチ東区SK91土層堆積状況(南から)
 (3)第2トレンチ東区掘立柱建物跡SB06-P3土層堆積状況(南から)
- 図版第9 (1)第2トレンチ東区全体完掘状況(東から)
 (2)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH26(東から)
 (3)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-A・B、SH26完掘状況(西から)
- 図版第10 (1)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-A・B(南から)
 (2)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-B(北から)
 (3)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-B土器出土状況(西から)
- 図版第11 (1)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-B土器出土状況(南西から)
 (2)第2トレンチ東区竪穴式住居跡SH12-B土器出土状況(部分)(南から)
 (3)第2トレンチ東区土坑SK91(主柱穴)土器出土状況(上が東)
- 図版第12 (1)第3トレンチ全景(南から)
 (2)第3トレンチ柱穴群検出状況(上が南)
 (3)第3トレンチ溝SD44(南西から)
- 図版第13 (1)第3トレンチ溝SD44南半部土器出土状況(北東から)
 (2)第3トレンチ溝SD44北半部土器出土状況(南から)
 (3)第3トレンチ溝SD44南半部土器出土状況(部分、北西から)
- 図版第14 (1)第3トレンチ溝SD44南半部土器出土状況(部分、上が南)
 (2)第3トレンチ溝SD44北半部土器出土状況(部分、上が北)
 (3)第3トレンチ溝SD44北半部土器出土状況(上が西)
- 図版第15 (1)第3トレンチ溝SD44完掘状況(北から)
 (2)第3トレンチ溝SD44完掘状況(南西から)
 (3)第5トレンチ全景(西から)
- 図版第16 (1)第4トレンチ全景(東から)
 (2)第4トレンチ溝SD04全景(東から)
 (3)第4トレンチ溝SD04全景完掘状況(北西から)
- 図版第17 出土遺物(1)
- 図版第18 (1)出土遺物(2)
 (2)出土遺物(3)
- 図版第19 出土遺物(4)
- 図版第20 (1)出土遺物(5)
 (2)出土遺物(6)

- 図版第1 (1)調査地全景(上が北)
(2)8トレンチ全景(上が南東)
- 図版第2 (1)上層遺構全景(北東から)
(2)トレンチ全景(北東から)
- 図版第3 (1)調査前全景(北から)
(2)溝SD368・369全景(東から)
(3)溝SD368・369全景(西から)
- 図版第4 (1)土坑SK347(北東から)
(2)竪穴式住居跡SH340(北西から)
(3)竪穴式住居跡SH345(北東から)
- 図版第5 (1)竪穴式住居跡SH345 竈近景(北東から)
(2)竪穴式住居跡SH350(南東から)
(3)竪穴式住居跡SH370-1・2(南西から)
- 図版第6 (1)竪穴式住居跡SH370-2 竈近景(南西から)
(2)竪穴式住居跡SH370-2 遺物出土状況(北西から)
(3)竪穴式住居跡SH370-1 遺物出土状況(北西から)
- 図版第7 (1)竪穴式住居跡SH373(北東から)
(2)竪穴式住居跡SH380(北から)
(3)竪穴式住居跡SH384(北東から)
- 図版第8 (1)竪穴式住居跡SH384竈近景(北東から)
(2)竪穴式住居跡SH384柱穴遺物出土状況(南東から)
(3)掘立柱建物跡SB490(北西から)
- 図版第9 (1)竪穴式住居跡SH450、500-1・2(南東から)
(2)竪穴式住居跡SH450、500-1・2(北西から)
(3)竪穴式住居跡SH450(北東から)
- 図版第10 (1)竪穴式住居跡SH440・550・400、土坑SK637(北東から)
(2)竪穴式住居跡550・400(東から)
(3)竪穴式住居跡SH440(南東から)
- 図版第11 (1)竪穴式住居跡SH520、土坑SK544(南から)
(2)竪穴式住居跡SH590、土坑SK588(北東から)
(3)トレンチ南端土坑群(南西から)
- 図版第12 (1)トレンチ南端土坑群(東から)
(2)土坑SK222断面、竪穴式住居跡SH520(南西から)
(3)土坑SK544・621(南から)
- 図版第13 (1)土坑SK507(南から)

- (2) 柱穴SP436 遺物出土状況(東から)
 (3) 柱穴SP437遺物出土状況(南西から)
- 図版第14 (1) 墓ST545(南から)
 (2) 墓ST620(南東から)
 (3) 墓ST554(南から)
- 図版第15 (1) 柱穴SP559(南から)
 (2) 土坑SK540(南から)
 (3) 不明土坑SX346(南東から)
- 図版第16 (1) 土坑SK588磔検出状況(北西から)
 (2) 土坑SK530磔検出状況(南西から)
 (3) 土坑SP503磔検出状況(南から)
- 図版第17 出土遺物 1
 図版第18 出土遺物 2
 図版第19 出土遺物 3
 図版第20 出土遺物 4
 図版第21 出土遺物 5
 図版第22 出土遺物 6
 図版第23 出土遺物 7
 図版第24 出土遺物 8
 図版第25 出土遺物 9
 図版第26 出土遺物10
 図版第27 出土遺物11
 図版第28 出土遺物12

4. 京都第二外環状道路関係遺跡

長岡京跡右京第 937 次・伊賀寺遺跡

- 図版第 1 (1) 上内田地区遠景(北東上空から)
 (2) 上内田地区全景(上空から、右が北)
- 図版第 2 (1) 上内田-1 地区土坑SK1009~1015近景(南西から)
 (2) 上内田-2 地区溝 S D2001~2004近景(南西から)
- 図版第 3 (1) 上内田-1 地区素掘り溝群近景(東から)
 (2) 上内田-1 地区素掘り溝群近景(南から)
 (3) 上内田-1 地区溝SD1001(C-C')堆積状況(西北西から)
- 図版第 4 (1) 上内田-1 地区溝SD1001(B-B')堆積状況(南西から)
 (2) 上内田-1 地区溝SD1001(A-A')堆積状況(南東から)

(3) 上内田-1 地区石包丁出土状況(東から)

図版第5 (1) 上内田-2 地区溝SD2001(G-G')堆積状況(南西から)

(2) 上内田-2 地区溝SD2001(G-G')堆積状況(北西から)

(3) 上内田-2 地区溝SD2001(E-E')堆積状況(北東から)

図版第6 (1) 上内田-2 地区溝SD2001(E-E')堆積状況(北東から)

(2) 上内田-2 地区溝SD2002~2004・柱穴群近景(東から)

(3) 上内田-2 地区柱穴群近景(西から)

図版第7 上内田地区出土遺物(1)

図版第8 上内田地区出土遺物(2)

長岡京跡右京第947次・伊賀寺遺跡

図版第9 (1) 伊賀寺地区調査地全景(南上空から)

(2) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05(左)・SH02(右)(上空から、上が南西)

図版第10 (1) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05近景(北東から)

(2) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05袋状土坑出土状況(北西から)

(3) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05袋状土坑完掘状況(北西から)

図版第11 (1) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05土器出土状況(北西から)

(2) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05袋状土坑断面(北東から)

(3) 伊賀寺地区溝SD01近景(南から)

図版第12 (1) 伊賀寺地区土坑SK03断面(南から)

(2) 伊賀寺地区土坑SK03近景(東から)

(3) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH02・土坑SK03近景(東から)

図版第13 (1) 伊賀寺地区掘立柱建物跡SB06(東から)

(2) 伊賀寺地区トレンチ南壁断面・溝SD04近景(北から)

(3) 伊賀寺地区トレンチ東部断ち割り断面(南から)

図版第14 (1) 伊賀寺地区出土遺物(1)

(2) 伊賀寺地区出土遺物(2)

図版第15 (1) 樽井地区全景(北西から)

(2) 樽井地区北壁断面(南から)

(3) 樽井地区出土遺物

図版第16 (1) 下内田地区第1トレンチ近景(北西から)

(2) 下内田地区第2トレンチ近景(北東から)

(3) 下内田地区第3トレンチ近景(南から)

長岡京跡右京第947次・下海印寺遺跡

図版第17 (1) 方丸地区調査地近景(南から)

(2) 方丸地区拡張後近景(南東から)

- (3) 方丸地区南東部近景(西から)
- 図版第18 (1) 菩提寺地区調査地近景(南東から)
 (2) 菩提寺地区南東部近景(北東から)
 (3) 駿河田地区調査地近景(北西から)
- 図版第19 (1) 駿河田地区調査地全景(南東から)
 (2) 駿河田地区調査地近景(南西から)
 (3) 駿河田地区断面(B-B')(南東から)
- 図版第20 (1) 方丸地区調査地近景(南西から)
 (2) 方丸地区断面(A-A')(東から)
 (3) 方丸地区遺物出土状況(南東から)
- 図版第21 (1) 方丸地区土坑SK01近景(南西から)
 (2) 尾流地区調査地近景(北西から)
 (3) 尾流地区断面(A-A')(北西から)
- 図版第22 (1) 西条地区第5トレンチ・土塁遺構全景(南東から)
 (2) 西条地区第5トレンチ・溝SD01近景(南東から)
- 図版第23 (1) 西条地区第1トレンチ近景(西から)
 (2) 西条地区第1トレンチ南東部(北西から)
 (3) 西条地区第2トレンチ近景(西から)
- 図版第24 (1) 西条地区第4トレンチ拡張部近景(南東から)
 (2) 西条地区第5トレンチ東部近景(東から)
 (3) 西条地区第5トレンチ溝SD01内遺物出土状況(南から)
- 図版第25 (1) 西条地区第6トレンチ近景(北西から)
 (2) 西条地区第6トレンチ溝SD01断面(北から)
 (3) 西条地区第6トレンチ近景(東から)

長岡京跡右京第956次・奥海印寺遺跡

- 図版第26 (1) 荒堀地区第1～3トレンチ全景(東から)
 (2) 荒堀地区第2トレンチ近景(東から)
 (3) 荒堀地区第2トレンチ拡張部南壁(北東から)
- 図版第27 (1) 荒堀地区第4～6トレンチ全景(西から)
 (2) 荒堀地区第4トレンチ近景(西から)
 (3) 荒堀地区第4トレンチ池沼遺構(南東から)
- 図版第28 (1) 荒堀地区第6トレンチ近景(西から)
 (2) 高山地区トレンチ全景(南東から)
 (3) 高山地区トレンチ断ち割り断面(北から)

長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡

- 図版第29 (1) 西条-1 地区近景(西から)
(2) 西条-2 地区近景(北東から)
- 図版第30 (1) 西条-1 地区西壁断面(東から)
(2) 西条-1 地区調査地断面(A-A')(南東から)
(3) 西条-1 地区調査地断面(B-B')(東から)
- 図版第31 (1) 西条-1 地区不明遺構SX95704近景(東から)
(2) 西条-1 地区不明遺構SX95702近景(東から)
(3) 西条-1 地区不明遺構SX95702焼土断ち割り(西から)
- 図版第32 (1) 西条-1 地区掘立柱建物跡SB95705近景(北から)
(2) 西条-1 地区掘立柱建物跡SB95706近景(北西から)
(3) 西条-1 地区柵列SA95709近景(西から)
- 図版第33 (1) 西条-1 地区溝SD95701断面・遺物出土状況(東から)
(2) 西条-1 地区溝SD95701近景(東から)
(3) 西条-2 地区遺物出土状況(東から)
- 図版第34 方丸地区・西条地区出土遺物(石製巡方のみ第956次方丸地区出土)

長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡

- 図版第35 (1) 尾流地区調査地西南部土坑SK97検出状況(北西から)
(2) 尾流地区土坑SK80検出状況(北から)
(3) 尾流地区土坑SK80完掘状況(南から)
- 図版第36 (1) 尾流地区土坑SK97検出状況(北から)
(2) 尾流地区土坑SK97完掘状況(南から)
(3) 尾流地区土坑SK105上層検出状況(北から)
- 図版第37 (1) 尾流地区土坑SK105下層検出状況(南から)
(2) 尾流地区土坑SK93検出状況(東から)
(3) 尾流地区竪穴式住居跡SH58検出状況(東から)
- 図版第38 (1) 尾流地区竪穴式住居跡SH58完掘状況(東から)
(2) 尾流地区竪穴式住居跡SH58内遺物出土状況(北から)
(3) 尾流地区貯蔵穴SK94検出状況(北から)
- 図版第39 (1) 尾流地区竪穴式住居跡SH58内炉跡SK93検出状況(北から)
(2) 尾流地区竪穴式住居跡SH58内砥石出土状況(北から)
(3) 尾流地区土坑SK54検出状況(西から)
- 図版第40 (1) 尾流地区掘立柱建物跡SB06検出状況(西から)
(2) 尾流地区掘立柱建物跡SB60検出状況(北から)
(3) 尾流地区土坑SK05検出状況(南から)
- 図版第41 尾流地区出土遺物(1)

図版第42 尾流地区出土遺物(2)

図版第43 尾流地区出土遺物(3)

図版第44 尾流地区出土遺物(4)

5. 長岡京跡右京第971次(7ANSID-5)・松田遺跡

図版第1 竪穴式住居跡SH02全景(東から)

図版第2 (1)調査前風景(南西から)

(2)調査地全景(西から)

(3)竪穴式住居跡SH02焼土層・炭化材検出状況(西から)

図版第3 (1)竪穴式住居跡SH02南東部の焼土層・炭化材検出状況(南東から)

(2)土坑SK05土器出土状況(南から)

(3)土坑SK06土器出土状況(西から)

図版第4 (1)竪穴式住居跡SH02土器出土状況(北西から)

(2)竪穴式住居跡SH02土器出土状況(北西から)

(3)竪穴式住居跡SH02土器出土状況(南西から)

図版第5 (1)竪穴式住居跡SH02遺物出土状況(東から)

(2)竪穴式住居跡SH02竈検出状況(南東から)

(3)竪穴式住居跡SH02貯蔵穴土器出土状況(南東から)

図版第6 (1)竪穴式住居跡SH02完掘状況(東から)

(2)竪穴式住居跡SH02竈断割り状況(南東から)

(3)トレンチ東壁断面(西から)

図版第7 出土遺物1

図版第8 出土遺物2

6. 長岡京跡右京第974次(7ANSID-6)・松田遺跡

図版第1 (1)調査地全景(北東から)

(2)トレンチ全景(上が北)

図版第2 (1)トレンチ全景(北東から)

(2)トレンチ全景(南西から)

(3)トレンチ全景(北から)

図版第3 (1)竪穴式住居跡SH01全景(南東から)

(2)竪穴式住居跡SH01竈周辺土器出土状況(北西から)

(3)竪穴式住居跡SH01北西柱穴(南から)

図版第4 (1)竪穴式住居跡SH01土器出土状況(西から)

(2)竪穴式住居跡SH10土器出土状況(北東から)

- (3) 竪穴式住居跡SH10土器出土状況(南から)
- 図版第5 (1) 竪穴式住居跡SH01竪検出状況(南東から)
(2) 竪穴式住居跡SH01竪断面状況(南東から)
(3) 土坑SK08アゼ断面(北から)
- 図版第6 (1) 竪穴式住居跡SH10アゼ断面(北東から)
(2) 竪穴式住居跡SH10完掘状況(北東から)
(3) トレンチ西壁断面(東から)
- 図版第7 出土遺物 1
- 図版第8 出土遺物 2

7. 女谷・荒坂横穴群第10・11次

- 図版第1 (1) 調査前状況(西から)
(2) 横穴検出状況(南東から)
(3) 作業状況(北から)
- 図版第2 横穴SX1・2全景(東から)
- 図版第3 (1) 横穴SX1・2全景(南東から)
(2) 横穴SX1・2・5検出状況(南東から)
- 図版第4 (1) 横穴SX1全景(南東から)
(2) 横穴SX1玄室入り口(南東から)
(3) 横穴SX1全景(北西から)
- 図版第5 (1) 横穴SX1玄室入り口付近断面(北東から)
(2) 横穴SX1墓道中央付近断面(南東から)
(3) 横穴SX1墓道先端付近断面(南東から)
(4) 横穴SX1玄室内土器出土状況(北西から)
- 図版第6 (1) 横穴SX1玄室内土器出土状況(北から)
(2) 横穴SX1耳環出土状況(北東から)
(3) 横穴SX1鉄鍬(11)出土状況(北から)
(4) 横穴SX1鉄鍬(12)出土状況(北東から)
- 図版第7 (1) 横穴SX2全景(南東から)
(2) 横穴SX2玄室入り口(南東から)
(3) 横穴SX2全景(北西から)
- 図版第8 (1) 横穴SX2墓道内通路検出状況(東から)
(2) 横穴SX2墓道断面(南東から)
(3) 横穴SX2墓道内土坑断面(南東から)
(4) 横穴SX2墓道内通路遺物出土状況(南から)

- 図版第9 (1)横穴SX2 遺物出土状況(南東から)
(2)横穴SX2 提瓶出土状況(北東から)
(3)横穴SX2 耳環出土状況(北から)
(4)横穴SX2 玄室内遺物出土状況(北西から)
- 図版第10 (1)土坑SK6 検出状況(南西から)
(2)調査地西部検出谷部(南西から)
(3)横穴SX3・4 検出状況(北東から)
(4)2トレンチ全景(南から)
- 図版第11 出土遺物1
- 図版第12 出土遺物2

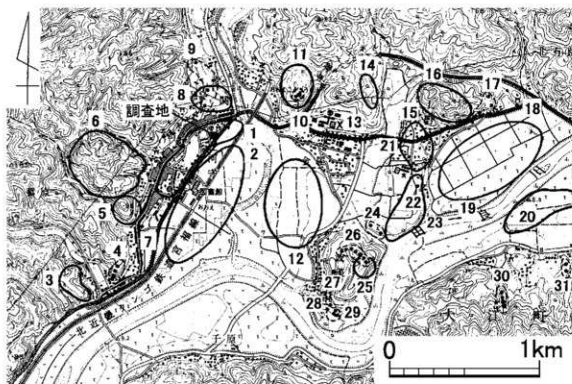
1.河守北遺跡第8次発掘調査報告

1. はじめに

河守北遺跡は京都府福知山市大江町河守に所在する。当遺跡の東側には、近畿地方北部の由良川が流れ、北側はその支流である宮川が流れ、遺跡は両河川を望む低位段丘上に位置している。

今回の発掘調査は国道175号新設改良工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査面積は150㎡である。発掘調査は平成21年4月30日～同6月16日まで行った。現地調査は調査第2課課長補佐兼第1係長小池寛、主査調査員柴嶋彦が担当した。

調査地背後の丘陵には、河守城などの中世城郭の曲輪に伴う平坦面が残っており、山麓には中世から続く神社・仏閣が存在し、また山麓沿いには丹後宮津へ抜ける街道が通り、宿場町として栄えていた。現在も旧街道に沿って短冊状に広がる町並みの景観が残っている。調査期間中は京



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 河守)

- | | | | | |
|------------|------------|---------------|-----------|-------------|
| 1. 河守北遺跡 | 2. 河守遺跡 | 3. 蓼原城跡 | 4. ツカ古墳群 | 5. 新治城跡 |
| 6. 河守城跡 | 7. 新町古墳 | 8. 段遺跡 | 9. 段古墳群 | 10. 小山端古墳群 |
| 11. 金屋城跡 | 12. 金屋波美遺跡 | 13. 芝居原遺跡 | 14. 柏谷遺跡 | 15. 上野古墳 |
| 16. 阿良須城跡 | 17. 阿良須古墳群 | 18. 阿良須神社境内古墳 | 19. 阿良須遺跡 | |
| 20. 高川原遺跡 | 21. 上野遺跡 | 22. 大良古墳 | 23. 平遺跡 | 24. 仲仙古墳群 |
| 25. 波美城跡 | 26. 波美古墳群 | 27. 大久保古墳 | 28. 宮裏古墳 | 29. 波美宮山古墳群 |
| 30. 大山田古墳群 | 31. 丸山古墳群 | | | |

都府教育委員会、福知山市教育委員会、地元住民の方々、調査補助員にお世話になった。記して感謝する。本調査報告は柴が執筆した。

2. 調査概要

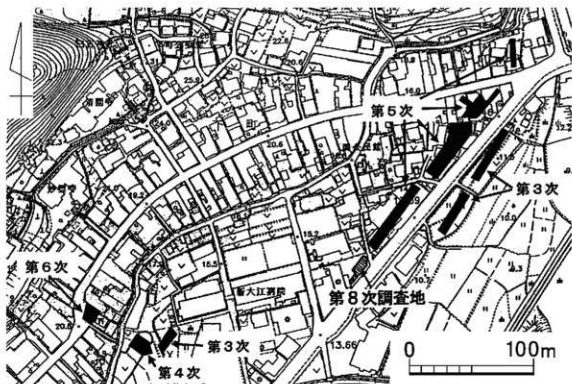
発掘調査は、重機により現代の盛り土層および近世以後に堆積した層を除去した後、人力により遺構精査および掘削作業を行った。以下にその概略を述べる。

層序(第3図)を見ると、既存建物の解体撤去後に0.6～1m程度盛り土がなされており(1層)、この層は土壌改良剤により地盤改良がなされ、固くしまった土層であった。その下層に2面の水田面(2・3層)が存在した。さらに洪水層(5層)を介してもう1面の水田面(6層:18世紀)がある。水田面の下には17世紀の遺構検出面があり(7層)、その直下に磨滅した土器片を含む包含層(8層)が堆積している。遺物包含層からは、古墳時代から近世にいたる時代の土器や古代の瓦、中世の軒平瓦、土錘などの遺物が出土した。包含層を除去した面は古墳時代中期(5世紀前半)の遺構検出面であった。

1) 検出遺構(第4図)

(1) 下層遺構 断面では包含層から遺構が掘り込まれていることが確認できたが、平面では包含層を除去した段階で明確に検出できた。遺構には5世紀代の土坑およびピットが含まれるが、大半は時期不明の土坑・柱穴群である。古代・中世・近世の遺構も含まれると考えられる。5世紀前半の遺構は、調査範囲が狭いため、建物としての復元は不可能であった。

そのなかで、土坑S K46は長さ約1m、深さ0.3mを測る長楕円形の土坑である。埋土は暗茶

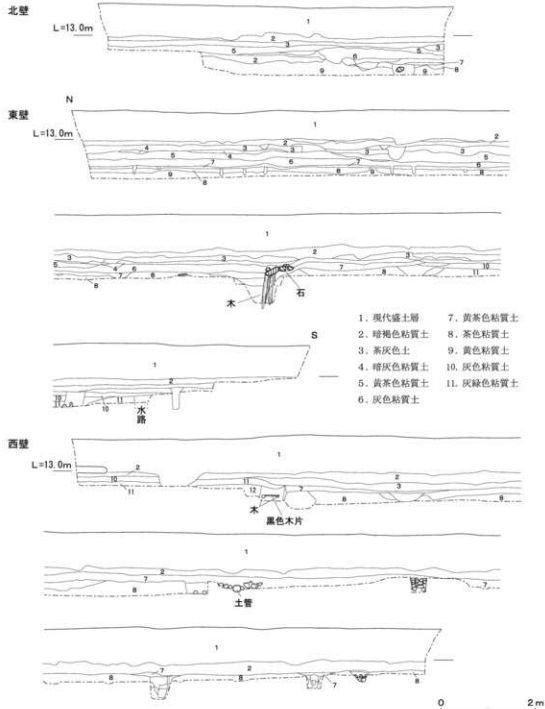


第2図 調査トレンチ配置図(「福知山市文化財調査報告書」第53集 第1図に加筆)

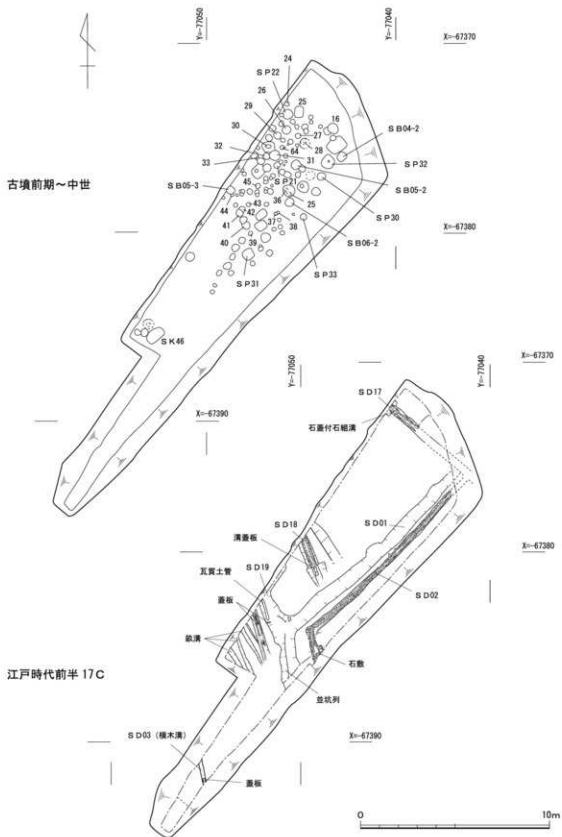
褐色粘質土で、須恵器の壺(第7図1)が出土した。

またピット3は直径0.4mを測り、深さ0.5mを測る。埋土中から管玉(第7図9)と綠色凝灰岩製の擦り切り施溝のある玉未製品が出土した。

(2)上層遺構 17世紀初頭の屋敷地の区画を検出した。山裾から扇形に広がる地形に沿うように石組および木組みの暗渠状構造を持つ上水施設が造られ、また屋敷地の外周には、生活用水を流すための素掘り溝も計画的に配置されていた。以下に遺構の概略を記す。



第3図 調査地土層図



第4図 検出遺構平面図

溝 S D 01 北東方向から南西方向に流れる幅 1 m、深さ 0.25 m を測る素掘りの溝である。断面は浅い皿状をなす。北東側は調査地の断面にかかり、さらに延伸する可能性がある。長さ 8 m 分

を検出した。埋土は暗灰色粘質土である。屋敷地の周囲を巡る排水溝と考えられる。南西部で、北からの溝と合流し、南へ折れ曲がる。溝の南寄りでは、護岸用の杭列を検出した。出土遺物は陶磁器、すり鉢、平瓦、金属製品、瓦質土管などがある。溝SD19との関係は不明である。

溝SD02 北東から南西に流れる石組溝で、幅0.35m、長さ約7.5mを検出した。調査地の北西側に位置する溝SD17から導水したのと考えられる。細部構造は溝の掘形に沿って、両側面に拳大の川原石を並べ、扁平な円礫を蓋石としていた。さらにその上面に蓋石を固定するように礫や平瓦片を充填し、暗渠状をなしていた(第5図、図版第5-(1))。通水部の幅は約3cmを測り、埋土は暗灰色の粘質土が詰まっていた。北西側の粘質土の下層には粗砂が見られ、北西から南東方向に水が流れるように緩傾斜がつけられていた。南西側で東へ「L」字状に屈曲し、調査地東壁で石積み溜め樹を検出した。溜め樹の規模は0.6×0.7mの方形で、深さは検出面から0.5mを測る。樹の周囲は拳大から人頭大の円礫を2～3石貼り付けていた。溜め樹には調査中も湧水があり、生活用水の溜め樹として使用されていたと考える。

溝SD03 幅0.3m、検出面からの深さ0.3mを測る木組み溝である。溝底部に直径5cmの丸太を両側面に敷設し、その上を溝に直交するような状態で、板状の蓋板が3枚残存していた。溝内には暗灰色粘質土が詰まっていた。断面の観察では、暗渠構造となっている(図版第10-(2))。

溝SD17 幅0.4m、深さ0.3mを測る石組み溝である。人頭大の花崗岩などの礫が使用されており、溝SD02と比較してやや粗雑な造りであった。通水部の幅は5cmを測る。蓋石を固定するために礫を充填し埋め戻していた。

溝SD18 石組溝と素掘り溝に蓋板材が付く複合構造の溝である(第5図、図版第7-(2)・(3))。蓋板材の上には、粗朶が堆積していた。また、素掘り溝の底部には有機質が腐食したことを示す土色の変化が認められたことから、溝には底板が残存した可能性がある。

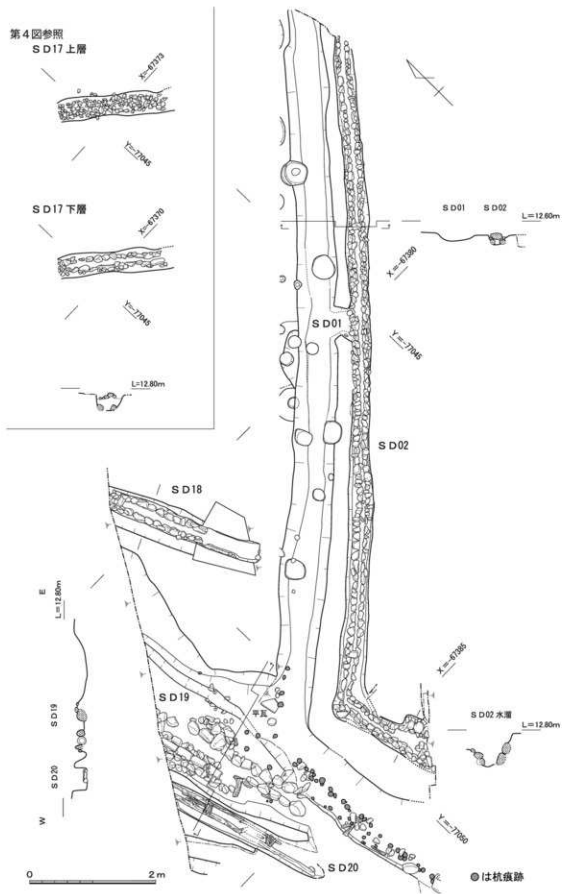
なお、溝SD18の南西側は盛り土による整地層があり、北東側より土地が一段高くなっていた。

溝SD19 北から南へ流れる瓦質土管を利用した上水施設である。溝SD01と重なるように敷設され、北側部分は5本の土管が良好に残存していたが、南側は溝SD01の肩部分に直交するように、多数の杭が打ち込まれていた。この杭列は土管を敷設する基礎となっていたものと思われる。これは、溝SD01を流れる下水が、上水と混じらないように工夫されたものと考えられる。溝は土管→石組み→素掘り溝と数回にわたり改修が見られた。これは谷水を導水したため、土管内部には泥質土が詰まっており、送水量が減少する度に改修の必要が生じたことが理由と思われる。この上水施設は溝SD02で囲まれた屋敷地のさらに東側へ導水するためのものと考えられる(図版第6-(3)、第7-(1))。

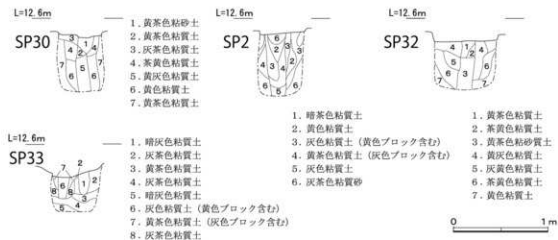
溝SD20 幅0.4m、深さ0.3mを測る木組み溝である。断面が箱形の掘形両側面に丸太を杭で固定し、蓋板を被せて埋め戻した埋設溝である。溝SD03と同方向で類似した構造を有するため、同時期のものと考えられる(図版第7-(1)、第10-(1))。

畝溝群 溝SD20の南側で、皿状の断面をなす4条の畝溝を検出した。溝SD20より先行する。

整地層 溝SD01の南側から溝SD03の間は遺構が見られず、礫混じりの黄褐色土で整地され



第5図 溝SD01・02・18~20実測図



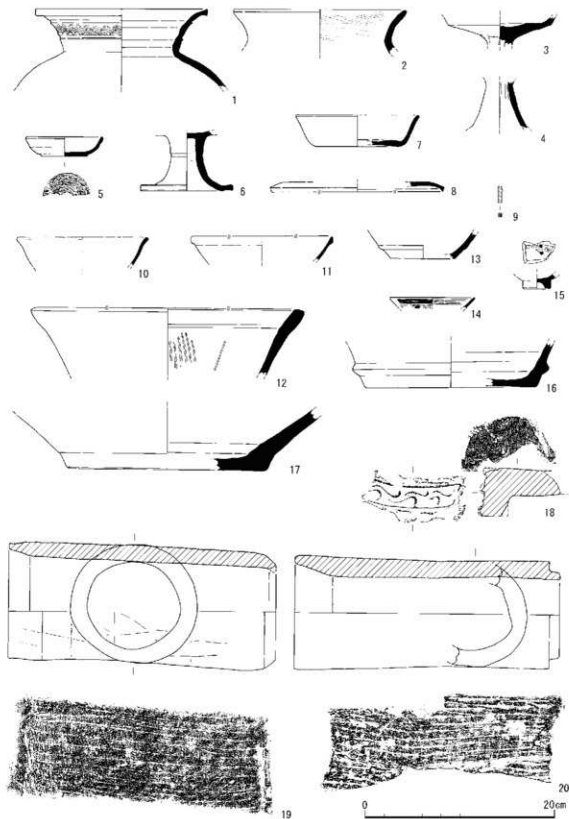
第6図 ビット断面実測図

ていた。屋敷間の通路部分と考えられる。

3. 出土遺物(第7・8図)

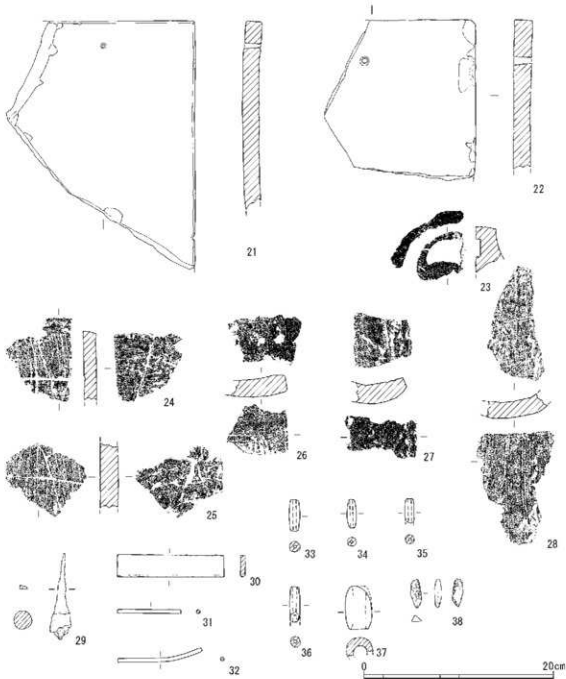
出土遺物は、上層遺構に伴う輸入陶磁器、肥前系磁器、播鉢、刀子状製品、不明金属製品などと、包含層から出土した黒色土器、瓦質播鉢、軒平瓦などと、下層遺構の土坑やビットから出土したものである。

古墳時代の遺物は須恵器、土師器、管玉がある。1は土坑SK46から出土した須恵器の壺である。復原口径は18cmを測る。頭部の凹線間に櫛描き波状文を施す。色調は内外面とも青灰色をなす。焼成は良好である。2は土師器甕の口縁部である。内面に粗いハケ調整が残存する。色調は淡褐色をなす。3・4は土師器の高杯である。5～8は須恵器である。5は杯で、復原口径は8cmを測り、器高は2.1cmである。底部に回転系切り痕が残存する。溝SD01から出土しているが、混入品と考えられる。6は高杯脚部で、色調は淡灰色をなす。7は杯Aで、復原口径は12.9cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色をなす。8は杯B蓋である。9の管玉は蛇紋岩製で、長さ1.7cm、幅は0.4cmを測る。両面穿孔である。そのほか擦り切り施溝のある緑色凝灰岩製の角柱体状未成品も出土した。管玉および未製品はビット3から出土した。10～14、16は包含層、15は溝SD01、17は溝SD03から出土した。10は青磁碗の口縁部片で、施釉の色調は淡緑灰色をなす。11は白磁碗口縁部片である。12は瓦質すり鉢で、復原口径は27.6cmを測る。内面のすり目は粗い。13は天目茶碗で、釉調は淡黒茶色、露胎部の胎土の色調は淡褐色をなす。14は肥前磁器である。15は輸入陶磁器と思われる碗の底部片である。底部の復原径は2.8cmを測り、胎土の色調は淡白色をなす。16は焼き絞め陶器の甕または鉢の底部片である。外面に隆帯状の貼り付け突起が見られる。17は鉢底部である。18は包含層から出土した軒平瓦片である。焼成は良好で青灰色を呈し、須恵質である。16世紀後半のものと思われる。19・20は瓦質土管である。19は溝SD19、20は溝SD01の水の落ち口部分に使用されていた。19の他に同形態の土管が3個体結合された状態で出土した。19は結合部を差し込むタイプである。20の土管結合部は有段のソケット状をなす。1点のみ出土した。21・22は平瓦片である。21は溝SD01の埋土内から出土した。目釘穴



第7図 出土遺物実測図(1)

が確認できる。22は溝S D19から出土した。23は巴文の瓦片の可能性もある。全体の色調は淡褐色をしている。24～28は奈良・平安時代の瓦片である。29は刀子と思われる金属製品である。現



第8図 出土遺物実測図(2)

存長9.1cm、最大幅2.2cmを測る。30～32は用途不明の鉄製品である。溝S D01から出土した。30は板状品である。長さ11.35cm、幅2.4cm、厚さ0.55cm、重さ105.4gを測る。31・32は棒状品である。31は長さ6.75cm、幅0.4cm、重さ6.5gを測る。断面は円形である。32は長さ8.9cm、幅0.4cm、重さ8.4gを測る。31・32とも長さの違いはあるものの、直径は一致しており、いずれも端面は残存しているため、一定規格の棒状品を切断したものの可能性がある。33～37は土錘である。33は重さ4.8gを測る。34は3.1gを測る。36は重さ4.3gを測る。37を除き、長さ3cm前後、幅1cm前後の小型品である。37は長さ4.5cm、幅2.75cm、穴の口径は1.4cmを測る大型品である。

残存する重さは18.6gを測る。38は包含層から出土した良質な緑灰色チャートの割片である。長さ3cm、幅1.15cm、重さ2.2gを測る。人為的な加工痕が見られる。

4. まとめ

今回の発掘調査では、上層遺構として整然と配置された石組みや木組み溝、瓦質土管を敷設した溝、石組み溝の末端には石組みの溜め枿(上水施設)や素掘り溝(排水施設)などを検出した。これら一連の遺構は、出土した遺物から17世紀前半に作られ、その後改修が行われた。

国道175号線が開通する以前の主要路は西側の山裾を抜ける道筋であり、近世の街道筋には、宿場町として短冊状の街割りが成立した。その後、江戸時代中期に数度の大火で町屋が焼失しているが、現在も短冊状の街割りは継承されている。

その街道筋から由良川寄りの一段低い段丘部分で、17世紀前半の屋敷に関連する遺構が見つかったことは注目に値する。

屋敷建物の本体は、遺構の状況から今回の調査地の溝S D01および溝S D02の東側に想定できるが、残念ながら後世の水田開発で削平された可能性が高い。また近世の瓦は福知山市内では、福知山城を除くと初めての出土であり、この点が重視できる。

木組み溝は溝S D03と溝S D20の2条が、互いに平行している。両溝間は幅5mを測り、通路に伴う側溝と考える。

文献によると17世紀前半、河守の地は宮津細川藩領となっており、当遺跡は福知山城と丹後宮津城との中間地点に位置し、細川藤孝の家臣であった人物の屋敷が推定される。今後の周辺での調査に期待したい。

また下層遺構は、古墳時代中期のピットを含め、多数のピットを検出したが、調査地の幅が狭かったため、建物跡として復原はできなかった。しかし、周囲には、古墳時代の遺構は良好な状態で残存しているものと考えられる。当調査地北側の第5次調査においても遺構および遺物が確認されており、調査地周辺の平坦地には古墳時代の集落が展開している可能性がある。

注1 調査において以下の方々のお世話になった。記して感謝の意を表します。八瀬正雄、松本学博(敬称略) 調査参加者(敬称略) 奥田栄吉、真下春美、小島健之介、丸谷はま子

注2 1587年小野木重勝が福知山城主となるが、1600年の関ヶ原合戦で自害し、その後の福知山城主は有馬豊である。

参考文献

- 松本学博「Ⅱ. 河守北遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第53集 福知山市教育委員会) 2007
 松本学博「Ⅲ. 河守北遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第55集 福知山市教育委員会) 2008
 戸原和人「3. 河守北遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査報告集』第130冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
 石尾敦信「6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

2.長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7地区)

・井ノ内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、平成20・21年度主要地方道大山崎大枝線地方道路交付金業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したもので、現地調査は平成20年9月24日から平成21年1月29日のほぼ4か月を要して実施し、整理・報告作業は現地調査終了後の平成21年度に実施した。調査面積は680㎡である。

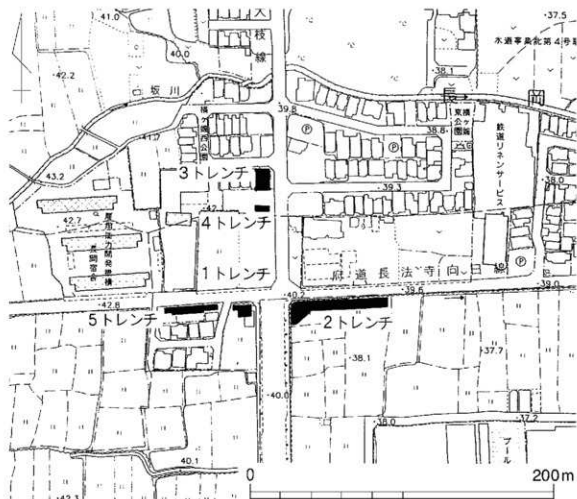
調査地は、長岡京市井ノ内横ヶ端・同市今里5丁目に所在し、西山丘陵裾から東側に延びる標高40m、小畑川右岸の善峰川によって形成された低位段丘上に立地する。

調査範囲は長岡京の条坊推定復元によると長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路(新条坊：右京三条三坊十三町・三条四坊四町)にあたり、縄文時代から中世までの複合遺跡である井ノ内遺跡の南端で、一部今里遺跡と重複する地点にあたる。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森 正、同調査第2課専門調査員竹井治雄が担当した。現地作業・整理作業については調査補助員・整理員、調査全般に関しては京都府教育委員会・長岡京市教育委員会を初め、地元の方々のご協力を得た。記して感謝する。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 トレンチ配置図

なお、調査に係る経費は全額、京都府建設交通部が負担した。報告に使用した座標系は日本測地系の第6座標系である。

2. 周辺地域でのこれまでの調査成果

主要地方道大山崎大枝線に伴う今回の調査地は、長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路の推定地で、複合遺跡である井ノ内遺跡の南端に位置し、調査地周辺には芝古墳群、井ノ内稲荷塚古墳、井ノ内車塚古墳が点在する。

周辺地域でのこれまでの調査成果を概観すると、昭和53年の試掘調査(長岡京跡右京第21・27次調査)以降、平成19年度までに十数回にわたり、京都府の府道道路事業として発掘調査がおこなわれている。

右京第772・775次調査は、今回の調査地の北450~670mの位置にあたり、縄文時代晩期の甕棺墓を検出している(網・百瀬2003)。

弥生時代の遺構・遺物としては、右京第27・615次調査で弥生時代後期の溝を確認しており(奥村1980、竹井1999)、今回の調査では第3トレンチで溝S D44、第4トレンチで溝S D04と、弥生時代後期の土器を含む大溝を検出している。これまでの調査では、弥生時代の竪穴式住居跡な

どは検出されていないが、井ノ内遺跡の南端部で弥生集落の存在が想定できる。

古墳時代には、調査地の北東750mに後期の前方後円墳である井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳などが存在しており、府道大山崎大枝線の調査でも6世紀後半段階の竪穴式住居跡(右京第830次調査S H77、第615次調査S H01)、竪穴式住居跡と方位を同じくする掘立柱建物跡(右京第830次調査S B210)が存在する(竹井1999、増田2006)。

長岡京造営以前の奈良時代の遺構としては樋の羽口・鉄滓を含む溝(右京第830次調査S D218)を検出している(増田2006)。

長岡京の条坊関係では、右京第772・775次調査において南北方向に直線的にのびる溝2条を検出しており、西三坊大路の西側溝と宅地内の区画溝を想定されている(網・百瀬2003)。今回調査の第1トレンチでもその溝の南延長部で後述のように2条の溝を検出している。この大山崎大枝線が長岡京西三坊大路を踏襲した道と考えた場合、長岡京から平安京へ都が遷り、長岡京の西三坊大路の平安京遷都後の変遷を考える上での有効な遺構・遺物と判断される。

長岡京期～平安時代前期の遺構としては、右京第83次調査Cトレンチで平安時代の遺物包含層を切り込んだ真南北に延びる溝S D2709(全長12.5m、上面幅0.7m、深さ0.26m)がある(山口1982)。また右京第830次調査では、縦板組の大型の井戸(S E02)、鍛冶工房の可能性のある土坑(S K392)などを検出している。

平安時代中期以降の中世段階では、右京第889次調査において白磁・緑釉陶器を含む溝状遺構(S D01・S D02)が、右京第27次調査の溝S D2709とは方位を異にするが、近接した位置に存在する(奥村1980、竹井2007)。

応仁の乱前後に存在した可能性がある「井ノ内館」(文明2(1470)年「井内館令敷火」と記載がある)との関連を想像させるような北西から南東方向に延びる瓦器碗を含んだ礫敷きの道路面(右京第830次S D250)を検出している(増田2006)。

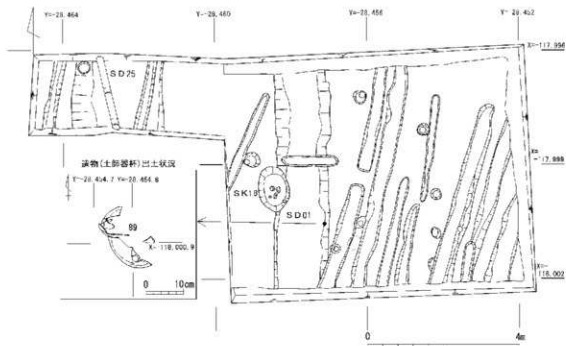
このように、これまでの調査では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・長岡京期・平安時代から中世に至る遺構・遺物が集中して出土する地点である。

3. 調査の概要

調査区は長岡京市の北西部にあたり、西山丘陵から東側に派生する標高40m前後の低位段丘上に位置する。

南北道路である府道大山崎大枝線と東西道路である府道長法寺向日線(光明寺道)の交差点を挟んで、南西に第1・第5トレンチ、南東に第2トレンチ、北西に第3・第4トレンチを設定して発掘調査を実施した(総調査面積680㎡)。以下トレンチごとにその概要を報告する。

1) 第1トレンチ(第3図、図版第1～3) 調査地の現況は標高38m前後の水田である。調査地は右京第772次調査によってその存在が明らかとなった西三坊大路の西側溝と宅地内の区画溝の南延長線上にあたるため、東西方向に長い5m×10mの調査区を設定した。また、築地および宅地内溝の有無を確認するために、さらに西へ2m×5mと調査区を拡張した。

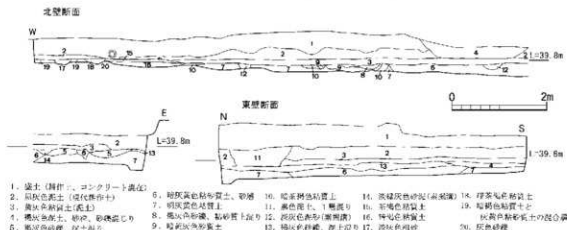


第3図 第1トレンチ遺構図

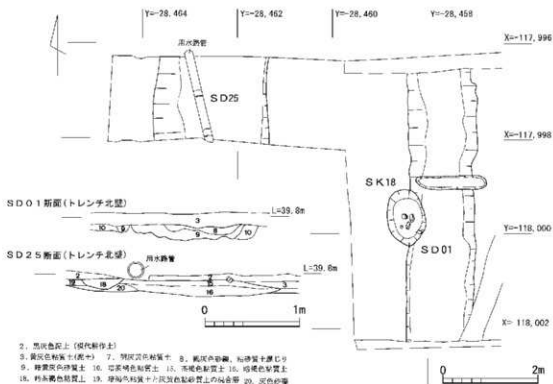
基本層序は地表下0.5mまで盛土、耕作土、床土が堆積し、褐灰色泥土(砂礫泥土混じり)層は中世の洪水・氾濫層である。この層は厚さ10~20cm、北東から南東方向にかけて堆積する。以下、灰褐色砂礫、明灰黄色土、暗灰黄色粘砂質土で、褐灰色砂礫(泥土混り)は長岡京期の遺構、中世の素掘り溝群の基盤層である。

検出した遺構には、地表下0.7mで検出した長岡京跡の西三坊大路の西側溝(溝SD01)、大路の西側に隣接する宅地内の溝状遺構(溝SD25)がある。溝SD01の東側を大路の路面と想定して調査を進めた。路面想定地では北北東から南南西方向の中世素掘り溝が10本と円形を呈する柱穴を多数検出したが、長岡京期の遺構は皆無であった。

溝SD01(図版第1-(3)、第2-(1)・(2)、第3-(3)) 第1トレンチ中央部で検出した真南北方向の溝状遺構である。溝北端の中心座標はX=-17,996.5・Y=-28,457.8で、溝の上面幅1.2m、深



第4図 第1トレンチ土層断面図



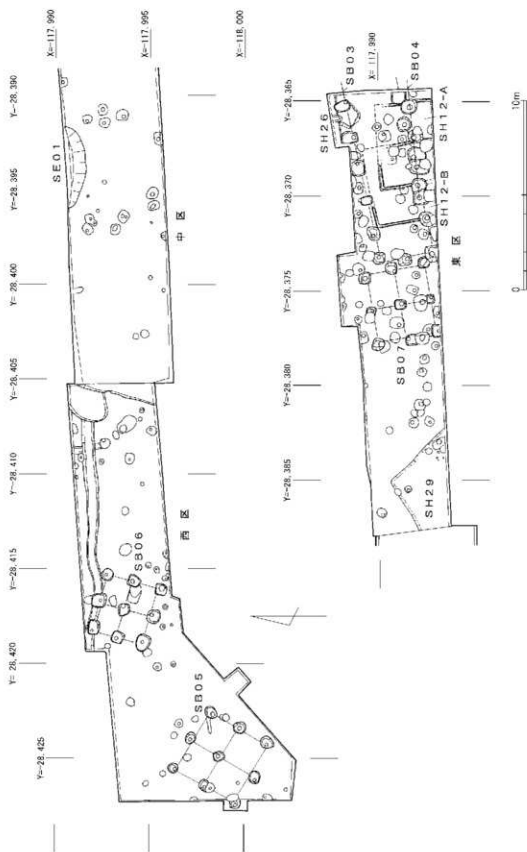
第5図 第1トレンチ溝S D01・25実測図

さ0.25mを測り、断面皿状を呈する。溝の埋土は上層では暗黄灰色砂質土、部分的に存在する下層では暗茶褐色粘質土が堆積する。最上層では褐灰色砂礫、粘砂質土混じりが堆積し、洪水によって埋没したものと思われる。溝の中央部のX=-117,998.6～X=-118,000.2地点では、溝幅が若干狭くなっており、宅地への橋が架けられた入り口にあたるものと推察される。溝の底には、南から北へ連なる偶蹄動物(牛か)の足跡が、溝の東肩まで残っていた。遺物は少ないが、須恵器細片のほか、長岡京期の土師器皿が東肩部から出土した。

溝S D25(図版第2-(3)、第3-(1)) 溝S D01の西側3.0m、トレンチを拡張した地点で検出した真南北方向の溝状遺構である。この遺構は調査区が南北に狭く、溝状遺構なのか、落ち込み遺構あるいは土坑なのか明確ではないが、現状では溝状遺構と考えている。溝S D25の北端での中心座標はX=-117,996.3・Y=-28,462.6で、溝の上面幅2.2m、深さ0.3mを測り、断面皿状を呈する。溝の埋土は暗茶褐色粘質土で、溝S D01の下層と同様の堆積土である。溝の底面には、溝S D01と同じように、偶蹄動物(牛か)の足跡が見つかった。遺物は破片ではあるが、長岡京期の土師器皿・甕・高杯、須恵器杯・甕等が出土した。

溝S D01と溝S D25は互いに接する側の上縁で計測して約3.0mの間隔で真南北方向に平行しており、長岡京の西三坊大路の西側溝と大路の西側に隣接する宅地内の溝状遺構と想定すると、この2条の溝の間は築地塀、柵の存在が想定される。想定築地の北端での中心座標はX=-117,996.4・Y=-28,459.9で、その周辺では中世の素掘り溝・小柱穴等は検出されたが、築地遺構は確認できなかった。

土坑S K 18(図版第3-(2)) 溝S D01を切って検出された土坑である。長軸0.7m、短軸0.5m



第6図 第2トレンチ遺構図

を測り、平面形は楕円形である。土坑断面は椀状を呈し、土坑埋土は上位から暗灰色粘質土、灰色砂質土、淡灰色砂である。最下層の底面付近では小・中礫が混在する。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。

素掘り溝群 第1トレンチ全域で検出した。各溝は上面幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.4mを測り、その方向は北北東から南南西(N-8°-E)が大半である。溝の断面は「U」字状を呈し、各溝は異なった埋土で、黒灰色粘土、灰色粘土、淡灰色砂質土(泥土含む)等が堆積する。出土遺物は大半が瓦器・皿類である。この素掘り溝群は、溝同士に切り合いがあることから時期差が認められる。平行する溝の間隔は1.1～1.3mであることから、水田の畦畔に伴うものでなく、畑の畝溝と推察される。

柱穴群 路面および築地想定位置から検出された。直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る小ピット群である。土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。柱穴の間隔は散在しており、整然と並ばない。前述の素掘り溝群に伴うものと思われる。

2) 第2トレンチ(第6図、図版第4～11) 調査は土置き場を考慮して、当初は調査区の西端と東端に、それぞれ50mと40mの小さなトレンチを設定して調査をすすめたが、遺構の密度、広がりを知るために重機掘削と埋め戻し作業を6回繰り返して行ない、最終的には東西5m×南北65mの東西に細長い調査区となった。このため、第2トレンチは、西・中・東区の3区に分けて記述を行う。

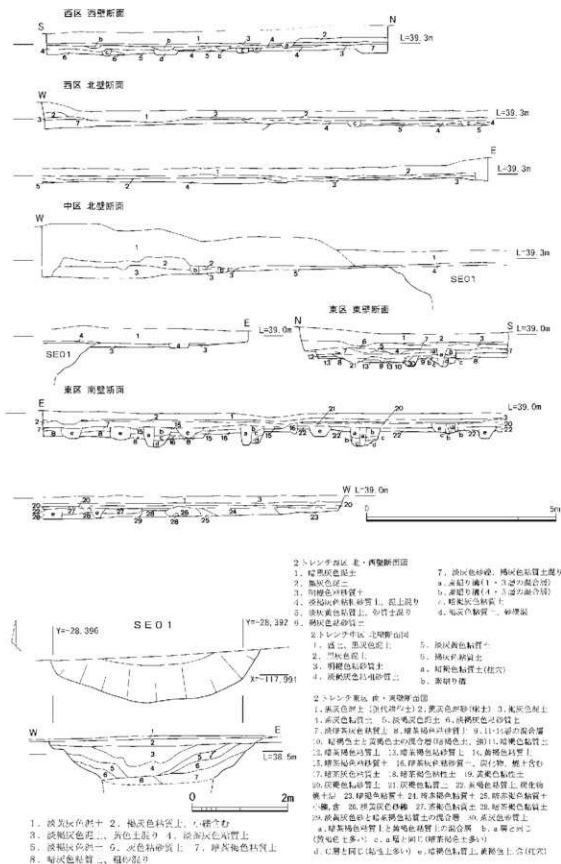
第2トレンチの基本層序は、西区・中区では地表下0.4mまで耕作土(黒灰色粘土)、床土(明褐色粘砂質土)、淡灰黄色粘質土が堆積する。淡褐色砂礫・粘質土混じり層は中世の洪水・氾濫層である。この層は、厚さ10～20cmで北東から南東方向にかけて堆積する。東区では、中世層以下、灰褐色粗砂質土(平安時代)、茶褐色粘質土が堆積する。この茶褐色粘質土は奈良時代の基盤層であり、かつ竪穴式住居跡の堆積土である。

検出した遺構は、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡4基、奈良時代の掘立柱建物跡5棟・井戸跡1基を確認したほか、中世の素掘り溝・小柱穴・土坑等を検出した。なお、第1トレンチで検出した西三坊大路に関連した遺構は認められなかった。

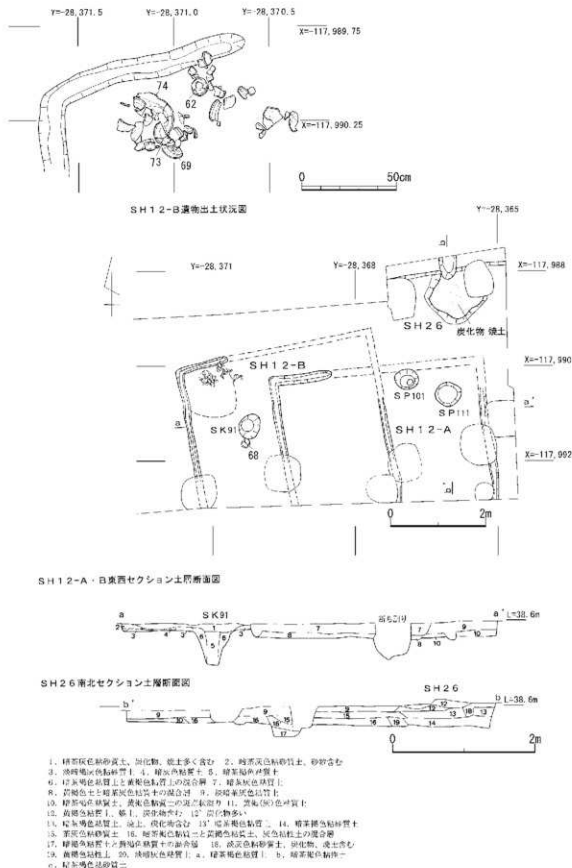
竪穴式住居跡は第2トレンチの東半部で集中して4基検出した。それぞれの竪穴式住居跡は遺存状態が悪く、壁面の立ち上がりなどは不明で、わずかに床面をめぐる周壁溝と一部の柱穴、土坑を確認したのみである。

(1) 竪穴式住居跡(第8図)

竪穴式住居跡SH12-B(図版第9-(3)、第10・11-(1)・(2)) 第2トレンチの東区で、北東辺と東辺の一部を検出した。竪穴住居跡の規模は、東西4.2m、南北3.7m以上、残存する深さは15cmを測り、方形を呈する。住居の主軸はN-5°-Wである。住居床面には、幅12cm、深さ5cmの周壁溝が巡る。竈は無かった。住居内の埋土は暗茶灰色粘質土で、炭化物・焼土が多く含まれる。その下層では暗茶灰色粘質土と黄褐色土の混合層があり、住居内の埋土と見るよりも、床面を成形するための貼り床と思われる。床面からは、主柱穴を1か所、土坑SK91を検出した。土坑S



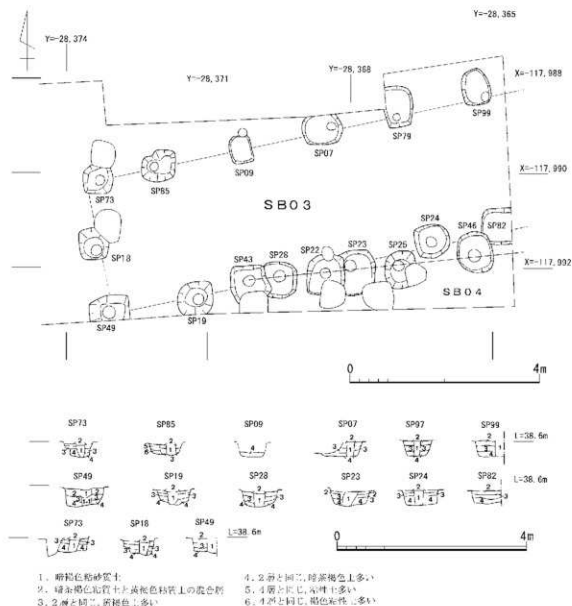
第7図 第2トレンチ土層断面図・井戸跡SE01実測図



第8図 第2トレンチ掘穴式住居跡SH12-A・SH12-B・SH26実測図

K91は調査時には土坑と判断したが、最終的に主柱穴と判断した。直径0.4m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。主柱穴の抜き取り穴から須恵器無蓋高杯(第21図68)が出土した(図版第11-(3))。住居床面の北西隅から須恵器類がほとんどで、杯身・蓋・高杯・甕等が密集して出土しており、住居の廃棄時に寄せ集められたものと推察される。貯蔵穴は検出されなかった。

竪穴式住居跡 SH12-A (第8図) 第2トレンチの東区で竪穴式住居跡 SH12-Bの下層で検出した竪穴式住居跡で、北東辺と東辺の一部を検出した。方形の住居で、東西4.2m、南北3.7m以上を測り、遺構検出面から床面までの残存する深さは15cmである。竪穴式住居跡の主軸はN-2°-Wである。住居床面には幅10cm、深さ5cmの周壁溝がめぐる。住居内の堆積土は、上層では暗茶灰色粘砂質土、焼土、炭化物を含む、下層では暗茶灰色粘砂質土、淡暗褐色粘砂質土、暗灰色粘質土の混合層である。床面を切り込んで長岡京期以降の柱穴・土坑等があり、竪穴式住居跡



第9図 第2トレンチ掘立柱建物跡SB03・04実測図

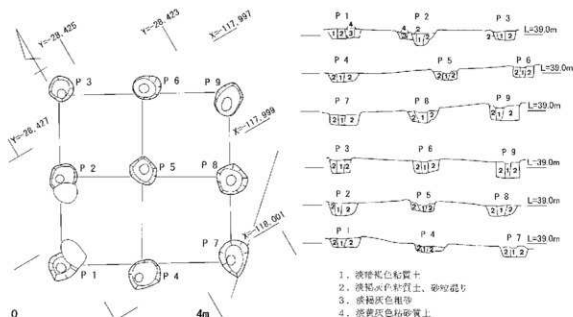
SH12-Aに関連する柱穴の可能性のあるものとして、柱穴SP111がある。柱穴SP111の規模は、直径0.5m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。この柱穴は住居の北東隅に近すぎる位置にあり、主柱穴とする確証を得ない。

竪穴式住居跡SH26 (図版第9-(2)・(3)) 第2トレンチの東区東端で、竪穴式住居跡の北辺の一部を検出したもので、方形の竪穴式住居跡と思われる遺構である。北辺の掘り込み(検出長約6.5m)を検出したが、南・東・西辺は奈良時代以降の柱穴・土坑などにより削平を受け、遺存していない。住居の検出面から床面までの深さは10cmを測る。住居の主軸はN-5°-Wである。住居床面には周壁溝がなかった。住居の北辺部には焼土・炭化物・黄褐色粘土が混在して広がる。また、竪穴式住居跡SH26の北辺推定中央には焼け土を含む高まりを検出したが、竈の本体は確認していない。住居内の埋土は黄灰色粘砂質土で、炭化物・焼土が多く含まれる。床面を切り込んで長岡京期以降の柱穴・土坑があり、竪穴式住居跡SH26に関係するものとしては、柱穴SP101がある。柱穴SP101は、直径0.35m、深さ0.5m、柱痕径18cmを測る。住居内の床面から土師器・須恵器が出土した。

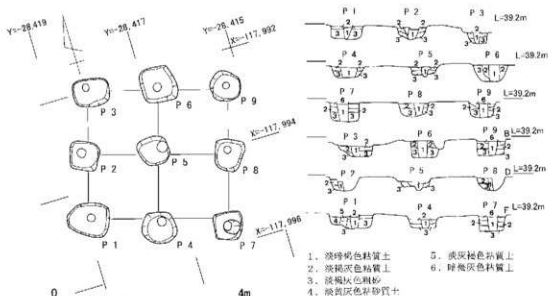
竪穴式住居跡SH29 (第6図) トレンチの東区西端で検出した方形の竪穴式住居跡で、北東辺と南東辺の一部を検出した。竪穴式住居跡の規模は、北東辺で4.2m以上、南東辺で3.7m以上を測り、検出面から床面までの深さは5cmを測る。住居の主軸はN-40°-Eである。住居床面には周壁溝が見られない。住居内の埋土は、暗褐色粘質土、暗赤褐色粘質土が堆積し、部分的に、炭化物・焼土が混在する。住居内から須恵器・土師器の細片が出土した。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第2トレンチではトレンチ中央では明確に建物跡として柱列が並ぶものはないが、西端で総柱の建物跡2棟、東端で3棟(総柱1棟、東西棟の建物2棟)を検出した。建物跡



第10図 第2トレンチ掘立柱建物跡SB05実測図

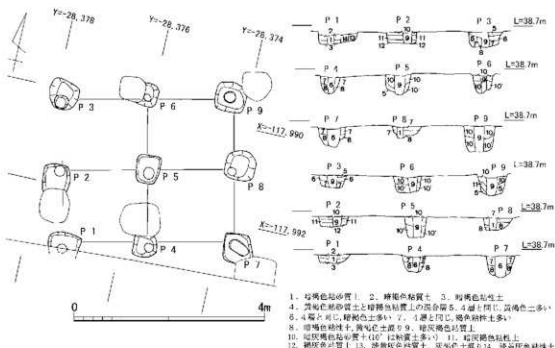


第11図 第2トレンチ掘立柱建物跡SB06実測図

としてまとまるピット群のほかにも多くの柱穴を検出しているが、現地調査時および調査後にも検討を加えたが、建物跡としてまとまらないものが数多くある。

掘立柱建物跡SB03(第9図、図版第7-(2)・(3)、第8-(1)) トレンチ東区東半部で検出した。南北2間(総長2.7m)、東西5間(総長9.0m)以上の東西棟である。柱筋の主軸はN-12°-Wである。柱間寸法は乗行1.35m等間(4.5尺)、桁行1.65m(5.5尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.5~0.8m、深さ0.5m、柱根径20cmを測る。

掘立柱建物跡SB04(第9図、図版第7-(2)・(3)) トレンチ東区東半部で掘立柱建物跡SB



第12図 第2トレンチ掘立柱建物跡SB07実測図

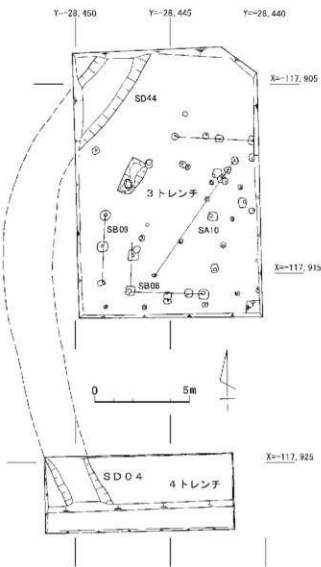
03の上層で検出した。東西3間(総長4.9m)以上で、東西棟か南北棟か不明である。柱筋の主軸はN-25°-Wである。柱間寸法は1.65m等間(5.5尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.7~0.9m、深さ0.5m、柱痕径20cmを測る。櫛列の可能性もある。

掘立柱建物跡SB05(第10図、図版第4-(3)) トレンチ西端で検出した2間(総長3.6m)×2間(総長3.6m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から大きく東(N-40°-E)に振れる。棟筋はP4・P6の柱痕が側柱筋から0.3m外側に出ていることから、南北棟の建物と考える。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)、梁行1.8m(6尺)を測る。柱掘形は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

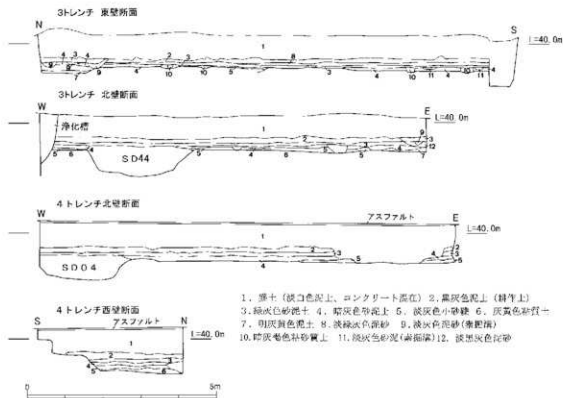
掘立柱建物跡SB06(第11図、図版第5-(2)・(3)) 掘立柱建物跡SB05の北東4mの地点で検出した2間(総長3.0m)×2間(総長2.7m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から大きく東(N-30°-E)に振れる。棟筋はP2・P8の柱痕が側柱筋から若干外側に出ていることから、東西棟の建物と考える。柱間寸法は、桁行1.5m(5尺)、梁行1.35m(4.5尺)を測る。柱穴は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

掘立柱建物跡SB07(第12図) 調査区東部、掘立柱建物跡SB04の西側から出土した2間(総長3.6m)×2間(総長3.0m)の総柱建物である。柱筋は真北方向から西(N-12°-W)に振れる。棟筋はP2・P8の柱掘形が側柱筋から外側に出ていることから、東西棟の建物と考える。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)、梁行1.5m(5尺)を測る。柱穴は方形を呈し、一辺0.35~0.55m、深さ0.15~0.35mを測る。柱痕は円形を呈し、0.15~0.18mである。遺物は土師器の細片が出土した。

井戸跡SE01(第7図、図版第6-(2)・(3)) 第2トレンチ中区北側で掘形の一部を検出した素掘りの井戸で、その全容は明らかではない。井戸の平面は円形を呈し、直径4m以上、深さ1.3m以上を測る。断面は挿鉢状を呈し、井戸内の堆積



第13図 第3・4トレンチ遺構図



1. 黒土 (黒灰色泥上、コンクリート混在) 2. 黒灰色泥上 (耕牛土)
3. 緑灰色粘土 4. 緑灰色粘土 5. 緑灰色粘土 6. 灰黄色粘土
7. 明灰色粘土 8. 淡緑灰色粘土 9. 淡灰色粘土 (赤肥層)
10. 暗灰色粘土 11. 淡灰色粘土 (赤肥層) 12. 淡灰色粘土

第14図 第3・4トレンチ土層断面図



1. 茶褐色粘土、砂粒含む 2. 茶褐色粘土、小礫、砂粒含む
3. 淡茶褐色粘土、小礫砂粒含む 4. 暗茶褐色粘土
5. 暗茶褐色粘土 6. 暗茶褐色粘土、小礫含む
7. 暗灰色粘土、小礫含む 8. 暗灰色粘土、砂粒含む
9. 淡灰色粘土

第15図 第3トレンチ溝S D 44実測図

土は泥土・粘質土・砂質土等の互層で人為的に埋められたものと思われる。須恵器、土師器等の細片が各層から出土した。

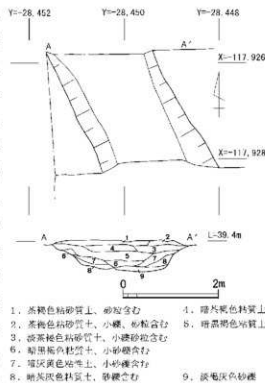
3) 第3トレンチ(第13図、図版第12～15-(2)) 排土置き場を考慮して、トレンチを調査区の南側(100m)と北側(34m)の2か所に分けて調査を実施し、最終東西10m、南北14mのトレンチとなった。

第3トレンチの基本層序は、地表下0.9mまで、コンクリートを含む盛土・耕作土・床土が堆積する。以下、淡灰色小砂礫(泥土混じり)は中世の洪水・氾濫層である。この層は厚さ10～20cm、北西から南東方向にかけて堆積する。灰黄色粘質土は柱穴群、溝S D 44の基盤層である。

調査の結果、奈良時代の掘立建物跡と弥生時代後期の溝S D 44を確認した。

溝S D 44(第15図、図版第12-(3)～15-

(2) 第3トレンチの北西隅で検出した北東から南西方向(N-30°-E)の溝である。溝の上面幅2.4m、深さ1.0mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝底は幅1.2mの平坦面が認められる。溝の埋土は、上層が茶褐色粘質土(砂粒含む)、茶褐色粘砂質土、中層は淡茶褐色粘砂質土、暗茶褐色粘質土、暗黒褐色粘質土、暗黒褐色粘性土である。下層は、暗灰黄色粘性土、暗茶灰色粘質土に砂礫が含まれる。最下層は淡褐灰色砂礫である。上層は砂礫・小砂礫が混在し、人為的に埋められた土壌である。土師器・須恵器が混じっている。中層では残存率の高い弥生土器の破片が多く出土した。下層には炭化物・焼土・腐植土・泥土が見られ、弥生土器の甕・壺・高杯・椀などが多数出土し、完存したものも出土している。時期は弥生時代後期後葉と推定される。



第16図 第4トレンチ溝SD04実測図

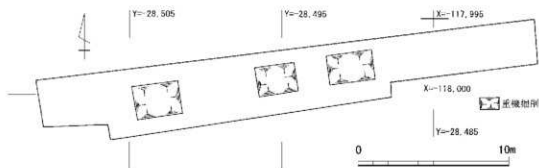
掘立柱建物跡SB08(第13図) 柱掘形は一辺0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mの方形を呈する柱穴と、直径0.2m前後、深さ0.2mの円形柱穴がある。方形の柱穴の柱間寸法は2m前後を測るが、建物跡として復原が困難である。

掘立柱建物跡SB09(第13図) 柱筋が真北から僅かに振れる南北方向の掘立柱建物である。

欄柵SA10(第13図) 円形柱穴の柱間寸法は2.5~2.7mを測り、欄と思われる。時期については、平安時代~中世である。

4) 第4トレンチ(第13図、図版第16) 調査地はアスファルトが敷設されていたため、カッターで切断し、4×10mの東西に長い調査区を設定した。このトレンチでは北西から南東方向の溝SD04を検出した。

溝SD04(第16図、図版第16-(2)・(3)) トレンチの西端部で検出した北西から南東方向(N-25°-W)の溝である。溝の上面幅2.1m、深さ0.9mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝の埋



第17図 第5トレンチ配置図

土は上層(茶褐色粘質土・粘砂質土)、中層(暗茶褐色粘質土)、下層(黒褐色粘質土、小砂礫、粗砂混り)、最下層(暗茶灰色粘質土)が堆積する。上層は小砂礫・砂、土師器・須恵器等が混在し、固くしまっており、人為的に埋められた土壌である。中層および下層から弥生土器の破片が出土した。溝SD04は溝SD44と規模・形態・土壌堆積・遺物出土状況等が類似しており、一連の遺構で、弥生時代後期の湾曲する溝と思われる。

5) 第5トレンチ(第17図、図版第15-(3)) 第5トレンチは、排土置き場と調査地南側の民家を考慮して、幅2~4m、東西33mの調査区を設定した。総面積118㎡である。調査当初、重機を用いて調査区全体を0.5mの深さで掘削した。続いて、トレンチ内に3か所のグリッドを設定し、表土下2.2mまでさらに掘り下げた。その結果、暗灰色泥土混じりのアスファルト、コンクリート等が堆積していた。このように第5トレンチは後世の削平が著しく、長岡京期あるいは中世の遺構・遺物は検出できなかった。今回の調査地内の埋め土の状況から、30数年前まで農業用水の溜池がこの地点に存在したと思われる。(竹井治雄)

4. 出土遺物

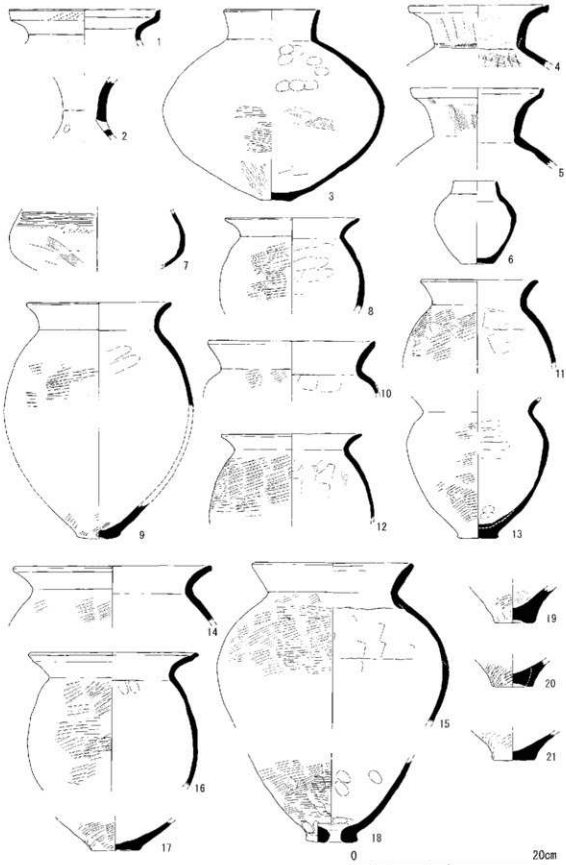
1) 弥生時代の遺物(第18~20図、図版第17・18)

今回の調査で出土した弥生土器は、コンテナ数にして約10箱を数える。遺構に伴う弥生土器は、そのほとんどが第3トレンチ溝SD44から出土し、この溝の延長部の可能性が高い第4トレンチ溝SD04から若干の弥生土器が出土した。

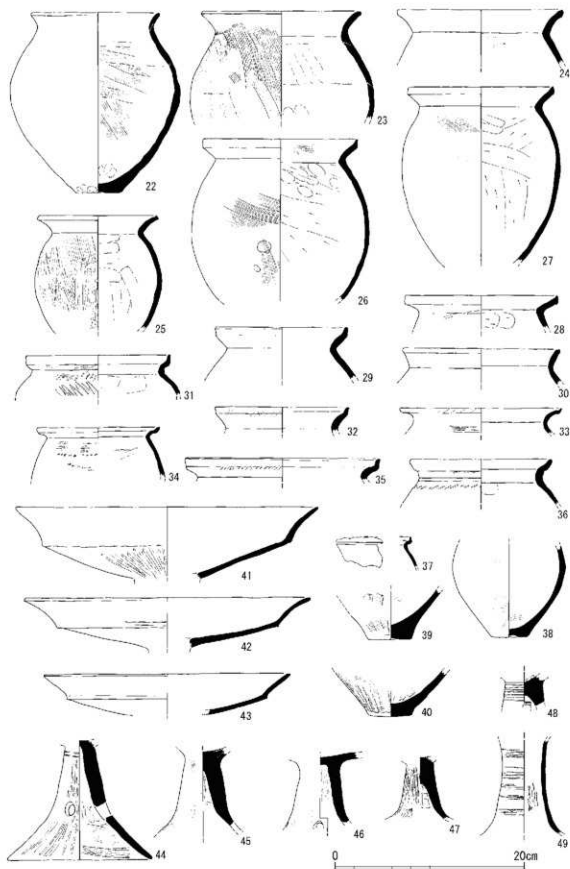
第18図1・2は、第4トレンチ溝SD04から出土した。1は、受口状口縁をなすいわゆる近江系の甕である。受部の引き出しは大きく、口縁部外面に櫛描列点文を施す。色調はにぶい黄褐色を呈し、復元口径は16.0cmを測る。2は、器台の胴部である。胴部径は小さく、三方に円形透かしをもつ。第4トレンチ溝SD04から出土した土器の時期は、受口状口縁甕は口縁部の引き出しが大きいことから後期中葉~後葉の幅で捉えられる資料であるが、器台は小片ながら、胴部径が小さく引き締まり、締まりが強いことから、弥生時代後期後葉に位置づけられるものである。共存資料には、小形化した第5様式系タタキ成形甕の底部小片が認められるが、こうした点もおおよそ後期後葉とする年代観と矛盾しない。

3~61は、第3トレンチ溝SD44から出土した。遺物は、最上層から弥生土器のほかには土師器・須恵器等が出土しているが、下位の層位では弥生時代後期のまとまった土器が出土し、古墳時代以降の遺構からの混入はみられない。溝埋土は5~6層に分層され、遺物の多くは下層とされる黒褐色粘質土層から出土しているが、最上層および上層出土土器と下層出土土器に大きな時期差は認められない。出土土器はほぼ完形個体として復元できるものが5%前後含まれ、個体の2分の1以上を復元できるものが3割程度を占める。

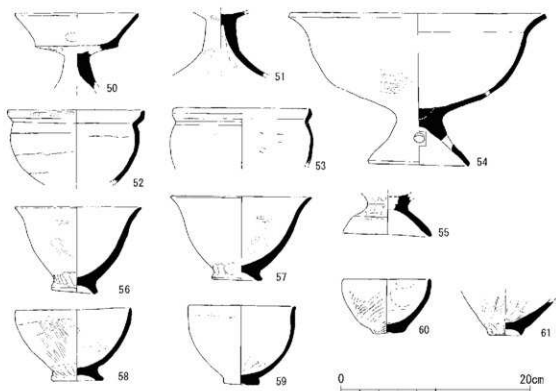
第18図3~7は、甕である。3は短頸甕で、4・5は広口甕である。4は、大きく外反する口縁部をもち、端部に面をなす。5は、受口状口縁を呈し、近江系土器の影響を受けたものとみられる。7の壺体部は、櫛描直線文と同列点文をもつ近江系の文様構成をなす壺の一部である。



第18図 出土遺物実測図(1)



第19図 出土遺物実測図(2)



第20図 出土遺物実測図(3)

第18図8～15は、いわゆる第5様式系のタケキ成形による「く」字口縁の甕である。口縁は外反し、端部を丸く収める。内面は摩耗が著しいが、いずれもハケを施し、ナデ調整で仕上げている。特に内面上半部は丁寧にナデ消されている。法量はおおよそ2群に分かれ、9・10・12・15など残存高および口径から器高25cm前後と推定される中形品と、8・13など器高15cm前後と推定される小形品がみとめられる。8は口径13.8cm、9は14.8cm、10は17.4cm、12は14.7cm、15は16.4cmを測る。14は細片であるが、復元口径20.6cmとやや大きく、大形品の可能性がある。16は、口縁端部が受口状をなす甕である。体部外面はタケキ成形により、第5様式系甕との折衷的な要素をもつ。17～21は、甕の底部である。くほみ底を呈する第5様式系甕の底部(17・19・20)と平底(21)をなすものがある。また、18は底部中央を穿孔していることから瓶の底部とみられる。

第19図22～29は、外面ハケ調整を基調とする「く」字口縁甕である。口縁端部を丸く収める単純口縁をなすもの(22～24)と、端部に面をなすもの(25～29)がある。後者には、いわゆる跳ね上げ状口縁を呈するもの(25)や、端部内面に強いナデを施し受口状にわずかに立ち上げるもの(29)がある。単純口縁をなす甕(22・23)は、頸部の屈曲が緩やかであり、内面はハケ調整を主とするが、一方、口縁端部に面をなす甕(26・27・28)は頸部の屈曲がシャープで内面ケズリ調整を主とし、系統的な違いが認められる。39・40は、外面に縦ハケを施し、内面にもハケ調整を施す「く」字口縁甕の底部とみられる。

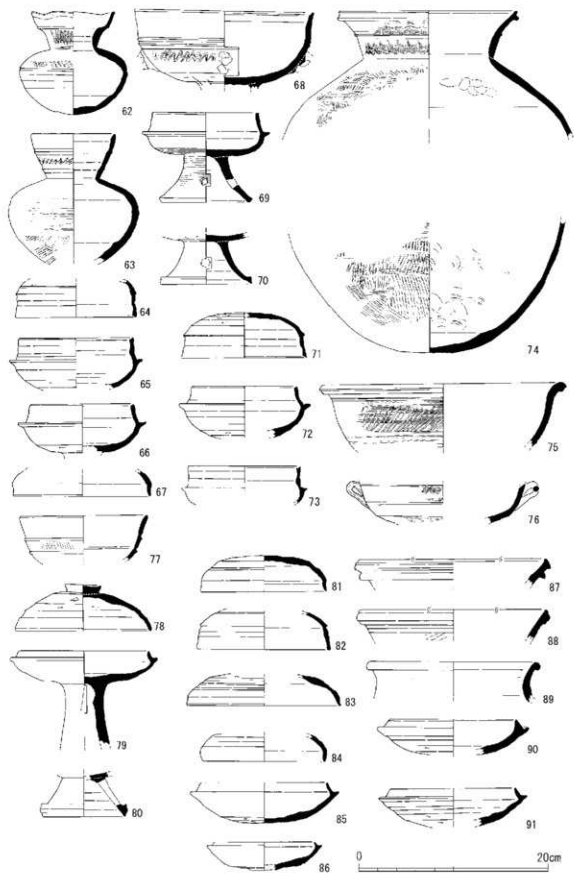
第19図31～37は、受口状口縁をなす甕である。いずれも口縁部外面、あるいは肩部に髹塗点文がみとめられる。口縁部の形状には、擬口縁を外方に大きく引き出し明瞭な受部をもつもの(37)

が細片のなかにみられるが、全体に受部の引き出しは弱く、短く上方に立ち上がるものを主体とする。30は、やや肩が張り、鉢に近いプローションをもつが、口径値が大きく寛とした。31・35は短い立ち上がりをもつ甕のなかでも、受部の屈曲が明瞭なものである。ともにぶい黄橙褐色を呈する。一方、34・36は、いずれも口縁部の立ち上がりが緩やかで、受部にやや厚みをもつ。34は、肩部に櫛描直線文と櫛描列点文を施し、口縁外面にわずかに櫛描列点文が認められる。36は、肩部にのみ櫛描列点文を施し、口縁部外面はナデ調整で仕上げる。色調は、橙褐色を呈する。37は、器壁の摩耗が著しいが、受部が短く、口縁部の立ち上がりがシャープである。受口状口縁甕の胎土は、いずれも石英・長石・チャートなどが含まれる在地土器の基本組成であり、湖南地域などからの明らかな搬入品として確認できるものはみられない。

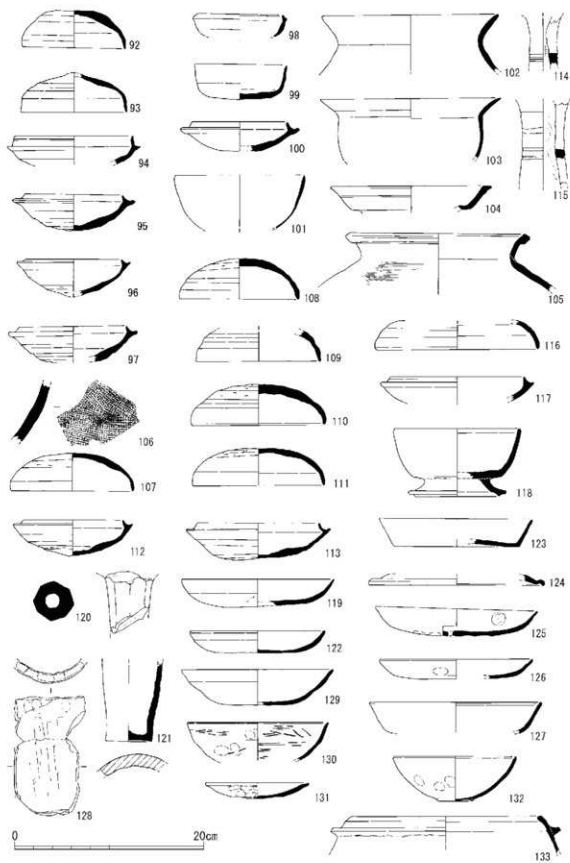
第19図41～48、第20図50・51は高杯である。大・中形品(41～46)と小形品(47・50・51)が認められる。41～43は大形の高杯の口縁部である。いずれも皿状の杯部を特徴とする。2次口縁が外反するもの(41・42)と、直線的に伸びるもの(43)がある。後者は擬口縁の上部に2次口縁を接合し、下部を外面に出し、稜をなすタイプで、杯部の成形に前者と異なる手法が認められる。いずれも摩耗が著しいが、41は外面に細かな縦方向のミガキが認められる。44～46は、高杯の脚の一部である。41～43と接合点はなく、また色調にも違いが認められることから、同一個体として認識できるものは確認できない。41は橙褐色を、42・43はぶい黄橙褐色を呈する。48は、高杯の脚部の一部である。脚部の上端に横方向の沈線が施されることから、東海系高杯と考えられる。色調は、ぶい橙色を呈する。また49は、高杯ないしは器台の脚部とみられる。摩耗が著しいが、5条の櫛描直線文が認められ、広義の東海系の範疇でとらえられる土器である。色調は、ぶい黄褐色を呈する。47・50・51は、小形の高杯である。50は、杯部の口径は大きく開かないタイプで、緩やかに裾状に開く脚部をもつとみられる。

第20図52～61は、いずれも鉢である。54は、台付鉢で、緩やかに外反する口縁部を特徴とする。鉢部と脚部に明瞭な接合点は確認できないが、色調や調整から同一個体とみられる。摩耗が著しいが、杯部外面にわずかにミガキがみとめられる。52・53は、受口状口縁をなす鉢である。52は近江系の特徴をよく残し、口縁部外面に櫛描列点文が認められるが、53は口縁部の受部が浅く、ナデ調整で仕上げられており、近江系の文様要素はすでに残していない。小形鉢には、口縁部が緩やかに外方に伸びるもの(56・57)と、内湾気味に立ち上がるもの(58～60)がある。さらに後者は、内外面にミガキあるはナデを施すもの(58・59)と、タタキ成形によるもの(60)がみられる。61は、前者の体部とみられる。

第3トレンチ溝S D44から出土した土器の帰属時期は、高杯の口径が大きく皿状を呈するものが主体であるが、脚部に長脚の著しいものがみとめられないこと、甕の組成はタタキ成形甕と外面ハケ調整甕がそれぞれ35%前後(受口状口縁甕約25%)と拮抗していること、受口状口縁鉢の体部最大径が肩部にあり器高が高いこと、またタタキ成形による小形鉢を含むことなどから、弥生時代後期後葉に帰属する一群とみられる。その時期幅は比較的短いとみられ、おおよそ山城地域の佐山遺跡土器編年Ⅰ式-2～3段階、山城Ⅲ～Ⅳ期に併行するものと考えられる(高野2003・吹



第21図 出土遺物実測図(4)



第22図 出土遺物実測図(5)

田2006)。

(高野陽子)

2)古墳時代～飛鳥時代の遺物(第21図、図版第19・20)

古墳時代の遺物は竪穴式住居跡のほか、土坑、掘立柱建物の柱穴から少量出土した。

竪穴式住居跡SH12出土遺物(第21図62～74) SH12からは須恵器甕・甕・杯身・杯蓋・無蓋高杯・有蓋高杯、土師器甕などが出土しているが、土師器甕については細片であり図示できなかった。SH12は検出遺構で記述したように2基の竪穴式住居跡で、SH12-Bの下層でSH12-Aを検出している。SH12-Bに帰属する可能性が高いものには、62・66・68～72・74があり、SH12-Aに帰属する可能性が高いものに、67・73・75がある。

須恵器甕62は扁球形の体部で直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は水平ぎみに外反したのち、直立ぎみに立ち上がる。頸部外面には櫛描波状文、体部肩には列点文を加飾している。口径9cm、器高11cmを測る。須恵器甕63は、口径9cm、器高14cmを測るもので、肩部の張った体部から頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は頸部からわずかに屈曲し、口縁端部は尖り気味におわる。頸部外面には、2条の稜線を持ち、その間に櫛描き波状文を加飾している。杯身66・72・73は椀状を呈する体部から水平ぎみにのびる受け部で、口縁部は直立するもの(66・73)と、やや内傾ぎみに長く立ち上がるもの(72)がある。口縁端部は内傾ぎみに面をもつもの(66・72)と沈線状にくぼみをもつもの(73)がある。杯部外面の2分の1程度の範囲にヘラケズリが認められる。杯蓋64・71は、口径12～13cm、器高5.0～5.5cmを測るもので、やや丸みをもつ天井部から垂下する口縁部へ続き、口縁端部は内傾する面をもつもの(71)と沈線状に凹むもの(64)がある。口縁部と天井部の境には明瞭な稜を設けている。杯蓋67は天井部が欠損しており、口縁部は外反ぎみに屈曲する。67は上層からの混入の可能性が高い資料である。無蓋高杯68は椀状の杯部で口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖り気味におわる。杯部下半には3条の沈線文とその下に櫛描き波状文を加飾する。また縦位の環状把手があったものと思われる。脚部は掘開きで方形透孔をもつものと思われるが、欠損している。有蓋高杯69は口径11.6cm、器高9.6cmを測るもので、腰部の張った体部から水平ぎみにのびる受け部を呈し、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。脚部は裾広がりで中位に方形透孔を設けている。脚部外面の上半にはかき目が施されている。有蓋高杯66は脚部を欠損した高杯で、杯部は69と同じ形態のものである。70は有蓋高杯の脚部と思われるもので、脚端部は上・下方に肥厚させて面をつくっている。甕74は球形に近い体部で、口頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は上・下方に肥厚して面を設けている。口頸部外面には2条の沈線とその上・下方に櫛描き波状文を加飾している。器台75は包含層出土資料であるが、SH12に帰属する可能性のある資料である。台部から内湾ぎみに深く立ち上がり、口縁部は水平気味に短く外反する。口縁端部は下方に肥厚して面を作る。台部外面には上方に1条、下方に2条の沈線が走り、その間に斜方するかき目を丁寧に施している。

竪穴式住居跡SH12は出土した須恵器の特徴から田辺陶邑編年のTK23型式と思われる。

竪穴式住居跡SH26出土遺物(第21図76・85・87～90) SH26からも土師器が出土しているが、細片であり図示できる資料がなく、須恵器のみを図示した。須恵器は杯身・杯蓋・有蓋高杯・蓋・

無蓋高杯・甕などがある。杯身85・90は半球形の底部から受け部は三角形に短く伸び、口縁部は斜め方向に短く立ち上がる。底部外面の3分の1以下の範囲に削りを施している。85は口径8.4cm、器高4.2cm、90は口径8.6cm、器高4cmを測る。杯蓋81～84は丸みをもつ天井部から聞きぎみの口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境に明瞭な稜を設ける古相のもの(82)と、稜を設けないTK43・TK209の新相のもの(81・83・84)がある。76は無蓋高杯の杯部下半部で、2条の沈線間に柳描波状文が認められ、外面には縦位の把手を2か所に貼り付けている。無蓋高杯77は口径13.6cmを測るもので、椀状の杯部を持ち、口縁部は斜め方向に直線的に立ち上がる。杯部中位には2条の低い突帯とその間に柳描き文を加飾している。有蓋高杯79は扁平な杯部で口縁部は短く立ち上がるもので口径13.5cm、杯部高3.6cmを測る。脚部は高い脚部で方形の透孔を設けている。杯蓋78は無蓋高杯79とセットになる可能性が高いものである。球形を呈する天井部をなし、中央にくぼみを持つつまみを貼り付けている。口径14.6cm、器高4.8cmを測る。高杯脚部80は裾広がりの短いもので、脚端部は上・下部が肥厚して面をつくる。脚部は方形の透孔を設けている。87～89は甕あるいは壺の口縁部片で直線的に外反する口縁部で、口縁部は尖りぎみに終わるもの(87・88)と直立ぎみに立ち上がる頭部で口縁部を丸くおさめるもの(89)がある。SH26から出土した須恵器は、76・77・80・82は古相を呈しており、SH12からの混入と思われるもので、多くのものは田辺陶器編年のTK43型式に属するものと思われる。

竅穴式住居跡SH29出土遺物(第22図92～104) 第2トレンチ東区西端で検出した竅穴式住居跡で、竅穴式住居跡内から須恵器杯身・杯蓋・椀、土師器甕・椀が出土した。杯身94～97・100は口径10cm前後、器高3.2～3.8cmを測るもので、口縁部は斜め方向に短く立ち上がる。杯蓋92・93は口径11cm前後、器高4cm前後を測るもので、口縁部は尖りぎみに垂下し、天井部は円弧状を呈するものである。法量・形態からみて95～97・100と同時期の杯蓋である。椀98は内湾ぎみに立ち上がる体部から口縁部は内側に短く屈曲するもので、高杯の杯部とも考えられるものである。椀99は底部から直立ぎみ立ち上がり、口縁部に続くものである。口縁部はわずかに外反する。104は細片のため不明瞭ではあるが、須恵器甕の口縁部片と思われるものである。口縁部は、水平ぎみに伸びた後、外上方向に直線的に立ち上がり、口縁部端は水平ぎみに肥厚する。口径17.2cmを測る。土師器椀101は内湾ぎみに立ち上がる深い椀状を呈し、口縁部端は尖り気味に終わる。土師器甕102・103は体部から口縁部が「く」の字形に屈曲するものである。102は体部径が口縁部径を凌駕するが、103は口縁部径が体部径を凌駕する。SH29から出土した遺物には、104など古相のものも含まれるが、その多くは、田辺陶器編年のTK209型式～飛鳥1期に属するものと思われる。

掘立柱建物跡SB03出土遺物(第22図118) SB03の各柱穴内からは土師器、須恵器の細片が出土したが、図示できたのはP4から出土した台付鉢118の須恵器である。118は水平ぎみに延びる底部から、斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる杯部に続き、口縁部は丸みを持って終わる。脚部は、斜め下方に裾開きとなり、端部は外方に肥厚するものである。口径13.4cm、器高7.2cmを測る。田辺陶器編年のTK217型式、6世紀末～7世紀初めのものと思われる。

掘立柱建物跡 S B04出土遺物 (第22図115・116) S B04の柱穴内からは、土師器・須恵器の細片が大半であったが、図示できたのは、P5 から出土した高杯柱状部 (115) と柱穴 P25内から須恵器杯蓋 (116) である。115は須恵器高杯の柱状部で、2段の長方形透孔があり、外面には2条の沈線が巡る。116は丸みを持つ天井部は欠損している。口縁部は内湾ぎみに垂下するもので、口縁部端は丸みを持って終わる。

掘立柱建物跡 S B05出土遺物 (第22図114) S B04と同様、各柱穴内からは土師器・須恵器の細片が出土したが、図示できたのは、P2から出土した1点 (114) のみである。114は須恵器高杯の柱状部で、2段透孔の間に1条の沈線が巡る。

掘立柱建物跡 S B06出土遺物 (第22図117) S B06の柱穴 P1 から出土したもので、口径14.2cmを測る。水平ぎみに短く伸びる受け部から、口縁部は断面三角形に短く立ち上がる。

土坑 S K87出土遺物 (第22図107・108) S K87からは図示できる資料として古墳時代後期の須恵器杯蓋 (107・108) が出土した。107・108は丸みをもつ天井部から口縁部はやや広がりぎみとなり、口縁部端は尖りぎみに終わる。

土坑 S K30出土遺物 (第22図109) S K30では土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できたのは古墳時代後期の須恵器杯蓋の細片が1点である。109は、口縁部は広がりぎみで、口縁部端は尖りぎみに終わる。

第2トレンチ包含層出土遺物 (第21図86・91、第22図105・106・110～118) 第2トレンチ東区では竪穴式住居跡が集中して存在しており、竪穴式住居跡の遺構検出作業時に古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。数基からなる竪穴式住居跡に帰属する可能性もあるが明確ではないため、ここでは包含層資料として図示した。86は須恵器杯身で、口径10.5cm、器高4.0cmを測るもので、口縁部は断面三角形で短く立ち上がる。91は口径13.2cm、器高4cm以上を測るもので、受け部は水平ぎみに短く伸び、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。105は須恵器壺の口縁部片である。ナデ肩の体部で口頸部は外反する口縁部に続く。口縁部端は肥厚して、外面に面をもつものである。口径19.6cmを測る。106は甕の体部下半部と思われるもので、赤褐色を呈し、細かいタタキが施されたもので、韓式土器と思われる。110・111は須恵器杯蓋で、丸みを持つ天井部から口縁部と続くもので、口縁部端は尖りぎみにおわる。112・113は須恵器杯身で、口縁部は断面三角形を呈し、短く立ち上がるものである。112は口径10.5cm、器高3.8cm、113は口径12.8cm、器高4.0cmを測る。

3) 古代～中世の遺物 (第22図、図版第20)

西三坊大路西側溝 S D01出土遺物 (第22図119、図版第19) 第1トレンチ S D01は西三坊大路の西側溝の可能性が高い溝であり、溝内からは土師器皿・須恵器壺などが出土したが、図示できたのは1点のみである。土師器皿119は口径16.0cm、器高2.0cm前後で、口縁部は尖りぎみに終わる。外面下半にははていねいな削り調整を施している。

宅地内区画溝 S D25出土遺物 (第22図120～124、図版第20-(2)) 第1トレンチ S D25は宅地内区画溝の可能性のある遺構で、S D25からは土師器皿・高杯・甕、須恵器杯 A・杯蓋・壺・甕

などが出土したが、細片が多く図示できる資料は5点である。土師器皿122は口径4.0cm、器高2.3cmを測り、口縁部は尖り気味におわる。外面調整は摩滅により不明。土師器高杯120は柱部のみで、中空で外面は八面体に成形している。須恵器杯A123は斜め上方に直線的に立ちあがるもので、口径16.2cm、器高3.0cmを測る。須恵器杯蓋124は天井部が欠損しているが宝球形のつまみをもつものと思われるもので、口縁部は屈曲したのち口縁端部はやや内側に巻き込むように肥厚する。口径13.6cmを測るが、細片である。須恵器壺G121は平底の底部で直立きみに高く立ち上がる体部で、口頸部は欠損しているが直線的に長く立ち上がるもので、長岡京期に特徴的な壺である。

土坑SK18出土遺物 (第22図131) 第1トレンチSK18からは、図示できる遺物として、土師器皿131がある。131は口径11.0cm、器高1.6cmを測るもので、丸底ぎみの底部から口縁部は水平に延びる。

溝SD28出土遺物 (第22図132・133、図版第20-(2)) 第2トレンチSD28からは土師器、須恵器、瓦器、白磁の細片が出土しており、図示し得たのは2点である。132は口径13.0cm、器高4.8cmで、底部には断面三角形の低い高台を貼り付けた瓦器椀である。133は口径20.0cmを測る羽釜で、口縁部は内湾きみとなる。

井戸SE01出土遺物 (第22図125~127、図版第20-(2)) 第2トレンチSE01からは、土師器皿・甕・高杯、須恵器壺の各細片が出土したが、図示できるのは土師器皿125~127である。125は口径17.0cm、器高2.8cmを測るもので、口縁部はなで調整を施している。125の底部には円形の穴が穿たれている。126は口径16.2cm、器高2.0cm前後を測る。127は口径18.0cm、器高3.2cm以上で、皿125・126よりも口径がやや大きく器高も深いものである。土師器皿の特徴から平安時代前期のものと思われる。

第2トレンチ包含層出土遺物 (第22図129・130) 129は口径16.0cmを測る白色系の土師器である。130は口径15.0cmを測る瓦器椀で、内外面に粗いミガキを施している。

第3トレンチ包含層出土遺物 (第22図128、図版第20-(2)) 第3トレンチSD44の最上層で、奈良時代の土師器・須恵器等を含む整地層から出土したもので、直径約10cm、厚さ約1cmを測る土師質で、円筒管状の不明土製品である。

5. まとめ

これまでの長岡京跡・井ノ内遺跡の調査では弥生時代の遺構・遺物の検出例がなかったが、今回の第3・第4トレンチで弥生時代後期の溝を検出した。この溝は円弧を描くように掘り込まれており堅穴式住居跡などは検出されていないが、弥生時代後期の集落を画する溝の可能性が高く、第3・4トレンチの東側に集落が存在するものと思われる。

溝SD04と溝SD44はほぼ規模、形態、土壌堆積、遺物出土状況等が類似しており、一連の湾曲する溝と推定される。過去数回におよぶ調査(右京第21・27・615次調査)の結果と今回の調査を総合的に判断すると、大溝は環濠の可能性が窺われる。遺構の立地は段丘面にあることから、東側には弥生時代後期の大規模な集落があったものと想定される。

古墳時代前期の様相は明らかではないが、古墳時代中期後葉～後期末の竪穴式住居跡が4基検出されている。後期の集落に関しては、近接した井ノ内所在の古墳群との関連がこれまでも指摘されていたが、今回の調査成果から、第2トレンチにまで広がる事が明らかとなった。

第2トレンチ西区で検出された総柱建物S B05・06は、倉庫棟である可能性が高い。総柱建物S B05・06とも真北に対して、総柱建物S B05は28°、S B06は17°30'、S B07は15°、いずれも西側に振れる。この2棟の建物は、竪穴式住居と複数回の重複がみられ、住居跡の主軸は差ほど変わらないことから、時間を空けずに建て替えが行われたものと思われる。また、これらの柱穴内からは、古墳時代後期の土師器・須恵器がわずかながら出土した。出土量が少なく、積極的な根拠は乏しいが、竪穴式住居と相前後した時期に作られた倉庫棟である可能性が高いと考えられる。

長岡京以前の奈良時代の遺構にはこれまでに溝などを検出しているが、今回新たに掘立柱建物跡を検出し、奈良時代の様相が明らかとなった。ただ、奈良時代後期の遺物と長岡京期の遺物の峻別が明確でなく、長岡京期の建物や溝であった可能性も十分考えられるものである。第2トレンチから出土した奈良時代の掘立柱建物跡は奈良時代を通じて3～4回の建て替えが見られ、今里遺跡の広がりや検討される重要な資料である。

長岡京期、条坊に伴うものとして第1トレンチで検出した溝S D01・S D25がある。この2条の溝の検出によって、西三坊大路の規模(路面幅)がほぼ判明した。これは右京第83・105次発掘調査で検出した溝S D8315(推定西三坊大路の東側溝)の溝心の座標はX=-118.4004でY=-28.4340であることから、西三坊大路の路面幅が今回の調査成果から類推すると24mとなるもので、(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した右京第772・775次調査(上里遺跡内)の資料(溝10=西三坊大路西側溝、溝11=宅地区画溝)と酷似するものである。

今回調査した第1トレンチの溝S D01と右京第772・775次調査で検出した溝10とは、南北方向でその直線距離は約670mと離れているが、両溝の心々の座標は、Y座標値の差が0.3mであり、振れ角はN-0°01'31"-Wである。右京第772・775次調査では西三坊大路の東側溝は検出されなかったが、西三坊大路に関連して真南北方向の柵列が見つかった。この柵列の座標値はY=-28.433.9で、と築地心(座標Y=-28.433.9)との間隔が30mと報告されている。この資料に類似する長岡京跡左京第361次調査では、東三坊大路の西側築地心と東側溝の柵の間隔が30m、路面幅25mの結果が得られており、長岡京跡西三坊大路の道(路面)幅が24m(8丈)であることが判明した。

第1トレンチで検出した溝S D25は宅地区画溝で、溝S D01との空間地は築地堀の存在が想定できる。長岡京跡右京第772・775次調査(上里遺跡内)の宅地区画溝と酷似し、築地跡も想定されている。今回の調査地(三条四坊二町)は大路に面する宅地に邸宅・官衙等の存在が推察される。

今回の調査地(井ノ内地区)では、過去の調査例の多さに比して、長岡京跡に関連する条坊道路等の遺構が余りにも検出例が少ないのが現状である。今回の調査は西山丘陵から派生する舌状の段丘崖(傾斜変換線)にあたる今里遺跡であり、右京第772・775次調査は上里遺跡である。井

ノ内遺跡の西部、西南部においては三坊大路の造作が困難であったかもしれない。また、旧乙調社に比定される地であり、井ノ内車塚、井ノ内稲荷塚古墳をはじめ古墳群が多く、「聖地」として強く意識されていたかもしれない。

(竹井治雄)

参考文献

- 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(1980-2) 京都府教育委員会) 1980
- 山口 博「長岡京跡右京第83次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 竹井治雄「長岡京跡右京第615次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 網伸也・百瀬正恒「長岡京跡右京二条四坊一町跡・上里遺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報(2003-4)』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 2003
- 高野陽子「(3)土器の編年」(『京都府遺跡調査報告書 佐山遺跡』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 増田孝彦「長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 吹田直子「山城地域」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター) 2006
- 竹井治雄「長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

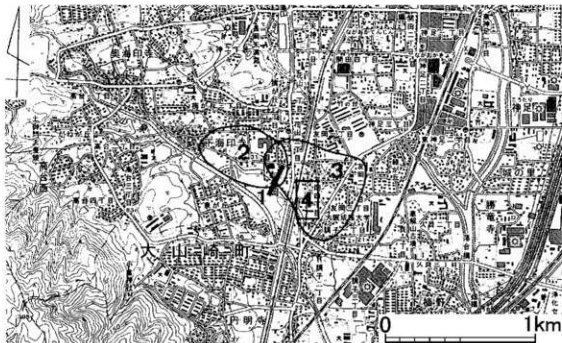
3.長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5 ・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡 ・伊賀寺遺跡発掘調査報告

1. はじめに

本報告は、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、平成20年度に実施した石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う発掘調査のうち、8トレンチに関するものである。

調査地は、長岡京市下海印寺伊賀寺・下内田に所在する。小泉川左岸の河岸段丘上に立地しており、付近の標高は、27.1～28.1mである。8トレンチは、長岡京の条坊復原によると、八条三坊九・十五・十六町(新条坊では七条三坊十二町、八条三坊九・十町)にあたり、八条条間北小路、西三坊坊間小路が想定される位置にあたる。また、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。

周辺の調査状況は、北側に広がる低位段丘縁辺部では調査地北西側100mの現NTT建物建設に伴い昭和56年度(右京第70次調査¹⁾)に実施された調査では、旧石器時代から近世に至る遺物が出土し、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡7基、土坑1基、七条坊間小路北側溝の可能性が指摘されている溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡6棟・土坑3基・櫓列が検出されている。昨



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)
1. 調査地 2. 伊賀寺遺跡 3. 友岡遺跡 4. 鞆岡麩寺



第2図 トレンチ配置図

年度調査報告した友岡西畑地区(右京第910・941次調査)^{Ⅱ2}では、縄文時代草創期と考えられる尖頭器、縄文時代中期の竪穴式住居跡1基、縄文時代晩期と考えられる石冠、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基、長岡京期の掘立柱建物跡3棟・溝2条・土坑3基、中世の掘立柱建物1棟・溝1条・土坑5基が、時期不明の掘立柱建物跡3棟が検出されている。

南側の河岸段丘上では、道路予定地内や第二外環状道路建設に伴う右京第907・943・947次調査で、縄文時代中期末～後期後葉の遺物とともに竪穴式住居跡・土坑・火葬人骨を埋納した墓壇や、古墳時代前期・後期の竪穴式住居跡、長岡京期の区画溝など多くの遺構が検出されている。

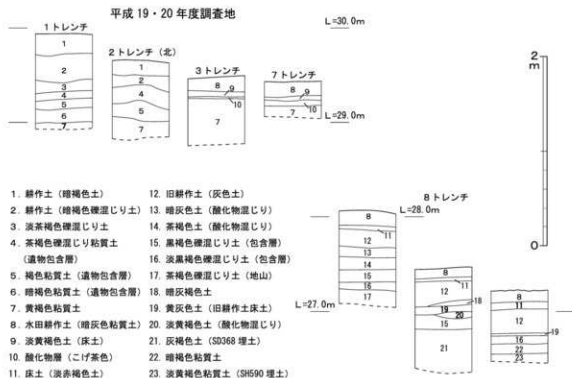
調査は、平成19年度に1～4トレンチまでを、平成20年度に5～8トレンチの調査を実施した(第2図)。現地調査期間は平成20年4月24日～10月31日である。調査面積は合計2,200㎡で、このうち8トレンチは1,267㎡である。1～7トレンチまでの調査結果は、平成20年度に報告している。^{Ⅱ4}

平成21年度は、遺物が多量に出土した8トレンチの整理・報告作業を行い、調査第2課調査第2係長森正、同主任調査員増田孝彦が担当した。原稿執筆は、縄文土器を京都大学生木村啓章、石畿を除く石器類を当センター専門調査員黒坪一樹、それ以外を増田が執筆した。

調査にあたっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府教育委員会・京都府乙調土木事務所をはじめとする関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。^{Ⅱ5}整理作業については、整理員の参加・協力を得た。^{Ⅱ6}記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府乙調土木事務所が負担した。報告に使用した座標は日本測地系第6座標系である。

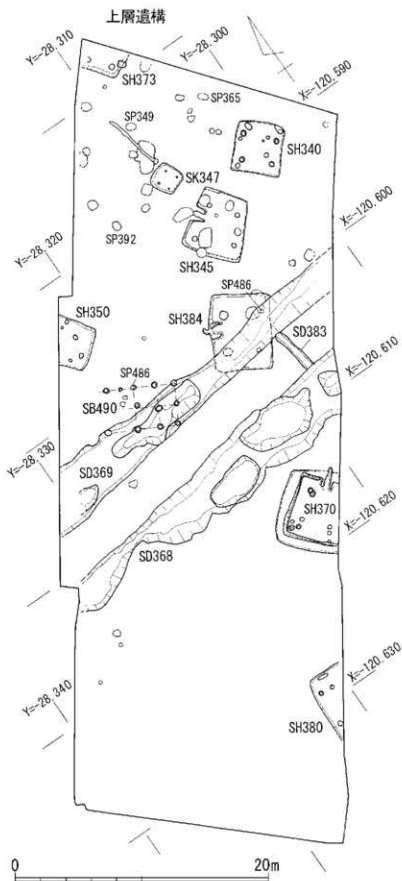
2. 調査概要(第2・3図)



第3図 土層柱状図

8トレンチの現況は水田であるが、中央付近でトレンチに対して45°北に傾く畦畔があり、これを境に北側と南側の水田面は約1mの比高差がある。台地上の地山であった黄褐色粘質土は、調査地ではトレンチ北端で一部確認したのみで、8トレンチ内には広がっていない。

調査地の土層(第3図)の堆積状況は、トレンチ北東壁高位側にあたる北側では、現水田耕作土(第8層)の下に床土(第11層)があり、さらに旧耕作土(第12層)が堆積し、その下位に酸化物を多く含む第13層の暗灰色土、同様に酸化物を多く含む第14層の茶褐色土がある。この第13・14層からは若干の須恵器、土師器、縄文土器が含まれる。この下には多くの遺物を含む第15層の黒褐色礫混じり土、第16層の淡黒褐色礫混じり土の包含層が存在する。長岡京期の土坑はこの第7層から掘り込まれる。この下位は、縄文時代検出面となる茶褐色礫混じり土(第17層)のベース面となる。この土層はトレンチ中央部分の畦畔付近を境にして南側検出面は淡黄褐色粘質土となる。トレンチ南端側の堆積状況は、現水田耕作土(第8層)の下に床土(第11層)、旧耕作土・床土(第12・19層)が堆積しており、その下位に第16層の淡黒褐色礫混じり土の包含層ある。この第16層以下は、縄文時代の遺構検出面である淡黄褐色粘質土のベース面となる。この淡黄褐色粘質土は全面に広がるのではなく、北側は竪穴式住居跡S H440・450・500-1・2、西側はS H400、墓S T620、土坑S K544、南側は竪穴式住居跡S H590、東側はトレンチ東壁に囲まれた範囲にのみ認められ、この部分を除く北側は前述した茶褐色礫混じり土、西側は淡黄褐色粗砂礫混じり土ないし粘質土となっている。この西側の土層は、隣接する右京第943次調査の淡茶褐色砂質土、灰白色砂礫層に相当するものである。中央部分に広がる淡黄褐色粘質土は、部分的に上下2層からなる部分も認められた。結果的に上下2層に分かれる部分は自然地形の起伏に浅く炭や遺物が



第4図 上層遺構平面図

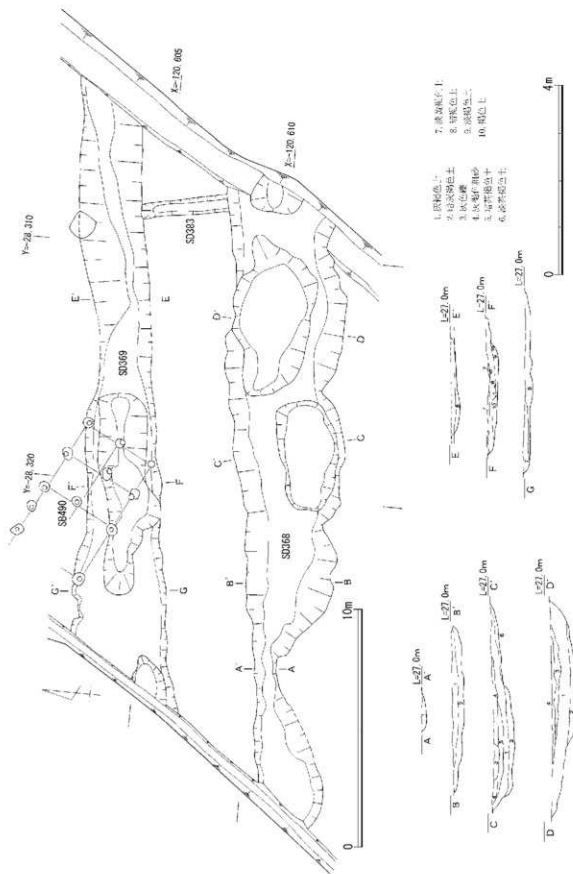
堆積したものであると判断した。

3. 検出遺構

検出された遺構は、上層の遺構として、長岡京期の溝3条、土坑1基、古墳時代後期の竪穴式住居跡8基、掘立柱建物跡1棟がある。下層遺構としては、縄文時代の竪穴式住居跡8基、土坑・柱穴約220基がある。上層・下層から検出された柱穴は、建物跡を特定するまでには至らなかった。

古墳時代の竪穴式住居跡の規模については、方向を入れた長辺×短辺、深さを記し、部分的な検出にとどまった住居跡については検出した長辺×短辺、深さとした。主軸方向については、竈のつく辺に直行する辺とし、竈のないものについては、住居の長辺側、部分的な検出にとどまった住居跡については検出できた長辺側で記した。

縄文時代の竪穴式住居跡の規模は、全体が分かるものが少なく、不整形なものが多い、主軸方向については、北西から南



第5図 溝S D 368・369平・断面図

西方向に並んでいるが、住居支柱穴の長軸方向で記した。

1) 上層の遺構(第4図、図版第2)

(1) 奈良時代の遺構・遺物

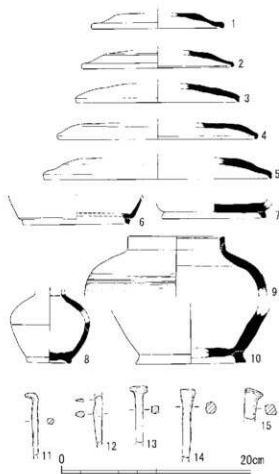
溝S D368・369(第5図、図版第3・17) トレンチ中央部を東西に平行して延びる溝を検出した。北側溝(S D369)と南側溝(S D368)の間は約3.2~3.5m幅をもつ。溝S D369は中央部分が削平を受けやや幅が狭くなっているが、東端で幅約2.6m、深さ約0.2m、西端で幅約4.0m、深さ0.2mを測る。全体的に東側から西側に向かってゆるい傾斜をもつ。長さ約31mを検出した。溝中央部より西側では、溝底面が長さ8.6m、幅2.2m、深さ0.15mにわたって一段掘り下げられている。埋め土中より、長岡京期と考えられる須恵器・平瓦片・丸瓦片が出土している。

溝S D368の規模は、東端で幅4.5m、深さ0.4m、西端で幅2.6m、深さ0.15mを測る。溝S D369同様、底面が3か所ので一段大きく掘り下げられている。また、溝西端近くでは、南側の掘形が北側に向かって、基部幅6.2m、先端幅2.2m、長さ2mが突出している。この部分のみ、溝幅が1m、深さ0.1mとなっている。この狭くなる部分を除き、東側・西側については滞水するような状況である。溝を渡る入り口部分である可能性も考えられるが、溝S D369側に同様な突出部分は認められない。埋土中より長岡京期と考えられる須恵器・平瓦片・土馬片が出土した。こ

の両溝に挟まれた空間には柱穴等は認められなかった。区画を目的とした築地等の施設が考えられる。この溝の延長部分は、右京第927次調査地で確認されているが、小泉川の流路痕跡の残る崖面以西は失われている。

埋土中からは多くの須恵器、土師器、平・丸瓦片、土馬片、鉄製品等が出土したが、図化できたものは少ない(第6図、図版第17)。溝S D368からは2・5・7・10、溝S D369からは1・6が出土した。1~5は須恵器杯B蓋である。1~5はいずれも口縁端部が下方へ屈曲する。6・7は須恵器杯Bである。高台が底部端近くに付される。8は須恵器壺Lである。9は須恵器短頸壺である。肩部付近にカキ目が施される。10は壺底部片である。内面底部に自然軸が付着する。11は鉄釘。12は刀子片で、刃部に磨ぎ減りが認められる。これらの遺物は、長岡京期と考えられる。

溝S D383(第5図、図版第3) 溝S D368・369を繋ぐように直交するもので、幅0.6~0.8m、



第6図 溝S D368・369出土遺物実測図

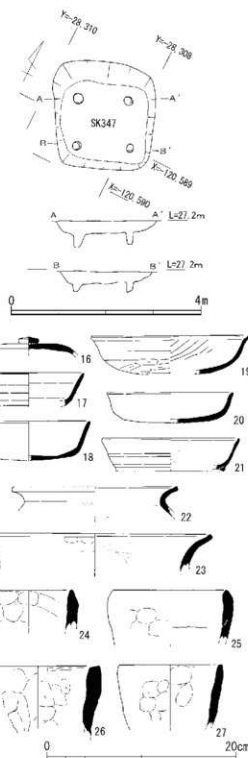
深さ0.12mを測る。溝S D369から溝S D368に向ってゆるやかに傾斜しており、排水溝とも考えられる。溝東側掘形には排水溝を覆っていた板材の固定に使用されていたと考えられる鉄釘3本が直立した状態で検出されたが、板材の痕跡は確認されなかった。

第6図13～15は、鉄釘である。トレンチが滞水した際に先端部分を欠損した。溝S D368より検出された釘11に比べて太いものである。残存状況が最も良いもので、14は厚さ1.2cm、長さ7.5cmを測る。

土坑S K347(第7図、図版第4) 竪穴式住居跡S H345の北側で検出した。一辺2.2×約2mの方形の平面形を呈し、深さ0.3mを測る。主軸方向はN27°Wである。底面は、中央部が浅いレンズ状に凹む。これを囲む形で柱穴が4か所検出された。柱穴の規模は直径0.18～0.22m、深さ0.24～0.38mを測る。柱穴は杭状のもので、先端が尖り、やや内傾気味に打ち込まれる。くみ取り式のトイレ遺構を想定し、土坑底面に堆積する土砂を採取し寄生虫卵分析を行った。

その結果、「…花粉化石はわずかに認められたのみで、多くは分解・消失している可能性が高いと推察される。こうしたことから寄生虫卵も同様に分解・消失している可能性も考えられよう。」と結果が出た。分析結果からトイレ遺構と断定することはできなかったが、否定もできないものとなった。

埋土中からは多くの須恵器(第7図16～18)・土師器(19～23)・製塩土器(24～27)が出土した。16は須恵器杯B蓋である。扁平な宝珠つまみが付く。17・18は須恵器杯Aで、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。18は口径12.75cm、器高4.2cmを測る。19・20は土師器杯である。19は内面立ち上がり部分に放射状の暗文を施す。外面はヨコナデ、底部付近はヘラ削りを施す。20は口径13.2cm、器高3.25cmを測る。21は土師器杯B



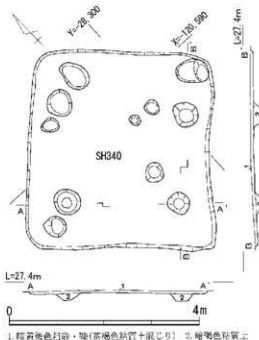
第7図 土坑S K347平・断面図、出土遺物実測図

である。貼り付け高台を有するもので口径14.4cm、器高3.5cmを測る。22・23は土師器甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、粗いハケ目調整が残る。22は口径17.2cm。23は口縁端部を上方につまみあげる。口径24.2cmを測る。24～27は製塩土器である。上半のみ依存し、砲弾型の体部に尖底をもつものと思われる。調整はエビオサエとナデが主体である。25は、体部に比して口径が狭いものである。口縁部は緩やかに外上方に広がるものと、やや内傾するものがある。26は口径12.8cmを測る。器壁は厚さ1cm以上と分厚い。これらの遺物は長岡京期と考えられる。

(2) 古墳時代の遺構・遺物

竪穴式住居跡 S H340 (第8図、図版第4) トレンチ北東壁近く、竪穴式住居跡 S H345の東側で検出した住居跡で、検出した住居跡のうち規模がわかるものの中で最も小形の住居跡である。住居跡の規模は、4.2×4.0m、深さ0.1m、主軸方向はN42°Eである。竈・周壁溝は認められなかった。主柱穴は住居角付近から4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.5～0.6m、深さ0.18～0.2mを測る。埋土中より細片化した須恵器・土師器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

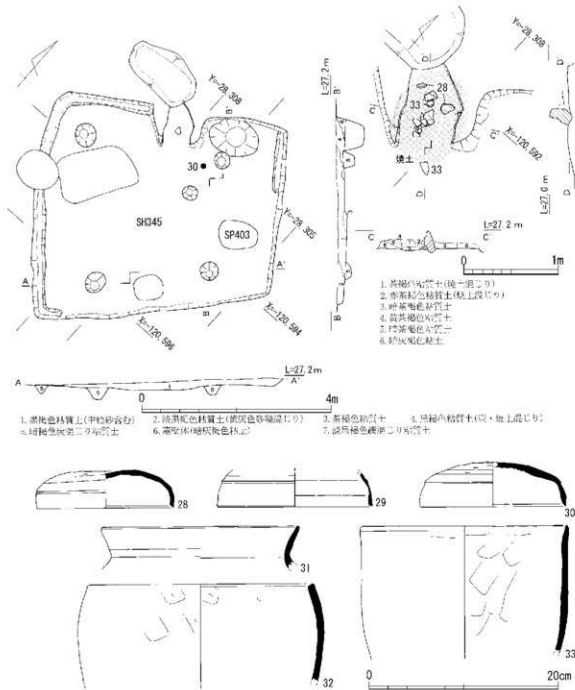
竪穴式住居跡 S H345 (第9図、図版第4・5) 竪穴式住居跡 S H340の南側で検出した住居跡で、南西辺中央付近と北東辺の竈煙道付近が後世の遺構により削平されている。住居跡の規模は、5.0×3.5m、深さ0.2m、主軸方向はN36°Wである。主柱穴は住居角付近から4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.38～0.45m、深さ0.22～0.26mを測る。周壁溝は北辺の竈部分を除き北西側と南西辺、北東辺の一部に幅0.2m、深さ0.15mが設けられている。北側の主柱穴そばには長径1.08m、短径0.8m、深さ0.53mの貯蔵穴と考えられる土坑が設けられている。竈は、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、両焚口間の内法が55cm、高さ14cm、長さ0.9mを測る。然焼部は平坦で炭が堆積し、中央に支脚が1石立つ。支脚周辺に小形の土師器甕が認められたが、図化できなかった。煙道部は後世の遺構に削平されている。



第8図 竪穴式住居跡 S H340実測図

出土遺物(第9図・図版第17)には、埋土中より29・31・32、竈内から28・33、竈周辺からは30が出土した。28～30は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年 T K10併行期と考えられる。31は土師器甕である。32・33は土師器甕である。32は口縁部がやや内傾し、内外面ともケズリ調整が施される。33は、内面はナデ仕上げしている。

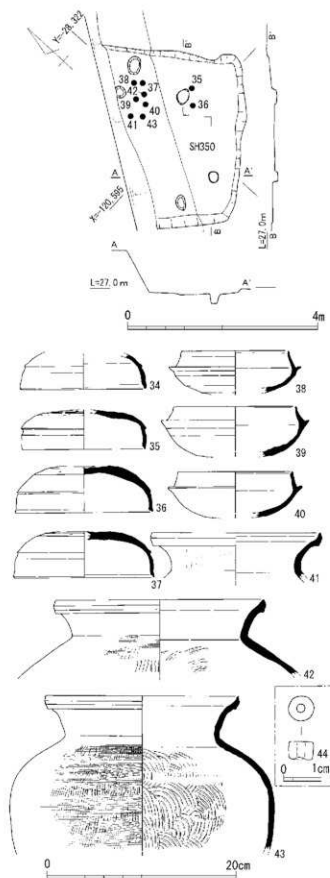
竪穴式住居跡 S H350 (第10図、図版第5) トレンチ北西壁中央付近で検出した。西側に拡張した際に北東辺が長く、南西辺が短い住居跡



第9図 竪穴式住居跡 S H345実測図、出土遺物実測図

であることが判明した。住居跡の規模は不明であるが北東辺が3m以上、東西3.7m、深さ0.16mを確認した。主軸方向はN34°Wである。主柱穴は住居跡南角付近から1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.2m、深さ0.1mを測る。周壁溝は存在しない。竈は検出されなかった。

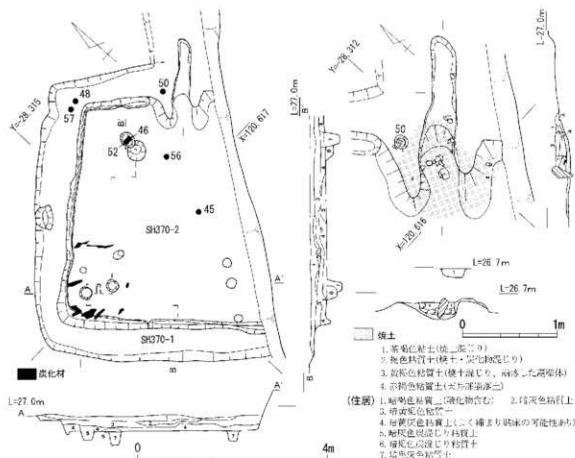
出土遺物(第10図)としては、住居西角付近、床面付近より34~43、埋土中より滑石裂白玉44が出土した。34~37は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。36は口径14.3cm、器高4.9cmである。38~40は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。杯身・杯



第10図 竪穴式住居跡 S H350実測図、出土遺物実測図

蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年 T K10併行期と考えられる。41~43は須恵器甕である。口縁部は回転ナデ、外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキである。41は口径17.6cm、42は口径21.8cm、43は口径20.3cmを測る。44は滑石裂白玉である。直径6.5~7mm、口径2mm、厚さ4.9mm、重さ0.4gを測る。

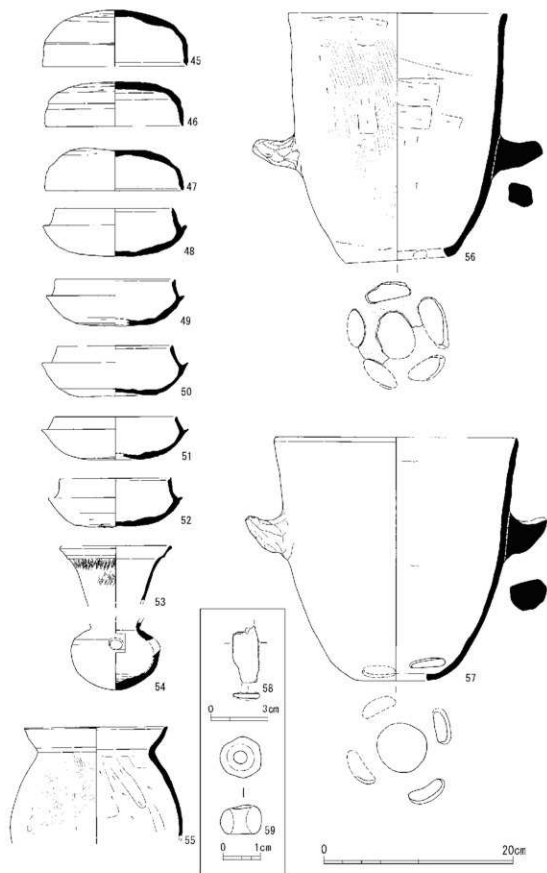
竪穴式住居跡 S H370 (第11図、図版第5・6) トレンチ南東壁中央付近で検出した住居跡で、約1/2が調査地外となる。2基の住居が重なり合っており、火災に伴い小さい住居 (S H370-2) から大きな住居 (S H370-1) へと建て替えが行われたようで、竪穴式住居跡 S H370-2 の西側角付近の床面には多くの炭化材が認められた。両住居とも北西辺は確認できたが、北東・南西辺は約半分の検出にとどまった。竪穴式住居跡 S H370-1 は北西辺5.6m、南西辺4.8m、北東辺3.4mを検出し、深さ0.25m、主軸はN50°Eである。主柱穴は直径0.28m、深さ0.45mである。竪穴式住居跡 S H370-2 は北西辺4.7m、南西辺4.3m、北東辺2.8m、深さ0.2mを検出した。主軸はN48°Eである。主柱穴は、建て替え前後とも、近い場所に設けられており、直径0.25~0.28m、深さ0.22~0.3mである。また、竪穴式住居跡 S H370-1 には竈が設置されている北東辺を除き、幅15cm、深さ6cmの周壁溝が設けられている。竪穴式住居跡 S H370-2 の竈は残存状況が非常に良く、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、



第11図 竪穴式住居跡SH370実測図、出土遺物実測図

両狭口間の内法が35cm、高さ15cm、燃焼部は平坦で炭が堆積し長さ0.8mを測る。中央に支脚が1石立つ。煙道部は緩やかな勾配で幅約20cm、長さ95mを測る。

出土遺物(第12図、図版第17・18)には、竪穴式住居跡SH370-2の竈左側より須恵器杯身50、中央付近より須恵器杯蓋45、竈周辺の住居床面から須恵器杯蓋46、杯身52、土師器甕56が出土した。竪穴式住居跡SH370-1では住居北角付近の床面より須恵器杯身48、その南側で土師器甕57が出土した。45~47は杯蓋である。いずれも天井部外面はヘラ削りを施す。45は口径15.1cm、器高5.95cm、46は口径14.3cm、器高4.75cm、47は口径14.4cm、器高4.5cmを測る。48~52は杯身である。底部外面はヘラ削りを施し、52の内面には叩き痕が残る。48は口径12.3cm、器高5.1cm、50は口径12.0cm、器高5.35cm、52は口径11.6cm、器高5.1cmを測る。杯身・杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。53・54は甕である。同一個体と考えられる。頸部には櫛描波状文が認められる。55は土師器甕である。外面はハケ目調整、内面はヘラ削りを施す。口径14.9cmを測る。56・57は土師器甕である。56は口径23.0cm、器高26.2cm、57は口径25.4cm、器高25.65cmを測る。残存状況の良い56では、外面は粗いハケ目、内面はケズリ調整を施す。底部は、56は6孔、57は5孔あり、56には粗いハケ目調整が認められる。58は刀子片である。残存長3.1cm、刃部の幅1.4cm。59は翡翠製小玉である。淡灰黄色を呈し、直径1.05cm、厚さ6.5~7.5mm、重さ1.3gを測る。両面穿孔で、よく研磨された縄文時代の優品である。



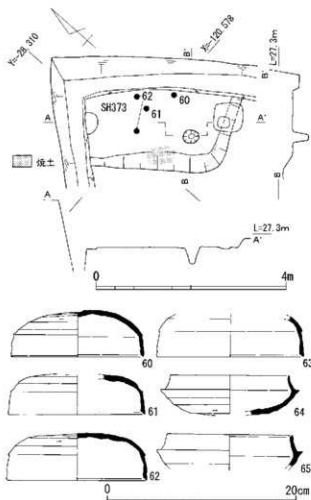
第12図 竪穴式住居跡 S H370実測図、出土遺物実測図

竪穴式住居跡 S H373 (第13図、図版第7) トレンチ北角付近より検出したもので、大半が調査地外に延びる住居跡である。住居跡の規模は不明であるが、南西辺3.0m、南東辺2.1m、深さ0.2mを確認した。主軸方向はN37°Wである。主柱穴は住居南角付近から1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.3m、深さ0.34mを測る。周壁溝は存在しない。竈は検出されなかったが、住居南西側掘り込み側壁で赤色に被熱を受けた部分が観察された。

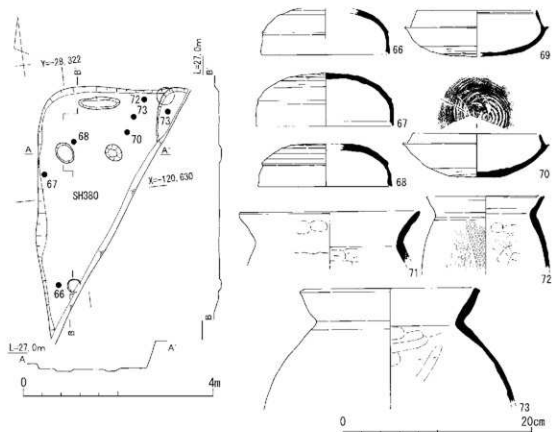
出土遺物(第13図・図版第17)には、埋土中より63~65、床面より60~62が出土した。60~63は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。60は口径13.8cm、器高5.0cm、62は口径14.3cm、器高4.75cmである。64・65は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。杯身・杯蓋の形態から、住居の時期は陶邑編年TK10併行期と考えられる。

竪穴式住居跡 S H380 (第14図、図版第7) トレンチ南端の南東壁で検出したもので、住居北側角を確認したのみで、大半が調査地外になる。住居跡の規模は、主柱穴と考えられる柱穴を2か所検出しており、この柱穴位置から復原すると一辺5.5mほどの規模が推定される。床面までの深さ0.12mである。主軸方向はN5°Wである。主柱穴は住居北・南角付近から2か所を検出した。柱穴の規模は直径0.28~0.46m、深さ0.06mを測る。周壁溝は存在しない。住居北辺のトレンチ壁際で焼土・炭混じりの長径1.2m以上×短径0.4m以上、深さ0.05mの楕円形を呈する浅い土坑状の凹みを検出した。竈付近に設けられた土坑と考えられる。

出土遺物(第14図)には、住居北辺・西辺付近の床面から66~69、北辺床面付近より70・72、土坑状の浅い凹みの埋土中から67・73が出土した。66~68は須恵器杯蓋である。丸を帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。67は口径14.3cm、器高5.65cmである。69は須恵器杯身で、丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削りを施す。70の内面底部には叩き痕が残る。杯身・杯蓋の形態から、69は陶邑編年TK10併行期と考えられる。70はやや新しい資料で、混入品の可能性がある。71~73は土師器甕であ



第13図 竪穴式住居跡 S H373実測図、出土遺物実測図

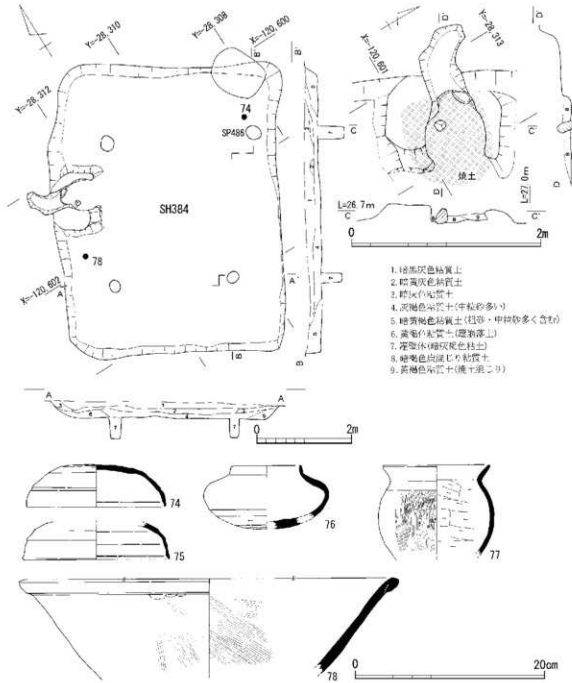


第14図 竪穴式住居跡SH380実測図、出土遺物実測図

る。口縁部は回転ナデ、72の外側は粗いハケ目調整、内側はヘラ削りを施す。口径12.2cmである。73は口径18cmを測る。

竪穴式住居跡SH384（第15図、図版第7・8） トレンチ中央部付近で検出した住居跡で、北東角と南西角を結ぶ住居南側1/2を溝SD369により削平される。住居跡の規模は、北西辺6.2m×北東辺4.6m、深さ0.44m、主軸方向はN56°Wである。支柱穴は住居角付近よりやや内側の4か所で検出した。柱穴の規模は直径0.3～0.4m、深さ0.55～0.68mを測り、検出した住居跡中最も深いものである。周壁溝は設けられていない。竈は、住居北西辺の中央部に付く。本体の規模は、両焚口間の内法が58cm、高さ28cm、長さ1mを測る。燃焼部は平坦で炭が堆積し、中央に支脚が1石立つ。煙道部は全長0.7m、住居外側に約0.55m延びている。

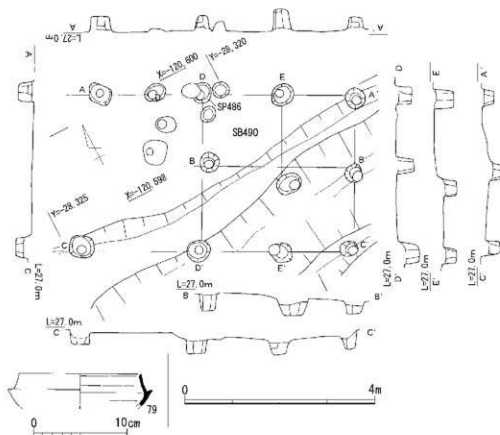
出土遺物（第15図・図版第17）には、埋土中より75～77が、竈付近から78が出土し、住居東端より74が出土した。74・75は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外側はヘラ削りを施す。74は口径14.5cm、器高4.5cmを測る。杯蓋の形態から、住居の時期は陶器編年TK10併行期と考えられる。76は須恵器短頸壺である。77は土師器甕で、竈内の焚き口付近より出土した。球形の体部と「く」字状に屈曲する口縁部からなる。体部外側は縦方向のハケ目調整、内側はヘラ削りを施す。78は土師器鉢と考えられるもので、口縁端部を肥厚させ、内外面とも粗いハケ目調整を施す。



第15図 竪穴式住居跡 S H384実測図、出土遺物実測図

掘立柱建物跡 S B490 (第16図、図版第8) 調査地中央のトレンチ北西寄りの溝 S D369の下層より検出した。桁行2間分(3.2m)×梁間2間(3.3m)の総柱建物である。北東側と南西側に桁行1間分西側に延びており、それぞれ柱間2.2m、2.5mを測る。主軸方向はN62°Wを測る。倉庫と考えられる。柱間は桁行が1.7・1.6m、梁間が1.5・1.9mである。柱掘形は直径0.4~0.5m、深さ0.35~0.45mを測る。柱穴 S P 486より須恵器杯身(79)が出土した。

出土遺物(第16図)には、須恵器杯身79がある。口縁部は内上方に高く立ち上がる。掘立柱建物跡の時期は、陶邑編年 T K10併行期と考えられる。

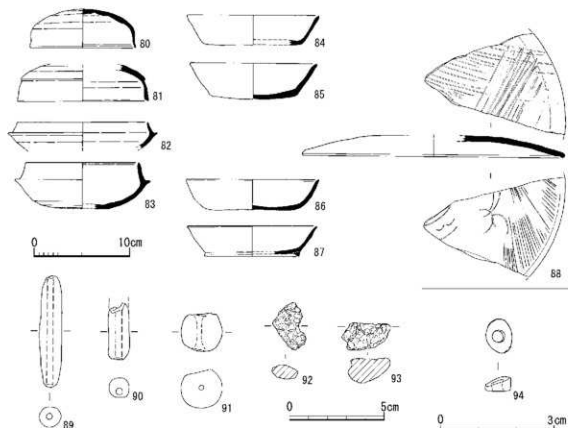


第16図 掘立柱建物跡S B 490実測図、出土遺物実測図

柱穴・包含層出土遺物(第17図、図版第17・18) 柱穴は数多く検出されたが、図化できる遺物が出土したものは少なかった。包含層出土遺物には、瓦・土馬・石器・石製品・金属製品・鍛冶生産関連遺物などがある。84・85・88は柱穴S P 349, 86はS P 392, 87は柱穴S P 365より出土した。84・85は須恵器杯Aである。底部から口縁部が屈曲して立ち上がる。85は口径13.4cm、器高3.8cmを測る。88は、土師器蓋である。内外面に暗文を施す。いずれも柱穴S P 349より出土した。86は、土師器杯である。全体が磨滅しているが口径13.9cm、器高4.2cmを測る。87は土師器杯Bである。口径13.6cm、器高3.2cmを測る。いずれも、長岡京期と考えられる。

80～83, 89～94は包含層中より出土した。80・81は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施す。80は口径11.0cm、器高4.1cmを測る。杯身・杯蓋の形態から、これらは陶邑編年TK10～43併行期と考えられる。89～91は土師質の土錘である。いずれも焼成は良好である。完形の89は長さ4.9cm、最大幅1.2cm、重さ8.4g、91は最大径2.2cm、重さ9.4gを測る。92・93は、気泡が多く開いた炉壁の一部と考えられるもので、鉄分をほとんど含まずガラス質が残る。94は碧玉製の玉で、径7～9mmの楕円形を呈し、片側が斜めに切断・研磨されており、厚さ1.5～4mmを測る。両側穿孔である。重さ0.3g。縄文時代の遺物であろう。

2) 下層の遺構と遺物(第18図)

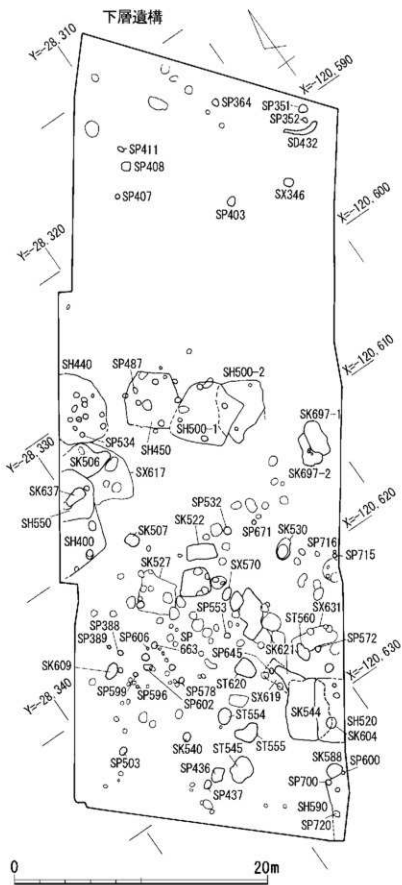


第17図 柱穴・包含層出土遺物実測図

(1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H500-1・2(第19図、図版第9) トレンチ中央部で検出した竪穴式住居跡で、3基が重なり合っている。いずれも不整形な平面形をなし、住居跡南側の一部は上層遺構である溝 S D369に削平されている。竪穴式住居跡 S H500-1は、竪穴式住居跡 S H450とも切り合い関係をもち、最も新しい住居跡となる。方形に近い平面形をもち北東辺約4.4m、北西辺4.5m、南西辺4.6m、南東辺4m、深さ0.15mを測る。主柱穴は4か所確認した。柱穴の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.16~0.3mを測る。住居西側の床面が赤色に被熱を受けており、炉等の存在が想定される。主軸方向は、北東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN22°Wである。埋土中より、小片化した縄文土器(24)とともに石鏃1点(333)、楔形石器1点(403)、石斧片1点(464)、剥片等が30点出土した。

竪穴式住居跡 S H500-2は、五角形に近い平面形となり、長軸約5m以上、短軸3.8m前後、深さ0.15mの規模が復原される。床面からは主柱穴が3か所確認できた。柱穴の規模は直径0.26~0.36m、深さ0.15~0.24mを測る。主軸方向は、東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN65°Wである。住居中央付近の床面が赤色に被熱を受けており、炉の存在が想定される。埋土中より、縄文土器深鉢(23)とともに石鏃片1点(A-29類)、チャート剥片1点(440)、サヌカイト剥片(441など)45点が出土した。

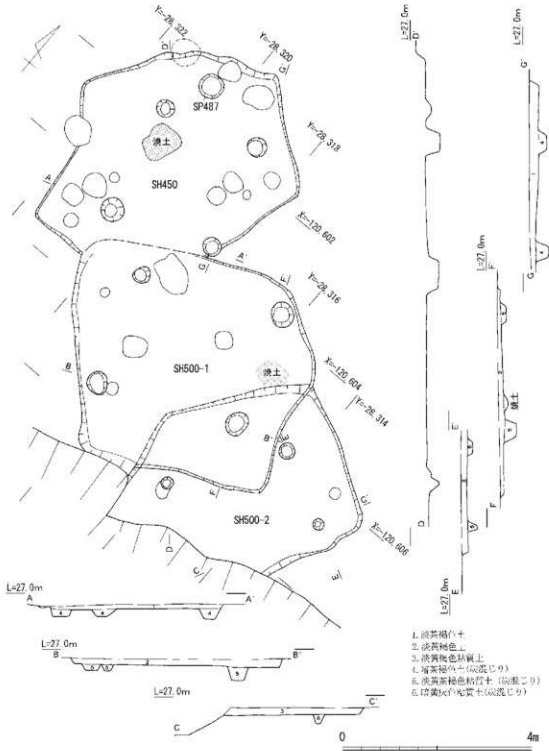


第18図 下層遺構平面図

竪穴式住居跡SH450

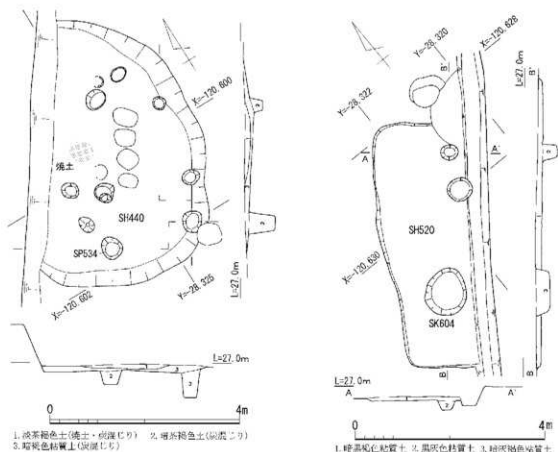
(第19図、図版第9) 竪穴式住居跡SH440の東側、竪穴式住居跡SH500-1と切りあい関係を有し、竪穴式住居跡SH500-1に先行する。不整形な六角形状をなしており、長軸5.3m、短軸4.2m程の規模が推定され、深さ0.25mを測る。床面からは支柱穴と考えられる柱穴4か所を確認した。柱穴の規模は直径0.4~0.5m、深さ0.18mを測る。主軸方向は、北東辺側の柱穴2か所を結ぶ線からするとN18°Wである。北東側の柱穴付近の床面で、方形に80cm×60cm、深さ30cmで掘り込まれた炭混じりの焼土が入った土坑があり、炉の存在が想定される。土坑SP487より無文鉢(151)が出土した。埋土中より、小片化した縄文土器とともに石鏃(A-12類)1点、剝片6点が出土した。

竪穴式住居跡SH440(第20図、図版第10) トレンチ中央西壁で検出したもので、住居跡の約1/2が調査地外になる。楕円形ないし隅丸方形をなす



第19図 竪穴式住居跡SH450・500-1・2実測図

と考えられ、レンズ状に約30cm掘り込まれる。トレンチ北東壁で幅5.4mを測る。主軸方向N32°Eである。内部埋土は2層からなり上層は、焼土・炭に混じって縄文土器深鉢・広口深鉢(1~12)や石鏃4点(228・334、A-28類1点、B-1類1点)、石錐未成品1点、楔形石器5点(395・407・412・429・430)、楔形石器剥片1点(424)、貝殻状剥片2点(436・438)、石核2点、削器1点、台石1点(502)、敲石1点(466)など、石器製作に伴うと考えられる遺物が出土した。下層か



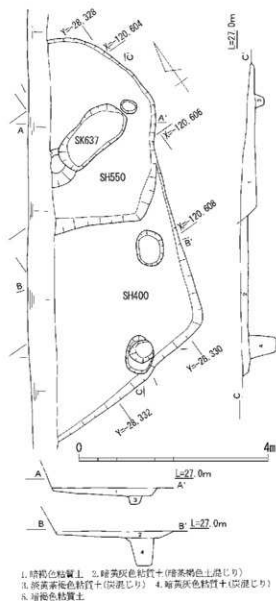
第20図 竪穴式住居跡 S H440・520実測図

らは、少量の縄文土器が出土した。

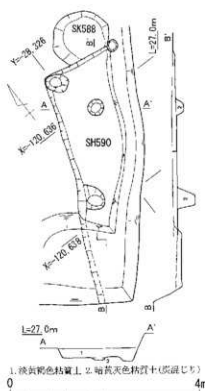
竪穴式住居跡 S H520 (第20図、図版第11) トレンチ南側の南東壁で検出した。住居跡の大半が調査地外となる。検出できた部分で見える限り方形の平面形をなす。住居跡の規模は不明であるが北西辺5.1m、南西辺1.8m、北東辺トレンチ壁側は土坑に削平されるが1.2mを検出した。深さ0.1mを測る。主軸方向は、住居北西辺でN29°Eである。主柱穴は、北東辺寄りでは1か所確認したが、南西辺側では土坑 S K604に削平されたが、トレンチ壁寄りに設けられている可能性もある。埋土中より、縄文土器(25)とともに削器(369)、剥片13点が出土した。

竪穴式住居跡 S H550 (第21図、図版第10) 竪穴式住居跡 S H440の南西側のトレンチ中央西壁で検出したもので、住居跡の約1/2が調査地外になる。不整形な方形をなすと考えられ、残存部分の幅4.15m、深さ0.2mを測る。主軸方向は不明である。主柱穴を東辺寄りで1か所検出した。柱穴は楕円形を呈し、長径約0.33m、深さ0.2mを測る。埋土中より縄文土器(16~19)とともに石鏃片2点(A-31類、B-1類)、敲石1点(486)、剥片34点が出土した。また、住居中央部には、埋没後に新たに掘削された土坑 S K637と切り合い関係をもち、縄文時代後期の中でも竪穴式住居跡と土坑の2時期の遺構が存在することが明らかとなった。

竪穴式住居跡 S H400 (第21図、図版第10) 竪穴式住居跡 S H550の下層で検出したもので、竪穴式住居跡 S H550に先行する。住居跡の約1/2が調査地外になるとともに、北側は竪穴式住居



第21図 竪穴式住居跡 S H400・550実測図



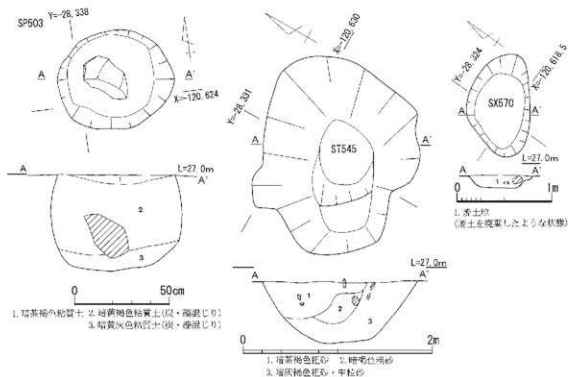
第22図 竪穴式住居跡 S H590実測図

跡 S H550に割平される。不整形な方形をなすと考えられ、一辺5.5m前後の規模が想定される。深さ0.2mを測り、主軸方向はN29°Eである。支柱穴は南辺の側壁を掘り込んで1か所、土坑 S K637の西側で1か所を確認した。柱穴の規模は直径0.5~0.8m、深さ0.19~0.6mを測る。内部の埋土中より縄文土器(20~22)とともに石礫3点(246・271・315)、剥片16点が出土した。

竪穴式住居跡 S H590(第22図、図版第11) トレンチ南端の南東壁で検出した。北側の土坑 S K588に切り勝つ。住居跡の大半が調査地外となる。検出できた部分で見える限り方形の平面形をなす。住居跡の規模は不明であるが北西壁で5m、北東壁で1.9m、深さ0.16mを確認した。主軸方向は住居北西辺でN19°Eである。住居北角付近から支柱穴と考えられる柱穴1か所を検出した。柱穴の規模は直径0.32m、深さ0.17mを測る。埋土中より小片化した縄文土器が出土した。

(2) その他の遺構

調査中は遺構名を表面観察から、土坑(SK)・墓(ST)・柱穴(SP)・不明遺構(SX)として掘削し、遺物の取り上げを行ったが、掘削が終了する段階では名称と合致しないものが多く出てきた。大半のものは土坑であるが、当初の遺構名のまま使用している。これらの土坑には、焼土



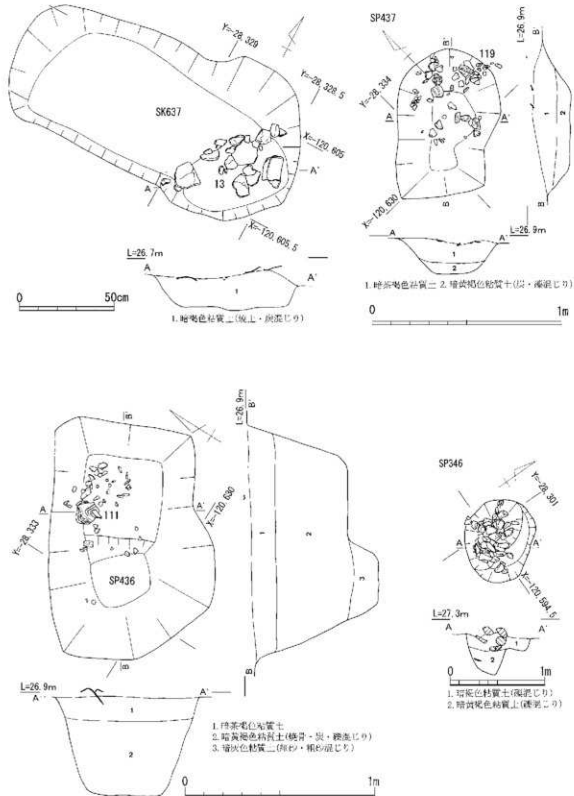
第23図 土坑S P503、墓ST545、不明遺構SX570実測図

が入るもの、焼土・炭混じりのもの、これらとともに、焼骨が混じるもの、礫が充填されたもの、土器が入るものなど様々な土坑が認められた。これらは、大きさ・平面形の違いなどがあるが、代表的なものに説明を加える。

不明遺構SX570(第23図) 土坑SK662の北側で検出した。楕円形を呈し長径1.1m、短径0.7m、深さ0.15mを測る。竪穴式住居跡SH450内の炉の痕跡と似ている。焼土により内部が詰まった状態ではなく、焼土粒と木炭粒が埋土に混在しており、ここで火を使用したというよりも、焼土を廃棄したものと考えられる。これらに交じって、敲石1点(465)、削器1点(371)が出土している。石器製作にかかわる遺構とも考えられる。

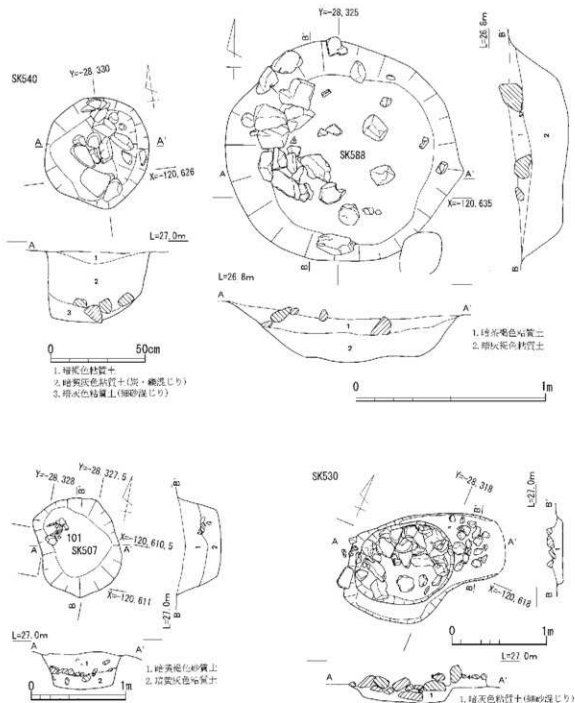
土坑SK637(第24図) トレンチ中央、北西壁の竪穴式住居跡SH550と切り合う。西側拡張部においてその延長部を確認したが、土坑西端部分は竪穴式住居跡SH400の柱穴に先行し、最も新しい遺構となる。隅丸長方形の平面形を呈し、長辺1.65m、短辺0.8m、深さ0.19mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢・注口土器(13~15)が集中して検出された。土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面では全く出土しなかった。埋土中からは、焼土が検出されたが焼骨は認められなかった。

柱穴SP437(第24図、図版第13) トレンチ南端、土坑SP436の西側で検出した。平面形は土坑SP436を少し小さくした同様の形態をなす。長辺1.6m、短辺0.9m、深さ0.4mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢(118~127)が集中して検出された。土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面では全く出土しなかった。埋土中からは焼土・焼骨・ササカイト剥片の出土は認められなかった。



第24図 土坑SK637、柱穴SP437・436、不明遺構SX346実測図

柱穴SP436(第24図、図版第13) トレンチ南端、土坑SP437の東側で検出した。長方形に近い平面形を呈し、長辺1.25m、短辺0.75m、深さ0.53mを測る。検出面付近において多くの縄文土器深鉢(111~117)が集中して検出されたが、土器の出土は底に向かうほど少なくなり、底面



第25図 土坑SK507・530・540・588実測図

では全く出土しなかった。中位付近において、径5～6mm程度から数mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中からは石鏃1点(237)が出土した。

不明遺構 X 346 (第24図、図版第15) 竪穴式住居跡SH340の南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.75mを測る。北東側の深さは0.15mであるが、南西側はさらに、長径0.7m、短径0.5mにわたり、深さ0.3m掘り下げる。検出面から一段目の掘形底面までは、拳大の角礫を中心に円礫や被熱し赤化・黒化した礫が検出された。これらの礫とともに、少量の縄

文土器無文深鉢(77)と石鉄片1点(A-39類)、剥片59点が出土した。石器製作に伴う廃棄土坑の可能性もある。

土坑 S K 540(第25図、図版第15) 土坑 S P 436の北側で検出した。円形を呈し、直径0.55～0.6m、検出面からの深さ0.38mである。底面近くで5～15cmほどの角礫が集中して検出された。礫検出面付近からは、径5～6mm程度から数mm程度の細かい火葬骨片が出土した。埋土中からは、少量の縄文土器深鉢(140)が出土した。

土坑 S K 588(第25図、図版第16) 竪穴式住居跡 S H 590と切り合い、時期的に先行する。直径1.2m、深さ0.32mを測る。検出面において、鶏卵大～15cm程の角礫を主体として河原石、部分的に被熱した石の集中を検出した。これらの石材は底面までは認められず、浮いた状態となっている。埋土中から縄文土器広口深鉢(142)とともに石鉄片1点(329)が出土した。

土坑 S K 507(第25図、図版第13) 竪穴式住居跡 S H 400の東側で検出した。隅丸長方形の平面形を呈し、長辺1.05m、短辺0.8m、深さ0.4mを測る。検出面では細片化した縄文土器が出土し、中位付近からは比較的大きな浅鉢破片の出土(101・102)をみた。中位とこれより下層は明確に土層が異なり、境目には多くの河原石の堆積が認められた。下層からは、遺物の出土は認められない。埋土中より削器1点、サヌカイト剥片3点が出土した。

土坑 S K 530(第25図、図版第16) 土坑 S K 697-1・2の南西側より検出した。長楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.1m、深さ0.2mを測る。土坑西寄りにはさらに長径1.1m、短径0.8m、深さ0.15m掘り下げる。東側の一段目掘形検出面には拳大～15cmほどの角礫を中心に河原石混じりの礫が検出された。西寄りの一段下がる部分には検出面から底面まで20～30程の角礫が集中していた。これらの礫の中には部分的に被熱した礫が認められる。埋土中からは、少量の縄文土器と楔形石器1点、剥片(5mm以下4点、5mm以上18点)が出土した。

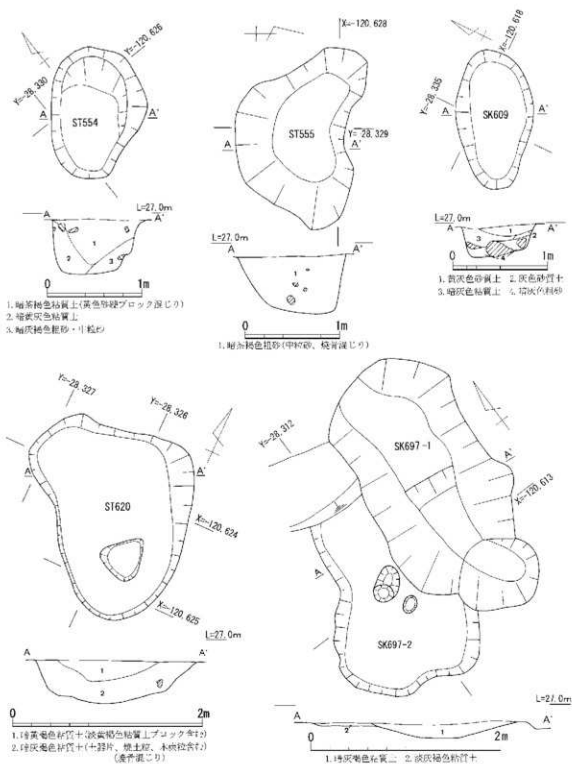
土坑 S P 503(第23図、図版第16) トレンチ西角付近で検出した。円形を呈し、直径52～63cm、深さ0.5mを測る。土坑底面から中位付近にかけては、全体が袋状になっている。底面近くで30×17cm程の角礫をほぼ立位で検出した。埋土中からは、縄文土器浅鉢・深鉢・広口深鉢(105～110)、チャートの剥片1点、黒曜石の剥片1点、サヌカイト剥片27点が出土した。

墓 S T 545(第23図、図版第14) トレンチ南端の土坑 S P 436の東側で検出した。いびつな楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.65m、深さ0.65mを測る。南西側がやや浅く中央部が一段深くなる。埋土中より細片化した縄文土器深鉢・広口浅鉢・注口土器(86～93)とともに石鉄片1点(A-18類)、サヌカイト剥片1点が出土した。

墓 S T 554(第26図、図版第14) 墓 S T 555の北側で検出した。楕円形を呈し長径1.4m、短径1m、深さ0.6mを測る。埋土中より細片化した縄文土器が出土した。

墓 S T 555(第26図) 墓 S T 545の北東側で検出した。隅丸三角形形状の平面形を呈する。長辺1.9m、短辺1.2m、深さ0.65mを測る。埋土中より細片化した縄文土器深鉢(78～85)とともにサヌカイト剥片4点が出土した。

土坑 S K 609(第26図) トレンチ南端近くの北西壁寄り検出した。楕円形を呈し、長径1.5m、



第26図 墓S T554・555・620、土坑SK609・697-1・2実測図

短径0.85m、深さ0.35mを測る。中央部底面近くより角礫・河原石が出土した。埋土中より細片化した縄文土器とともに、ササカイト剥片が1点出土している。

墓S T620(第26図、図版第14) 墓S T554の北東側で検出した。楕円形を呈し、長径2.2m、短径1.5m、深さ0.47mを測る。底面近くより極少量の焼土とともに、径5～6mm程度から数

mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中からは、サヌカイト剥片3点、少量の縄文土器深鉢(62～69)が出土した。同様な焼骨を出土した土坑としては、柱穴S P436、墓S T560、土坑S K697-1がある。土坑S K637からは焼土が検出されたが焼骨は認められなかった。

土坑S K697-1(第26図) 竪穴式住居跡SH500-2の南側で検出した。長楕円形を呈し、長径2.5m、短径1.4m、深さ0.13mを測る。底面近くより極少量の焼土とともに、径5～6mm程度から数mm程度の細かい焼骨片が出土した。埋土中より縄文土器(95～99)とともに石鏃3点(225・335、A-9類)、石器1点(372)、敲石1点(474)、剥片2点出土した。

(増田孝彦)

(3)出土遺物

①縄文土器

Sトレンチでは、おもに中期末の北白川C式、後期後葉の元住吉山II式～宮滝式の遺物が出土した。遺構出土遺物の掲載になるべく努めた。

a. 住居跡出土土器(第27図、図版第18・19)

SH440 1～3は口縁部が内折し外反する深鉢。口縁部直下と内折している部分に凹線が施文される。宮滝式。4は深鉢胴部。5は無文の広口深鉢である。6は内面に一本沈線をもつ広口深鉢。7は太い多条の沈線が描かれ、沈線の端に刺突状の文様が施される。8は横位に多重の沈線をもつ。内湾した口縁をもち浅鉢と考えられる。9は口縁下に細い多条の平行沈線を描き、沈線間を櫛目状の文様と蛇行沈線が描かれている。注口土器と考えられる。10は口縁部が「く」字状に内屈する浅鉢。細い3条の沈線が横位に描かれる。主文様部は摩滅のためやや不明瞭であるが、蛇行沈線が描かれ周囲に6つの刺突が施されている。11は算盤形の器形をし、多条の沈線と蛇行沈線で描かれており、文様意匠から加曾利B1式のものと考えられる。12は底部である。宮滝式と加曾利B式は併行関係になく全体としてやや時期に幅があると考えられる。

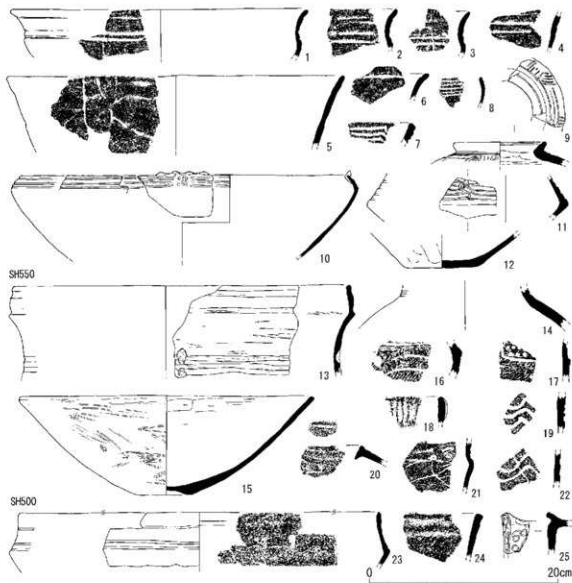
SH550 凹線土器期の遺構であるが、資料化する土器片は出土しなかった。一部中期の土器の混入が見られた。16～19は中期末北白川C式の体部片である。

S K637 13は屈曲部をもつ深鉢である。口縁部に間隔を置いた2条の凹線を描き、胴部にも凹線文様帯をもつ。中心に巻貝の側面を斜位に刺突した文様が施される。器面は巻貝調整後ナデで仕上げられている。14は注口土器。文様意匠の様相から元住吉山期のものと考えられる。15は無文の浅鉢。口縁端部が面取りされ器面は巻貝条痕を強く残す。

SH400 凹線土器を中心とした遺構である。20は注口土器。摩滅しているが、口縁に2条の沈線と蛇行沈線で文様が描かれる。21は深鉢の頸部から胴部にかけての破片であり、巻貝扇状圧痕文と刺突文が施される。宮滝式である。22は深鉢の胴部片であり、2条以上の波状文が描かれる。中期末のもので混入したものと考えられる。

SH500 凹線土器を中心とした遺構である。23は口縁部が屈曲しやや外反する深鉢である。内面の摩滅が著しい。24は口縁に2条の凹線の巡る広口深鉢である。

SH520 25は山形の口縁をもつ土器の口縁部片である。丸い棒状工具による刺突によって文



第27図 出土遺物実測図(1) 縄文土器

様が描かれている。中期末北白川C式と考えられる。

b. 遺構出土遺物(第28・29図、図版第18～21)

a) 土坑出土遺物(中期)

S K 544 北白川C式を中心とした遺構である。26・27・29は口縁部文様帯を隆帯で囲む土器である。26は多重の区画文を主文様としている。28は口縁部と胴部の境が外側へ肥厚し、さらに沈線で口縁部と胴部を区画し、縄文を充填している。また胴部には波状文が描かれる。32～37は口縁部から一段下がったところに文様帯をもつ土器である。32は隆帯と刺突文により区画が描かれる。33・34・36は隆帯によってのみ楕円形区画文が構成され沈線は描かれない。35は口縁部から一段下がったところに凸帯をもつものである。凸帯下は2重の「U」字状の文様が描かれる。38～43は山形口縁をもつ土器である。38は「く」字状に口縁が内屈し沈線で文様が描かれる。39は小さな渦巻文が描かれる。40・42・43は沈線によって文様が描かれる。41は棒状工具による刺



第28図 出土遺物実測図(2) 縄文土器

突列によって文様が描かれている。44は口縁部が沈線と刺突文のみによって構成されている土器である。45・46は口縁部が肥厚する土器である。47は「く」字状に内屈し口縁部文様帯をもつ浅鉢の体部片である。口縁部に羽状沈線が充填されている。48は無文の浅鉢と考えられるが口縁と胴部の間に段をもちやや外反するような器形を呈している。49～52は深鉢の体部片であり、円形の区画文あるいは渦巻状の沈線で描かれる。53は底部である。54は凸帯をもつ土器であり、晩期まで時期が下る可能性がある。

S K 621 北白川C式を中心とした遺構である。55・56は口縁部文様帯を隆帯で囲むものである。55は口縁部文様帯が羽状沈線で充填されるが、主文様をもたない。56は口縁部文様帯が2重の区画となっている。57は口縁部から一段下がったところに隆帯による文様帯をもち、斜刻線を充填する。58・59は山形の口縁をもつものである。沈線と円形の区画文によって描かれる。60・61は口縁部が肥厚する土器である。縄文が施されている。

S T 620 北白川C式を中心とした遺構である。62は波状口縁をもつ深鉢である。口縁は内屈しており口縁に沿って2条の沈線が描かれ主文様が多重の円形区画文をもつ。63は沈線で円形の主文様と長方形の区画文を描く深鉢である。65は押し引き沈線で口縁部文様帯を描く。口縁部がやや肥厚する。66は口縁部一段下がった所に隆帯をもつ。隆帯から垂下沈線を描く。67は磨消縄文で文様が描かれる土器である。64は口縁部が肥厚し、縄文が施される土器である。68・69は深鉢底部で中期末と考えられる。

S X 619 70は浅鉢口縁部片である。細い多重の沈線で主文様が描かれ、その周辺がやや隆起する。71・72は深鉢体部片である。71は縦方向に楕円形の区画をもった文様が描かれている。

b) 土坑出土遺物(後期)

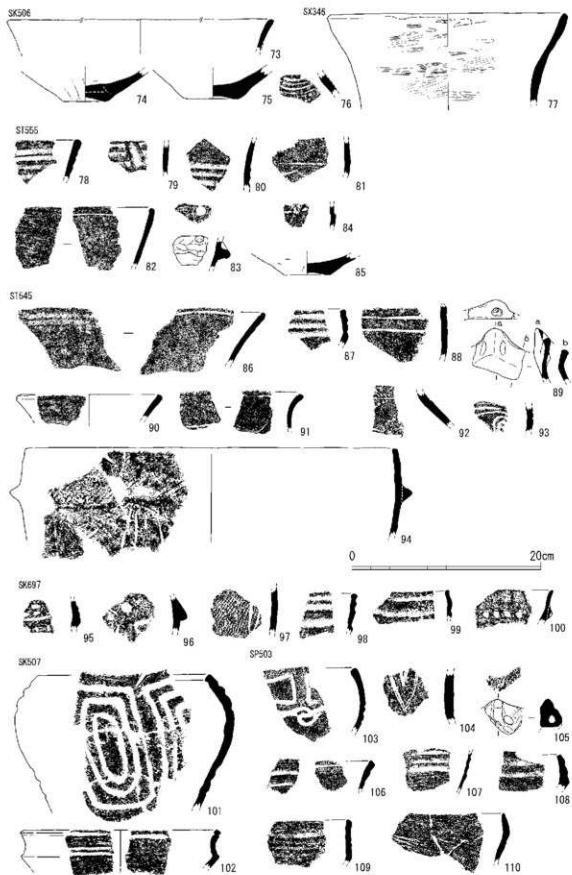
S X 346 77は無文深鉢。巻貝条痕によって内外面が調整されている。後期のものと考えられる。

S K 506 73は無文の広口鉢。口縁部に粘土塊が貼り付けてある。74・75は底部。76は注口土器。細い沈線で文様が描かれている。後期後葉のものと考えられる。

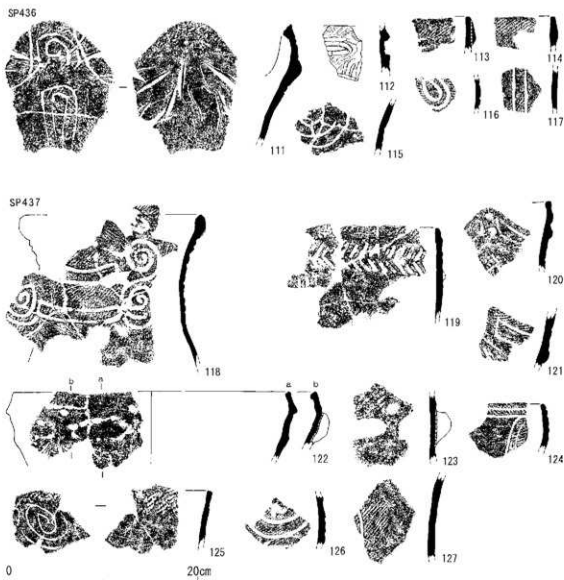
S T 555 凹線土器を中心とした遺構である。78は多条の凹線をもつ広口深鉢である。79～81は深鉢体部片。79は巻貝による圧痕文をもつ。81は上弦の連弧文をもち元住吉山I式の特徴をもつ。82は無文広口深鉢で内面に一本沈線を施す。83は胴部に棒状工具を押し当てた把手をもつものである。84は胴部屈曲部に巻貝による扇状圧痕文をもつ。85は底部である。

S T 545 元住吉山I・II式を中心とする遺構である。86は口縁部2条の凹線を施し内面1本沈線を描く広口深鉢。87は内屈口縁深鉢で3条の凹線をもつ。88は深鉢胴部片。2条の沈線間に二枚貝を押し捺した擬縄文が施される。元住吉山I式。89は波状口縁深鉢の波頂部。元住吉山I式。90は無文広口鉢。91は口縁部が外反するもの。頸部は沈線が描かれていることから、屈曲するものと考えられる。92は注口土器片。斜刻帯や刺突により文様が描かれている元住吉山式の特徴をもつものである。93は渦巻文を胴部に描くものである。

94は口縁部から一段下がったところに凸帯をもつものである。胴部には垂下沈線が描かれる。



第20図 出土遺物実測図(3) 縄文土器



第30図 出土遺物実測図(4) 縄文土器

北白川C式ものと考えられる。

S K 697-1 中期末の土器と後期の土器が混在していた。95は口縁部文様帯を隆帯で囲むもの。96は口縁部から一段下がったところに隆帯と沈線による椀区区画文をもつ土器である。97は深鉢胴部。98・99は後期凹線土器。100は凸帯をもつ土器である。

S K 507 101は太い沈線で多重の区画文が描かれた土器である。一般的な北白川C式の土器よりもかなり太い沈線で描かれ、文様意匠もことなることから九州の阿高式の系譜をもつものと考えられる。中期後葉に位置づけられる。同様の器形の土器は中津式にも存在するが、口縁に1本の沈線をもたないことから中津式とは違う系統の土器であると考えられる。102は後期後葉の宮滝式期のものと考えられる。精製された浅鉢である。混入したものと考えられる。

S P 503 多時期にわたって遺物が出土した。105は北白川C式の無文浅鉢の把手。104は北白川C式深鉢の胴部。103は口縁部区画文をもちまた小さな「J」字状の沈線が描かれ、縄文が充填

される。中津式。106は広口深鉢。口縁内面に一本の沈線が巡る。107は凹縁文土器の胴部で、「レ」字状凹線が巡る。108は口縁部が内屈し、凹線を施すもので、浅鉢と考えられる。109は内屈した口縁を有する深鉢である。110は外面が巻貝で調整されている。

c) 主要柱穴出土遺物(中期)(第30・31図、図版第18・19)

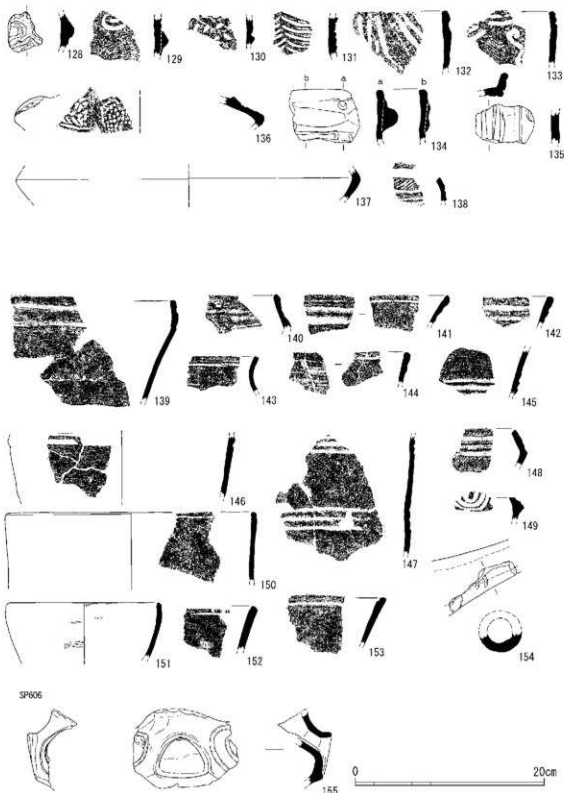
S P 436 北白川式がまとまって出土した。111は口縁と胴部の境に隆帯をもつ波状口縁の土器である。胴部は紡錘状の文様をもち縄文が充填されている。112は、口縁部から一段下がったところに隆帯と押し沈線で区画した土器である。113・114は口縁部が肥厚する土器で縄文が充填されている。115～117は深鉢胴部である。

S P 437 S P 436に隣接し北白川式がまとまって出土した。118は口縁端部が丸く肥厚する土器である。口縁部が一部のため全体の器形はわからなかった。文様は押し沈線によって描かれている。119は口縁に羽状沈線が充填される区画文をもつ深鉢。区画の周囲には隆帯が刻離した痕跡がある。120・121は口縁部文様帯が肥厚し波状の口縁を呈する深鉢。主文様はなく区画文が描かれる。120は区画文間に2点の指頭状の圧痕が施される。122・123は口縁部から一段下がったところに楕円形区画文をもつ深鉢。122は押し沈線によって文様が描かれている。123は隆帯のみによって区画文を作っている。124は口縁部文様帯がなく沈線と沈線内を充填する縄文によって文様が描かれる。内湾した器形を呈する。125は口縁部がやや肥厚し、口端部と内面の口端直下に縄文が施されている。また渦巻状の文様が細い沈線で描かれている。126・127は深鉢胴部である。

柱穴出土遺物(第31図、図版第20) 中期末北白川式期を中心とする。128～130は主文様帯を隆帯で囲むもので、それぞれS P 572、S P 553、S P 645から出土した。131は重丸沈線をもつもので、S P 578から出土した。132～134は山形の口縁をもつもので、132・134はS P 720から、133はS P 663から出土した。135は口縁部から一段下がったところに区画文様帯をもつもので、S P 532から出土した。136は主文様帯をもつ浅鉢で、主文様部は隆帯で囲まれ、刺突文で充填されている。S P 663から出土した。137は無文の浅鉢で、S P 716から出土した。138は口縁部に縄文を施し、その下に2条以上の沈線を描く。浅鉢と考えられる。S P 388から出土した。

d) 柱穴・土坑出土遺物(後期)(第31、図版第21)

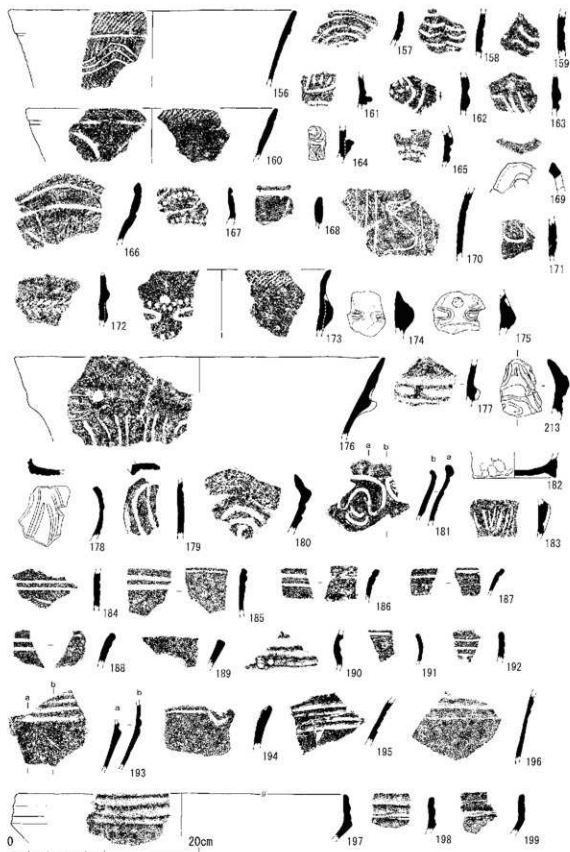
元住吉山Ⅱ式から宮滝式を中心とする。139は口縁が内折する土器である。上下2条の凹線が描かれる。S P 671 から出土した。140は口縁が内折し、やや外反する土器である。上下2つの巻貝による扇状圧痕文と3条の凹線が描かれる。S K 540から出土した。141は口縁部が外反する深鉢である。口縁端部を面取りしている。S P 534 から出土した。142～144は広口口縁深鉢である。142・144は内面沈線と斜刻帯が描かれ、特に144の凹線は通常のものに較べて幅が広く、よく凹線内が研磨されている。それぞれS K 588、S P 599、S P 715から出土した。145～147は深鉢胴部。147は胴部が屈曲する深鉢で、凹線断面が「レ」字状である。148は内屈する口縁を有する浅鉢。3条の密接した凹線とその上下に刻みが施される。それぞれS K 540、S P 600、S P 534から出土した。149は口縁部に多重の円形の文様をもつ。S P 700から出土した。150・152・



第31図 出土遺物実測図(5) 縄文土器

153は無文広口深鉢。それぞれSP600、SP602、SP596から出土した。151は無文鉢で、SP487から出土した。154は注口土器注口部で、SK540から出土した。

155は、胴部に横位に粘土版を橋状に取り付けた把手をもち、その両側に区画と渦巻状の文様



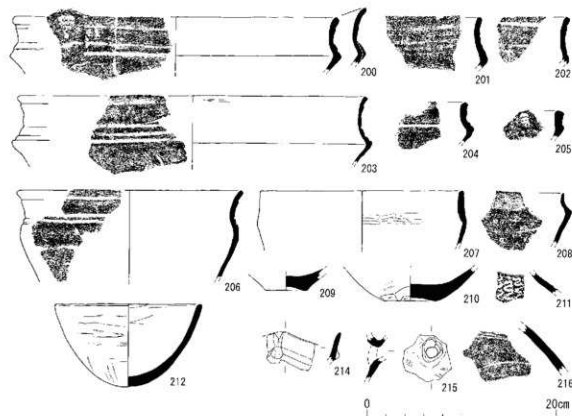
第32図 出土遺物実測図(6) 縄文土器

をもつ。双耳壺のような形をもつが、西日本の後期における一般的な双耳壺よりやや大きく把手のあり方が異なっている。吊手土器のような特殊な器形である可能性も考えられる。中期末のものと考えられる。S P606から出土した。

c. 包含層出土遺物(第32～34図、図版第18・20・21)

a) 包含層出土遺物(中期)(第32図、図版第20)

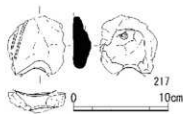
156は口縁部が一本の沈線で区画され口縁部はわずかに肥厚する。157は多重の円形の主文様をもった波状の口縁をもつ土器と考えられる。158・159は多重の連弧文で描かれている。160は口縁部に1本の沈線を描き、胴部に弧状の沈線をもつ土器である。また口縁内面に縄文が施文される。161～165は口縁部文様帯を隆帯で囲むもの。165は押し引き沈線によって文様が描かれている。166～168は口縁部文様帯を沈線で囲む土器である。169は波状口縁波頂部を穿孔している。170・171は深鉢体部片。172～175は口縁から一段下がったところに文様帯をもつもので、隆帯と沈線によって楕円形区画文を構成している。176・177は口縁から一段下がったところに凸帯をもつ土器である。176は凸帯と指頭圧痕状のもので構成される。177は凸帯による楕円形区画文で構成される。213は口縁部に沿って2本の沈線をもち、波頂部の下に蛇行沈線が描かれる。178～180は山形の口縁をもつ土器である。178・179は波頂部の側面であり区画文で表現される。180は口縁が内屈しており、口縁下の文様が渦巻文となっている。181は特殊な形をしており、口縁に小さな突起をもつ土器である。182は底部。183は船元Ⅲ式と考えられ、中期中葉のものである。



第33図 出土遺物実測図(7) 縄文土器

b) 包含層出土遺物(後期)(第32・33図、図版第21)

元住吉山Ⅱ式から宮滝式の凹線文土器が主体であった。184は上弦の連弧文をもち、沈線間に縄文が充填されている。元住吉山Ⅰ式。185～188は広口深鉢で内面に一本沈線を施すもの。元住吉山Ⅱ式から宮滝式前半期によく見られる。186は斜刻帯をもつ。189は無文広口深鉢。190は胴部に多条の凹線を施すものであり、巻貝側面の圧痕と刺突をもつ。元住吉山Ⅱ式。193は内屈した口縁の深鉢で、口縁に多条の凹線を描く。194は内面に一本の沈線を施し、巻貝殻頂による刺突をもつ土器である。191は口縁に一本の沈線をもつ内湾した浅鉢である。192は口縁に多条の沈線をもち、やや内湾した器形をもつ。やや古手のものである可能性がある。195・196は深鉢胴部である。197～199は内屈口縁浅鉢。口縁部に3条の凹線が施文されている。元住吉山Ⅱ式。200～206は口縁部が内折し外反する有文の深鉢である。肩状圧痕文など宮滝式に盛行する特徴をもっている。207・208は口縁が内折し外反する無文の深鉢である。209・210は底部である。211は波状の沈線が巡る。注口土器の可能性をもつ。212は無文鉢。巻貝によって調整されている。214は波状口縁深鉢の波頂部で、巻貝の圧痕をもつ。215は注口土器注口部。216は注口土器体部片。刻みがみられ元住吉山式期の特徴をもつものと考えられる。

第34図 出土遺物実測図(8)
土製品

d. 土製品(第34図、図版第18)

217は粘土板状の土製品である。2条の沈線が施され、一部に湾曲した端部をもっている。これら特徴を土偶の手足の一部と考えることが出来るかもしれない。

e. 小結(縄文土器のまとめ)

今回の調査では、おもに縄文時代中期末の北白川C式の土器と後期中葉～後葉期の元住吉山Ⅰ・Ⅱ式～宮滝式期の土器が出土した。全体的に遺存状態は悪く、摩滅した状態や、両時期の土器が混入した状態で出土するものも多かった。比較的まとまった状態で出土した遺構は中期末ではS K544、S K621、S P436、S P437等があげられ、後期中葉～後葉期ではS H440、S K637、S T555等があげられる。

中期末の土器の全体を泉拓良氏の編年をもとに概観してみると、口縁下に口縁部文様帯をもつA類においては、古い段階の口縁部文様帯や主文様を隆帯で囲むものは全体として少なく、口縁部文様帯が肥厚しただけのものや、口縁部文様帯が消失したものが見受けられた。泉編年でA4類とされる多重沈線による連弧文が描かれる土器もいくつかみられた。また口縁部の一段下がったところに隆帯で楕円形区画文をもつB類においては、古い段階とされる橋状把手をもつものがみられず、楕円形区画文が隆帯と区画文だけで表されるものや、退行し凸帯で楕円形区画をあらわすもの、あるいは凸帯のみになってしまったものが多く見受けられた。突起状山形口縁をもつC類に関して言えば、遺存状態が口縁の一部に限られるものも多いが、主文様部をもつもの、渦巻文様をもつものとともに、口縁部に区画文や沈線を施文しているものがみられた。こういった傾向を通して従来の編年上、主にA類、B類から北白川C式の新しい段階の資料がやや優位であり、

特にS P436・437ではその傾向が見て取れるかもしれない。しかし、遺存状態が悪く確認できなかった資料も考えられるので、推測の段階に留めるとする。

後期中葉～後葉期の土器について丹治康明氏や岡田憲一氏の編年をもとに概観すると、幅の広い断面「U」字状の凹線、内面斜刻帯をもつ広口深鉢・鉢が多くみられ、また内面沈線のみや、沈線のない広口深鉢・鉢や断面「レ」字状を呈する凹線文をもつものもあり、元住吉山Ⅱ式～宮滝式の前段階に比定できるものが主体であった。その一方で、「く」の字状に内屈・内湾し、外反する口縁の深鉢がみられ、またこれらの土器は文様が幅の狭い凹線や、溝の深い沈線で描かれたものであり宮滝式の新段階に比定出来るものもみられる。また連文の描かれたものや、匙状突起をもつ深鉢の一部もあり、昨年度の調査区同様、後期の古い時期は後期中葉の元住吉山Ⅰ式に比定できると考えられる。

また異系統と考えられるような土器の出土もみられ、これら土器様相から中期末から後期後葉にかけて他地域との結びつきをもつ京都盆地における拠点的な集落であったと考えられる。

(木村啓章)

②石器

包含層中や遺構内より出土した定形的な石器(剥片石器・礫石器)、その他の石核・剥片などを含めた石器関連資料の総点数は4,485点である。³⁸⁾

まず、定形的な石器の器種、点数、総点数に占める割合(%)を示したい。

剥片石器は、石鏃244点(5.4)、石錐11点(0.2)、削器19点(0.4)、加工痕ある剥片38点(0.85)、使用痕ある剥片3点(0.07)、搔器1点(0.02)、楔形石器50点(1.1)、同砕片38点(0.85)の内訳である。石鏃・石錐は未成品を含み、楔形石器(ピエス・エスキュー、截断面のある石器ともいう)は定形的な石器に含めた。

礫石器は、石斧3点(0.07)、敲石類36点(0.8)、台石・石皿8点(0.2)、石錘1点(0.02)、砥石1点(0.02)となる。敲石類の多さが特徴である。³⁹⁾

定形的な石器以外のものには、石核、剥片、サヌカイト礫素材、搬入礫がある。加工痕のない搬入礫については数えていないが、それら以外の点数と総点数に占める割合(%)を示すと、石核29点(0.6)、剥片4,003点(89.3)である。⁴⁰⁾

石材については、礫石器以外の剥片石器および剥片・砕片のほとんど(99.96%)はサヌカイトである。⁴¹⁾石器類の時期であるが、当地区から今回検出された堅穴式住居跡や土壘墓群には相伴しないが、縄文土器以外の土器がみられないことから、一部のものを除き、大部分は元住吉山Ⅱ式～宮滝式期に該当するとみられる。⁴²⁾

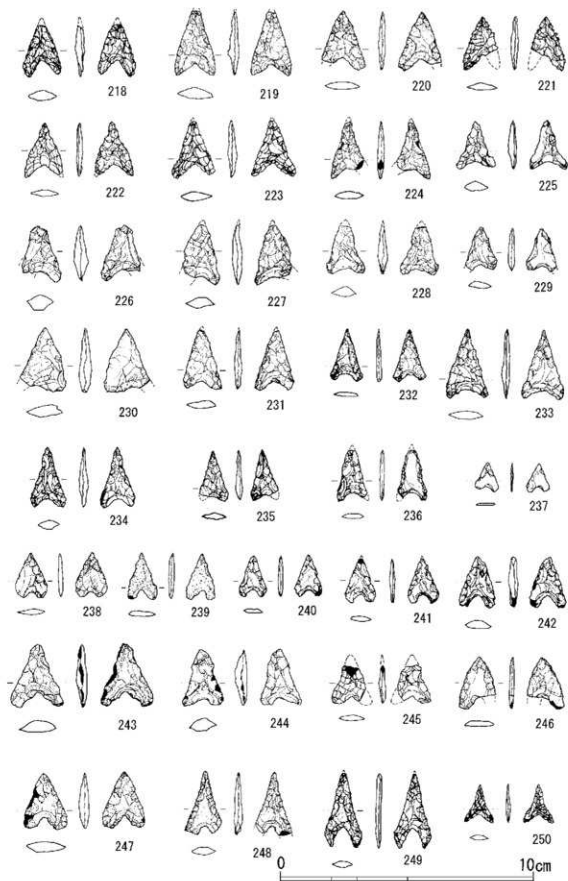
(黒坪一樹)

a. 剥片石器・石核・剥片

a) 石鏃(図版第35～38、図版第22・23)

出土点数244点には、未成品17点を含む。このうち、形態の変化を捉えた122点を網羅的に図示し、未成品は9点を図示した。

大半のものは包含層中より出土している。破損品は、先端や脚部・脚部先端を欠損するものが



第35図 出土遺物実測図(9) 石鏃

多い。石材は、チャート2点、不明1点で、サヌカイト製が大半である。黒曜石の剥片が1点出土しているが、黒曜石製の石鏃は出土しなかった。

石鏃は、基部の形態により以下に分類した。

A類：凹基式、B類：平基式、C類：円基式、D類：無茎式の4大別した。形態が多様ある凹基式は1～39、平基式は1～3、円基式は1～3に細分した。表記は、A-1類とし、個々の数値については、末尾の一覧表に記載している。欠損品は()内に、残存する大きさ(cm・g)を表記した。

A-1類(第37図218～225、図版第22) ほぼ二等辺三角形の平面形を呈し、基部にやや深い三角形形状の抉りをもつものである。側縁は直線のなものが多く、221のように内湾気味で鋸歯状のものや、222のように先端部付近で急に細くなり尖るもの、223・225のように側縁がやや外反し、脚部も外に開くものがある。調整加工は、225を除いて丁寧な調整が側縁に施される。総数14点出土した。後述するA-29類に次ぐ出土数である。

A-2類(第35図226・227、図版第22) 二等辺三角形を呈し、側縁は直線的で、やや厚みがあるものである。先端は226は尖らず、227は尖る。抉りは三角形形状でやや深い。2点のみ出土した。

A-3類(第35図228・229、図版第22) 脚が外側に開き気味で、側縁中央付近でやや反り気味となる。抉りは浅い弧状をなすものである。2点出土した。

A-4類(第35図230、図版第22) 二等辺三角形を呈し、やや厚みがある。基部中央に浅く幅の狭い弧状の抉りをもつものである。1点出土した。

A-5類(第35図231～236、図版第22) 細身の二等辺三角形を呈し、先端は尖る。脚部先端は236を除いて比較的丸い。抉りは231が浅い三角形、他はやや深い弧状である。10点出土した。

A-6類(第35図237～242、図版第22) 基部は内湾気味で先端は丸いものやよく尖っているものがある。全長1.15～2.0cmを測り、比較的小型なものが主である。7点出土した。

A-7類(第35図243～245、図版第22) やや大ざっぱな作りをしており、大型の243・244と小型の245がある。244・245は脚先端は外側に尖り、243は内湾気味に丸い。抉りは243が深い三角形形状、244・245は浅い。3点出土した。

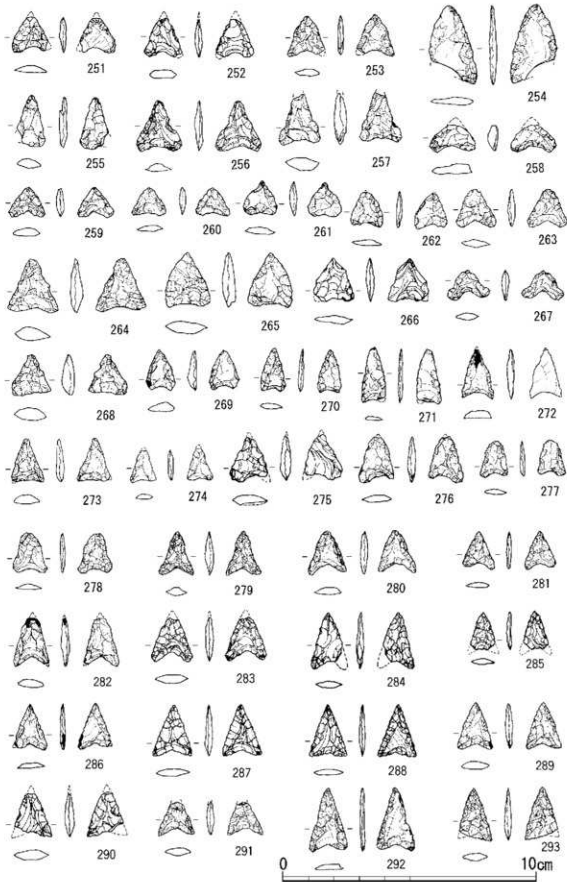
A-8類(第35図246・247、図版第22) ずんぐりと丸みを帯びた二等辺三角形を呈し、側縁が内湾する。基部の抉りは、やや深い三角形形状である。2点出土した。

A-9類(第35図248・249、図版第22) 先端が鋭い二等辺三角形の平面形を呈する。側縁の調整は細かい。脚部はやや外側に突出し、端部は内向する。抉りは、深い「U」字状のものが施される。4点出土した。

A-10類(第35図250、図版第22) 先端、脚部とも鋭く尖る。調整剥離は非常に細かい。脚部は、側縁中央より外側に広がる。抉りは、深い三角形形状に施す。1点出土した。

A-11類(第36図251～253、図版第22) ほぼ正三角形に近いもので、抉りは浅く緩やかな弧状をなす。3点出土した。

A-12類(第36図254、図版第22) 大型品である。二等辺三角形を呈し、抉りはやや深い三角



第36図 出土遺物実測図(10) 石鏃

形状をなしていたとみられる。2点出土した。

A-13類(第36図255) 二等辺三角形を呈し、基部中央にごく浅い「U」字状の抉りを施すものである。脚部両端は丸い。2点出土した。

A-14類(第36図256・257、図版第22) ほぼ正三角形に近く、側縁は左右非対称である。抉りは広く浅い。ゆるやかな弧状をなす。2点出土した。

A-15類(第36図258・259、図版第22) 長さに対して幅の広いものである。258は幅1.8cmを測る。抉りは浅い弧状のもの258と三角形形状のもの259である。2点出土した。

A-16類(第36図260～262、図版第22) 小型で幅広のもの260と、正三角形に近いもの261がある。脚部端は丸い。262は側縁がやや内湾する。抉りは広く浅い弧状である。262が三角形形状を呈する。3点出土した。

A-17類(第36図263、図版第22) 正三角形に近い平面形を呈し、先端部は尖らず丸いものである。抉りはやや深い三角形形状をなす。1点出土した。

A-18類(第36図264、図版第22) A-7類を大型化したような形状をなし、抉りは浅い三角形形状をなすものである。3点出土し、うち、1点を図化した。

A-19類(第36図265・266、図版第22) 側縁が膨らみ不定形なものである。265は片側がやや内湾気味で、266は五角形に近い平面形を呈する。ともに浅い弧状の抉りである。265は厚手である。2点出土した。

A-20類(第36図267、図版第22) 長さに対して幅が広く、脚部も外側に大きく広がる。A-15のように先端が尖らず丸い。抉りは先端が丸く深いものである。1点出土した。

A-21類(第36図268) ほぼ正三角形を呈するものである。基部にごく浅い弧状の抉りを施す。1点出土した。

A-22類(第36図269～272、図版第22) 身幅の狭い二等辺三角形を呈し、基部に浅い弧状の抉りを施すものである。脚部両端が尖るが、271はやや丸く作り出される。272は薄い剥片を素材とし、表面は素材の剝離痕のみで、加工痕はない。5点出土した。

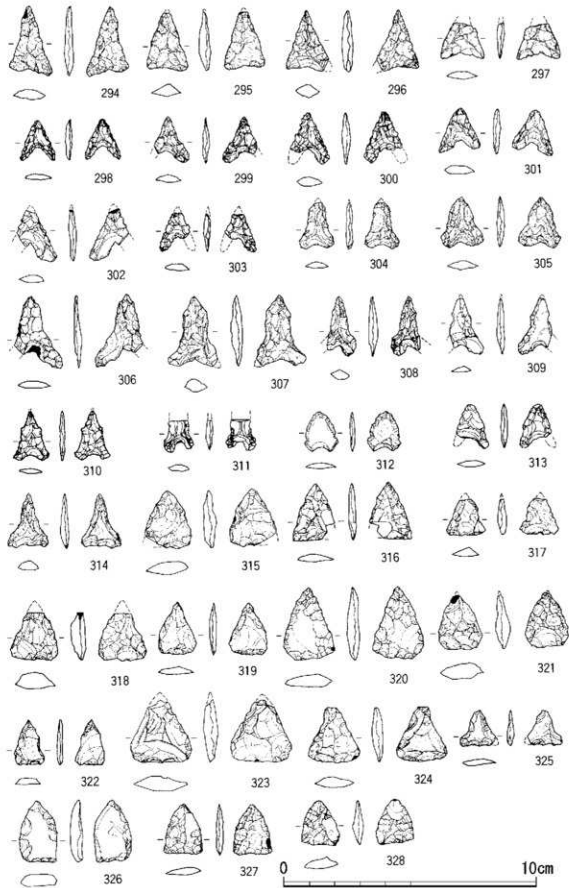
A-23類(第36図273・274、図版第23) A-22類に比べ短い二等辺三角形を呈し、基部に浅い弧状の抉りを施すものである。側縁は直線的で、脚部の両端は尖るが、274はやや丸く作り出される。273は素材の剝離面を残す。4点出土した。

A-24類(第36図275・276) 二等辺三角形を呈するが、やや脚が不整形で均整がとれていない。基部に浅い弧状の抉りを施す。2点出土した。

A-25類(第36図277・278、図版第23) 五角形を呈し、脚部は外へ広がり気味である。先端、脚両端とも丸く作り出される。基部に、やや深い弧状の抉りを施す。2点出土した。

A-26類(第36図279、図版第23) 細身の五角形状を呈し、脚部は外側に向かって広がる。先端、脚両端とも尖る。抉りはやや深い三角形形状である。連続する丁寧な加工が全体に認められる。チャート製で1点出土した。

A-27類(第36図280・281、図版第23) A-28類よりも正三角形に近く、側縁は左右非対称で



第37図 出土遺物実測図(11) 石鏃

ある。先端は尖り、脚端部は内湾しやや丸い。基部に先端の丸い三角形の抉りを施す。3点出土した。

A-28類 (第36図282～285、図版第23) やや細身の二等辺三角形を呈し、側縁は直線的なものである。先端は尖り、脚端部は尖るものと丸いもの(283)がある。長さ22cm前後のもので、285は小型品である。基部にやや深い三角形の抉りを施す。8点出土した。

A-29類 (第36図286～291・293、図版第23) 分類したもののうちで最も出土数が多く、均整がとれたプロポーシオンである。側縁が直線的な二等辺三角形を呈し、周縁は連続する丁寧な加工が全体に認められる。288・291・293は特に典型的なものである。先端、脚端部は尖り、基部に浅い三角形の抉りを施す。2cm前後のものであるが、286・289・291は小型品である。16点出土した。290はチャート製である。

A-30類 (第36図292、図版第23) A-29類をやや細くした二等辺三角形を呈する。薄い剥片を素材とし、表面は周縁に連続した丁寧な加工が施されるが、裏面は素材の剥離面が広く残り、側縁のみ加工を施す。1点出土した。

A-31類 (第37図294～297、図版第23) A-30類に比して、均整がとれたものではない。脚端部の長さも左右均等でなく、基部の抉りも浅く広い三角形を呈する。7点出土した。

A-32類 (第37図298～303、図版第23) 二等辺三角形を呈し、側縁は直線的である。脚部は丸いものが多いが、298・301は尖る。総数10点出土した。

A-33類 (第37図304～309、図版第23) 二等辺正三角形を呈し、先端から広がってきた側縁が、中央で内湾気味にくびれたあと、脚部が外側に広がり五角形を呈するものである。306・307は大型のもので2.8cm前後、304は小型のものである。305はややズングリとし、308・309は細身の中型品である。基部の抉りは、浅い弧状のもの304と、浅い三角形のもの306、深い三角形のもの306、「U」字状のもの308がある。11点出土した。

A-34類 (第37図310、図版第23) 先端が極端に鋭い五角形のもので、側縁中央から脚部に向かって外反する。脚端部は丸く、基部は浅い弧状の抉りを施すものである。1点出土した。

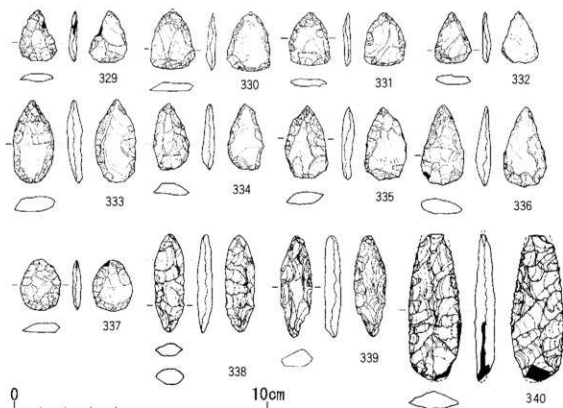
A-35類 (第37図311、図版第23) A-33類の308に類似するが、基部は深い「U」字状の抉りを施すものである。1点出土した。

A-36類 (第37図312、図版第23) 先がやや円く逆「U」字形を呈し、脚部端が外側に向かって突出する。両面とも加工は周縁のみに施され、体部中央に素材の剥離面を残している。抉りは、浅い弧状である。1点出土した。

A-37類 (第37図313) A-8類246に近い平面形を呈する。先端は尖らず、脚は細く、脚端部は丸く加工される。抉りは、やや深い三角形である。1点出土した。

A-38類 (第37図314、図版第23) 二等辺三角形の平面形を呈し、先端は尖る。石錐である可能性もあるが、基部がわずかに凹むことから凹基式と見做した。1点出土した。

A-39類 (第37図315～317) 平基式と見做されるが、基部にわずかながらも凹みが認められることから、凹基式と見做した。315・316は側縁がやや内湾気味のものである。4点出土した。



第38図 出土遺物実測図(12) 石畿

B-1類 (第37図318～321、図版第23) 基部に抉りをもたない平基畿である。平面形が、二等辺三角形を呈し、320は大型品である。6点出土した。

B-2類 (第37図322、図版第23) 五角形の平面形を呈し、薄い剥片素材を利用したもので、表裏面とも先端・周縁のみ加工を施すものである。1点出土した。

B-3類 (第37図323～325、図版第23) 正三角形に近い平面形を呈するものである。323は大型品である。4点出土した。

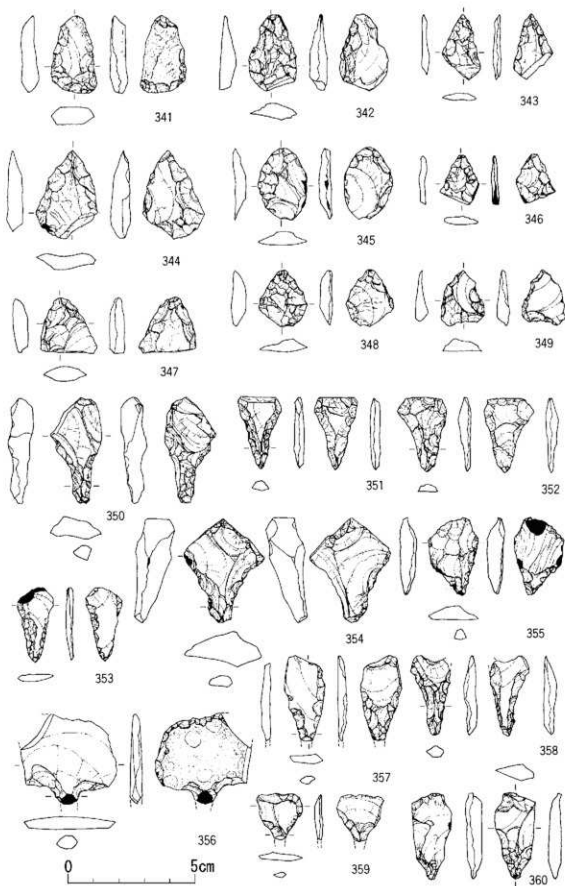
B-4類 (第37図326～328、図版第23) 釣鐘状の平面形を呈するものである。327・328はほぼ全面にわたり細かく丁寧な加工が施されている。5点出土した。

C-1類 (第38図329～332、図版第23) 小型・中型のもので釣鐘状、二等辺三角形、不定形な平面形を呈する。いずれも、素材剥片の剝離面が残る。基部の形状がやや丸味を帯びる。6点出土した。

C-2類 (第38図333～336、図版第23) やや大型品で、C-1類同様、素材剥片の剝離面が多く残る。厚手のものが多い。先端は尖り、周縁に細く連続した平坦な剝離面が施される。333・336は他のものに比して整った平面形を呈する。4点出土した。

C-3類 (第38図337、図版第23) 楕円形を呈し、裏面には剥片素材の剝離面が残る。1点出土した。
(増田孝彦)

D類 (第38図338・339、図版第23) 2点ある。338は厚みのある両面加工で、中央部から周縁部にかけて入念に調整されている。石材は石英を用いている。339は周縁部に加工が施され、表



第39回 出土遺物実測図(13)

裏中央には調整剥離は及ばない。石材はサヌカイトである。

b) 尖頭器(第38図340、図版第23)

元の古い素材の剥離面がわからないほど両面に丁寧な剥離が施され、縁辺から中軸に斜め方向の細長い剥離面がのびている部分もある。先端部および基部端を若干欠損するが、基部端がやや「U」字形となる尖頭器である。縄文時代草創期のものであろう。石材はサヌカイトである。

c) 石鏃未成品(第39図341～349、図版第24)

9点図示している(341～349)。横長すづまり剥片、貝殻状剥片、不定形剥片などを素材とする。周縁部に調整加工を施している過程のもの(341・342・345・349)や、先端部がほぼ完成しているもの(343・344・346・348)、製作中の折損品(347)などがある。9点ともサヌカイトである。

d) 石鏃(第39図350～360、図版第24)

合計11点ある。楔形石器の製作過程で生じた肉厚の剥片を用い、機能部のみに入念な調整加工をほどこしたもの(350・354・360)、薄い剥片を素材とする細長い二等辺三角形で、機能部およびつまみ部の縁辺に調整加工を施したもの(351・352・359)、つまみ部先端部にあまり調整加工がおよばず、機能部との境が不明瞭なもの(353・357・358)、幅広の不定形剥片を素材とするもの(355)、両側から抉り出されたような機能部をもつもの(356)などがある。356は片面を礫表とする大きなつまみ部の破片である。355は機能部にあまり鋭さがなく、左側縁辺に加工を施す前の未成品であろう。すべてサヌカイトを石材とする。

e) 石匙(第40図361・362、図版第24)

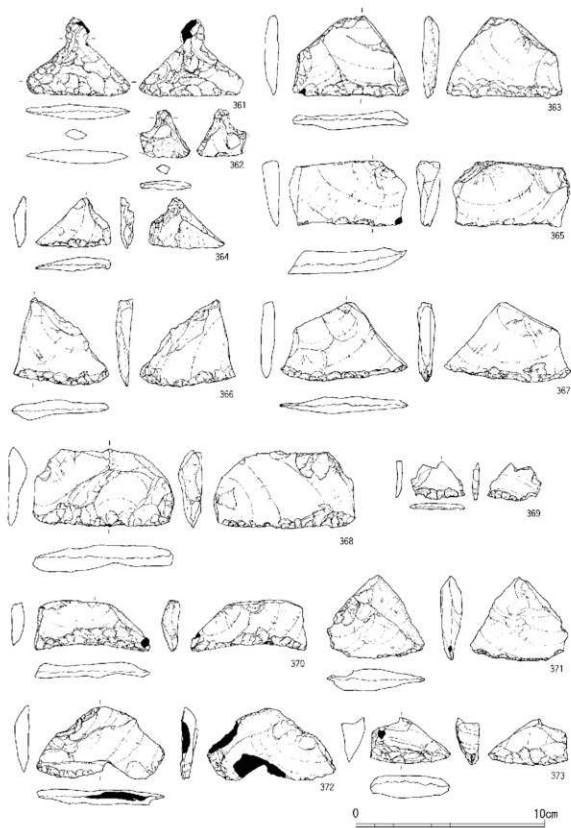
対象物を切り・削り・搔くための万能利器で2点出土している(361・362)。2点ともサヌカイト製である。361は三角形に近い横長剥片を素材とする両面加工である。つまみ部を明瞭に作り出し、下辺には特徴的な連続剥離による鱗状のスクレーピング・エッジが形成されている。362は薄い剥片を素材に、機能部の表面右端を欠損する小型の石匙である。明瞭に作り出されたつまみ部と縁辺部は丁寧に調整されている。下端の刃部となる部分に361のようなスクレーピング・エッジはなく、わずかな加工のみみられる程度である。製作途中の失敗のため、仕上げを放棄したものであろう。

f) 削器(第40図363～373、図版第24)

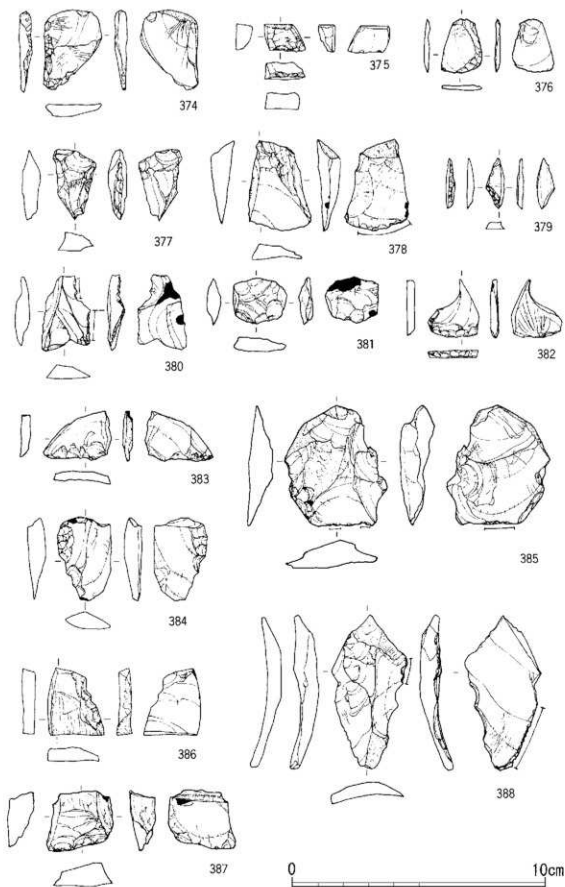
すべてサヌカイトを石材とする。石匙と同じく、対象物を切削する作業に使用したものである。11点を図示している。素材となる剥片には、主軸を傾ける横長剥片(363～367・370・372)、幅広の縦長剥片(368)、三角形に近い幅広すづまり剥片(371)がある。両極打法により得られた石鏃の素材剥片とは違い、大きさも剥離方法も排他的である。

素材剥片の形状を大きく変えることなく、刃部の加工は基本的に腹面・背面の両方から施されている。調整剥離が比較的浅く少ない365・371も、刃こぼれ的な痕跡ではなくあくまでも削器の刃部形成を意図している。刃部形は、直刃のもの(363～365・368・369)、やや外側にカーブするもの(366・367・371・372・373)や内湾するもの(370)がある。

g) 加工痕ある剥片(第41図374～379・381～384・386・387、第42図389～391、図版第25)



第40圖 出土遺物実測図(14)



第41図 出土遺物実測図(15)

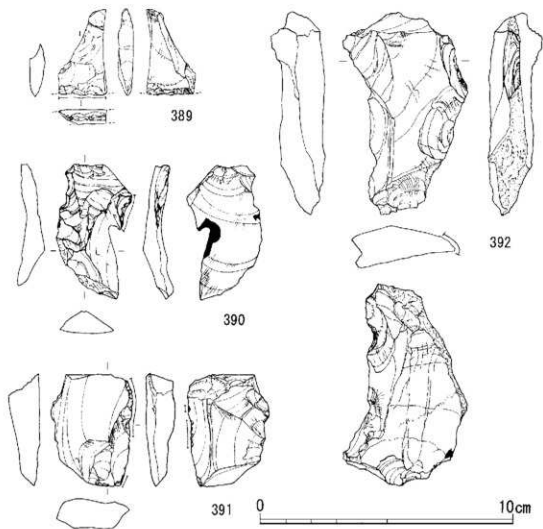
すべてサヌカイトを石材とする。15点を図示している。不定形剥片、貝殻状剥片、横長剥片の縁辺部に加工痕を有するものである。加工痕は縁辺部の一部にとどめるもの(374・376・384・386・387・390・391)や、長く連続して形成されているもの(375・377~379・381・382・383・389)がある。後者の多くは削器の断片とみられる。また、側縁部に裁断面を有するもの(375・381・387)があり、両極打法の影響がうかがえる。381は両面加工石器で、石礫の素材ともいえる。

h) 使用痕ある剥片(第41図380・385・388、図版第25)

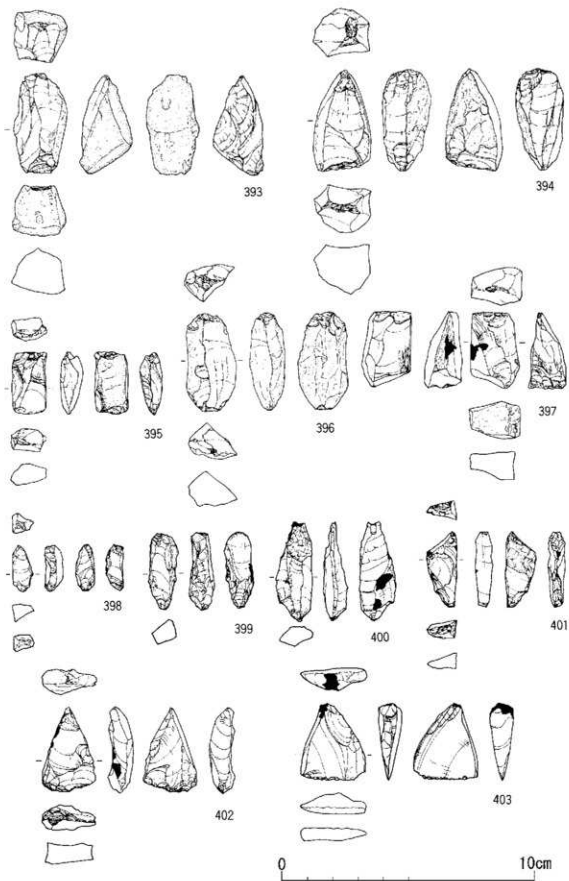
さまざまな形状の剥片を素材に、その薄く鋭利になった縁辺部に、刃こぼれ状の使用痕をとどめるものである。3点(380・385・388)あり、加工痕ある剥片に比べて出土点数は少ない。すべてサヌカイトを石材とする。

i) 挿器(第42図392、図版第25)

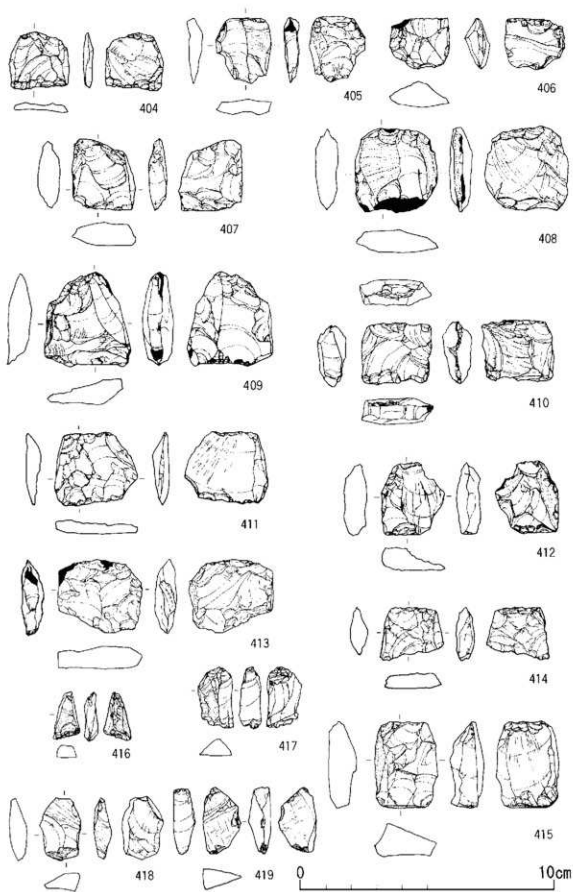
板状の不定形剥片を用い、刃部の断面が鋭角となる削器に対して、長軸に沿う縁辺の一部に鈍い角度で立ち上がる機能部をもつものである。獣皮の脂肪を掻き取る用途と考えられるものである。挿器とみられるものはこれ1点のみである。サヌカイト製である。



第42図 出土遺物実測図(16)



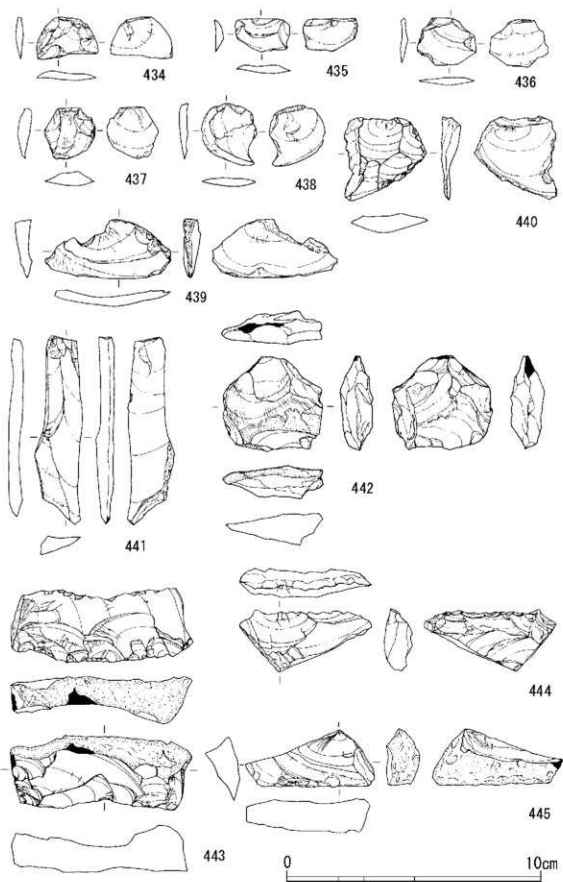
第43図 出土遺物実測図(17)



第44図 出土遺物実測図(18)



第45図 出土遺物実測図(19)



第46図 出土遺物実測図(20)

j) 楔形石器(第43図393~403、第44図404~416、第45図427・429~431、図版第25)

主に四辺形の相対する辺に強い打撃による階段状剥離痕やあばた状の潰れ痕を形成する剥片石器である。27点を図示した。階段状剥離痕が主に相対する二辺にみられ、長方形の短辺に形成され縦に長いもの(393~397・415)、正方形の相対する辺や長方形の長辺に形成されているもの(404~414・431)がある。さらに打撃による潰れ・剥離痕が三角形の頂点と底辺に形成されたもの(401~403・416・427)、四辺形の1対の頂点に潰れ痕が点的に形成されたもの(430)、紡錘形で小型の残核状のもの(398・399・429)がある。石材はすべてサヌカイトである。縦に長いものには肉厚な剥片が、横に長いものや正方形に近いものには相対的に薄い剥片が素材となっている。両端の階段状剥離のある辺を含めて切った断面形は紡錘形となり、側縁部に種状剥離面や裁断面を形成するものが高い割合で存在する。

楔形石器は旧石器時代からみられるが、縄文時代になって激増し、弥生時代まで存続するといった悠久な時間幅をもつ石器でもある。地面に置かれた台石の上に素材となる剥片や礫核を置き、それらを敲石でほぼ垂直に打撃する両極打法で生じたものとされる。

用途については、両極打法で発生した剥片の中から石鏃などの製作に適したものを得るという、楔形石器を素材とみる見解と、楔形石器を敲石とともに使用し、対象物(石・骨・木など)を割り砕くための工具とみる見解などがある¹⁷⁾。

k) 楔形石器の剥片・砕片(第44図417~419、45図420~426・428・432・433、図版第25)

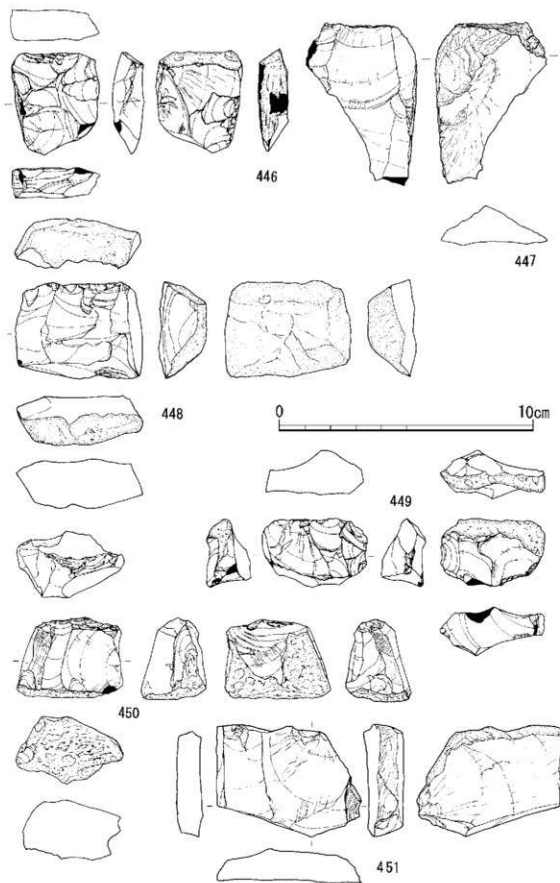
楔形石器の製作または使用に関連する剥片・砕片である。13点図示した。不定形剥片を素材とするもの(417~419・423・428)、断面三角形や台形で、強い打撃によりねじれたように剥離された細長い削片(420~422・424~426)などがある。さらに432・433は細長い縦長削片で、特に432は細石刃と見紛うようなものであるが、ともに楔形石器由来の剥片である。

l) 剥片(第46図434~441、第49図459、図版第26)

剥片には楔形石器の影響を受けたものが目立つが、その他にも、寸つまりの貝殻状削片、縦長および横長の削片、幅広削片などがある。434~438は横長または貝殻状削片である。両面加工石器などの加工に伴うポイント・フレーク状の削片といえる。5点のみ図化した他にも多量にある。441は自然面を打面とする細長い縦長削片である。背面の頂点には調整剥離がみとめられる。きめの粗い淡灰色のサヌカイトである。439は自然面打面をもつ横長の削片である。459は礫面を打面に、440は剥離面を打面として剥離された幅広削片である。最終的に剥離される前に、幅広削片を剥離した痕跡をとどめている。440は濃青黒色のチャートを石材としている。

m) 石核(第46図442~445、第47図446~451、第48図452~456、第49図457・458、図版第26)

両極打法を用いて剥片剥離作業が想定される、楔形石器以外の石核についてみる。主なもの17点を図示した。大きく見ると、Ⅰ類：板状および不定形の削片を素材に、その縁部から直線状または求心的に横長、幅広、不定形などの削片を剥離したもの、Ⅱ類：厚みのある礫核の縁部より同じく求心的な剥離を施したもの、Ⅲ類：打面転移を繰り返しながら幅広削片や縦長削片を採った残核などである。全体的に、打面は自然面が多く、打面調整はほとんどみられない。



第47図 出土遺物実測図(21)

I類(442~447・451・457・458)

442は下端および表面に自然面を残し、腹面側で打点を移しつつ求心的な剥片剥離が行われ、背面側の上端から幅広の縦長剥片が1枚得られている。443は表面中央に稜がはしり、断面三角形を呈する。自然面を打面として直線状に剥片剥離を試み、腹面側で貝殻状剥片やすづまり剥片を得ている。444・445は厚みのある三角形に近い素材の頂部や縁部から横長剥片を剥離したものである。445は自然礫面を打面とする。444はネガ面で構成された裏面上の縁辺に調整剥離がみられる。446は厚手の四角形に近いもので、側縁3辺に自然面を残す。背面の長軸に沿う縁辺から幅広の横長剥片および貝殻状剥片が採られている。腹面右縁辺に細かな階段状剥離が認められる。447は自然面を大きく残す不定形剥片を素材に、腹面側で幅広縦長剥片を剥離している。451は板状の幅広縦長剥片を素材に、表面の長辺縁部から自然面を打面として幅広剥片を剥離したものである。

457は大型の板状の剥片素材である。自然面を打面に表面で三角形の縦長剥片が採られ、それに先行して左下半で横長剥片がとられた痕跡がある。削器などの素材を得たものであろう。458は厚手の礫表皮剥片で、礫面を打面に幅広の横長剥片を採ったものである。

II類(448~450・454~456)

448は裏面を自然面とし、上端から打点を移しつつ不定形剥片や幅広剥片を剥離している。上端の縁部には強い打撃による細かな階段状剥離痕がみられる。449は厚手で不定形な船底形に近い形態で、表面側には自然面を打面に、裏面には下端のボジ面を打面に剥離された痕跡がある。いずれも小型の横長剥片や貝殻状剥片をそれぞれ1~2枚得たとみられる。

450は下面および片面に広く礫面が残る。上辺から縦長剥片が、側縁から幅広横長剥片が剥離されている。

454は目的的な剥片はとられておらず、分割された礫核または残核である。礫表を下面および一縁辺にとどめている。455は厚い素材の片面に求心的な剥離痕をとどめ、中・小型の横長剥片および幅広剥片を得ている。456は厚みのある亀甲形で、片面に自然面を大きく残し、腹面側にて求心的な剥片剥離をおこなった痕跡をとどめる。幅広剥片や貝殻状剥片などが採られている。

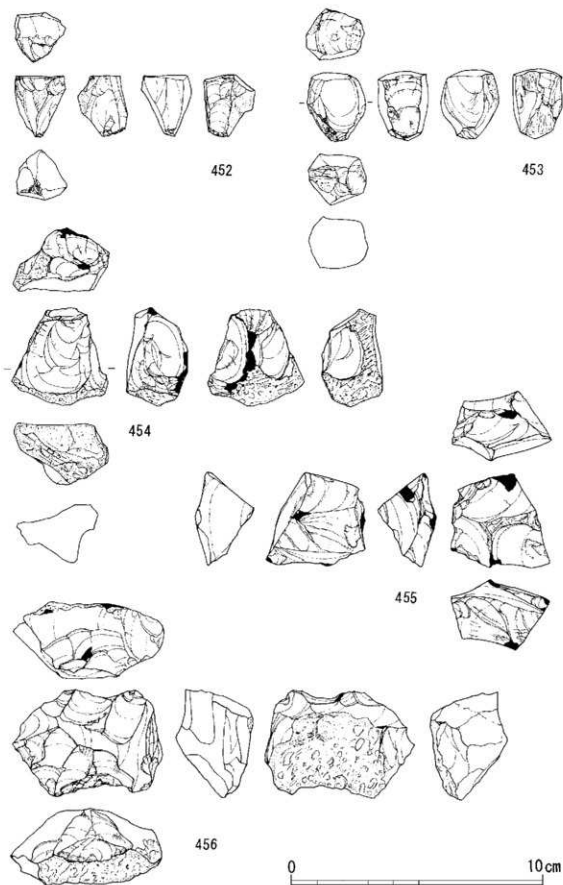
III類(452・453)

452は、円錐形に近い剥離打面をもつ小型の残核である。尖った下部端は硬いものに強く押し付けられたことによるあばた状の潰れ痕をとどめ、両極打法の痕跡もある。小型の縦長および不定形剥片などを剥離している。453は打面転移を繰り返しつつ、剥片剥離作業の最終段階を示すサイコロ形の残核である。幅広・縦長剥片が得られたのであろう。

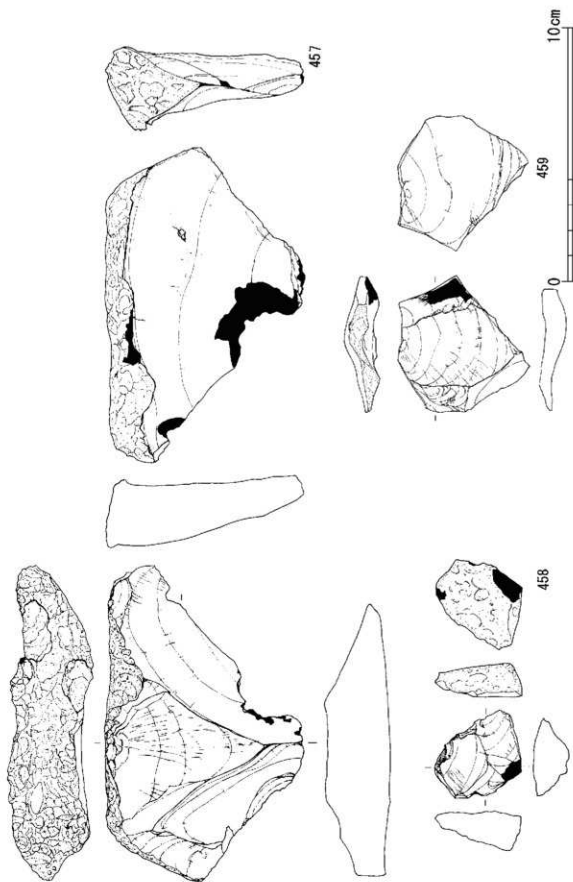
n) サマカイト素材礫核(第50図460・461、図版第26)

2点ある(460・461)。460は表裏面を粗く整形して亀の甲形にしたものである。216gを測る。

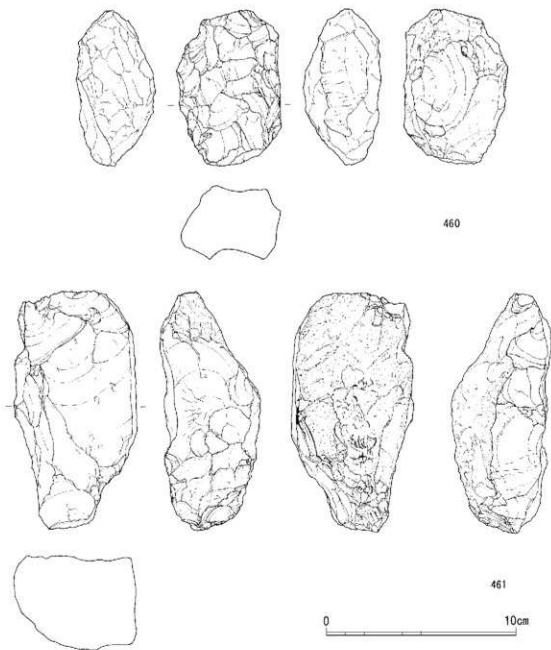
461は片面に礫表を大きく留めた大型のもので、もう片面と1側面は分割面となっている。断面形が鋭角となる片側先端部で大きく2枚の剥片が剥離されているが、歪みが大きく目的素材は得られていない。525gを測る。2点の礫核は大きく、消費地にもち込まれた素材として注目さ



第48図 出土遺物実測図(22)



第49図 出土遺物実測図(23)



第50図 出土遺物実測図(24)

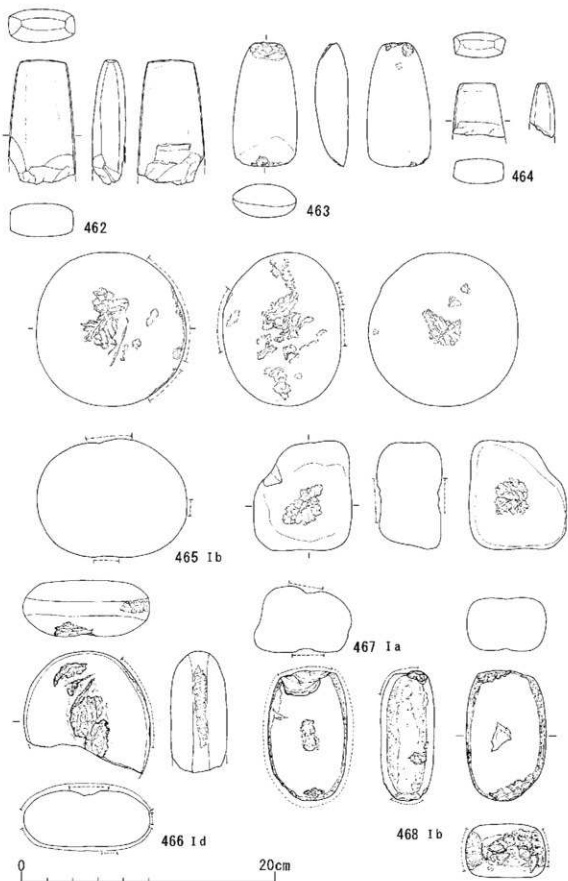
れる。

(増田孝彦・黒坪一樹)

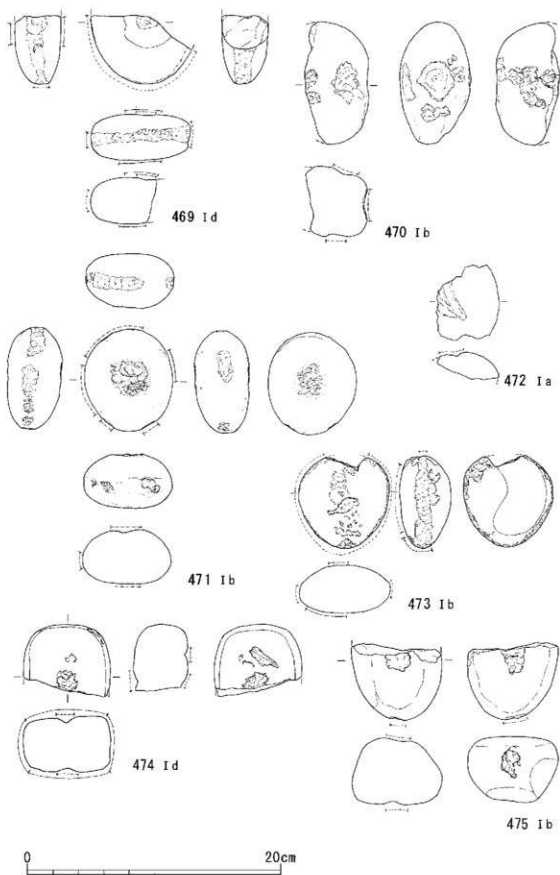
b. 礫石器

a) 石斧(第51図462～464、第56図510・511・514、図版第27)

磨製石斧は3点ある。462は全体をよく研磨された扁平な素材を用いている。刃部を激しい打撃により破損している。基部と両側縁は明瞭に面取りされている。463は厚みのある礫を用いた片刃の石斧である。基部端面に剝離痕・潰れ痕がついている。464は刃部から中間部までを欠損している。462と同じく扁平素材のよく研磨された石斧である。基部端面および両側縁の面取りは顕著で完成されている。



第51図 出土遺物実測図(25)



第52図 出土遺物実測図(26)

打製石斧に関するものは、完形品が1点(514)、破片が2点(510・511)ある。510と511は節理で薄く割かれた破片で、端部に打撃によるつぶれ痕や剝離痕が形成されている。514は扁平な楕円形の自然礫を素材に、その周縁部を部分的に調整加工し、円い端部を土掘り具の先端(刃部)として使用したものであろう。3点とも頁岩または粘板岩を石材としている。

b) 敲石類(第51～55図465～500、図版第27・28)

礫石器で敲石および磨石を包括して敲石類とした。法量(長さ・幅・厚さ・重さ)はさまざまで、形態は、扁平(楕)円、卵型、細長い棒状のものがある。石材は砂岩・花崗岩を主とする。礫形、使用痕、使用部位により、以下のように分類した。

I a類：(楕)円礫の表裏面に敲打による凹み・あばた痕をとどめるもの

I b類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+周縁部の敲打痕・剝離痕

I c類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+表裏面の磨面

I d類：(楕)円礫の表裏面の凹み・あばた痕+周縁部の敲打痕・剝離痕+表裏面の磨面

II a類：(楕)円礫の表裏面に滑らかな磨面が形成されたもの

II b類：(楕)円礫の表裏面の磨面+周縁部の敲打痕

III a類：円礫の側縁部の全周または一部に敲打痕をとどめるもの

III b類：楕円礫に側縁部の全周または一部に敲打痕をとどめるもの

IV類：細長い礫の両方または片方に敲打によるあばた痕や剝離面をとどめるもの
敲石類のなかでもっとも顕著な出方をみせるのはI類の凹石である。

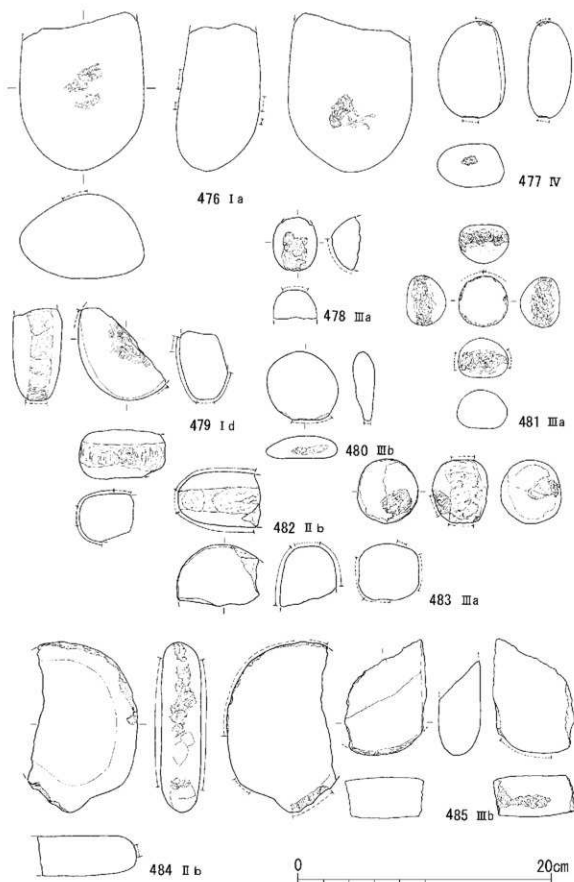
I類は(楕)円礫の表裏面または片面に敲打による凹みやあばた痕を有するいわゆる凹石で、その他の使用痕や形成部位を複合的に有するものを考慮して上記のとおり4つに細分した。

II類はいわゆる磨石の類である。表裏面に敲打による凹みをもたないものである。表裏面に滑らかな磨面のみが形成されているものをII a類、加えて周縁部に面的な敲打痕をとどめているものをII b類とした。このII類は植物食利用具の一つとして、石皿とともに堅果類などのすり潰しに使われた可能性が高いと考えられる。ただ、破損割合が高く、かつ表裏面を磨っただけの単一機能の磨石(II a類)は493の1点のみという点から、本地点においては石器製作具への転用が進んだか、あるいは植物食利用は低調であったことがうかがえよう。

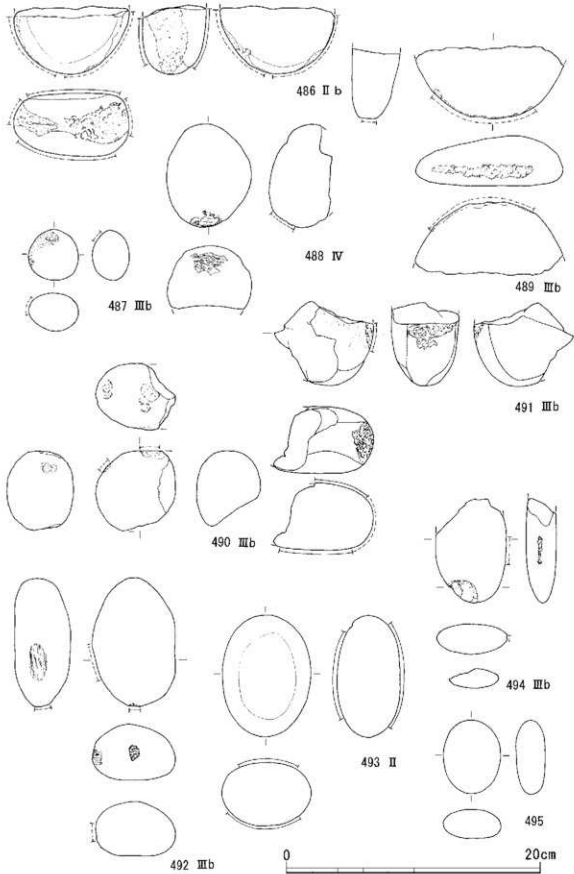
III a類は円礫の周縁部にあばた状の敲打痕をとどめるもので、200g以下の小型のものが目を引く。石器製作のハンマーとして特徴的なものである。III b類は、石器製作用のものおよび植物食利用具としても考えられるものを含み、大きさに幅がある。

IV類は楕円礫や細長い礫の端部を使用するもので、旧石器時代以来、石器製作や堅果類の殻割りなどに用いられたものであろう。今回のものは477を除き、激しい打撃による剝離・打製痕や中間からの折損など、石器製作具としての色合いが濃いものである。

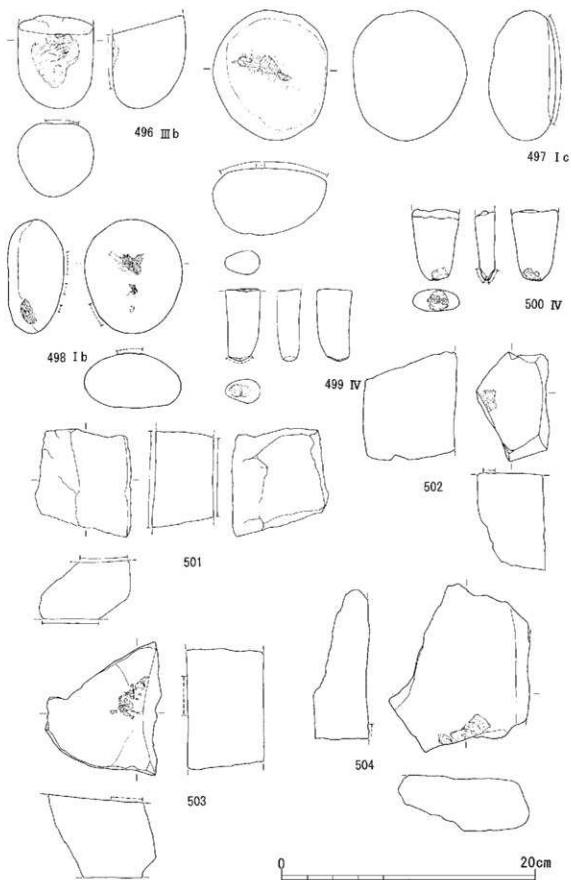
一般的に敲石類は植物食糧の調理加工具、石器製作具、朱や毒の精製関連具、皮なめし具などの用途が考慮されている。今回の資料はほとんど石器製作具と考えられるものである。根拠としては、楔形石器や、大量の剥片・破片が出土している状況から両極打法や石器製作ハンマーの存



第53図 出土遺物実測図(27)



第54図 出土遺物実測図(28)



第55図 出土遺物実測図(29)

在を如実に示す資料が多いこと、調理作業ではあまり発生しない激しい剝離・打裂痕や破損が顕著であること、後述する堅果類の磨り潰し用の石皿がほとんど皆無であることなどがあげられる。両極打法の痕跡は、線条の敲打や押圧による潰れをもつものが敲石類Ⅰ類に多いことから、石器製作ハンマーの存在はⅢa類・Ⅳ類の顕著な存在から明らかである。使用による剝離・アバタ痕および摩擦による減りではなく、半割や折損など、機能が大きく損なわれているものを破損とみると、図化した敲石類36点のうち、破損しているものは23点を数える。高い破損率といえる。

c) 台石・石皿(第55図501～504、第56図505～508、図版第27・28)

いずれも敲石類とのセットで使用されたと考えられるものである。台石は平坦な広い面にあばた状の敲打痕、線条の凹み、さらに磨痕などの明瞭な使用痕をとどめるもの、石皿は主に磨面を広く有し、使用により皿状に滑らかな凹みが形成されているものとした。

501・507・508の表面は、自然面とするにはやや平滑なため、使用部としたものである。502～504は表面中央部にあばた状の潰れ痕をとどめ、505はややいびつな円礫の凸面中央部に押し付けたような線条の凹みがみられるものである。台石はいずれも楔形石器と関連している可能性はあるが、楔形石器の縁辺を想起させる線条の凹みをもつ505は特徴的である。

506は、扁平な礫の片側表面がやや滑らかなへこみをもつことで石皿とした。しかし、磨面の状態および範囲が安定していないことや、大きく破損していることから、堅果類の磨り潰し用とは思えないものである。敲石類同様、台石・石皿についても破損率を示してみる。台石・石皿の総数8点はすべて破損している。植物食利用の台石・石皿では考えにくい高い破損率である。石器製作に代表されるような非常に激しい使われ方が窺い知れよう。

d) 石錘(第56図509、図版第27)

1点のみ出土した。扁平な自然礫の両先端部を打ち欠き、明瞭な繫り部を作っている。加工のための打撃は表裏両面から入っている。

e) 砥石(第56図513、図版第27)

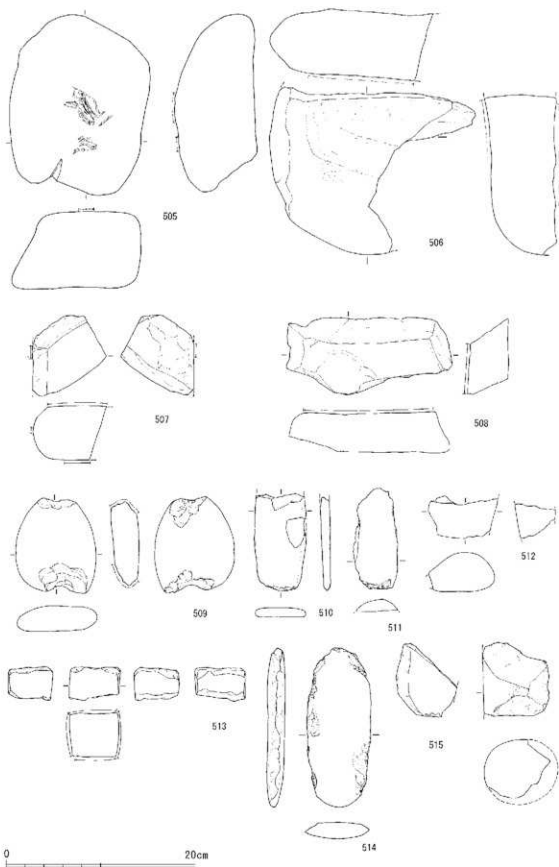
1点ある。下半は欠損しているが、上面・四側面すべて使用により研磨され、非常に滑らかとなっている。石材は砂岩である。所属時期は不明であるが弥生時代以降のものであろう。

f) 搬入礫(第54図495、第56図512・515)

遺跡に持ち込まれたであろう礫は多量にある。それらのうち3点(495・512・515)を示した。495は敲石類Ⅲ類としたものと同質の礫素材、512・515は珪質の硬い石材で、ハンマーやその他の石器への加工用であらう。(黒坪一樹)

c. 小結(石器のまとめ)

今回の主に8トレンチからは多量の石器関係資料が出土した。多くの器種があり、定形的な剥片石器では石鏃・尖頭器・石錘・石匙・削器・使用痕ある剥片(UF)・加工痕ある剥片(RF)・搔器・楔型石器がある。これらの製作・使用に伴う剥片・石核も多く、剥片は定形的な石器のおよそ10倍の量がある。石材はほとんどサヌカイトであるといつてよい。チャート・頁岩・石英などはごく少ない。



第56図 出土遺物実測図(30)

剥片石器および剥片・石核についての特徴をみていくと、まず、石鏃と楔形石器の多さがあげられる。石鏃はもっとも多く出土した石器である。基部がくぼむいわゆる凹基式鏃が多いが、微妙な形態上の変異を捉えるために細分した。石核から素材剥片が形成される時の予測不可能な剥離の振幅の大きさと作り手の好みなどが反映され、形態の微妙なカーブや先端部の加工に差が生じた。形態の多様さとともに、肉厚なものから薄く軽量のものまでである石鏃の重さは、殺傷効果や飛距離に大きく関係していると推測され、狩猟対象により使い分けられたのであろう。

縄文時代になって、主に石鏃の製作に関し飛躍的に普及した技術に、楔形石器による両極打法がある。実際、石鏃と楔形石器の増加は正比例し密接な関係が指摘されている。台石などの上に楔形石器を置き、上から垂直に敲石で打撃を加えて素材剥片を得るものである。この場合、楔形石器は素材となる。本地点においても、石鏃製作のための素材剥片(ポイントフレークなど)を多量に得るため、両極打法が採用された結果、楔形石器が台石・敲石とともに多く用いられた。

さらに、短辺に階段状剥離やつぶれ痕を有する、形の整った楔形石器(393~396など)については、文字通り骨や木を割るために打ち込まれた楔として用いられた可能性がある。この場合、楔形石器は工具となる。

素材、工具のいずれであっても、打撃作業中に相対する端部に細かな剥離痕が生じ、その結果として小剥片や微細な石屑が多く生成されるため用途の限定は難しい。素材か工具か、複数の用途を視野に入れておく必要がある。石鏃・楔形石器が多出し、本遺跡と時期が重なる遺跡に、向出遺跡(大阪府阪南市)がある。

削器の多さも留意すべき事象である。定形的な削器以外にも加工痕のある剥片には削器の刃部片のなものが多く、削器の素材は石鏃・楔形石器の素材とは特に大きさに差があり、削器の方が大きい。両極打法との排他的な関係がみてとれる。

両極打法以外にも石器製作に関係する多種多様な石核・剥片がある。石核には主に自然面を打面とする板状の剥片を素材とするもの(I類)や、礫核素材のもの(II・III類)などがあり、多くは打点を横方向に移動させつつ求心的な剥片剥離をおこなっているものである。自然面を打面とするものが多く、打面調整や打面再生はほとんどみられない。生まれた剥片には横長・縦長剥片、寸づまり剥片、貝殻状剥片などがある。

礫石器については、磨製石斧・打製石斧・敲石類・台石・石皿・石錘がある。石斧・石錘は少ない。もっとも顕著な出方を示すのは敲石類と台石である。敲石類はいわゆる凹石の形態が非常に多い。その使用痕を観察すると、縦糸に長いものが押し付けられたり、擦過したりして形成されている。これらの使用痕は両極打法による楔形石器の使用によるものであろう。本来、植物食利用の調理具としても考えられる遺物であるが、ここではその使用痕の状態や高い破損率さらに石皿の欠如などから石器製作具の色彩が濃厚である。

こうした多用途な器種の石器、多量の剥片や、石核・素材礫核などの大部分は、縄文時代中期～後期の時期とみられるが、今回のおびただしい縄文期の遺構群(住居跡・土壌墓)に伴うものではなく、後世の人あるいは自然の営為により本地区に残されたものである。したがって、今回の遺

構群と同時ではないが、縄文時代後期のある時期に、本地区あるいはその周縁で石器製作が行われていたとみられ、石器製作空間の一角を掘り当てていることは明らかである。

(黒坪一樹)

4. まとめ

長岡京期

長岡京期の溝S D 368・369は東西方向よりも約7～8°ほど北に振っている。現在残る水田畦畔と重なるが、長岡京跡の復原条坊には合致しないものである。両溝に挟まれた空間部分は3.2～3.5mあり、築地等の施設を想定することは可能だが問題が残る。幅が広く、空間部分には柱穴も存在しない。両溝とも底面は凹凸があり、溝掘削後に必要な土砂を確保するために再掘削した可能性がある。そのため、空間部分の外側の掘形の幅が一定でない。溝S D 369の延長部にあたる右京第927次調査地のS D 01では、この溝上に建物跡が推定される部分があり、この部分より北側には南北方向の水田畦畔が残っており、なんらかの区画の存在が想定される。一方、東側の低位段丘上にも延長部分に相当する畦畔が存在することから、区画が台地上にも延びていると考えられる。

低位段丘上の調査で検出した掘立柱建物跡S B 40・120、溝S D 02・30については、正方位を示すもので、溝S D 368・369とは方向が異なる。長岡京期の建物配置や土地利用を考える上で重要な資料となる。同じく、鍛冶生産関連の遺構・遺物のは、中世の邸宅内に付随する鍛冶工房を推定したが、今回出土した鍛冶滓は、中世の遺物が確認されなかったことや、右京第70次調査で竪穴式住居跡から鉄滓が出土していることなどから、古墳時代～長岡京期の可能性も考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、6世紀中頃を中心とする竪穴式住居跡が8基検出された。規模的には大差ないものであるが、竈の有るものと無いものがある。竈を有するものでは、時期により竈の方向が異なるようで、古い段階では北東方向、新しい段階では北西方向を向く。低位段丘上では、6世紀後半～7世紀前半の竪穴式住居跡が検出されており(右京第70・910次調査、8トレンチ周辺ではこの時期の住居跡は認められず、6世紀後半以降には集落の中心は台地上に移動したものと考えられる。

縄文時代

検出した遺構は、後期の竪穴式住居跡8基、中期・後期の土坑(柱穴等を含む)約220基がある。竪穴式住居跡に関しては、不整形なものが多く、主柱穴の位置も住居の辺に沿わず、その位置が極端にズレたりしているものが多い。内部から出土する遺物も少ない傾向があった。また、石器の出土は、ごく少量の石鏃・敲石・石斧片が出土する程度である。サヌカイト剥片の出土も検出面付近に限られており、石器の製作は、竪穴式住居が廃絶した後に開始されたと考えられる。

検出された土坑(柱穴等を含む)は、礫の有無・形状・遺物出土状況などで3種に分けられる。

a.土坑内部から焼骨片が検出されたもの

いずれも、焼骨片は数mm～1cm程度の細片であり人骨かどうか不明である。他にもこれらの土坑とよく似た形状、遺物の出土状況のものがあるため、掘削中に微細な焼骨片を見落としている可能性もある。南側約40mの右京第943次調査では、火葬人骨を埋納した土坑が見つまっているため関連性が問われる。焼骨が検出されたものは、S P 436・S K 540・S T 560・S T 620があり、S P 436・S T 620は中期の土坑であり、S K 540・S T 560は後期の土坑である。このうち、礫を伴うもの(S K 540)、土器・石礫1点を伴うもの(S P 436)、石礫を伴うもの(S K 540)、台石を伴うもの(S P 436)がある。剥片の出土量は、S T 560が46点と多いものの、検出面からの出土である。その他の土坑は、最大でも3点までであることから、石器製作以前に設けられた土坑と考えられる。

b. 土坑内部に礫が入るもの

さらに2種類に分けることができる

(1) 検出段階で集積状に礫が見えているもの。S X 346(石礫1点、剥片59点)、S K 530(剥片石器1点、剥片22点)、S K 588(石礫1点)がある。

(2) 土坑中位に礫が出土するもの。S P 503(剥片28点)・S K 507(剥片3点)に分けられる。

(1)については墓である可能性も考えられるが、焼骨等の出土は認められなかった。(2)については、礫が角礫で大きい、または円礫(小泉川の礫)を土坑内に並べており、S P 503のように断面が袋状になるものも認められることから、貯蔵穴の可能性もある。

いずれも後期の土坑であるが、細片化した縄文土器とともに、石礫、剥片石器、ササカイトの剥片の出土量に多寡が認められる。このような剥片出土量の違いは、石器製作以前と以後に設けられた土坑の違いと考えられる。

c.a・bともに該当しないもの

大半の土坑がこれに相当する。ほとんどの土坑は、底面からは遺物が出土せず、遺物は土坑の深さの約2/3より上半に限られる傾向がある。このことから、土坑外面を覆っていた土砂とともに小片化した土器が土坑内に落ち込んだとも推定される。ゴミ穴の可能性もある。いずれの土坑にも、ササカイト剥片類の出土が1～7点みられる。

これに対して、石礫1点(S P 403・486・600、S K 506・527・697、S T 545)、その他の定形的な石器が出土するものでも、ササカイト剥片の出土は1～2点と少ない。堆積状況からすると、浅い窪みに堆積したものと考えられるS K 506・527を除くと、大半が墓である可能性もある。

上記したものの以外に石礫・剥片・剥片石器・礫石器が飛びぬけて多いものには、S T 545(石礫1点、礫石器1点、剥片32点)、S K 506(剥片23点、礫石器1点)、S K 544(石礫1点、剥片石器2点、礫石器3点、剥片32点)、S K 621(剥片石器1点、剥片11点)、S X 373(剥片15点)、S X 617(剥片石器1点、剥片27点)がある。堆積状況から浅い窪みに堆積したものと考えられるS X 617の除くと、石器製作に関係する土坑と考えられる。

8トレンチにおける包含層や縄文時代遺構検出面で出土したおびただしいササカイト製石礫、剥片は、この地が石器製作場所となっていたことを裏づける。このことから、遺構群の推移をみ

ると、中期段階では土坑が広がっており、後期段階で竪穴式住居が営まれるとともに、前後して土坑が作られる。その直後、SH440埋土にみられるように、遺構面全体に広がっているサスカイトの剥片の出土から石器製作の場となり、石器製作後、再び土坑が設けられたと考えられる。出土した土器から、中期末の土坑は北白川C式、石器製作以前と考えられる竪穴式住居跡および前後する土坑は後期中葉～後葉の元住吉山Ⅱ式、石器製作およびその後の土坑の時期は元住吉山Ⅱ式～宮滝式の段階に比定できる。

今回の調査で出土した碧玉製の玉、2トレンチSP04から出土した玉の原石と考えられる緑色凝灰岩、右京第943次調査の縄文時代後期の火葬墓墳SK26から出土している加工痕のある碧玉製玉破損品、平成21年度に8トレンチ南側で長岡京市教育委員会が実施された右京第975次調査でも穿孔途上の破損品の碧玉が多数検出されており、縄文時代後期には石器製作とともに玉作りも行われていたと考えられる。

今回の調査では、長岡京の復元条坊に合致しない溝や、古墳時代後期・縄文時代中期末、後期後葉の各時期における土地利用の様相が明らかとなった。

(増田孝彦)

注1 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第70次(7ANOIR地区)調査概要」(「長岡京市文化財調査報告書」第9集 長岡京市教育委員会) 1982

注2 増田孝彦「4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5、NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注3 中川和哉ほか「京都第二外環状道路関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

岩松保ほか「3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注4 注2に同じ

注5 都出比呂志・増田富士夫・泉拓良・千葉豊・富井眞

注6 松下道子・山本弥生・荒川仁佳子・村岡弥生・井上聡・山川幸乃

注7 寄生虫卵分析業務は、株式会社バレイオ・ラボに委託し分析を行った。

注8 代表的なものを実測した。実測図における剥片石器の黒く塗りつぶした部分は新しい破損部である。石鏃は機能的な差を表すものではないが、微妙な形態の違いを示すため細かく区分している。加工痕ある剥片、使用痕ある剥片・搔器は使用部位と使用痕を実線で表示している。礫石器は石材の質感を表すための自然面を描き出さず、使用痕・使用部位のみを記入している。さらに敲石類は形態区分の類型を記し、あわせて使用痕の部位と種類を示すため、破線(敲打痕・擦過痕)、実線(磨痕)、一点破線(剝離痕)を肉眼および触感によりわかる範囲で添えた。

注9 礫石器の石材は砂岩・花崗岩・頁岩・粘板岩などが主とみられるが、正確な鑑定を行っておらず、今回、一覧表には記載できなかった。

注10 剥片は便宜的に長さが5mm以上と以下に分けた。5mm以下のものは4,003点のうち110点あり、そ

のなかには1mm程度の碎片も含んでいる。

- 注11 サヌカイトにはいくつかの質の違いがみられる。肉眼観察から、破砕面は黒くて質感の滑らかなもの・破砕面は黒灰色で質感がガラス質を帯びてややざらつくもの・破砕面は淡緑灰色で石理が発達し白いスジの多く入るものなどがある。最後の淡緑灰色で白いスジの多く入るものについては石材欄にサヌカイト淡緑と記した。二上山産や金山産(香川県)など、産地の違いを反映するものと思われる。
- 注12 一部、縄文時代草創期の尖頭器や、弥生土器の出土はないが、弥生時代の可能性を示すもの(石鏃・砥石など)もごく少量ある。
- 注13 田中英司「縄文時代における剥片石器の製作について」(『埼玉考古』第16号 埼玉考古学会) 1977、33~47頁
田中英司「付編 縄文時代の剥片石器製作」(『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会) 1979、187~190頁
- 注14 岡村道雄「ビエス・エスキューについて-岩手県大船渡市碁石遺跡出土資料を中心として-」(『東北考古学の諸問題』東北考古学会) 1976、75~96頁
- 注15 藤山龍造「3)石鏃の普及と石器製作」(『環境変化と縄文時代の幕開け』雄山閣) 2009、84~85頁
- 注16 山元建・仁王浩司・岡田憲一ほか「向出遺跡 一般国道26号(第二阪和国道)建設に伴う発掘調査報告書」(『財』大阪府文化財調査研究センター調査報告書)第55集 (財)大阪府文化財調査研究センター) 2000、253~255頁

付表1 石器観察表

定形的な剥片石器と礫石器について作成し、剥片(楔形石器以外)・石核・サヌカイト礫核は別愛した()は欠損品の残存部および重さを計測したものである

石鏃一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿入番号
218	包含層	サヌカイト	A-1	先端部欠損	(2.05)	1.5	0.4	(0.9)	第35図
219	包含層	サヌカイト	*	先端部欠損	(2.5)	1.6	0.45	(1.2)	第35図
220	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.3	(1.7)	0.3	(0.9)	第35図
221	S K 506	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.15	(1.35)	0.29	(0.5)	第35図
222	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.15	(1.5)	0.29	(0.5)	第35図
223	包含層	サヌカイト	*	先端部欠損	(2.25)	(1.7)	0.35	(0.7)	第35図
224	S D 368	サヌカイト	*	基部片側欠損	(2.25)	(1.3)	0.3	(0.5)	第35図
225	S H 580	サヌカイト	*	定形	1.95	1.5	0.38	0.7	第35図
226	S D 368	サヌカイト	A-2	基部片側欠損	2.2	(1.55)	0.6	(1.4)	第35図
227	包含層	サヌカイト	*	先端、基部片側欠損	(2.35)	(1.25)	0.4	(1.2)	第35図
228	S H 440	サヌカイト	A-3	先端部欠損	(1.9)	1.55	0.4	(0.7)	第35図
229	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	1.7	(1.2)	0.25	(0.5)	第35図
230	包含層	サヌカイト淡緑	A-4	基部片側欠損	2.5	(1.9)	0.35	(1.8)	第35図
231	包含層	サヌカイト淡緑	A-5	先端部欠損	(2.35)	1.55	0.3	(0.9)	第35図
232	包含層	サヌカイト	*	定形	2.1	1.3	0.2	0.4	第35図
233	包含層	サヌカイト淡緑	*	定形	2.75	1.65	0.32	0.9	第35図
234	包含層	サヌカイト	*	定形	2.4	1.4	0.35	0.7	第35図

遺物 番号	包含層・ 遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿入番号
235	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.0	(1.1)	0.25	(0.4)	第35図
236	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	(2.0)	1.2	0.2	(0.4)	第35図
237	S P 436	不明	A-6	定形	1.15	0.9	0.1	0.1	第35図
238	包含層	サヌカイト	*	定形	1.75	1.25	0.2	0.4	第35図
239	包含層	サヌカイト	*	定形	1.8	1.2	0.2	0.5	第35図
240	包含層	サヌカイト	*	定形	1.6	1.1	0.15	0.3	第35図
241	包含層	サヌカイト	*	定形	(1.25)	1.25	0.23	(0.4)	第35図
242	包含層	サヌカイト	*	定形	2.0	1.45	0.33	0.8	第35図
243	包含層	サヌカイト淡緑	A-7	定形	2.5	2.1	0.45	1.4	第35図
244	包含層	サヌカイト	*	定形	2.2	1.65	0.5	1.4	第35図
245	包含層	サヌカイト	*	先端・基部片側欠損	(1.5)	(1.35)	0.23	(0.4)	第35図
246	S H 400	サヌカイト	A-8	基部片側欠損	2.05	(1.5)	0.2	(0.7)	第35図
247	包含層	サヌカイト	*	定形	2.2	1.7	0.4	1.3	第35図
248	包含層	サヌカイト	A-9	基部両側欠損	(2.5)	(1.5)	0.3	(0.8)	第35図
249	S K 527	サヌカイト	*	定形	3.95	1.5	0.25	0.7	第35図
250	S K 544	サヌカイト	A-10	定形	1.55	1.2	0.2	0.2	第35図
251	包含層	サヌカイト	A-11	先端・基部片側欠損	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.5)	第36図
252	S D 369	サヌカイト	*	先端・基部片側欠損	(1.55)	(1.55)	0.31	(0.5)	第36図
253	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	1.6	(1.5)	0.25	(0.5)	第36図
254	S H 384	サヌカイト	A-12	基部片側欠損	3.1	(1.9)	0.3	(1.8)	第36図
255	S D 368	サヌカイト	A-13	基部片側欠損	2.0	(1.1)	0.35	(0.6)	第36図
256	包含層	サヌカイト	A-14	定形	2.0	1.9	0.3	0.8	第36図
257	包含層	サヌカイト淡緑	*	先端欠損	(2.0)	1.6	0.5	(1.3)	第36図
258	包含層	サヌカイト	A-15	先端欠損	(1.1)	1.8	0.4	(0.7)	第36図
259	S H 370	サヌカイト	*	定形	1.15	1.45	0.3	0.4	第36図
260	S D 368	サヌカイト	A-16	定形	1.1	1.4	0.25	0.3	第36図
261	S H 380	サヌカイト	*	定形	1.35	1.35	0.3	0.5	第36図
262	包含層	サヌカイト淡緑	*	先端部欠損	(1.4)	1.3	0.2	(0.4)	第36図
263	包含層	サヌカイト淡緑	A-17	定形	1.5	1.55	0.3	0.6	第36図
264	包含層	サヌカイト	A-18	定形	2.15	2.0	0.5	1.8	第36図
265	包含層	サヌカイト	A-19	定形	2.15	1.75	0.5	2.2	第36図
266	S D 369	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	1.75	(1.6)	0.3	(0.7)	第36図
267	包含層	サヌカイト淡緑	A-20	定形	1.2	1.65	0.25	0.3	第36図
268	S K 347	サヌカイト	A-21	定形	1.6	1.55	0.5	0.9	第36図
269	S P 403	サヌカイト	A-22	定形	1.55	1.15	0.35	0.6	第36図
270	包含層	サヌカイト	*	定形	1.7	1.0	0.2	0.3	第36図
271	S H 400	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.2	(1.0)	0.15	(0.4)	第36図
272	包含層	サヌカイト淡緑	*	先端部欠損	(1.95)	1.25	0.3	(0.6)	第36図
273	包含層	サヌカイト	A-23	定形	1.7	1.3	0.35	0.7	第36図
274	S D 369	不明	*	先端部欠損	(1.25)	1.05	0.2	(0.7)	第36図
275	S H 384	サヌカイト	A-24	先端・基部片側欠損	(1.8)	(1.5)	(0.42)	(1.1)	第36図
276	包含層	サヌカイト	*	先端部欠損	(1.8)	1.4	0.3	(0.8)	第36図
277	S H 370	サヌカイト淡緑	A-25	定形	1.4	1.1	0.2	0.4	第36図
278	包含層	サヌカイト淡緑	*	定形	1.55	1.4	0.2	0.4	第36図
279	S H 370	チャート	A-26	定形	1.72	1.4	0.35	0.5	第36図
280	包含層	サヌカイト淡緑	A-27	定形	1.7	1.55	0.3	0.6	第36図
281	S H 370	サヌカイト淡緑	*	定形	1.5	1.3	0.2	0.3	第36図
282	包含層	サヌカイト淡緑	A-28	先端部欠損	(1.9)	1.4	0.35	(0.7)	第36図
283	S K 522	サヌカイト	*	先端部欠損	(1.7)	1.6	0.32	(0.8)	第36図
284	S D 368	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.2	(1.1)	0.29	(0.6)	第36図
285	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部両側欠損	(1.45)	(1.0)	0.2	(0.3)	第36図
286	包含層	サヌカイト	A-29	基部片側欠損	1.8	(1.3)	0.2	(0.5)	第36図
287	包含層	サヌカイト	*	定形	2.05	1.5	0.31	0.8	第36図
288	包含層	サヌカイト	*	定形	2.05	1.55	0.21	0.6	第36図
289	包含層	サヌカイト	*	定形	1.80	1.4	0.3	0.6	第36図
290	S H 384	チャート	*	先端・基部片側欠損	(1.75)	(1.45)	0.38	(0.9)	第36図
291	包含層	サヌカイト	*	先端部欠損	(1.3)	1.4	0.3	(0.4)	第36図
292	S P 660	サヌカイト	A-30	定形	2.5	1.5	0.2	0.7	第36図
293	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.1	(1.8)	0.3	(0.6)	第36図

遺物 番号	包含層・ 遺構	石材	形態分類	遺存状況	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	種別番号
294	包含層	サヌカイト	A-31	完形	2.75	1.7	0.4	1.1	第37区
295	S D 368	サヌカイト	*	先端部欠損	(2.3)	1.65	0.4	(1.4)	第37区
296	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.4	(1.7)	0.5	(1.4)	第37区
297	包含層	サヌカイト	*	先端部欠損	(1.4)	1.7	0.3	(0.6)	第37区
298	包含層	サヌカイト	A-32	完形	1.6	1.4	0.25	0.4	第37区
299	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	1.8	(1.4)	0.3	(0.4)	第37区
300	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	(2.05)	(1.55)	0.35	(0.7)	第37区
301	S D 369	サヌカイト	*	完形	1.8	1.7	0.3	0.6	第37区
302	S D 369	サヌカイト淡緑	*	先端・基部片側欠損	(2.02)	(1.6)	0.3	(0.6)	第37区
303	S D 369	サヌカイト	*	先端・基部片側欠損	(1.5)	(1.15)	0.24	(0.3)	第37区
304	S H 370	サヌカイト	A-33	先端部欠損	(1.85)	1.4	0.25	(0.5)	第37区
305	S H 370	サヌカイト淡緑	*	完形	2.0	1.6	0.35	0.8	第37区
306	S D 368	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.85	(1.9)	0.3	(1.0)	第37区
307	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	2.8	(2.0)	0.5	(1.7)	第37区
308	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.4	(1.15)	0.4	(0.7)	第37区
309	包含層	サヌカイト淡緑	*	先端・基部片側欠損	(2.22)	(1.35)	0.3	(0.6)	第37区
310	包含層	サヌカイト	A-34	完形	1.9	1.4	0.2	0.4	第37区
311	包含層	サヌカイト	A-35	先端部欠損	(1.2)	1.2	0.25	(0.3)	第37区
312	S D 369	サヌカイト	A-36	完形	1.55	1.3	0.2	0.5	第37区
313	S D 368	サヌカイト	A-37	基部片側欠損	1.7	(1.3)	0.27	(0.5)	第37区
314	包含層	サヌカイト	A-38	完形	2.2	1.6	0.35	0.7	第37区
315	S H 400	サヌカイト	A-39	基部片側欠損	2.3	(1.95)	0.5	(2.0)	第37区
316	包含層	サヌカイト	*	基部片側欠損	2.25	(1.65)	0.3	(1.1)	第37区
317	包含層	サヌカイト淡緑	*	先端部欠損	(1.4)	1.5	0.35	(0.7)	第37区
318	包含層	サヌカイト	B-1	先端部欠損	(1.9)	1.9	0.6	(2.2)	第37区
319	包含層	サヌカイト	*	完形	2.05	1.55	0.3	0.9	第37区
320	S H 370	サヌカイト	*	完形	2.85	2.0	0.5	2.8	第37区
321	S K 367	サヌカイト	*	先端部欠損	(2.15)	1.85	0.6	(2.3)	第37区
322	包含層	サヌカイト淡緑	B-2	完形	1.8	1.2	0.25	0.5	第37区
323	包含層	サヌカイト	B-3	先端部欠損	(2.45)	2.4	0.6	(2.9)	第37区
324	S D 368	サヌカイト淡緑	*	完形	2.20	2.05	0.45	1.7	第37区
325	包含層	サヌカイト淡緑	*	基部片側欠損	1.35	(1.4)	0.25	(0.5)	第37区
326	S P 486	サヌカイト	B-4	完形	2.45	1.5	0.5	2.4	第37区
327	包含層	サヌカイト	*	完形	2.0	1.55	0.3	1.0	第37区
328	包含層	サヌカイト	*	完形	1.75	1.5	0.45	0.9	第37区
329	S K 588	サヌカイト	C-1	完形	2.0	1.5	0.3	1.0	第38区
330	包含層	サヌカイト	*	完形	2.2	1.55	0.35	1.7	第38区
331	包含層	サヌカイト	*	完形	2.1	1.6	0.3	1.3	第38区
332	S D 368	サヌカイト	*	完形	2.05	1.45	0.35	1.1	第38区
333	S H 500	サヌカイト	C-2	完形	3.25	1.65	0.6	4.0	第38区
334	S H 440	サヌカイト	*	完形	2.6	1.4	0.5	2.1	第38区
335	S K 697	サヌカイト	*	完形	2.85	1.7	0.5	2.5	第38区
336	S D 368	サヌカイト淡緑	*	完形	3.15	1.7	0.6	3.0	第38区
337	包含層	サヌカイト	C-3	完形	2.0	1.6	0.35	1.5	第38区
338	包含層	石英	D	完形	3.85	1.2	0.6	9.5	第38区
339	包含層	サヌカイト	D	完形	4.0	1.2	0.65	4.2	第38区
340	S D 369	サヌカイト	尖頭器	先端・基部片側欠損	(5.8)	2.1	0.8	10.8	第38区
341	S H 370	サヌカイト	C-2?	未製品	3.1	1.5	0.7	4.4	第39区
342	S D 368	サヌカイト	C-2?	未製品	3.0	1.9	0.7	3.7	第39区
343	S D 369	サヌカイト	不明	未製品	2.6	1.5	0.3	0.9	第39区
344	包含層	サヌカイト	不明	未製品	3.5	2.4	0.6	5.7	第39区
345	包含層	サヌカイト	C-3?	未製品	2.8	1.9	0.5	2.7	第39区
346	S H 370	サヌカイト	不明	未製品	1.8	1.4	0.3	0.7	第39区
347	包含層	頁岩	折損品	未製品	2.2	2.2	0.6	3.2	第39区
348	S K 544	サヌカイト	C-3?	未製品	2.2	1.9	0.5	2.0	第39区
349	S H 370	サヌカイト	A類	未製品	2.2	1.7	0.5	1.6	第39区

石錐一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
350	S H 370	サヌカイト	無	4.2	3.0	0.8	5.8	第39図
351	S X 631	サヌカイト淡緑	無	2.9	1.8	0.4	2.0	第39図
352	包含層	サヌカイト淡緑	無	2.9	1.9	0.5	2.1	第39図
353	S X 619	サヌカイト	ツマミ	3.9	1.4	0.3	1.1	第39図
354	S H 373	サヌカイト	無	4.1	3.2	1.4	12.0	第39図
355	包含層	サヌカイト	未	3.1	2.0	0.6	3.1	第39図
356	包含層	サヌカイト	機能部	(3.6)	3.8	0.5	(8.2)	第39図
357	S H 370	サヌカイト	先端	(3.4)	1.7	0.4	(2.3)	第39図
358	S H 370	サヌカイト淡緑	無	3.2	1.6	0.6	2.3	第39図
359	S D 369	サヌカイト	機能部	(1.8)	1.8	0.4	(1.1)	第39図
360	S H 380	サヌカイト	無	3.4	1.6	0.6	3.3	第39図

石匙・削器・搔器一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	素材剥片	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
361	包含層	石匙	横長	サヌカイト	4.1	5.5	0.8	12.8	第40図
362	包含層	石匙	横長	サヌカイト	2.5	(2.6)	0.5	(3.0)	第40図
363	S D 369	削器	横長	サヌカイト	4.3	6.1	0.7	22.4	第40図
364	包含層	削器	横長	サヌカイト	2.7	4.0	0.6	5.3	第40図
365	包含層	削器	横長	サヌカイト	3.5	6.2	0.9	28.8	第40図
366	S H 370	削器	横長	サヌカイト淡緑	4.6	5.0	0.7	15.9	第40図
367	S H 370	削器	横長	サヌカイト淡緑	4.2	6.7	0.7	22.1	第40図
368	包含層	削器	縦長	サヌカイト	4.1	7.5	1.0	40.4	第40図
369	S H 520	削器	横長	サヌカイト	2.0	2.9	0.3	2.3	第40図
370	包含層	削器	横長	サヌカイト	2.7	6.1	0.6	13.1	第40図
371	S X 570	削器	幅広	サヌカイト	4.4	5.1	1.1	16.7	第40図
372	S K 697	削器	横長	サヌカイト	3.4	6.8	0.8	17.1	第40図
373	S D 368	削器	横長	サヌカイト	0.4	4.2	1.2	11.2	第40図
389	S H 370	削器	不明	サヌカイト	3.4	1.9	0.6	4.2	第42図
392	S P 364	搔器	縦長	サヌカイト	8.0	4.4	1.4	56.4	第42図

RF・UF一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	加工・使用部位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
374	SH370	サヌカイト	左側縁	3.1	2.3	0.5	3.5	第41図
375	SD369	サヌカイト	下辺	1.1	1.6	0.6	1.4	第41図
376	SD369	サヌカイト	右下端	2.1	1.6	0.2	0.9	第41図
377	包含層	サヌカイト	右側縁	2.8	1.7	0.7	3.2	第41図
378	SH370	サヌカイト淡緑	下辺	3.6	2.5	0.9	5.7	第41図
379	包含層	サヌカイト	左側下半	2.0	0.7	0.2	0.4	第41図
380	SP493	サヌカイト	右側縁	3.0	1.9	0.6	2.3	第41図
381	SK544	サヌカイト	周縁	1.8	2.1	0.6	2.4	第41図
382	包含層	サヌカイト	下辺	2.3	2.0	0.3	1.4	第41図
383	包含層	サヌカイト	下辺	2.0	2.7	0.4	2.1	第41図
384	SH370	サヌカイト	左側上半	3.2	2.2	0.7	4.7	第41図
385	SH370	サヌカイト	下辺	4.7	4.1	1.0	17.1	第41図
386	SD368	サヌカイト淡緑	右側縁	2.6	2.2	0.5	4.7	第41図
387	SH347	サヌカイト淡緑	下辺	2.4	2.7	1.0	6.1	第41図
388	SH370	サヌカイト	両側一部・下半	6.1	3.0	0.6	11.4	第41図
390	SD368	サヌカイト	右側一部	5.3	3.0	0.9	11.1	第42図
391	包含層	サヌカイト	右側縁	4.4	3.2	1.2	22.3	第42図

楔形石器一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	階段刻離	截断面	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
393	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.9	2.1	2.1	166	第43図
394	包含層	サヌカイト	短辺	有	4.0	2.3	1.4	208	第43図
395	S H 440	サヌカイト	短辺	有	2.5	1.4	0.9	43	第43図
396	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.9	2.0	1.5	11.6	第43図
397	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.0	2.0	1.5	10.2	第43図
398	包含層	サヌカイト	両端点状	有	1.8	0.8	0.7	1.2	第43図
399	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.1	1.1	0.8	3.4	第43図
400	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.9	1.5	0.8	4.0	第43図
401	包含層	サヌカイト	両端点状	有	3.0	1.2	0.8	2.9	第43図
402	S D 368	サヌカイト	端点・下辺	有	3.4	2.2	1.0	6.9	第43図
403	S H 500	サヌカイト	上端・点状	有	3.0	2.6	0.9	6.0	第43図
404	S H 370	サヌカイト	正方2辺	有	1.3	1.4	0.4	2.7	第44図
405	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	2.6	2.2	0.6	4.2	第44図
406	S D 368	サヌカイト	正方4辺	有	2.0	2.4	1.0	4.6	第44図
407	S H 440	サヌカイト	正方2辺	有	2.8	2.5	0.7	6.9	第44図
408	S D 368	サヌカイト	正方2辺	無	3.3	3.3	0.9	12.8	第44図
409	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	3.7	3.4	1.2	15.4	第44図
410	包含層	サヌカイト	長方2辺	有	2.8	2.4	1.0	9.9	第44図
411	S D 368	サヌカイト	正方2辺	有	2.9	3.3	0.6	6.2	第44図
412	S H 440	サヌカイト	正方2辺	無	2.9	2.5	1.0	6.9	第44図
413	包含層	サヌカイト	正方2辺	有	2.9	3.4	0.9	11.0	第44図
414	包含層	サヌカイト	長方上辺	有	2.1	2.5	0.7	4.4	第44図
415	包含層	サヌカイト	短辺	有	3.4	2.5	1.3	13.3	第44図
427	包含層	サヌカイト	上端・下辺	有	2.6	1.3	0.7	2.4	第45図
429	S H 440	サヌカイト	上端・点状	有	3.1	1.4	0.7	3.4	第45図
430	S H 440	サヌカイト	上端・点状	有	5.2	2.7	2.0	26.1	第45図
431	S D 369	サヌカイト	正方3辺	有	4.6	4.1	2.0	42.3	第45図

楔形石器剥片・碎片一覧表

遺物番号	包含層・遺構	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
416	包含層	サヌカイト	1.9	1.1	0.5	1.0	第44図
417	S D 368	サヌカイト	2.4	1.4	0.7	2.4	第44図
418	包含層	サヌカイト淡緑	2.5	1.6	0.7	3.0	第44図
419	包含層	サヌカイト淡緑	3.2	1.0	0.4	1.4	第44図
420	S D 368	サヌカイト	4.3	1.3	1.1	6.8	第45図
421	包含層	サヌカイト淡緑	4.4	1.5	0.9	6.6	第45図
422	包含層	サヌカイト	2.8	1.9	0.7	2.3	第45図
423	S H 380	サヌカイト	2.5	1.1	0.6	1.7	第45図
424	S H 440	サヌカイト	4.5	1.2	1.2	8.6	第45図
425	包含層	サヌカイト	3.6	1.8	0.6	3.3	第45図
426	S D 368	サヌカイト	3.6	1.2	0.5	1.2	第45図
428	S H 347	サヌカイト	2.7	1.6	0.9	4.0	第45図
432	包含層	サヌカイト	1.7	0.6	0.2	0.2	第45図
433	包含層	サヌカイト	3.2	1.0	0.4	1.4	第45図

石芥一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿図番号
462	S K 544	磨芥	有	(9.7)	(5.2)	(2.6)	(214.8)	第51図
463	包含層	磨芥	無	9.8	5.0	2.6	198.8	第51図
464	S H 500	磨芥	有	(4.3)	(4.1)	(2.0)	(54.1)	第51図
510	S X 390	打芥片	有	(10.3)	5.4	1.0	(105.0)	第56図
511	包含層	打芥片	有	(10.8)	(4.7)	(1.3)	(84.0)	第56図
514	S H 384	打芥	有	16.8	6.8	1.8	330.0	第56図

敲石類一覧表

遺物番号	包含層・遺構	形態分類	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿入番号
465	S X 570	I b	無	12.1	11.8	9.3	1830	第51図
466	S H 440	I d	有	(9.65)	9.95	4.4	(595.0)	第51図
467	S H 580	I a	無	8.6	7.7	5.2	550	第51図
468	包含層	I b	無	10.25	6.5	4.2	455	第51図
469	S K 544	I d	有	(5.4)	(8.3)	3.65	(193.8)	第52図
470	S D 369	I b	有	9.7	5.0	5.55	380	第52図
471	包含層	I b	無	8.05	6.95	4.3	340	第52図
472	包含層	I a	有	(5.95)	(5.05)	(2.15)	(80.8)	第52図
473	包含層	I b	有	(7.15)	7.05	3.75	(274.9)	第52図
474	S K 697-1	I d	有	(5.7)	(6.9)	4.4	(243.2)	第52図
475	S D 368	I b	有	(6.0)	(7.1)	5.2	(32)	第52図
476	包含層	I a	有	(12.5)	9.8	6.3	(110)	第53図
477	S H 370	IV	無	7.6	5.3	3.4	193.7	第53図
478	包含層	III a	有	4.2	3.45	(2.3)	(42.8)	第53図
479	包含層	I d	有	(7.2)	(6.8)	(3.9)	(204.2)	第53図
480	包含層	III b	無	5.4	5.5	1.75	69.4	第53図
481	包含層	III a	無	3.95	3.95	3.05	71	第53図
482	S H 370	II b	有	(6.5)	(4.8)	4.4	192.1	第53図
483	包含層	III a	無	5.0	4.75	4.4	165.2	第53図
484	包含層	II b	有	(13.45)	(7.75)	3.2	570	第53図
485	包含層	III b	有	(9.55)	(6.4)	3.25	260	第53図
486	S H 550	II b	有	(5.3)	9.0	5.0	(340.0)	第54図
487	S D 368	III b	無	4.0	3.9	2.9	60.5	第54図
488	包含層	IV	有	8.1	(6.7)	4.7	(365.0)	第54図
489	包含層	III b	有	(11.5)	(5.5)	(4.0)	(110.0)	第54図
490	S D 369	III b	有	(6.3)	(6.2)	(5.3)	(244.4)	第54図
491	S K 544	III b	有	(6.6)	(7.8)	(5.3)	(355.0)	第54図
492	S H 370	III b	無	10.2	6.4	4.4	420.0	第54図
493	包含層	II a	無	9.7	7.0	5.0	460.0	第54図
494	包含層	III b	有	(8.2)	5.5	2.4	(132.6)	第54図
496	S D 368	III b	有	(7.3)	6.0	5.8	(350.0)	第55図
497	S D 368	I c	無	10.3	9.0	5.3	605.0	第55図
498	包含層	I b	無	9.2	7.7	4.3	445.0	第55図
499	S D 369	IV	有	(6.7)	(2.8)	(1.9)	(40.0)	第55図
500	S H 347	IV	有	(5.6)	3.7	1.6	(41.6)	第55図

台石・石皿一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	破損	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿入番号
501	包含層	台石	有	(7.5)	(7.2)	4.5	(45.0)	第55図
502	包含層	台石	有	(5.5)	(7.5)	(7.7)	(54.5)	第55図
503	S K 506	台石	有	(10.5)	(8.9)	(6.6)	(84.5)	第55図
504	S D 436	台石	有	(13.3)	(11.1)	(4.1)	(69.5)	第55図
505	包含層	台石	無	19.1	14.5	8.2	2860	第56図
506	包含層	石皿	有	(21.8)	(17.5)	6.9	(129.5)	第56図
507	包含層	台石	有	(8.5)	(7.8)	5.8	(43.5)	第56図
508	包含層	台石	有	(17.1)	(5.2)	(4.4)	(80.0)	第56図

その他の礫石器・礫一覧表

遺物番号	包含層・遺構	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	挿入番号
509	包含層	石錘	(10.1)	8.4	2.8	(28.2)	第56図
495	S K 544	礫	5.8	4.5	2.3	89.8	第56図
512	包含層	礫	(3.6)	(7.1)	(4.2)	(150.3)	第56図
515	包含層	礫	(7.8)	(7.1)	(6.1)	(40.0)	第56図
513	S D 369	砥石	(3.6)	3.8	3.6	(140.7)	第56図

4. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20年度発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画された京都第二外環状道路敷設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施したものである。道路は長岡京市域では長岡京市南部を東西に流れる小泉川に沿って山間部に至るルートが予定されている。このルートは桓武天皇によって造営された長岡京跡城西南部に当たる地域を横切る。

小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが本来は大きく蛇行しながら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も指摘できた。発掘調査の必要な箇所を特定することを目的に、平成15年から試掘調査を先行して、調査可能な地域から順次試掘調査を行うと共に、面的な調査が必要な地域には発掘調査を実施してきた(岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008)。

調査対象地域は、長岡京市調子地区から同奥海印寺地区までと広範囲にわたり、15地点を対象に実施した。これらの地点は長岡京跡のほか友岡遺跡・伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡・西山田遺跡・奥海印寺遺跡・鈴谷窪隣接地にも該当する。本報告書は長岡京跡右京第937次・947次・956次・957次調査に関するものである。平成20年度には第946次調査(調子地区)も実施したが、21年度に実施した周辺調査とあわせて平成22年度に報告する予定である。

現地調査は調査第2課調査第2係長森 正、主任調査員松井忠春・戸原和人・竹原一彦・中川和哉・森島康雄、専門調査員竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹・岡崎研一、主査調査員柴 暁彦、調査員高野陽子・村田弘が担当した。本報告書は戸原・中川・石尾・黒坪・岡崎・村田が執筆し、岡崎が取りまとめを行った。文資については文末に明示した。本報告書で使用した国土座標は現地記録も含め日本測地系の第VI座標系を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。現地調査、報告に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターを始め関係機関、地元自治会、近隣住民の方々の指導と協力をいただいた。記してお礼申し上げます。

2. 自然と歴史(第1図)

今回の調査地は、京都盆地西南部に位置する長岡京市の南部にあたる地域にある。西側には、京都盆地を形成する山が迫り、この山は丹波方面へと連なる。この山塊は丹波帯と呼ばれる古生層からなりたっており、チャートや粘板岩などが分布している。この山塊に源を発する小泉川左岸に遺跡はある。現在は河川改修によって直線状に改修されているが、本来は大きく蛇行してお

付表2 平成20年度第二外環状道路建設に伴う調査一覧表

次数	番号	地区名	所在地	調査期間	調査面積	備考
第937次	1	上内田地区 (7ANOKD-8)	長岡京市下海印寺上内田	H20.06.17 ～10.08	1,200㎡	本掘
第946次	2	調子地区 (7ANRHK-7)	長岡京市調子2丁目	H20.06.17 ～H21.02.17	3,220㎡	本掘 ※次年度報告
第947次	3	伊賀寺地区 (7ANOOD-7)	長岡京市下海印寺下内田	H20.07.28 ～10.10	630㎡	本掘
	4	樽井地区 (7ANOTI-2)	長岡京市下海印寺樽井	H20.07.08 ～08.12	300㎡	
	5	下内田地区 (7ANOOD-7)	長岡京市下海印寺下内田	H20.08.19 ～10.03	150㎡	
	6	方丸地区 (7ANOHR-10)	長岡京市下海印寺方丸			試掘
	7	菩提寺地区 (7ANOBZ-2)	長岡京市下海印寺菩提寺	H20.09.17 ～10.30	150㎡	
	8	駿河田地区 (7ANPSG-2)	長岡京市奥海印寺駿河田			
第956次	9	駿河田地区 (7ANPSG-3)	長岡京市奥海印寺駿河田	H20.11.19 ～12.04	30㎡	
	10	尾流・方丸地区 (7ANOOR-7) (7ANOHR-11)	長岡京市下海印寺尾流・方丸	H20.12.01 ～12.18	80㎡	
	11	西条地区 (7ANOSJ-3)	長岡京市下海印寺西条	H21.01.07 ～02.26	330㎡	試掘
	12	荒堀地区 (7ANPAR-3)	長岡京市奥海印寺荒堀	H21.01.14 ～02.04	190㎡	
	13	高山地区 (7ANPTY-1) (7ANPSH-1)	長岡京市奥海印寺高山	H21.02.09 ～02.20	110㎡	
第957次	14	西条地区 (7ANOSJ-4)	長岡京市下海印寺西条	H20.11.25 ～H21.01.20	240㎡	
	15	尾流地区 (7ANOOR-8)	長岡京市下海印寺尾流	H20.11.26 ～H21.02.26	820㎡	本掘

り、それに対応するように川の両側に氾濫原も大きく広がっている。川は長岡京市域から大山崎町を経て、大阪湾に注ぐ淀川と合流する。

小泉川流域では後期旧石器時代から遺跡が認められる。南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期に属するサヌカイト製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。この石器には、接合資料も認められ、この地域では珍しく本来の包含層が残されていた。

縄文時代には小泉川流域で多くの遺跡が発見されている。最も古い時期の土器は、下海印寺遺跡から発見された早期のポジティブな押型文土器片である。早期に属するチャート製のわゆるトロトロ石器が附遺跡から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から北白川下層式の縄文土器が住居跡に伴って検出されている。

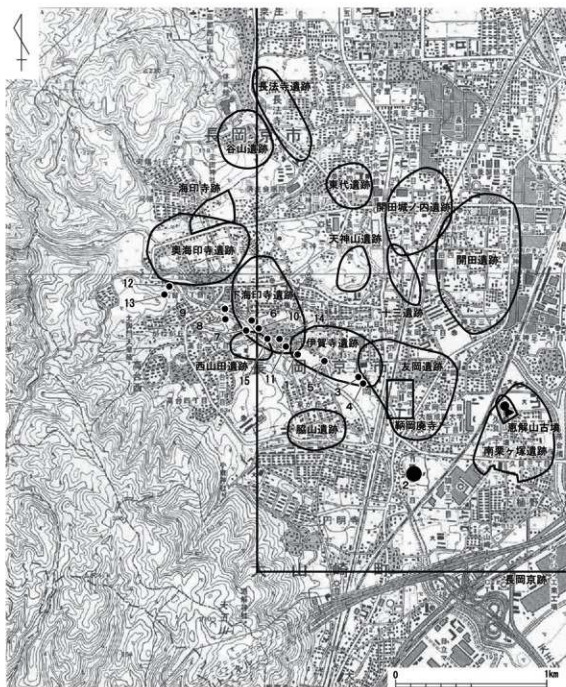
中期には伊賀寺遺跡から400m離れた友岡遺跡(右京第325次調査地点)から、段丘斜面に投棄された状態で、船元式土器が大量に出土した。中期末の北白川C式の時期には、伊賀寺遺跡で6棟の竪穴式住居および遺物が検出されている。また、大山崎町脇山遺跡(高野1997)でも北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期初頭の中津式土器は伊賀寺遺跡で、後期緑帯文期は伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡で遺構・遺物が発見されている。元住吉山式土器を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認されている。ま

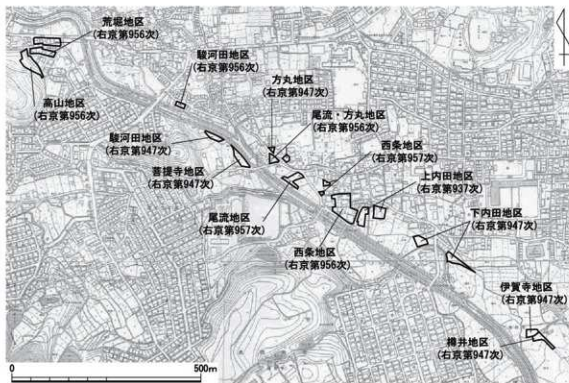
た、同時期の墓壙も発見された。そのうち2か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器が出土している。

縄文時代晩期に入ると、小泉川下流の大山崎町下植野遺跡において突帯文の壘棺が検出されている。

弥生時代前期の遺構は、小泉川流域では発見されていないが、碓遺跡で土器が出土している。弥生時代中期前葉には南栗ヶ塚遺跡や下植野南遺跡で方形周溝墓群が発見されている。両遺跡とも石製武器が出土した主体部が確認された。中期後葉の土器は碓遺跡から発見されている。弥生



第1図 調査地及び主要遺跡分布図(数字は付表2の調査地点)



第2図 調査地位置図

時代末の竪穴式住居跡は伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡で発見されている。右京第902次調査のものはベット状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡である。

古墳時代には、下流に境野1号墳と呼ばれる全長約62mの前方後円墳が存在している。古墳時代前期に築造され、段築と埴輪列が確認されている。古墳時代後期に入ると多くの竪穴式住居跡が伊賀寺遺跡内の随所で確認されている。同じように下植野南遺跡においても5世紀後半から6世紀にかけての竪穴式住居跡が多数発見されている。

飛鳥時代の遺物が出土する額岡^{ハカノ}麿寺の存在が古くから知られていた。正確な位置は確認されていないが、飛鳥時代から長岡京期に至る瓦が発見されている。出土瓦には「田辺^{タノヘ}史牟^{シム}也毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

奈良時代の建物としては、掘立柱建物などが伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡、下植野南遺跡などで発見されている。

今回の調査地域は、長岡京跡右京域の西南部にあたる。長岡京は延暦3(784)年桓武天皇によって平城京から遷都され、延暦13(794)年に平安京に移るまで都として機能していた。長岡京の造営は10年と短く、七条より南の地域で明確な条坊は発見されていない

(中川和哉)

(1)長岡京跡右京第937次調査(7ANOKD-8・上内田地区)・伊賀寺遺跡

1. はじめに

調査地は、長岡京跡右京七条四坊十二町に相当する。下海印寺西条の集落付近が高台の地形を呈しており、その縁辺部にあたる。縄文時代から近世にかけての集落遺跡である伊賀寺遺跡にも含まれる。

この調査は、平成19年度に行われた右京第901次調査・右京第902・928次調査および右京第926次調査(試掘調査)の成果を受け、実施したものである。右京第902・928次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡が見つかり、右京第901・926次調査では、古墳時代初頭～後期の流路跡や、古墳時代中頃～後期にかけての土器が出土する土坑を検出している。このような周辺の調査成果から、今回の調査地には古墳時代の流路の続きや竪穴式住居跡などが存在すると考えられた。調査地は、水路をはさんで2か所に設定した。右京第926次調査地の西側を上内田-1地区とし、右京第928次調査地の北側を上内田-2地区とした。遺構名は、地区ごとに通し番号を付し、地区・遺構番号として4桁で表した。

2. 調査概要(第3・4図)

基本層位は、厚さ0.9m前後の盛土の下が褐灰色砂質土や灰色礫混じり砂質土が0.8mほど堆積しており、これらを除去するとオリブ灰色粘砂質土となる。オリブ灰色粘砂質土の上面が中世の遺構面となる。その標高は、32.1mである。オリブ灰色粘砂質土には、長岡京期～平安時代後期にかけての土器片を包含する。この層を除去すると古墳時代の遺構面となる。

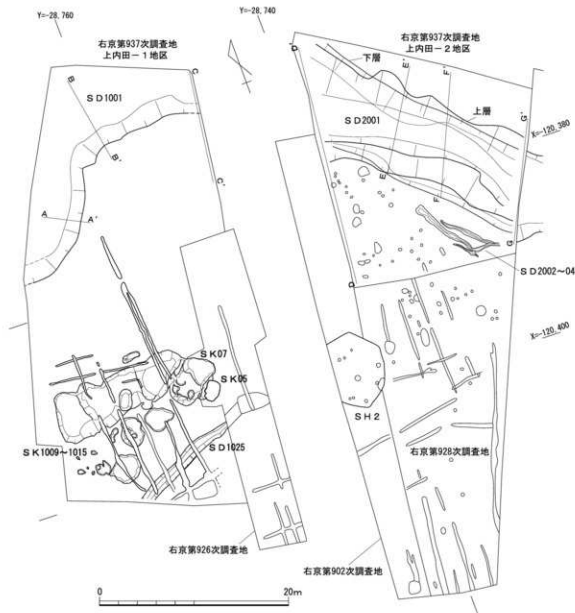
1)縄文時代 上内田-2地区で検出した流路S D2001を大きく断ち割ったところ、流路のベース面である黄褐色砂礫土内から縄文土器片が数点出土した(第5図)。黄褐色砂礫土層は、流路跡S D2001のベースとなることから、弥生時代以前の洪水堆積層と判断され、付近に遺構が存在するとは考えがたい。

2)弥生時代後期末～古墳時代 この時期の遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路跡(S D2001)、古墳時代中期後半～後期の土坑群(S K1009～1015)・流路跡(S D1001・2001・1025)を検出した。隣接する右京第902・928次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡(S H2)を検出していることから、今回の調査地においても住居跡の存在を想定したが、建物跡などの検出には至らなかった。

土坑S K1009～1015(第8図) 1地区南側から、東西方向に長い不整形な土坑S K1009とその周辺部から小規模な土坑群S K1010～1015を検出した。土坑S K1009の東端は、右京第



第3図 上内田地区
調査トレンチ配置図



第4図 上内田地区遺構配置図

926次調査時に土坑 S K 05・07として確認しており、今回これを含めて図示した。その規模は、東西17.5m、南北6m、深さ0.1~0.5mを測る。土坑床面は平坦でない。埋土はオリブ灰色粘質土で、これらの土坑は、湿地状の堆積環境にあったとみられる。土坑底や下層から、完形品を含む須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器直口壺・高杯などが出土した(第11・12図)。これらの遺物から、古墳時代中期後半~後期にかけての土坑群と考えられる。遺構の性格については、不整形な形状やベース面が青灰色粘土であることから、粘土採掘坑の可能性が高いと思われる。ただし、土師器壺などが正置した状況で出土していることを考えると、水辺の祭祀に関わる遺構である可能性も否定できない。また土坑群 S K 1010~1015は、土坑 S K 1009付近に集中し、埋土も灰色系の粘質土と同色であり、深さも0.1~0.3mと土坑 S K 1009とほぼ同じであった。このことから、これらの土坑群は元来1基の土坑であったが、後世に大規模な削平を受け、部分的に深く掘り込

まれた箇所が残り、数基の土坑が集合したように検出した可能性があると考える。

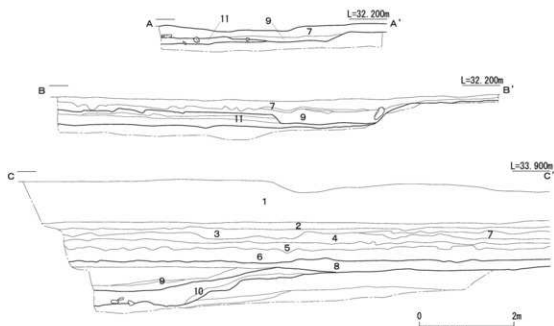
流路 S D 1001 (第4・6図)

調査地北西側から北部にかけて「L」字状に屈曲する流路を検出した。規模は、最大幅10m、深さ0.4~0.8mを測る。流路に沿う形で西から北部にかけてわ

ずかな高台が巡り、その裾部を東流する。流路の埋土は、大きく2層に分かれた。調査地北側では、上層に古墳時代中期後半~後期の土器片を包含するオリブ黒色シルトが、下層には植物遺体を含む黒色シルトが堆積していた。下層に、遺物は包含しない。流路屈曲部より上流である調査地北西側では、上層にオリブ黒色シルトが薄く堆積し、わずかに古墳時代中期後半以降の土器片が出土した。その下層は、西側の高台からの流れ込みによるためか、オリブ黄色砂土が堆積し、中から石廂丁(49)1点と木製の編み錘(48)1点が流れ込んだ状態で出土した。この流路 S D 1001が構築された時期は不明であるが、流路として機能していた時期は古墳時代中期後半である。石廂丁などの遺物の出土は、西側の高台に遺構の存在を示唆するものである。



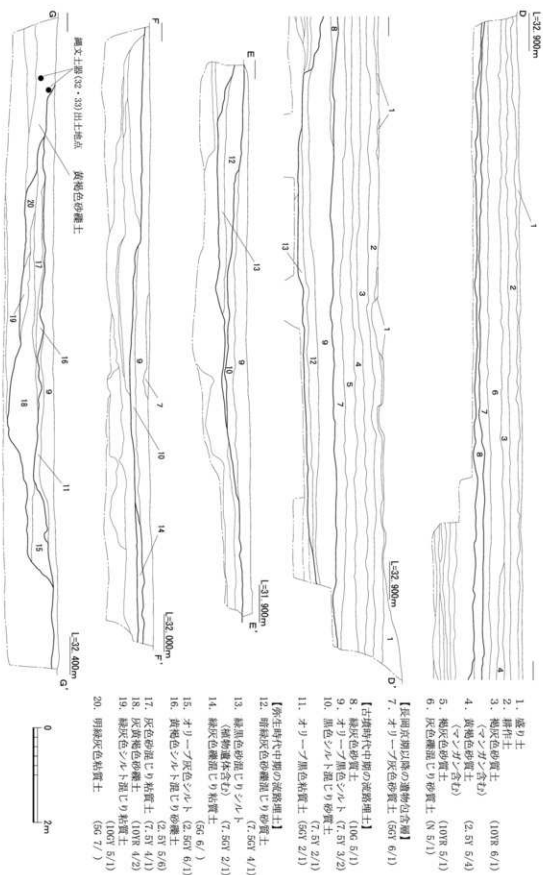
第5図 上内田地区出土縄文土器

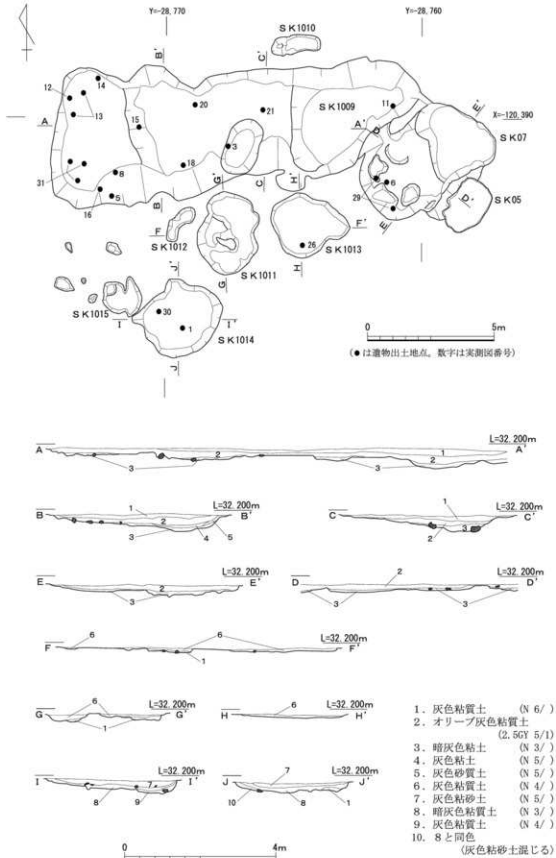


- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1. 盛り土 | 【長岡京期以降の遺物包含層】 |
| 2. 耕作土 | 8. オリブ灰色粘砂質土(礫混入)(5GY 6/1) |
| 3. 黄灰色粘砂質土(マンガン含む)(7.5YR 5/1) | 【古墳時代後期の流路埋土】 |
| 4. 褐灰色砂質土(マンガン含む)(10YR 5/1) | 9. オリブ黒色シルト(7.5YR 3/2) |
| 5. 褐灰色砂質土(10YR 5/1) | 【古墳時代中期の流路埋土】 |
| 6. 灰色礫混じり砂質土(10YR 5/1) | 10. 黒色シルト(植物遺体含む)(2.5GY 2/1) |
| 7. 明褐灰色砂質土(マンガン含む)(10YR 6/1) | 11. オリブ黄色砂土(5Y 6/3) |

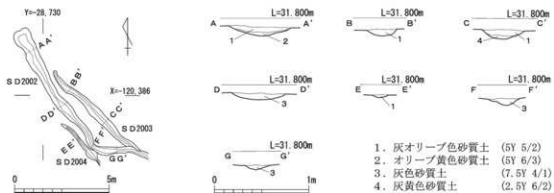
第6図 上内田-1地区流路 S D 1001土層断面図

第7図 上内田-2地区流路S.D2001土層断面図





第8図 上内田-1地区土坑S K 05・07・1009~1015実測図



第9図 上内田-2地区溝S D 2002～2004実測図

流路S D 2001(第4・7図) 調査地北側で東流する流路を検出した。右京第901次調査で検出した流路に続く。断面観察や出土遺物などから、大きく2時期に分かれた。上層は、古墳時代中期～後期の流路で、下層は弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路である。上層流路の規模は、幅7～10m、深さ0.3mを測る。下層流路の規模は、幅8m、深さ0.4～0.6mを測る。上層で検出した流路は、1地区で検出した流路S D 1001の続きである。下層の流路は、1地区では認められず、調査地北北西の方から流れていたものと考ええる。

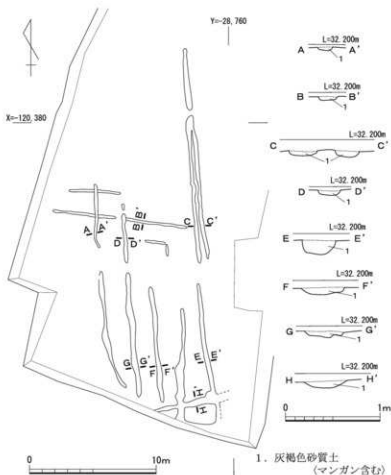
3) 時期不明

溝S D 2002～2004・柱穴群(第9図) 出土遺物がなく時期不明であるが、長岡京期～平安時代後期の土器片が出土するオリーブ灰色粘砂質土下から検出し、古墳時代の遺構と考える。

4) 中世

この時期の遺構としては、1地区から中世の素掘り溝群を検出した。

素掘り溝群(第10図) オリーブ灰色粘砂質土を掘り込んで10数条の溝を検出した。その規模は、幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.15mを測る。耕作に伴う溝と推定される。溝内から、瓦器片が出土している。

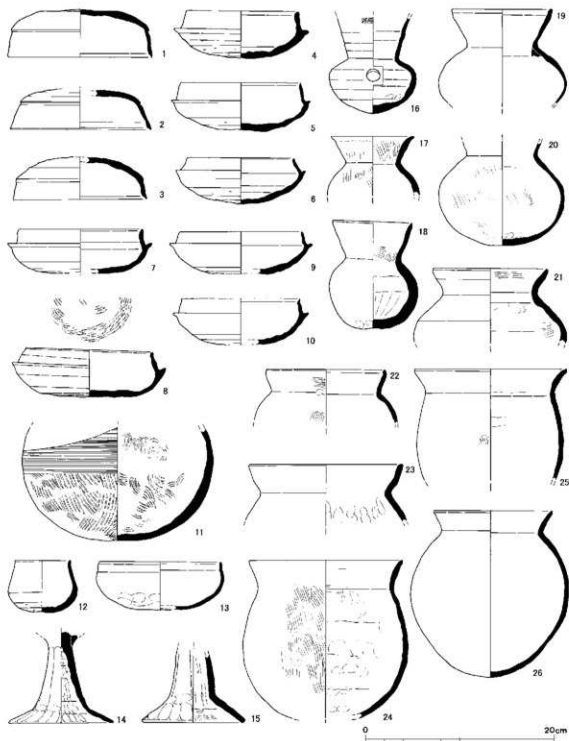


第10図 上内田-1地区中世耕作溝群実測図

3. 出土遺物

上内田地区出土遺物は、第11～14図に掲載した。

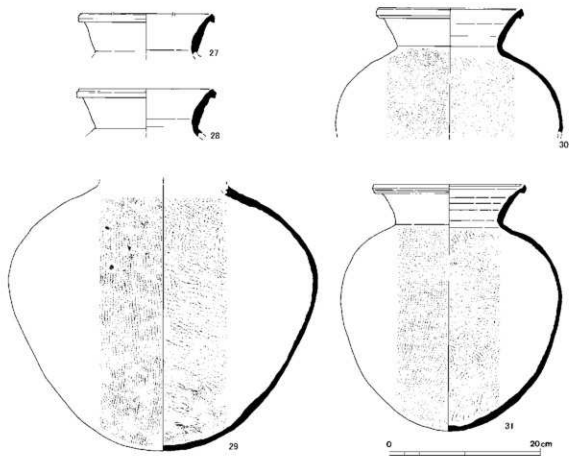
土坑 S K 1009 から出土した遺物は、2～9・11～16・18・20・21・29・31である。土坑 S K 1011 出土遺物は24、土坑 S K 1012 出土遺物は25である。土坑 S K 1013 出土遺物は26、土坑 S K



第11図 上内田地区出土遺物実測図(1)

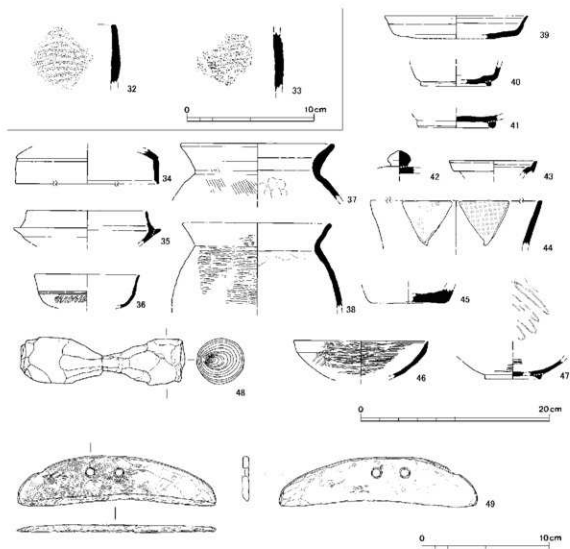
1014出土遺物は1・10・17・19・23・30である。土坑SK1015出土遺物は27、土坑SK1016出土遺物は28、土坑SK1017出土遺物は22である。溝SD1001出土遺物は34~45・48・49で、溝SD2001出土遺物は46・47である。溝SD2001のベース面である黄褐色砂礫土内から出土した縄文土器片は、32・33である。西条-1地区の遺物包含層であるオリブ灰色粘砂質土出土遺物は、50~68である。

1~3は、須恵器杯蓋である。1・2は、平坦な天井部と下方を向く口縁部からなる。3は丸みを帯びた天井部と下方を向く口縁部からなる。いずれも端部は外下方に尖る。口縁基部に凹線が1条巡る。4~10は、須恵器杯身である。わずかに丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸い。底部外面はヘラ削りし、そのほかはロクロナデ調整する。8の底部内面には、タタキの痕跡が輪状に残る。11は、須恵器壺である。底部から体部にかけて球形を呈す。内外面をタタキで調整し、体部外面にその後カキメを施す。12は、土師器鉢である。小型品である。底部はヘラ削りする。13は、土師器杯である。浅い体部と上方に立ち上がる口縁部からなる。摩滅しており調整不明である。体部下半外面に指による圧痕が残る。14・15は、土師器高杯の脚部である。内外面をヘラ状工具や指によるナデ整形する。16は須恵器甗である。口縁部に1条の波状文が巡る。17~21は、土師器壺である。球形の体部と外上方に立ち上がる口縁部からなる長頸壺と短く外上方に立ち上がる短頸壺がある。内外面を縦方向のハケ調整する。22~

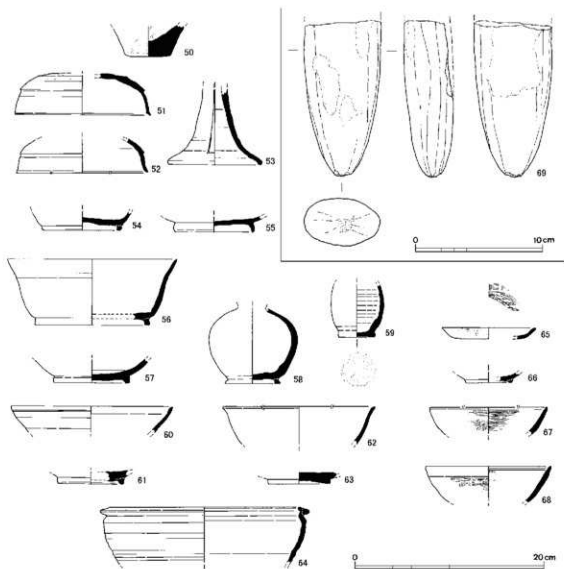


第12図 上内田地区出土遺物実測図(2)

26は、土師器甕である。口縁部が屈曲して立ち上がるものや外反するものがある。体部外面は縦方向のハケ調整をおこない、内面には指圧痕が残る。27～31は、須恵器甕である。体部肩部がやや張り、卵形を呈す。口縁端部は上下方に尖る。34は、須恵器杯蓋である。口縁基部に1条の凹線が巡る。35は、須恵器杯身である。口縁部は内上方に立ち上がる。36は、無蓋高杯の杯部である。体部半ばに1条の凹線が巡り、その下に波状文を施す。37は、土師器甕である。体部外面は縦方向のハケ調整を施し、内面はナデ仕上げする。38は、土師器甕である。溝S D1001出土遺物の中で、時期の古いもので、庄内併行期である。外面はタタキを施し、内面は摩滅しており調整不明である。39は、須恵器皿である。平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。40・41は、輪状の高台を貼り付けた須恵器杯である。42は、須恵器蓋の擬宝珠つまみである。43は、須恵器壺の口縁部である。44は、須恵器杯で、内面全面と外面の一部に漆が付着する。45は、須恵器鉢の底部である。46・47は、瓦器碗である。46は、内外面に密に暗文を施す。47は、底部内面に千鳥に暗文を施し、断面三角形の低い高台が付く。48は、木製の編み錘である。49は、サヌカ



第13図 上内田地区出土遺物実測図(3)



第14図 上内田地区出土遺物実測図(4)

イト製の石甕丁である。半月形直線刃形を呈す。50は、弥生土器壺か甕の底部である。体部外面はタタキ、内面はハケ調整する。51・52は、須恵器杯蓋である。口縁基部に1条の凹線が巡る。53は、長脚の須恵器高杯である。2か所に一段透かしを設ける。54～56は、須恵器杯である。55は、高さのある高台が付く。56は、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。ロクロナデ整形する。58は、輪状高台の付く須恵器壺である。体部は球形を呈す。59は、須恵器瓶子である。57は、須恵器碗である。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。60～63は、緑釉陶器碗である。60・62は濃緑色の釉薬が、61・63は淡緑色の釉薬が内外面に施される。64は、須恵器鉢である。内湾しながら立ち上がる体部と内上方に尖る口縁部からなる。体部はミズビキ整形し、口縁部はナデ仕上げする。65は、瓦質の皿である。内外面に暗文がみられる。66は、瓦器碗の底部である。67・68は、瓦器碗である。口縁部内面に1条の凹線が巡る。内外面に密に暗文を施す。

4. 小結

調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の流路跡と、古墳時代中期後半～後期の流路跡と、同時期の土坑群などを検出した。長岡京跡に伴う遺構は検出しなかった。弥生時代末から古墳時代初頭の流路は、1地区の北北西から2地区を通り、右京第901次調査で検出した流路に続く。この時期の遺構としては多角形の竪穴式住居跡SH2がある。1地区から他に住居跡が見つからなかったのは、西側の高台から竪穴式住居跡SH2付近にかけて緩やかに傾斜していたが、後世に削平されたためと思われる。この流路は、古墳時代中期～後期になると現小泉川から地形に沿うように蛇行して流れるようになる。土坑や流路内埋土から古墳時代中期後半～後期の土器・土器片が出土したことは、北西部の台地上を中心に古墳時代中期後半以降の集落が展開すると思われる。また、2地区の洪水堆積層からの縄文土器片出土は、下海印寺遺跡に近いことを考えると注目される。

(岡崎研一)

(2)長岡京跡右京第947次調査(7ANOOD-7・伊賀寺地区)・伊賀寺遺跡

1. はじめに

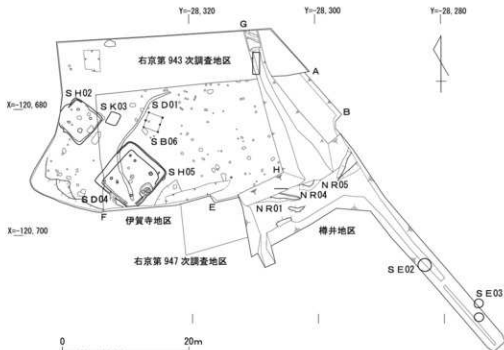
調査地は、長岡京跡右京八条三坊十町にあたる。また、伊賀寺遺跡の南東端に位置する。小泉川にはほぼ平行して北西から南東方向に延びる丘陵の西端部分にあたる場所で、小泉川氾濫源(榎井地区)と約2mの比高差がある。調査地の北側に丘陵の崖面が想定されている。右京第943次調査では、縄文時代の住居跡や火葬骨を埋葬した土壇、弥生時代終末期の竪穴式住居跡などが検出されている。今回の調査地は、右京第943次調査地に隣接する。

2. 調査概要(第15・16図)

伊賀寺地区は、右京第943次調査の調査成果を参考に、灰褐色・紫暗褐色土の遺物包含層まで重機により掘削した後、人力で掘削作業を行った。また、東部で右京第943次調査地を含む南北方向の断ち割りを実施した。調査成果として、右京第943次調査で検出された弥生時代終末期(庄内併行期)の竪穴式住居跡(SH02)の東隅、同時期の竪穴式住居跡(SH05)、時期不明の土坑(SK03)、竪穴式住居跡SH05の上面を通る中世の溝(SD01)、中世以降の掘立柱建物跡や柱穴などを検出した。以下に主な検出遺構について記述する。遺構番号は右京第943次調査地から連続する竪穴式住居跡SH02・SH05はそのまま使用し、それ以外は新たに遺構番



第15図 伊賀寺地区・榎井地区
調査トレンチ配置図



第16図 伊賀寺地区・樽井地区遺構配置図

号をつけた。

1) 弥生時代の遺構

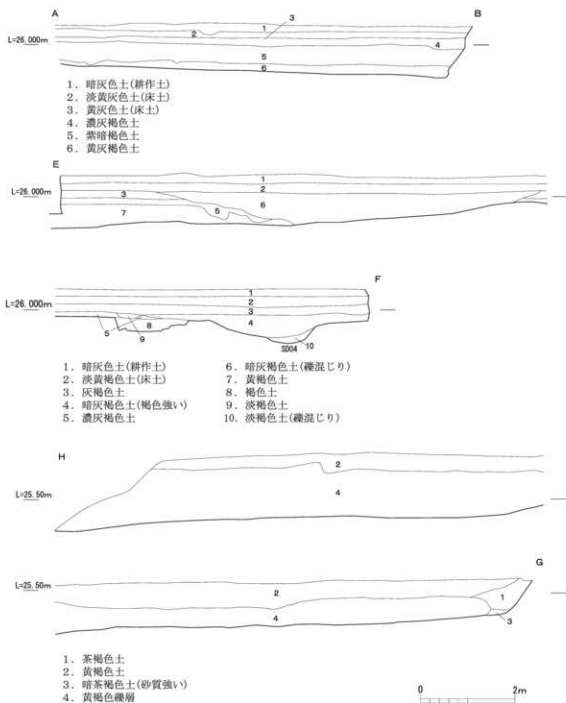
竪穴式住居跡SH05 (第18図) 検出面からの深さ約0.3m、一辺約8.0mの方形住居跡である。中軸線が約45度西に振れている。南東辺の中央部に2.0×1.5mの袋状土坑があり、南東以外の辺に1.0～1.2mのベット状遺構が付き、明瞭でない部分があるが周壁溝が廻る。中央部に被熱を受けた炉跡と推定される場所が2か所あり、1か所は直径約0.6m、深さ約0.2mを測り、焼土が混入していた。隣接するもう1か所は約0.5mの方形で深さ約5cmを測る。柱穴は深いもの4か所とやや浅いもの2か所、合計6か所を検出した。南西辺側でベット状遺構の整地土の下層から周壁溝が確認できたので、竪穴式住居跡SH05が6.5×7.0mの住居を拡張したものであることが判明した。遺物は床面直上から出土したものが大半であるが、住居跡がほぼ埋まった後に混入したと推定されるものがあった。

竪穴式住居跡SH02 (第16図) 右京第943次調査で検出された住居跡の東隅を確認した。検出面からの深さ約0.3mを測り、周壁溝が廻る。

2) 中世の遺構

溝SD01 (第16図) 竪穴式住居跡SH05の上面で検出した、弧を描くように北東から南西方向にはしる素掘り溝である。埋土は淡褐色土で幅0.3～0.4mで、深さ5cm前後を測る。13世紀以降の土師器皿の細片が若干出土した。

溝SD04 (第16図) 竪穴式住居跡SH05の南西部上層で検出した。埋土は礫を含む淡褐色土で、幅0.4～0.7m、深さ10cm前後の素掘り溝である。北から南に傾斜している。若干の土師器皿、須恵器などの細片が出土した。

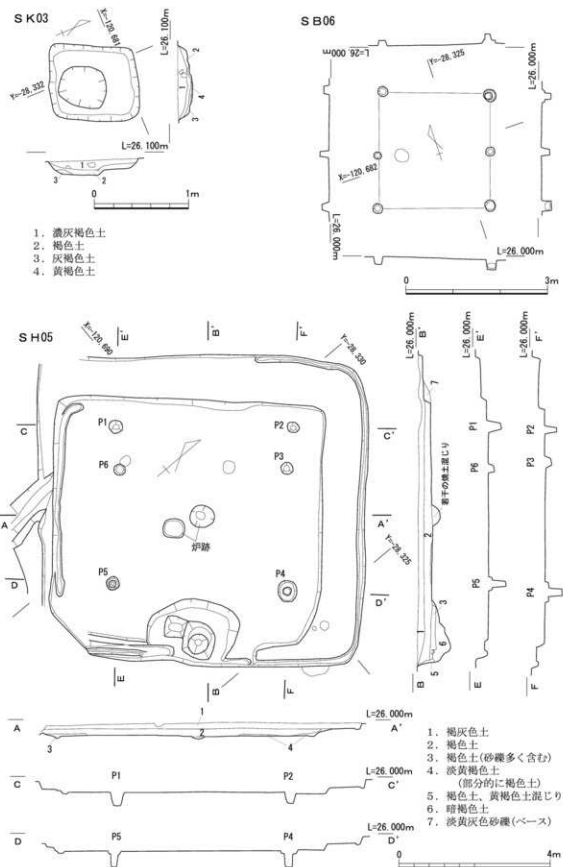


第17図 伊賀寺地区土層断面図

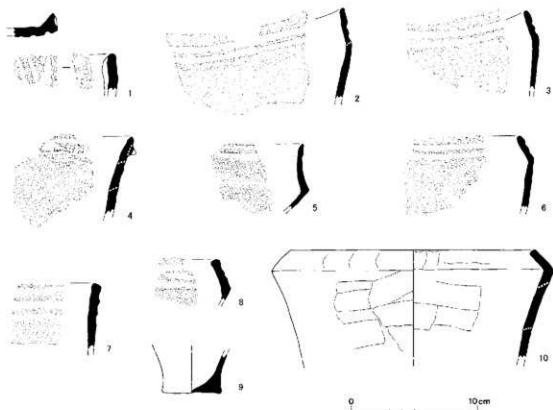
掘立柱建物跡 S B06 (第18図) 竪穴式住居跡 S H05の北方で検出した、円形柱穴が並ぶ掘立柱建物跡である。柱間は桁行約2.5mで、梁間の中間に柱を持つ、2×1間の建物跡に復元できる。柱穴から13世紀以降の土師器皿の細片が出土した。

3) 時期不明の遺構

土坑 S K03 (第18図) 竪穴式住居跡 S H02の東で検出した、0.8×1.0mの方形土坑で南部が窪み、深さ0.2mを測る。時期のわかる遺物は出土していない。(石尾政信)



第18図 土坑 S K03・竪穴式住居跡 S H05・掘立柱建物跡 S B06実測図



第19図 伊賀寺地区出土遺物実測図(1)

3. 出土遺物(第19～20図)

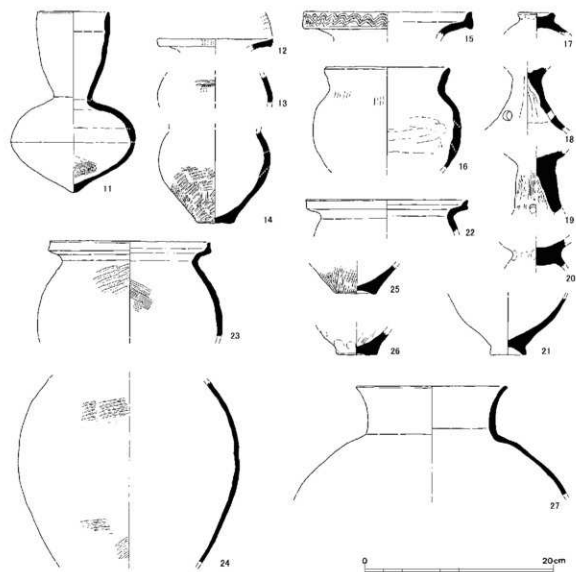
出土遺物は、灰褐色・紫暗褐色土の遺物包含層から少量の土師器・須恵器・平瓦などが出土したが、図化できるものはなかった。東部の断ち割りで黄褐色土および砂礫層から縄文土器が出土している。竪穴式住居跡S H05から弥生土器が出土している。以下に主な遺物について記述する。

1) 縄文土器(第19図)

1は断ち割り内から出土した北白川C式の深鉢口縁部である。2・6～8・10は断ち割りで出土した縄文時代後期の土器片で、元住吉山Ⅱ式～宮滝式の時期と考えられる。2・6・7・10は生駒山西麓産と考えられる特徴を持っている。3・5は弥生時代の竪穴式住居跡S H05埋土中から出土した元住吉山Ⅱ式～宮滝式の時期の土器片である。いずれも生駒山西麓産土器の特徴を持つ。4は遺構精査中に検出した縄文時代晩期突帯文土器口縁部である。胎土にはチャートや頁岩、砂岩の円磨度の高い砂粒が含まれ、後期の土器と胎土が異なる。9は断ち割り部から出土した深鉢底部である。(大本朋弥)

2) 竪穴式住居跡S H05出土遺物(第20図)

11は長頸壺で、算盤玉状の体部に逆「ハ」字形に広がる口縁部が付くものである。器壁表面は摩滅のため不明である。内面は淡灰褐色、外面は淡黄褐色を呈す。口径7.4cm、体部径13cm、高さ19cmを測る。12は壺の口縁端部である。端部をわずかに拡張し、外・内面に3列の刺突がみられる。淡褐色を呈す。15も壺の口縁端部である。端部を上方に拡張し、外面に波状文が施される。暗い黄褐色を呈す。口径17.4cmを測る。13は甕の体部である。14も甕の体部である。外面に



第20図 伊賀寺地区出土遺物実測図(2)

タタキ痕がみられる。底径3.5cmを測る。16も甕である。外面の口縁部は暗い黄橙色、体部は黒灰色を呈す。口径12.8cmを測る。22は、口縁端部を上方につまみ上げる形態の甕である。暗い橙色を呈す。口径16.8cmを測る。23も口縁端部を上方につまみ上げる形態の甕である。体部外面にタタキ痕、内面にハケによるナダが残る。暗い黄橙色を呈す。口径16.8cmを測る。24は23とよく似た甕の体部である。17は蓋のツمامミである。18～20は高杯の脚部である。25・26は甕の底部である。21は壺の底部である。体部の外面にタタキ痕が残る。内面が灰黄褐色、外面が暗い黄橙色・灰黄褐色を呈す。体部径23.1cmを測る。これらは住居跡の下層や床面直上から出土した。弥生時代終末期のものである。27は直立ぎみの口縁部で端部が外反する。調整は器壁表面が摩擦のため不明である。口径16cmを測る。住居跡が、ある程度埋没した後の上層から出土した。古墳時代中期のものである。

4. 小結

今回の調査では、弥生時代終末期の竪穴式住居跡および中世の掘立柱建物跡を検出したが、長岡京期の遺構は無かった。長岡京期の遺構は施工されなかったか、中世以降に削平された可能性が高い。東部で右京第943次調査地を含む南北方向の断ち割りを行ったところ、住居跡・柱穴が掘りこまれた黄褐色土から若干の縄文土器、その下層の礫層から縄文時代後期の土器が出土した。このことから、この地帯では縄文時代中期・後期の遺構が検出されている低位段丘の土砂が再堆積した場所に、竪穴式住居跡などが作られていることが判明した。(石尾政信)

(3) 長岡京跡右京第947次調査(7ANOTI-2・樽井地区)

1. 調査概要(第15・16図)

今回の調査地は、長岡京市下海印寺樽井に所在し、標高26.5mを測る段丘の崖面から標高24.5mの氾濫源にかけての地形の変換点にあたる。

調査によって小泉川水系による開削と堆積の状況を確認した。第4層の黄褐色粘質土(床土)からは、瓦器碗や土師器皿などが出土しており、下層に堆積した砂礫は、拳大から人頭大までの大きさで、流路によって古墳時代の遺物を含むもの、平安時代から中世までの遺物を含む層がある。

近世以降の井戸2基(S E 02・03)と、古墳時代以降の小泉川旧河道(N R 01)、縄文時代以降と考えられる旧河道2条(N R 04・05)、縄文時代の伊賀寺遺跡が載る段丘の裾部を検出した。

近世井戸 S E 03(第16図) 掘形の直径1.4mを測り、深さ1.2mまでを確認した。上段が石組みで、下段は縦板組みの構造となっていた。

近世井戸 S E 02(第16図) 掘形の直径1.3~2.1m、深さ1.9mを測る。最下層で直径約10cmの丸太材を使用した木枠が一辺約90cmの方形に組まれていたが、縦材はこの井戸を廃棄する段階で抜き取られており遺存していなかった。埋め土内より須恵器、天目茶碗が出土した。

旧河道 N R 01(第16・21・22図) 全体の規模は明かでないが第21図の第5~19層、第22図の第6~11層を埋土とする旧河道である。検出面の標高24.5m、川底の標高23.2mを測る。6~10層の堆積は幅約10mを測り、第6~8層中より須恵器壺、平安時代の無釉陶器、瓦器碗等が出土した。また、13~16層の堆積は幅約6.0mを測り、第15層中より須恵器円面碗、緑釉陶器碗、第16層中より古墳時代の須恵器杯身等が出土した。

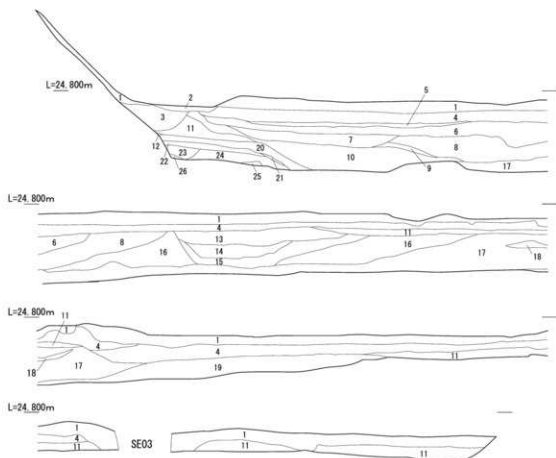
旧河道 N R 04・05(第16・22図) 北側断面の最下層の第12層が流路内堆積土と判断される旧河道で、調査時にもこの層から湧水がみられた。北西から南東に方向をもっている。旧河道 N R 04が幅約1.6m、深さ約20cmを測り、旧河道 N R 05は幅約1.7m、深さ約14cmを測る。第9層を取り除いた段階で第12層の暗黄褐色砂層を検出し、この砂層中より縄文土器が出土した。

2. 出土遺物(第23図)

1・2・4は旧河道N R05からの出土、3は旧河道N R04からの出土である。

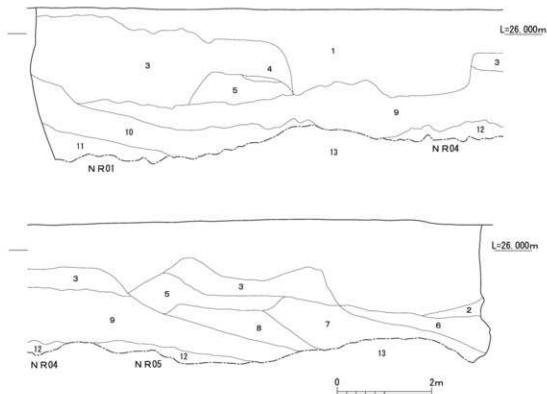
1は縄文土器深鉢の口縁部で、端部と横帯にLRの縄文を施し、内面はナデ調整。器面は外面がぶい橙色、内面が明褐色を呈する。胎土には1～2mmの石英、長石を多く含んでいる。中期末の所産である。2は鉢の体部片である。外面二枚貝による条痕を施し、内面ナデ調整。器面は外面が黒色、内面が灰黄褐色を呈する。胎土にはごく細かい砂粒を含む。凹線文期の所産である。3は鉢の体部片である。外面にLRの縄文を施し、内面はナデ調整。器面は外面が橙色、内面が明赤褐色を呈する。胎土には1～2mmの石英、長石を含んでいる。中期末の所産である。

東壁断面図



- | | | |
|----------------------|---------------------|-------------------|
| 1. 暗褐色粘質土(耕作土) | 11. 暗黄褐色粘質土 | 19. 黄褐色砂礫(φ1～3cm) |
| 2. 黒色粘質土 | 12. 褐色砂層 | 20. 暗黄褐色砂層 |
| 3. 黒灰色砂礫混粘質土 | 13. 黄褐色粘質土 | 21. 暗青灰色粘土層礫混じり |
| 4. 黄褐色粘質土(床土) | 14. 黄褐色粘質土 | 22. 明黄褐色砂層 |
| 5. 灰褐色砂礫(φ3～10cm) | 15. 黄褐色粘質土 | 23. 濁褐色砂層 |
| 6. 暗黄褐色粘質砂礫(φ5～30cm) | 16. 暗灰色砂礫(φ10～30cm) | 24. 灰黄褐色砂層 |
| 7. 灰褐色砂礫(φ5～20cm) | 17. 黒灰色砂礫(φ5～20cm) | 25. 黒色砂層(マンガン) |
| 8. 暗褐色砂礫(φ3～10cm) | 18. 黒灰色砂層 | 26. 明黄褐色砂層 |
| 9. 暗灰色砂層 | | |
| 10. 黒灰色砂礫(φ1～3cm) | | |

第21図 樽井地区(東壁)土層断面図

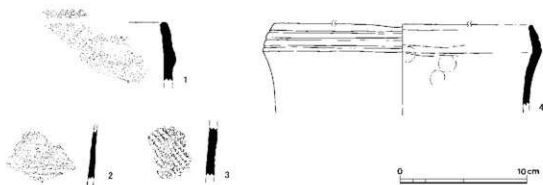


- | | | |
|------------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 黒灰色砂礫混じり粘質土 | 5. 黄褐色粘質砂礫 (φ 5～30cm) | 9. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm) |
| 2. 黒灰色礫混じり粘質土 | 6. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm) | 10. 暗褐色砂礫 (φ 3～10cm) |
| 3. 暗黄褐色粘質砂礫 (φ 5～30cm) | 7. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm) | 11. 暗褐色砂層 |
| 4. 黒褐色粘質土 | 8. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm) | 12. 暗黄褐色砂層 (縄文土器出土) |
| | | 13. 明黄褐色砂層 |

第22図 樽井地区(北壁)土層断面図

4は深鉢の口縁部で、口径20.2cm、残存高6.3cmを測る。横帯に凹線3条を施し、下半と内面はナデ調整。器面は外面が灰褐色、内面がにぶい橙色を呈する。胎土には1mm前後の石英、長石を含んでいる。元住吉山I式期の所産である。

3. 小結

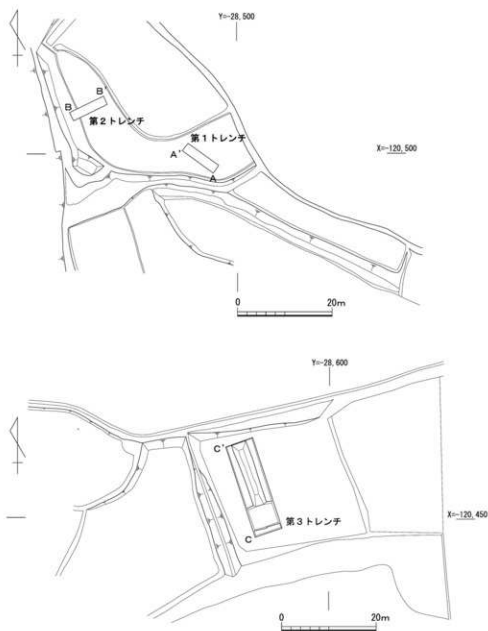


第23図 樽井地区出土遺物実測図

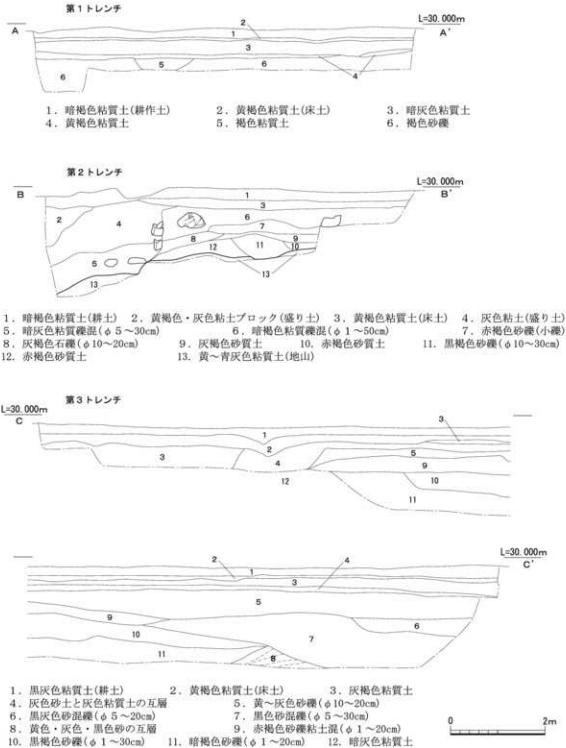
河岸段丘上面では、縄文時代中期末から後期にかけての集落遺跡の広がりが見らるかになりつつあるが、段丘の裾部で同時期の流路跡を確認したことは、当時の集落の立地、景観を復原する上で貴重な資料を得たと考えられる。(戸原和人)

(4)長岡京跡右京第947次調査(7ANOOD-7・下内田地区)・伊賀寺遺跡

1. はじめに



第24図 下内田地区トレンチ配置図



第25図 下内田地区土層断面図

調査地は、長岡京市下海印寺下内田に所在し、小泉川旧流路に架かる川向橋を挟んで東に2か所(第1・2トレンチ)、西に1か所(第3トレンチ)の調査トレンチを設けた。調査は、第1・2トレンチを先行して手掘り掘削を開始し、その後、第3トレンチの重機による掘削作業を行った。

2. 調査概要(第24・25図)

第1・2トレンチは、低位の段丘上面に位置しており、標高29.9mで畑として土地利用されていた。南の段丘下面では、水田として土地利用されている。1・2トレンチでは、耕作土の下に整地土として入れられた第3層黄褐色の粘質土、第4層灰色粘土層中には須恵器や土師器片が包含されており、その下面では拳大から人頭大の礫を含む灰褐色の砂礫が河川性の堆積をしている。さらに下層では、第13層黄～青灰色粘質土となる。砂礫層内には少量の遺物を含むが、下層の粘土層では、遺物は出土していない。第2トレンチでは、南への落ち込みの地形を確認し、第8層の上面で古墳時代の須恵器杯身・杯蓋が出土した。

第3トレンチは水田として土地利用されていた。耕作土・床土以下は旧小泉川の河道の堆積を示している。今回の調査トレンチ内では、西側に一時期の川の肩部があり、第10～12層をベースとし、西側に向かって河道が下がっていく状況を確認した。整地のために入れられた黄褐色粘質土の床土内より白磁・須恵器等が出土している。礫層から遺物は出土していない。

3. 小結

第2トレンチの第8層の上面で古墳時代の須恵器杯身・杯蓋が出土したことにより、調査地周辺に何らかの古墳時代の遺構が存在するものと考えられる。

(戸原和人)

(5)長岡京跡右京第947次調査(7ANOHR-10・方丸地区、 7ANOBZ-2・菩提寺地区、7ANPSG-2・駿河田地区)・下海印寺遺跡

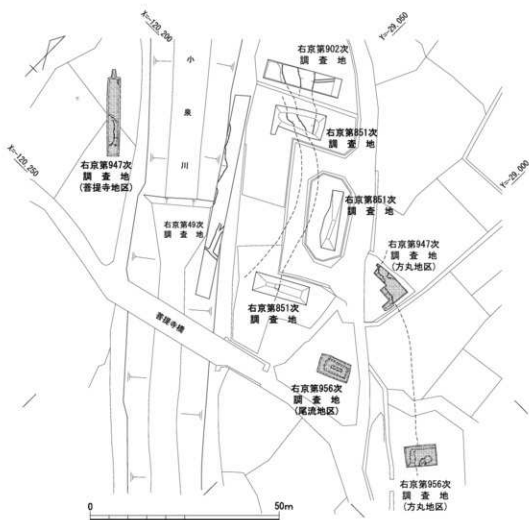
1. はじめに 今回の調査地は、小泉川左岸の方丸地区(7ANOHR-10)と、右岸の菩提寺地区(7ANOBZ-2)、右岸の駿河田地区(7ANPSG-2)である。方丸・尾流地区は、長岡京跡の西四坊大路と七条条間小路の交差点付近にあたる。菩提寺・駿河田地区は、長岡京城から外れる。

2. 調査概要

1)方丸地区(7ANOHR-10)

(1)調査の概要(第27・28図)

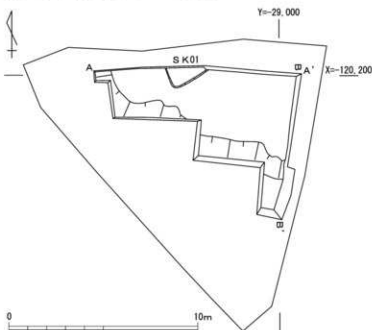
今回の調査地から北東部の高台では、数回にわたって調査が実施されてきた。縄文時代早期から中世にかけてのさまざまな遺構・遺物が見つかっている。今回の調査地付近でも、昭和56～60年度にかけて試掘調査が実施された。今回の調査地は、試掘坑にかかった状態で5m四方のトレンチを設定し掘削した。北壁から西壁にかけて落ち込みがみられ、試掘坑と思われた。この試掘坑西側と南側にわずかな落ち込みがみられたことから、西側と南側に部分拡張を行った。その結果、土坑1基と南側に下がる地形を検出した。



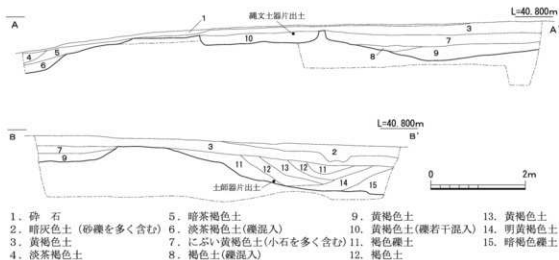
第26図 方丸・尾流・菩提寺地区トレンチ配置図

土坑SK01(第27図) 北壁にかかると検出した。0.6×2.1m以上、深さ0.2mを測る。若干礫を混入する黄褐色土を埋土とし、その上層から縄文土器片が出土した。

傾斜面(第27図) 南方に下がる地形を検出した。褐色礫土・褐色土・黄褐色土が互層に堆積し、一時期で埋まった状況を示す。褐色礫土下層から土師器片が数点出土し、その年代観より中世に埋まったものと思われ



第27図 方丸地区平面図



第28図 方丸地区土層断面図

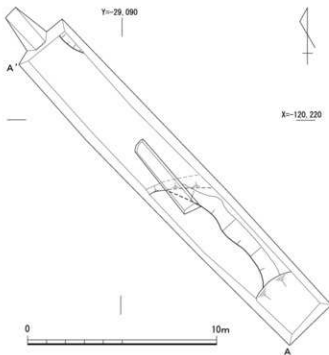
た。

(2) 出土遺物

今回の調査地から出土した縄文土器片や土師器片は、図示できるものでなかった。

(3) 小結

調査の結果、縄文時代の土坑1基を検出した。調査地外に続くため、全容については不明である。また、トレンチ南側で南へ下がる傾斜面を検出した。縄文時代早期から中世にかけての遺構が存在する高台の縁辺部にあたると思われる。長岡京跡に関連する遺構は検出できなかった。



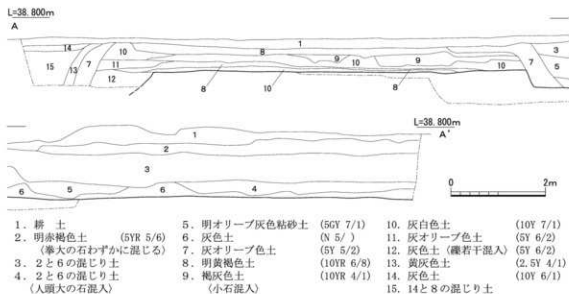
第29図 菩提寺地区平面図

1) 菩提寺地区(7ANOBZ-2)

(1) 調査の概要(第29・30図)

現在の小泉川に平行する形でトレンチを設定した。調査地北側の隣接地で、平成17年度に右京第851次調査を実施しており、古墳時代の流路跡を検出し、集落跡などの存在を想定している。

重機掘削後人力による精査を行った結果、トレンチ中央やや南西側で安定した地盤(明黄褐色土)を検出した。この地盤は、トレンチ北西側・南東側・小泉川側になく、それぞれの方向に地形が下がることがわかった。堆積状況から明黄褐色土から北東側に落ち込む地形が古く、旧小泉川への傾斜面の肩部と思われる。その後トレンチ北西側と



第30図 菩提寺地区土層断面図

南東側の落ち込みが設けられ、埋まっていた。北西側の落ち込みの底は平坦であり、最下層に明オリブ灰色粘砂土や灰色土が堆積しており、湿地状態であったと考えられる。出土遺物がなく、時期は不明である。南東側については、人頭大の石やコンクリートなどが混入した攪乱であった。

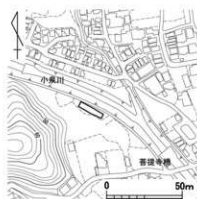
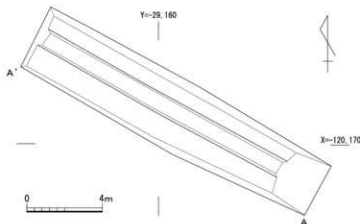
(2) 小結

今回の調査地は、小泉川と菩提寺川に挟まれたところの調査であった。そのためか、顕著な遺構は確認できなかった。また、右京第851次調査地と比べて1m強の標高差を有して、今回の調査地が低くなっていることから、後世の削平によって消失した可能性もある。

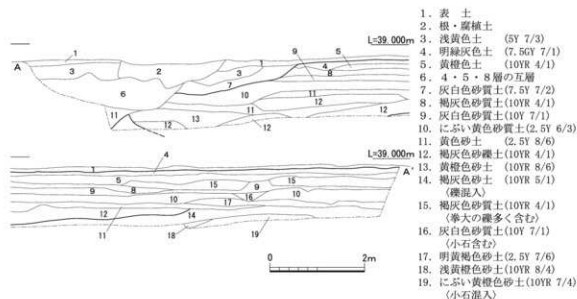
3) 駿河田地区(7ANPSG-2)

(1) 調査の概要(第31～33図)

今回の調査地は、平成17年度に実施した右京第851次調査の菩提寺地区と駿河田右岸地区の間にあたる。駿河田右岸地区では、近世から現代の旧小泉川の堆積を確認している。今回はその隣

第31図 駿河田地区
トレンチ配置図

第32図 駿河田地区平面図



第33図 駿河田地区土層断面図

接地にあたることから、同様の成果が想定できた。また、菩提寺地区では古墳時代の流路跡を抽出していることから、その関連も窺えることが想定された。

現状の小泉川に平行する形でトレンチを設定した。トレンチ中央から北西側では砂質土・砂礫土・砂土が互層になって水平堆積しており、旧小泉川の河川内の堆積と考えられる。近世陶磁器の細片が1点出土している。

トレンチ南東端は根などで攪乱を受けていたが、上層からは、その互層を切る形で溝がみつかった。埋土は第3・7層の浅黄色土・灰白色砂質土である。下層からも緩やかに「U」字形にくぼむ流路跡がみられた。埋土は第11～13層の黄色砂土・褐灰色砂質土・黄褐色砂土である。黄色砂土は東側から流れ込む形で堆積していた。トレンチ南東側では水平堆積がみられないことから、右京第851次調査の駿河田右岸地区からこの付近までの間を旧小泉川は蛇行して流れていたと思われる。

(2)小結

旧小泉川の河川内の調査となった。出土物がないことから時期は不明である。(岡崎研一)

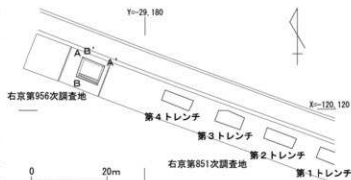
(6)長岡京跡右京第956次調査(7ANPSG-3・駿河田地区)・下海印寺遺跡

1. 調査概要(第34・35図)

調査地は長岡京市奥海印寺駿河田に所在し、昨年度におこなった右京第851次調査に引き続いて、宅地の移転が終了した地点を選び調査を実施した。

現地表面の標高は40.5mを測る。地表下0.5mまでが灰色砂礫やコンクリート基礎、0.9mまで

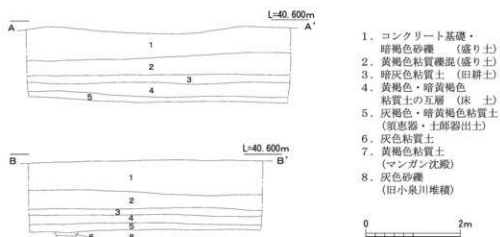
が褐色・青灰色粘質土による現代の盛り土である。以下、第3層の暗灰色粘質土(旧耕作土)、第4層の黄褐色粘質土の互層(床土)となり、地表下1.45mで旧小泉川水系の堆積である第8層の灰色砂礫となる。第5層の灰褐色・暗黄褐色粘質土中から須恵器・土師器等が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。



第34図 駿河田地区トレンチ配置図

2. 小結

第5層中から少量の出土遺物が認められたものの本調査地の周辺では、小泉川水系の河川堆積が大部分を占め、集落等の土地利用については否定的な調査結果となった。(戸原和人)



第35図 駿河田地区土層断面図

(7) 長岡京跡右京第956次調査(7AN00R-7・尾流地区、7AN00R-11・方丸地区)・下海印寺遺跡

1. はじめに

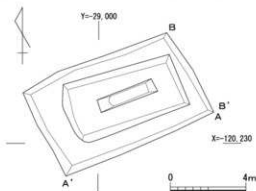
今回、実施した試掘調査地点は、平成20年度の右京第947次調査地の南側に位置する。調査地は、2か所の試掘トレンチを設定した。高台に設定したトレンチは方丸地区に、小泉川寄りに設定したトレンチは尾流地区にあたる。

2. 調査概要

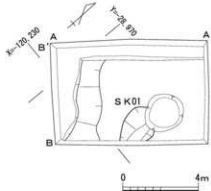
1) 尾流地区(7ANOOR-7)

(1) 調査の概要(第36・38図)

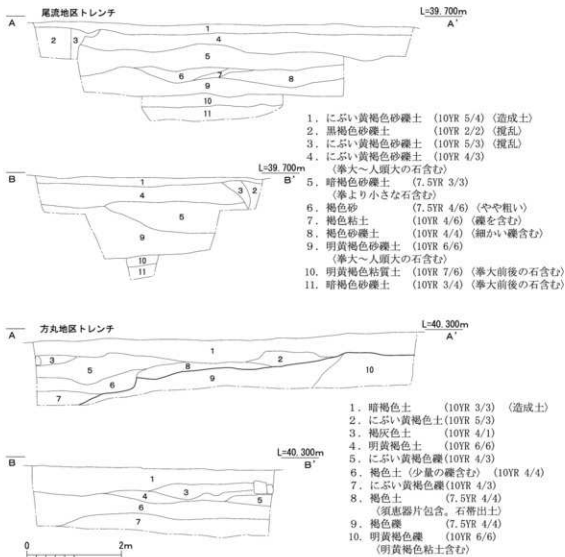
対象地内に40m²のトレンチを設定した(第36図)。現地表下約0.2~0.4mに堆積するにぶい黄褐



第36図 尾流地区平面図



第37図 方丸地区平面図

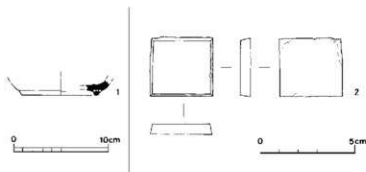


第38図 尾流・方丸地区土層断面図

色砂礫土下、2mの深さまで礫層の堆積のみで、遺構・遺物は検出できなかった。

(2) 小結

この付近は、後世に削平または地形の改変があったと考えられ、顕著な遺構は検出できなかった。



第39図 方丸地区出土遺物実測図

2) 方丸地区(7ANOHR-11)

(1) 調査の概要(第37・38図)

尾流地区の試掘トレンチの東側で、40mの試掘トレンチを設定し調査を実施した(第37図)。検出遺構としては、第9層を掘り込む形で不定形な土坑を1基検出した。またトレンチの西側で、小泉川に向かって傾斜する地形を確認した。

土坑 S K 01 トレンチの東側で不定形な土坑の一部を検出し、埋土内から馬の骨が出土した。土坑の時期については、出土した土器片が小片であることや、遺構確認が目的の試掘調査であり、土坑の完掘を実施していないため、現時点では不明である。

(2) 出土遺物(第39図)

遺物は第8層から出土した。1は、緑釉陶器の底部片である。直径4.05cmを測る高台は、貼り付け高台である。2は、同じく第8層から出土した石製巡方の未製品である。断面は台形で、厚さは0.55cm、底部は最大で3.3×3.1cmを測る。

(3) 小結

方丸地区では段丘の平坦部で、平安時代と思われる土器や巡方が出土し、時期不明ではあるが馬骨が出土する不定形な土坑を検出した。これらのことから、方丸地区においては、遺構が遺存していることが確認できた。

今回の調査は、遺構確認を目的とした試掘調査のため、平面図や土層の堆積状況などの記録作成のち、埋め戻しを行なった。

(村田和弘)

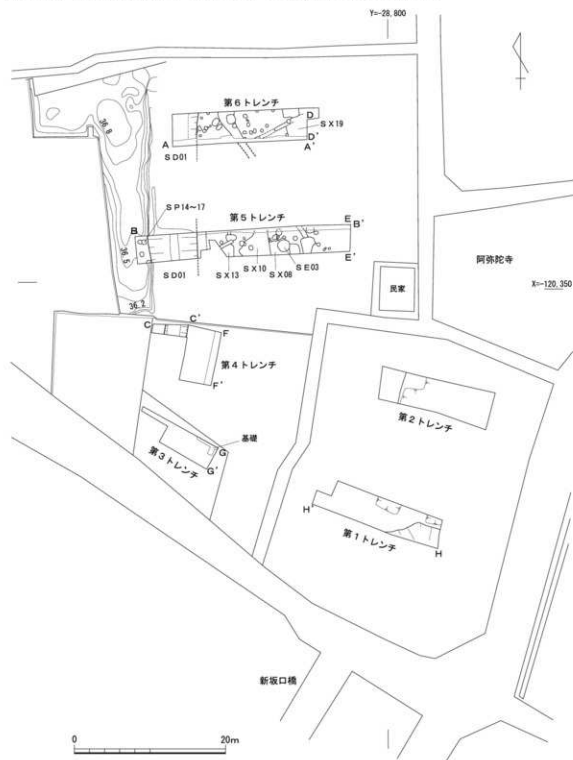
(8) 長岡京跡右京第956次調査(7ANOSJ-3・西条地区)・下海印寺遺跡

1. はじめに

調査対象地は、長岡京跡右京七条四坊十一・十二町と縄文時代から近世にかけての集落遺跡である下海印寺遺跡にかかる。東側隣接地には、縄文時代から近世にかけての伊賀寺遺跡が展開す

る。

当該地は、右京第957次調査(西条地区)の南東80m、右京第937次調査(上内田地区)の西隣の微高地にあたる。右京第957次調査では、古墳時代中期後半の溝や時期不明の竪穴式住居跡と思われる遺構が検出された。右京第937次調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の流路跡と竪穴式住居跡を、古墳時代中期後半～後期にかけての土坑と流路跡を検出した。



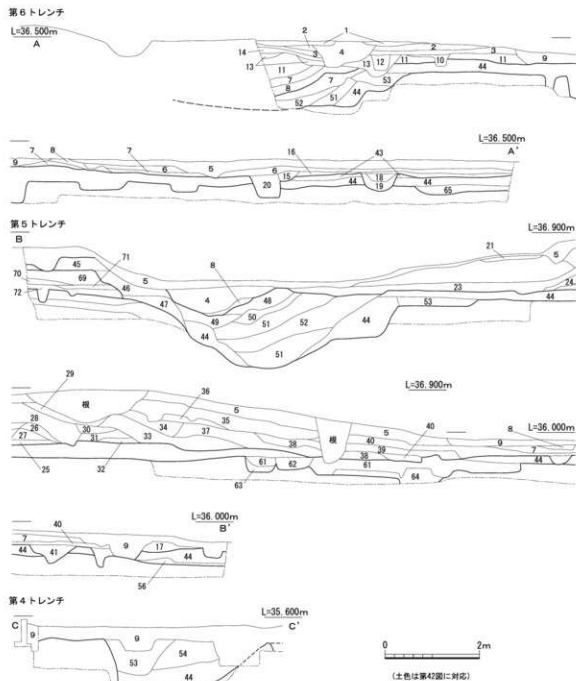
第40図 西条地区トレンチ配置図

対象地東側には、阿弥陀寺が存在する。創建時期については不明であるが、慶長10(1605)年の「京都所司代上竹救免状」に寺名があり、天保10(1839)年に焼失・再建されている。

これら周辺の成果などから、微高地には弥生時代末から近世にかけての土器類が出土し、数時間にわたる集落遺構が存在すると考えられた。

2. 調査概要(第40～42図)

調査対象地は、北から南へ緩やかに傾斜しており、南側を小泉川が流れる。対象地中央には約



第41図 西条地区土層断面図(1)

1mの高まりを、西側には平面逆「L」字形の約0.7mの高まりを、幅5.5m、長さ32mと10mを認めた。前者については古墳の可能性も視野に入れて、後者についてはその範囲が一筆で括られていたことからその性格解明のために、古墳状隆起と逆「L」字形の高まり2か所にかかるようにトレンチを設定した(第5トレンチ)。また、周辺の様子を見るために、試掘トレンチをさらに5か所設定した(第1～4・6トレンチ)。今回の調査は、対象地内に複数の遺構面が存在する可能性が考えられたことから、断面観察と遺構検出に努め、面的な調査の必要性ならびにその範囲確認を重点的におこなった。調査を進めるにしたがって、遺構が広範囲に展開する様が認められたことから、検出遺構については一部の遺構を除いて上面を検出するに留めた。また、出土遺物については、次年度以降の本調査にあわせて報告することとした。

第1トレンチ 対象地東側には右京第937次調査地があり、今回の調査地から2m強の高低差で低い位置が中世ならびに古墳時代の遺構面となることから、東方に下がる旧地形を確認するために南東部分に設定した。地表下0.5mでわずかに土器片を包含する黒褐色土が堆積しており、その下層で柱穴が数か所認められた。時期は不明である。その下層では、右京第937次調査地へと下がる堆積土(第66～68層)が認められた。掘削した最下層の暗褐色土から縄文時代の石礫1点が流れ込んだ状況で出土した。

第2トレンチ 第1トレンチの北側に設定した。トレンチ西側に限られた範囲で安定した面が認められたが、大半は後世の攪乱であった。顕著な遺構は検出できなかった。

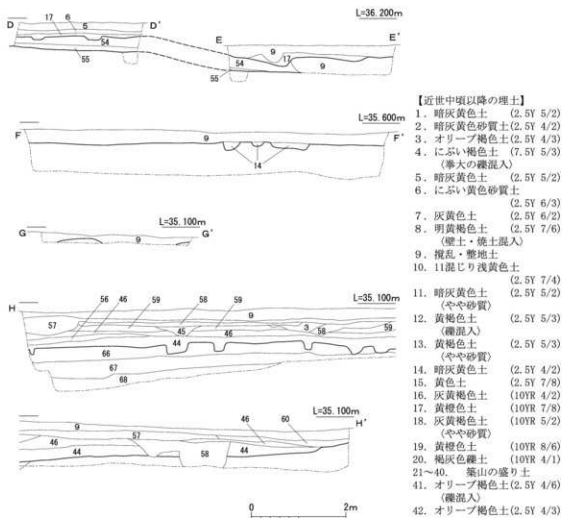
第3トレンチ 対象地南西隅に設定した。一部建物の基礎があり、その他は、黄褐色礫土の地山であった。この層は、大阪層群の上に堆積しており、遺物包含層や顕著な遺構が認められなかったことから、この付近は大きく削平を受けているものと判断した。

第4トレンチ 第3トレンチ北側に設定した。断面観察の結果、顕著な遺構が認められず、後世に大きく削平されたものと考えられる。第5・6トレンチで確認した溝SD01が第4トレンチ付近まで続くかどうかを確認するために、トレンチ西方を一部拡張した。その結果、幅約3.4m、深さ約1.0mの溝を確認することができ、溝SD01はこの付近まで存在することがわかった。埋土は、小石～拳大の礫が混入する黒褐色土で、出土遺物はなかった。

第5トレンチ 調査開始前に現地表面で確認できた調査地中央付近の古墳状隆起と、対象地西側の平面逆「L」字形の高まりにかかる形で設定した。掘削した結果、古墳状隆起は旧宅地内の庭の築山であり、本来の地形は平坦であることがわかった。築山を除去したところ、遺構面は2面存在することがわかり、それぞれの遺構面から溝や土坑などを検出した。出土遺物から、上面は近世以降の遺構面、下面には弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良～平安時代、中世の遺構が存在することがわかった。トレンチ西端では南北方向の溝SD01が認められ、平行する形で逆「L」字形の高まりが認められた。一部この高まりを断ち割って試掘調査したところ、水平に盛られた土層である可能性も考えられた。この盛り土は締まっており、この盛土下からは、一辺0.7m前後の隅丸方形の柱穴が4か所で確認できた。

溝SD01の規模を確認するため、トレンチにかかった部分を掘削したところ、幅約5.6m、深

さ約1.6mの断面「U」字形の大溝であることがわかった。断面を観察すると、上位に壁土・焼土が混入した明黄褐色土が「U」字形に堆積することから、阿弥陀寺焼失後の整地に因るものと考えられる。溝中位からは近世初頭の大甕が散乱した状況で出土した。最下層から出土遺物がないため開削時期については不明であるが、長期にわたって徐々に溝が埋まったことがわかった。また、最下層は拳大から人頭大の礫が堆積しており、シルト層が確認できなかったことから、常



- 【中世～近世中頃の埋土】
43. 褐灰色土 (10YR 6/1)
(小石混入)
 44. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
(小石混入)
 45. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
 46. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)
 47. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
 48. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
(礫多く混入)
 49. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
(やや砂質)
 50. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
(礫混入)
 51. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
(拳大～人頭大の石混入)

52. 黄褐色砂礫土 (2.5Y 5/3)
53. 黒褐色土 (10YR 3/1)
54. 黒褐色土 (10YR 3/1)
(拳大の礫混入)
55. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/6)
(礫混入)
56. 黄褐色土 (10YR 7/8)

- 【中世以降の埋土】
57. 明黄褐色土 (10YR 6/6)
 58. 黄褐色土 (2.5Y 5/4)
 59. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
 60. 黒褐色土 (10YR 2/2)
 61. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)
 62. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
(やや砂質)
 63. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
 64. 黄褐色砂質土 (2.5Y 5/4)

【近世中頃以降の埋土】

1. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 4/2)
3. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)
4. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)
(拳大の礫混入)
5. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
6. にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6/3)
7. 灰黄色土 (2.5Y 6/2)
8. 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)
(壁土・焼土混入)
9. 攪乱・整地土
10. 11混じり浅黄色土 (2.5Y 7/4)
11. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
(やや砂質)
12. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
(礫混入)
13. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
(やや砂質)
14. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
15. 黄色土 (2.5Y 7/8)
16. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
17. 黄褐色土 (10YR 7/8)
18. 灰黄褐色土 (10YR 5/2)
(やや砂質)
19. 黄褐色土 (10YR 8/6)
20. 褐灰色礫土 (10YR 4/1)
- 21～40. 築山の盛り土
41. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/6)
(礫混入)
42. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)

【庄内期の埋土】

61. 黒褐色土 (2.5Y 3/1)
62. 黒褐色土 (7.5Y 3/1)
63. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
64. 褐色土 (10YR 4/4)

【古墳時代後期の埋土】

65. 褐灰色土 (7.5YR 4/1)
(炭混入)

【弥生時代以前の埋土】

66. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
67. にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)
68. 暗褐色土 (10YR 3/4)

第42図 西条地区土層断面図(2)

に水が溜まっているという状況でないことが窺えた。

第6トレンチ 第5トレンチ北側に平行する形で設定した。断面観察から小石が混じる黒褐色土(包含層)の上面と下面の2面に遺構が存在することがわかった。トレンチ西端で溝S D01の一部が認められた。肩部付近から瓦器碗の破片(12世紀頃)が出土した。溝S D01出土遺物としては最も古いものであることから、中世に築かれた可能性がある。この溝は南北方向に一直線に掘削されていること、土塁状の高まりと平行すること、中世にさかのぼる可能性があることから、この溝は土塁に平行に築かれた堀である可能性が高いと考えられた。溝S D01を部分的に掘削したが、底面には至らなかった。この溝内では、数回にわたっての壁土・焼土の混入土の堆積が認められたことから、第5トレンチと同様に阿弥陀寺焼失後に整地された可能性がある。

トレンチ東側からは、古墳時代後期の土器を包含する土坑(S X 19)も検出した。全容は不明であるが、平面が方形を呈した遺構の一面とも見て取れ、竪穴式住居跡の可能性も考えられる。

3. 小結

調査の結果、対象地北半分には少なくとも2面の遺構面が存在することが明らかとなった。上面には、焼土の検出により阿弥陀寺焼失・再建に伴う近世の遺構が、下面には、庄内併行期～古墳時代後期にかけての集落跡と中世の遺構が展開するものと思われた。特に溝S D01と平行する土塁状の高まりは中世城館の可能性が高い。乙訓地域では、方形に堀と土塁を巡らす中世城館が、開田城や今里城など数例みつまっている。西条地区にも同様の施設が存在すると思われた。検出状況から城館の中心施設は、溝S D01と土塁状遺構の西側に展開すると思われる。

また、今回の検出遺構に加えて、周辺の調査事例となる右京第852・957次調査の西条地区や右京第862・870・957次調査の尾流地区、右京第902・928次調査の上内田地区の各調査成果を考えると、今回の調査対象地である高台には庄内併行期、古墳時代中期から古墳時代後期、奈良～平安時代・中世の集落跡が重複して存在する可能性が高く、面的な調査に期待されるところである。

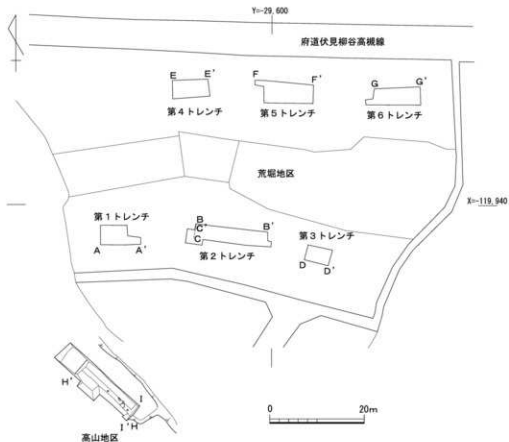
(岡崎研一)

(9)長岡京跡右京第956次調査(7ANPAR-3・荒堀地区、 7ANPTY-1・PSH-1・高山地区)・奥海印寺遺跡

1. はじめに

荒堀および高山地区は、主に縄文時代から江戸時代の複合遺跡である奥海印寺遺跡の南西端にあつている。あたり一帯は起伏に富み、河川により形成された開析谷や段丘が卓越している。

周辺遺跡については奥海印寺遺跡のほか、奥海印城(推定)や海印寺跡(平安時代前期)、走田古墳群(古墳時代後期)などが知られている。さらに、この西山丘陵上の楊谷寺に至る旧参道脇で須



第43図 荒堀・高山地区トレンチ配置図

恵器が採集され、奈良・平安時代の窯跡(鈴谷窯)が所在しているとされる。こうした地勢にあることから、周辺に窯跡や古墳の存在が想定された。

荒堀地区は雛壇状の宅地跡地で、上下段に高低差のある調査地に6か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた(第43図)。厚い盛土を除去したところで、上段の第2トレンチ、下段の第4・6トレンチの合計3か所から若干の遺構・遺物を確認することができた。その他のトレンチでは、厚い盛土の下は旧地形(丘陵)の粗礫層となり、遺構面も遺物もまったく認められなかった。

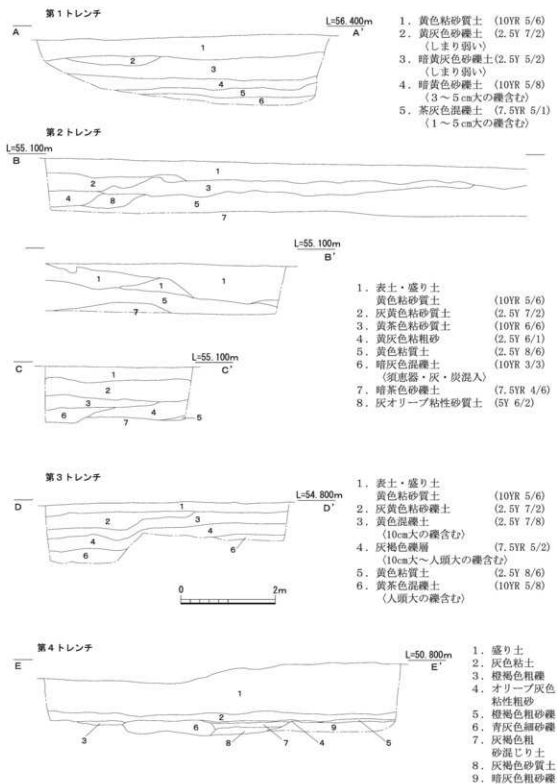
高山地区は、荒堀地区の北西部に近接し、宅地造成地の南側に隣接する丘陵斜面地に当たっている。現況は竹林であるため、調査範囲内の竹伐採作業から始めた。そして、窯跡の有無を確認するため、丘陵裾部に平行する細長いトレンチを設定した。竹林の厚い置き土を重機掘削で除去したのち、人力掘削にて遺構・遺物の確認に努めた。その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、古墳時代後期の須恵器杯や土師器の破片を含む層を確認することができた。

2. 調査概要

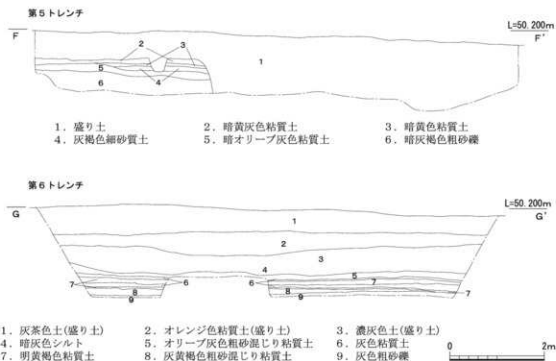
1) 荒堀地区(第43～46図)

(1) 調査の概要

集合団地や一戸建住宅の跡地で、調査地は上下段に大きく分かれる。およそ標高55m前後から



第44図 荒堀地区土層断面図(1)



第45図 荒堀地区土層断面図(2)

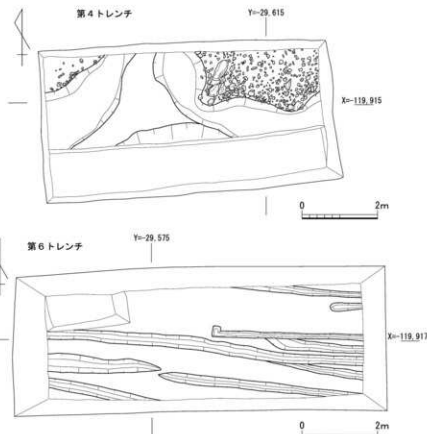
56mを測る上段部に第1～3トレンチを、標高約50mの下段部に第4～6トレンチを設定した。

第1トレンチ

5層の茶灰色混礫土で旧表土を確認したが、これより下層は丘陵を構成する地山の粗礫層となり、遺構・遺物とも確認できなかった。

第2トレンチ

7層の暗茶色砂礫土は旧表土面で、これより下層は第1トレンチと同様、粗礫層となり遺構・遺物



第46図 荒堀地区第4・6トレンチ平面図

は確認されなかった。また、南西隅部で、大きく掘削された掘り込みを確認した。3層および6層が埋め土で、ここより土師器または弥生土器の破片が出土したが、竹林の置き土に伴う掘り込みとみられ、古い包含層や遺構に伴うものではなかった。ただ、近隣に何らかの遺構の存在を考慮する必要がある。

第3トレンチ

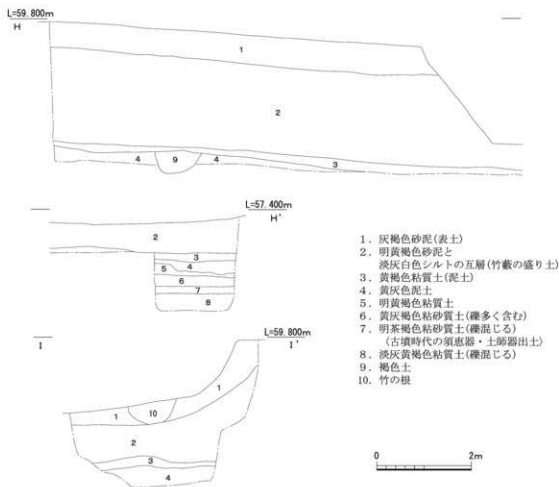
黄茶色混雑土の6層は地山で、それより上の堆積層は、置き土と判断される。遺構・遺物とも皆無であった。

第4トレンチ

長辺の北壁に沿って、礫面の広がりを検出した。礫面の分布は部分的で、礫面と礫面の間は2本の澁んだ溝(流路)になっていたとみられる。溝の肩部は不明瞭ながら微かな起伏として確認された。わずかに南に低くなっているが、流れはあまりなく澁んだ状況であったとみられる。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

第5トレンチ

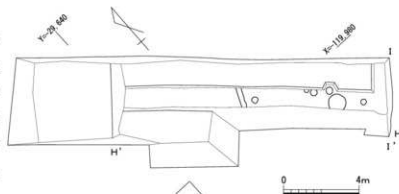
ほぼ全体に現代建物による深い攪乱で、地山面までの堆積層は西側の一部を除いてほとんどみられず、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。



第47図 高山地区土層断面図

第6トレンチ

第4層までは近・現代の盛土である。上位の7層上面で、9条の浅い溝を検出した。溝内より若干の須恵器小片が出土した。小片であるため時期不明である。耕作に伴う遺構とみられ、暗灰色粘質土を埋土とし、幅10~20cm、深さ数cmを測る。



第48図 高山地区トレンチ平面図

2) 高山地区(第47・48図)

(1) 調査の概要 調査はまず竹の伐採から始めた。伐採後、110mの細長い調査トレンチを設定した(第43・48図)。掘削は重機により表土および竹林栽培による客土を除去し、旧表土より下層を人力で掘削・精査した。厚い竹林客土(1.4~2.2m)を除去した面で、土坑および溝を検出したが、これらは竹林栽培にともなうもので、溝は排水用のものと考えられる。チャートなどの小礫を集めて組んで溝にしている。組まれた礫に混じって近世の土瓶の破片が出土した。

さらにトレンチ西端を深掘りしたところ、さらに80cmほど下層で、古墳時代後期の須恵器杯蓋および土師器の小片が出土した。出土した層位は第7層の明茶褐色粘砂質土である(第47図)。狭い範囲におけるトレンチの底面および土層断面の観察では、遺構の存在や広がりはいえ捉えられないが、調査地より高所にあった古墳が壊され、それに関係する土器類が流れ込んだ可能性が高い。出土層位の観察・記録の後、埋め戻しを重機により行い、すべての作業を終了した。

3. 小結

荒堀地区では、第2・4・5トレンチから若干の遺構・遺物を検出したが、周辺遺跡との関連が窺えるような顕著な成果は得られなかった。

高山地区は、厚い竹林客土の下層から古墳時代後期の須恵器の断片が出土し、当該期の遺物包含層を確認した。鈴谷窯のような奈良・平安時代の窯跡の痕跡はなかったが、古墳時代の須恵器が出土したことで、周辺丘陵部に古墳が存在している可能性が高まった。(黒坪一樹)

(10)長岡京跡右京第957次調査(7ANOSJ-4・西条地区)・下海印寺遺跡

1. はじめに



第49図 西条地区調査トレンチ配置図

調査対象地は、長岡京跡右京七条四坊十十四町に相当し、京城西端にあたる所でもある。また、縄文時代から近世にかけての集落遺跡である下海印寺遺跡にかかる。当該地は、右京第852次調査(西条地区)の東側と南側の隣接地で、微高地上にあたる。便宜上、東側を西条-1地区、南側を西条-2地区とした。検出した遺構名は、右京第852次調査にならい、次数を頭に付した。右京第852次調査では、奈良から平安時代の掘立柱建物跡や欄列などを検出している。また、調査地南西隅からは西側に下がる自然地形(SX51)も確認しており、旧小泉川沿いの狭小な平地部(尾流地区)に続く。尾流地区では、右京第862・957次調査の2回の本調査が実施され、縄文時代後期と晩期の土坑をはじめ、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡や、古墳時代後期の竪穴式住居跡などが検出された。

2. 調査概要(第49図)

今回の調査地は、右京第852次調査地の隣接地であることから、この調査成果をもとに実施した。

1) 西条-1地区(第50～54図)

主に奈良から平安時代にかけての土器片を包含する黒褐色礫土下のにぶい黄褐色土(地山)を掘り込む形で、古墳時代から平安時代にかけての遺構を検出した。また調査地北西隅から、遺物包含層である黒褐色礫土を掘り込む形で東西方向の溝を検出した。トレンチ周囲の壁面を観察すると、同様の形で掘り込まれた柱穴も認められた。

不明遺構 SX95702(第52図) 調査地北西隅で検出した土坑である。埋土はにぶい黄褐色土である。掘削したところ、急に立ち上がる壁面と平坦な床面からなる。壁面外側の一部で赤色焼土を検出した。また壁面が直線的であることも考慮すると、竪穴式住居跡の可能性も考えられる。出土遺物はなかったが、古墳時代後期の溝(SD95703)が切り込む層位より下の層で検出したことから、古墳時代後期以前の遺構と考える。

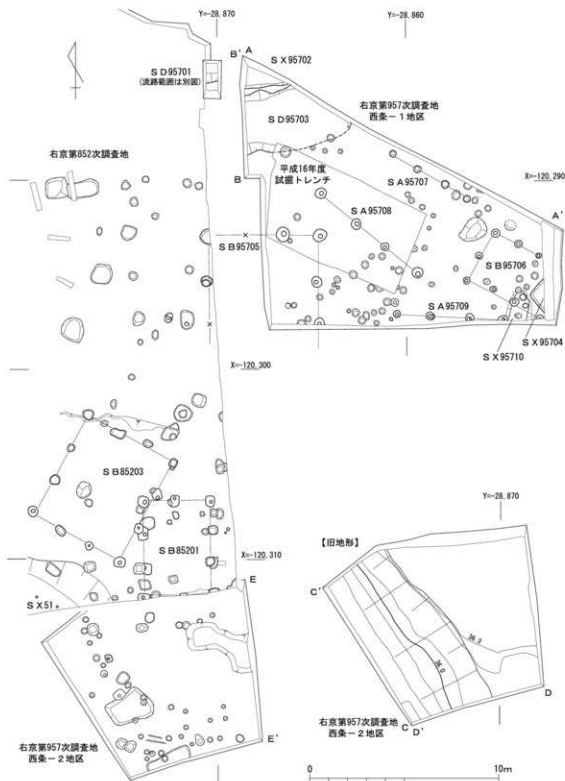
不明遺構 SX95704(第52図) 調査地東側で検出した土坑である。基礎に切られた形で検出した。急に立ち上がる壁面と平坦な床面からなる。埋土は、にぶい黄褐色土である。出土遺物はないが、不明遺構 SX95702と同様の竪穴式住居跡の可能性のあるものとする。

不明遺構 SX95710(第52図) 1.0×1.4mの範囲に黄褐色土を0.1mほど盛り、その一面に0.4×0.3mの落ち込み1か所と赤色焼土を検出した。赤色焼土は落ち込み斜面部にも認められたが、斜面部が固く焼けしまるというものではなかった。鍛冶関連遺物も認められず、その性格については不明である。

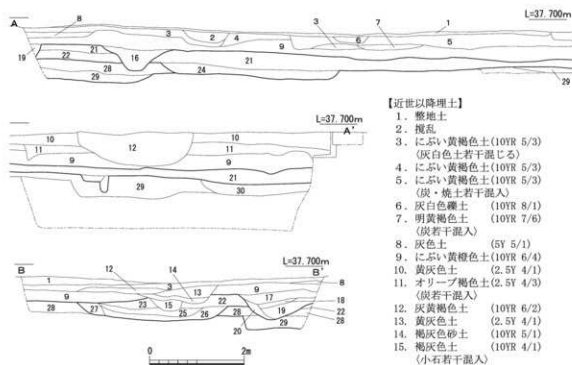
溝 S D95703(第50図) 調査地北西部で検出した溝である。幅約3.6m、深さ約0.3mを測り、弧状に巡る。わずかな出土遺物から、古墳時代後期の遺構と思われた。溝の性格については不明

である。西隣の右京第852次調査地では検出されていないので、急激に立ち上がり、土坑状を呈する可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 95705 (第53図) 調査地南西部で検出した掘立柱建物跡で、右京第852次調査地に及ぶ。東西3間(6.2m)×南北2間(4.5m)以上、主軸方向は真北を向く。同方向の建物と



第50図 西条地区道構配置図



【近世以降埋土】

1. 整地土
2. 覆土
3. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
(灰白色土若干混じる)
4. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
5. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
(炭・焼土若干混入)
6. 灰白色礫土 (10YR 8/1)
7. 明黄褐色土 (10YR 7/6)
(炭若干混入)
8. 灰色土 (5Y 5/1)
9. にぶい黄褐色土(10YR 6/4)
10. 黄灰色土 (2.5Y 4/1)
11. オリーブ褐色土(2.5Y 4/3)
(炭若干混入)
12. 灰黄褐色土 (10YR 6/2)
13. 黄灰色土 (2.5Y 4/1)
14. 褐灰色砂土 (10YR 5/1)
15. 褐灰色土 (10YR 4/1)
(小石若干混入)

【中世埋土】

16. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
17. にぶい黄褐色土(10YR 4/3)
(小石多く含む)
18. にぶい黄褐色砂土(10YR 6/3)
19. 灰黄褐色土 (10YR 5/2)
20. 灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2)
(瓦器類・土師器類出土)

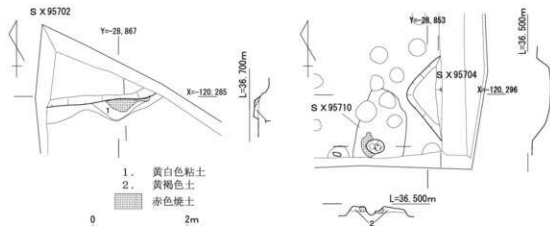
【奈良～平安時代埋土】

21. 黒褐色礫土 (土器片混入) (10YR 3/2)
22. にぶい黄褐色土 (10YR 6/3)
23. にぶい黄褐色土 (小石含む) (10YR 6/4)

【古墳時代埋土】

24. 黒褐色土 (小石多く含む) (10YR 3/2)
25. 暗褐色土 (10YR 3/4)
26. 暗褐色砂質土 (10YR 3/4)
27. 黒褐色土 (10YR 3/1)
28. にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)
29. にぶい黄褐色土 (10YR 6/4)
30. 黒褐色砂質土 (10YR 3/2)

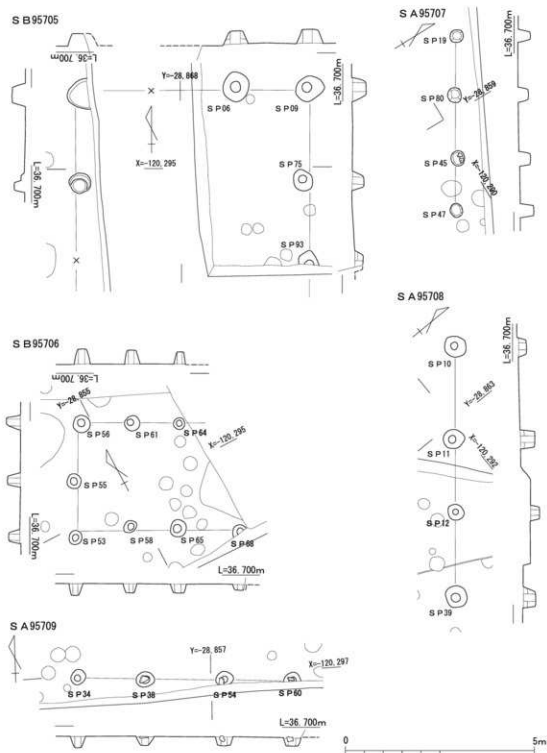
第51図 西条-1地区土層断面図



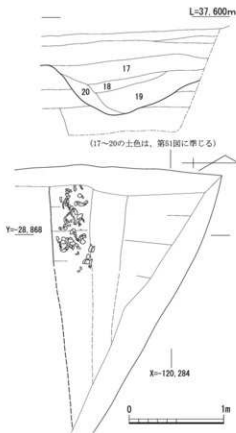
第52図 西条-1地区不明遺構 S X 95702・95704・95710実測図

しては、右京第852次調査地で検出した掘立柱建物跡 S B 85201がある。柱穴は、径0.5～0.7mを測り、深さは0.3～0.5mである。時期のわかる遺物が出土しなかったため、時期不明である。

掘立柱建物跡 S B 95706 (第53図) 調査地東側で検出した掘立柱建物跡である。東西3間(4.3m)×南北2間(2.8m)、N62°Wと大きく西側に傾く。柱穴 S P 64から須恵器杯蓋(第56図6)が出土しており、古墳時代後期の建物跡と思われる。柱穴は、径0.3～0.5mを測り、深さは約0.4m



第53図 西条-1地区掘立柱建物跡・柵列実測図



第54図 西条-1地区溝SD95701実測図

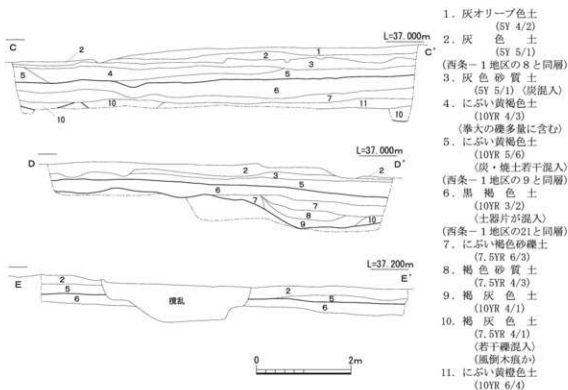
である。

欄列 S A95707 (第53図) 調査地中央北側で検出した。N57°Wと大きく西側に傾き、掘立柱建物跡 S B 95706とほぼ同方向を向く。柱穴は、径0.3~0.4mを測り、深さは約0.3mである。確認長約4.5mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。

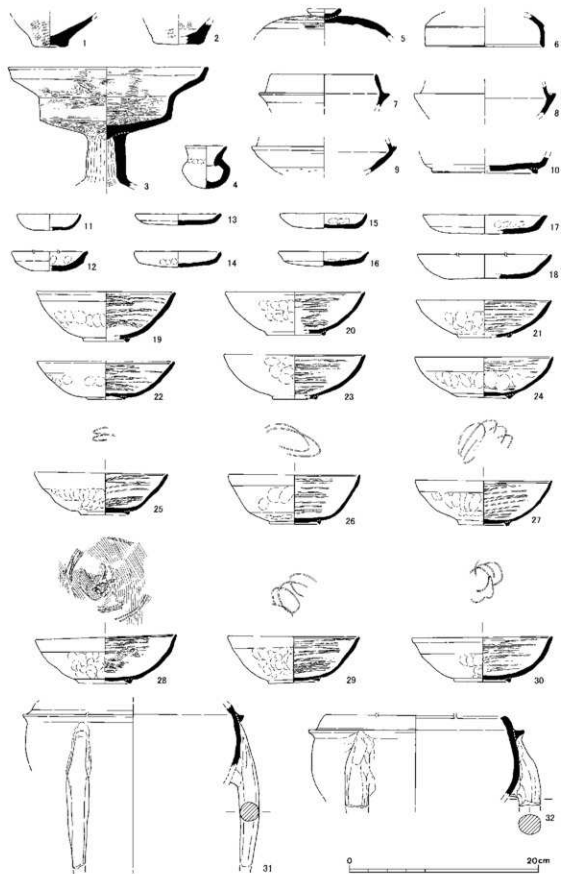
欄列 S A95708 (第53図) 調査地中央で検出した。N50°Wと大きく西側に傾く。柱穴は、径0.4~0.6mを測り、深さは0.2~0.4mである。確認長約6.5mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。

欄列 S A95709 (第53図) 調査地中央南側で検出した欄列である。柱穴は、径0.3~0.5mを測り、深さは0.2~0.3mである。確認長約5.7m、N87°Wを向く。調査地南側に展開する可能性もあることから、掘立柱建物跡の一面を確認した可能性もある。

溝 S D95701 (第54図) 推定幅1.7m、深さ約0.5m、断面「U」字形の溝である。N88°Wとほぼ真東西方向の溝である。南側斜面にそって堆積した灰黄褐色砂質



第55図 西条-2地区土層断面図



第56图 西条地区出土遺物実測図

土に混入した状況で、瓦器・土師器などが多量に出土した。右京第852次調査地の北東隅に延びる位置にあるが、同調査報告では、この遺構についての記載はない。

2) 西条-2地区(第55図)

西条-1地区での遺物包含層である黒褐色礫土が、西条-2地区では礫の混入が見られなくなり、黒褐色土となる。この層の上面に中世以降の遺構が存在するものと想定して精査した。その下の層であるにぶい褐色砂礫土を掘り込み形で古墳時代から平安時代の遺構が存在すると考え、精査した。その結果、柱穴や土坑などを検出したが、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。右京第852次調査で検出した掘立柱建物跡S B85201は今回の調査地内に延びないことがわかった。また、右京第852次調査で検出した旧小泉川へと下る旧地形の傾斜面(S X51)の続きが認められた。にぶい褐色砂礫土の中から、弥生時代末の高杯が1点(第56図3)出土したことから、旧小泉川への旧地形は弥生時代末以前の地形であると考えられる。

3. 出土遺物(第56図)

西条-1地区の出土遺物は1・2・4～32で、西条-2地区出土遺物は3である。1・2は、遺物包含層(黒褐色礫土)出土遺物で、4・5・7・9は溝S D95703出土、6は柱穴S P64出土、8・10は土坑出土、11～32は溝S D95701出土である。

1・2は、弥生土器壺か甕の底部である。外面タタキを施し、1の内面はナア仕上げ、2はハケ調整する。3は、庄内併行期の高杯である。杯部は横方向のミガキを内外面に密に施す。脚部は、縦方向のミガキを施す。4は、ミニチュアの壺である。5は、須恵器有蓋高杯の蓋である。天井部外面にはヘラ削り後拂掛き沈線を施す。輪状のつまみを付す。6は須恵器杯蓋である。7～9は須恵器杯身である。5～9は、古墳時代中期後半～後期にかけてのものである。10は須恵器杯である。輪状高台を貼り付け、平安時代のものである。11～18は土師器皿である。口径13cm前後と7～10cmのものがある。19～30は瓦器椀である。内面は暗文が粗く施され、外面は指圧痕が残る。28は、内面に粗いハケ調整が施され、その後暗文を施す。外面に暗文が残らず、逆三角形の低い高台が貼り付くことから、12世紀後半頃と考える。31・32は瓦質の三足羽釜である。

4. 小結

右京第852次調査の成果などから、今回の調査で確認した黒褐色礫土が遺物包含層であると考え、掘削を行ったが、包含層上面から掘り込み遺構(S D95701)の存在が認められ、右京第956次西条地区の調査成果を考え合わせると、今回の調査地付近から阿弥陀寺付近にかけての高台には遺構面が2面存在することがわかった。

中世の溝S D95701は真東西方向を向いており、出土した遺物は南側からの流れ込みによるものであることから、区画溝的なものとする。下層遺構では掘立柱建物跡や横列に伴って不明遺構S X95702・95704を検出したが、検出状況から、これらは竅穴式住居跡の可能性が高く、西条

地区の高台には広範囲に集落が存在するものと思われる。

(岡崎研一)

(11)長岡京跡右京第957次調査(7AN00R-8・尾流地区)

・下海印寺遺跡・西山田遺跡

1. はじめに

今回の調査地は、長岡京跡の条坊復原によると、右京七条四坊および西四坊大路に想定される位置にある。また、縄文時代から中世にいたる集落遺跡として知られている下海印寺遺跡の範囲にも含まれている。

調査は、小泉川に面する河岸段丘上及び一段低い水田部で実施し、縄文時代から近世に至る時期の遺構・遺物を検出した。

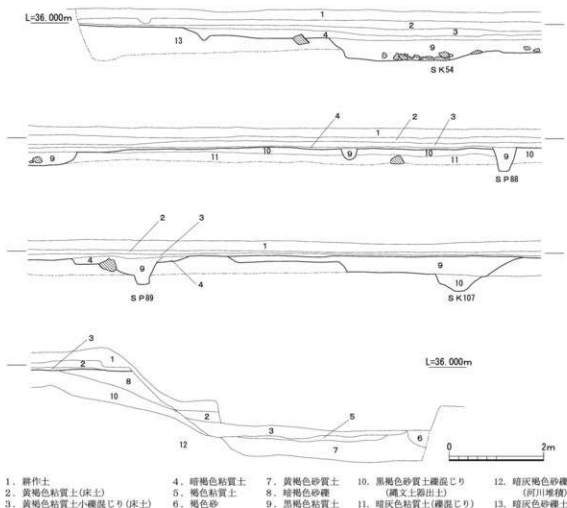


第57図 尾流地区調査トレンチ配置図

2. 調査概要(第57・58図)



第58図 尾流地区遺構配置図



第59図 尾流地区土層断面図

1) 縄文時代

調査地の中で、河岸段丘上の南端部付近では、縄文土器片を含む暗褐色の砂質土層が部分的に認められた。この範囲の中で後期の土坑4基と晩期の土坑1基を検出した。

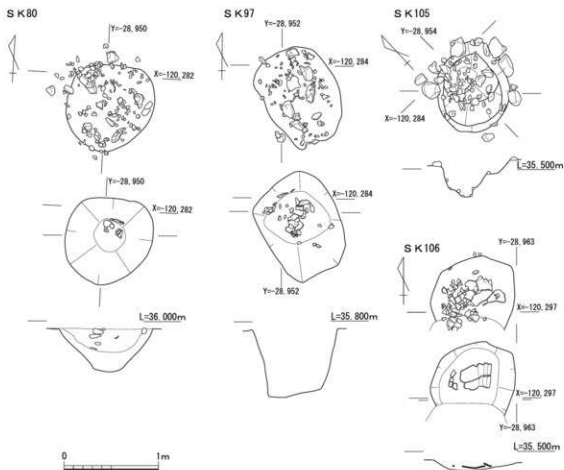
土坑 S K 80 (第60図) 調査地の中央で検出した。長軸0.92m、短軸0.91mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.44mを測る。縄文時代後期と考えられる。

土坑 S K 97 (第60図) 土坑 S K 80の南西で検出した。長辺1.05m、短辺0.8mの平面規模で、検出面からの深さ0.7mを測る。土器を立てた状態で検出した。縄文時代後期と考えられる。

土坑 S K 105 (第60図) 土坑 S K 97の西で検出した。長辺0.52m、短辺0.43mの平面規模で、検出面からの深さ0.4mを測る。縄文時代後期と考えられる。

土坑 S K 107 土坑 S K 97の東で検出した。長辺1.9m、短辺0.67mの平面規模で調査地の南側に広がっている。縄文時代後期と考えられる。

土坑 S K 106 (第60図) 調査地西よりで検出した弥生時代の堅穴式住居跡 S H 58の床面下層から検出した。長軸1.32m、短軸0.85mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.12mを測る。深鉢を横位に埋めた状態で検出した。縄文時代晩期と考えられる。



第60図 尾流地区土坑S K80・97・105・106発掘図

2) 弥生末～古墳時代

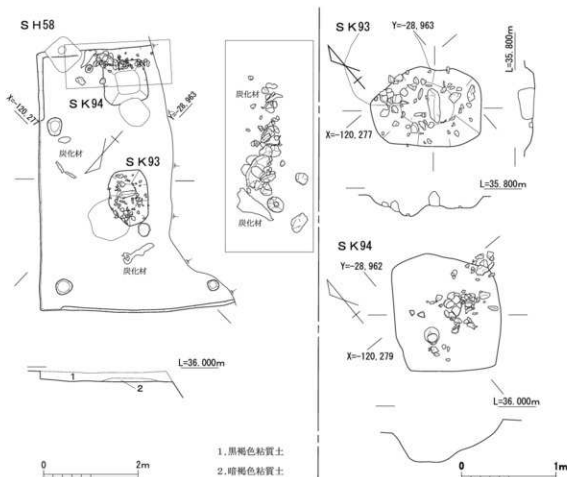
竪穴住居跡1基とその住居内の炉跡・貯蔵穴、周辺部で土坑1基、ピット群などを検出した。

竪穴式住居跡 S H58 (第61図) 調査地の西よりで検出した。南半を小泉川の氾濫によって削られている。弥生時代終わり頃のもので、一辺の長さ約5mの方形の住居と考えられる。床面からは、炭化した木材片や赤く焼けた土器とともに、これらに覆いかぶさるような状態で土の塊が出土した。炉跡S K93の南では崖面の上で砥石が出土している。これらの検出状況から、屋根構造の上には土が載っていたと考えられ、火災があった段階で火を受けて倒壊したと考えられる。住居内からは中央に平面方形の炉跡S K93と、南東よりで平面方形の貯蔵穴S K94を検出した。また、住居跡東半部の埋土中から、幅4mm、長さ11.5mmの水晶原石1点が出土した。

炉跡 S K93 (第61図) 平面1.15×0.8m、深さ20cmを測る。炉の中央部に長軸37cm、幅12cm、高さ17cmの石を仕切りのように立てている。炉内の石は焼けており、底には炭が残っていた。

貯蔵穴 S K94 (第61図) 平面0.95×0.85m、深さ35cmを測る。貯蔵穴の南東辺の上、壁溝との間に20cm幅の床面があり、複数の壺が置かれた状態から倒れて割れた状態で出土した。貯蔵穴の中からは、壺が立位で置かれた状態で出土し、その上に前述の壺の破片が流れ込んでいた。

また、北西辺に2基と北東辺で1基の柱穴、周壁溝の一部を検出した。柱穴の直径は25～30cm、深さ10cmを測り、周壁溝の幅は4～8cm、深さ3～5cmを測る。



第61図 尾流地区竪穴式住居跡 S H58・土坑 S K93・94実測図

土坑 S K54 調査地の東南よりで検出した。東西 5m、南北 3m の平面規模で、調査地の南側に広がっている。土坑内からは弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器等が出土した。このほかに滑石製の白玉 1 点が出土した。表面淡緑灰色を呈す。直径 3.5mm、長さ 3.2mm を測り、1mm の穿孔を施す。

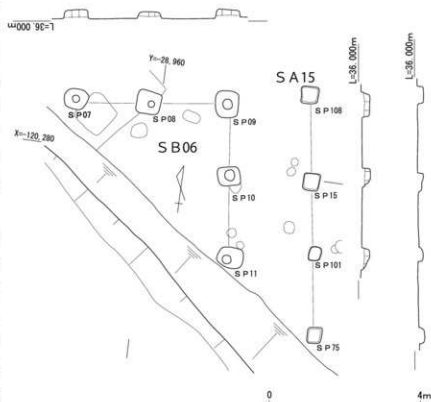
3) 奈良時代

掘立柱建物跡 3 棟、土坑 1 基を検出した。これらの遺構はそれぞれの辺が平行していることから、同じ時期のものと考えられる。その方位は真北から約 10 度西に傾いている。

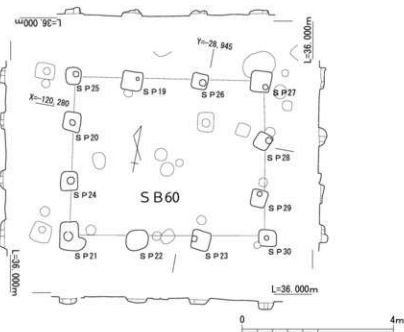
掘立柱建物跡 S B06 (第 62 図上) 南半を小泉川の氾濫によって削られているため、全体の規模は不明であるが、東西 4m の 2 間、南北 4.07m の 2 間を検出した。柱の掘形は平面方形を呈し、柱穴 S P 07 が東西 65cm、南北 55cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 18cm を測る。柱穴 S P 08 は東西 65cm、南北 64cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 17cm を測る。柱穴 S P 08 は東西 65cm、南北 64cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 17cm を測る。柱穴 S P 09 は東西 62cm、南北 72cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 25cm を測る。柱穴 S P 10 は東西 58cm、南北 52cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 27cm を測る。柱穴 S P 11 は東西 70cm、南北 56cm で、深さ 20cm を測り、柱の直径 24cm を測る。柱間の寸法は東西の柱穴 S P 07・08・09 がそれぞれ 2.0m、南北の柱穴 S P 09・10 が 1.87m、

柱穴 S P10・11が2.2mを測る。

柵列 SA15 (第62図上) 掘立柱建物跡 S B06の東で南北に4基、3間分の柱穴を検出した。柱の掘形は、柱穴 S P108が東西・南北ともに47cmで深さ15cmを測る。柱穴 S P15は東西22cm、南北23cmで、検出した深さは20cmを測る。柱穴 S P101は東西33cm、南北40cm深さ15cmを測る。柱穴 S P75は、東西38cm、南北42cmで深さ15cmを測る。柱間の寸法は掘形の中心で測ると、柱穴 S P108・15が2.25m、柱穴 S P15・101が1.9m、柱穴 S P101・75が2.15mと不揃いである。

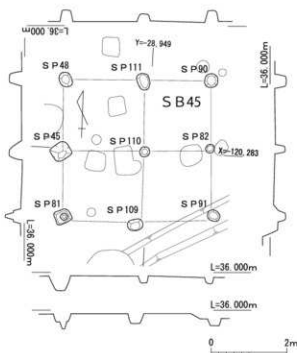


掘立柱建物跡 S B60 (第62図下) 掘立柱建物跡 S B06の東で検出した東西5.2mの3間、南北4.3mの3間で東西に長い建物である。柱の掘形は掘立柱建物跡 S B06より小さい規模で平面方形を呈している。一辺が40~75cm、深さ20~30cmを測り、柱の直径は15~20cmを測る。柱間の寸法は不揃いで、東西が平均1.73m、南北で平均1.43mとなる。

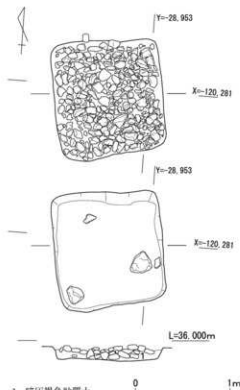


掘立柱建物跡 S B45 (第63図) 掘立柱建物跡 S B60と重複して検出した東西4.0mの3間、南北3.63mの2間で東西に長い竪柱建物で

第62図 尾流地区掘立柱建物跡 S B06・60、柵列 SA15実測図



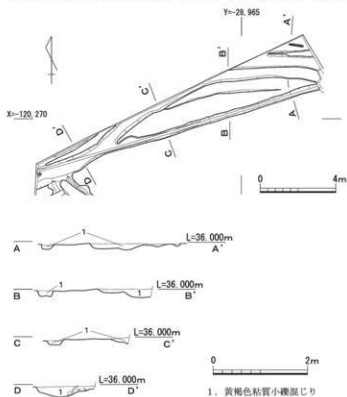
第63図 尾流地区掘立柱建物跡 S B45実測図



1. 暗灰褐色粘質土

第64図 尾流地区土坑 S K05実測図

ある。柱の掘形はS P45・81を除き平面円形で、直径が20~40cmを測り、深さ30~50cmを測る。方位は、他の建物が約10度西に傾いているに比して真北から約15度西とほぼ真北に近い。柱間の寸法は不揃いで、東西が平均2.0m、南北で平均1.8mとなる。



1. 黄褐色粘質小礫混じり

第65図 尾流地区中・近世溝群実測図

土坑 S K05 (第64図) 調査地の中央部で検出した東西約1.15m、南北約1.2m、深さ0.15mを測る方形の土坑である。中には直径3cmから10cmの円礫が全面に敷き詰められていた。遺物は出土しなかった。

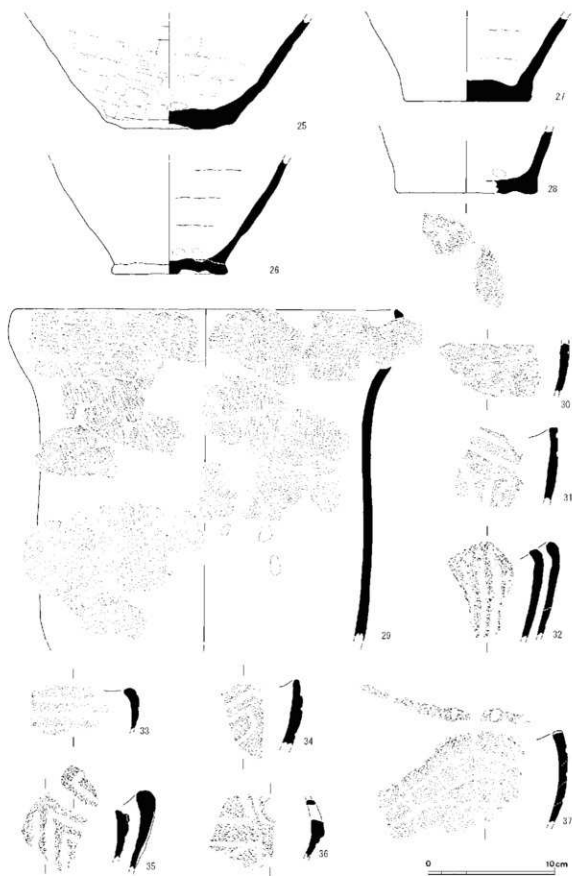
4) 近世 (第65図)

耕作に伴う溝・暗渠を検出した。調査地の北よりで検出した溝群は、北側の道路に平行しており、現在の水田地割りが出来る前の用排水路と考えられる。

(戸原和人)



第66図 尾流地区出土遺物実測図(1)



第67图 尾流地区出土遺物実測図(2)

3. 出土遺物(第66~70図)

今回の調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の住居跡、古墳時代の土坑、奈良時代の掘立柱建物跡など各時代の遺構から遺物が出土した。以下、時代ごとに主な遺物について記述する。

1) 縄文時代(第66~68図)

本調査では土坑および包含層より縄文時代後期初頭を中心として比較的まとまって縄文土器が出土した。しかし、表面が磨滅しているものも少なくない。このため、縄文原体が判別可能なものを中心に記述した。

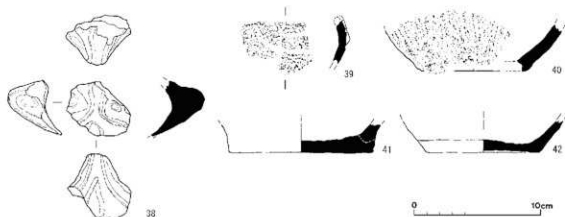
土坑 S K 80 出土土器 (1~15) 大部分は小片であり、全体の文様意匠は復原しえないが、総じて後期初頭の所産であると考ええる。1~3・7は口縁部である。1はRLの磨消縄文意匠を施す平口縁土器である。4・8~13は有文胴部である。11のみ磨消縄文意匠を施す。14は無文の胴部である。15は底径11.0cmを測る平底土器である。

土坑 S K 97 出土土器 (16~28) 16は平縁の無文土器で後期初頭に属するものと思われる。17は平口縁のRLの磨消縄文土器である。中津式と考えられる。後期初頭の所産であると思われる。18は平縁の沈線文土器である。19は磨消縄文を施す深鉢の胴部である。20・22は同一個体と思われる。北白川C式の大波状口縁深鉢の系譜を引く富士山型の波状口縁土器で、退化した口縁部文様帯を有する。中津式通有の磨消縄文意匠とはやや異なり、未完成といってもよいもので、型式的に古い要素を備えている。21はRLの「J」字の磨消縄文を有する平口縁土器である。23は粗いナデ調整の平縁無文土器である。24~28は平底深鉢である。24は底径7.0cmを測る。25は底径11.4cmを測る。26は約10.0cm、27は約10.0cmを測る。28は底径11.0cmを測る、外底面には木葉圧痕が見られる。

土坑 S K 105 出土土器 (30) 30は沈線区画内に刺突を施す胴部片で、中津式と考えられる。

土坑 S K 106 出土土器 (29) 29はキャリバー状の器形を呈する無文土器で、口縁部は横位、胴部は縦位にRLの燃糸文を施す。また、一部条痕がみられ、里木Ⅱ式と考えられる。S K 106より単独で出土した。

柱穴出土遺物 掘立柱建物跡 S B 60北東隅 (S P 27) から2m東の柱穴から石鏃1点が出土し



第68図 尾流地区出土遺物実測図(3)

た。凹基式の二等辺三角形の形をした打製石鏃で、打撃痕が深く入り、縄文期の可能性がある。基部の幅1.1cm、長さ2.6cmを測る。

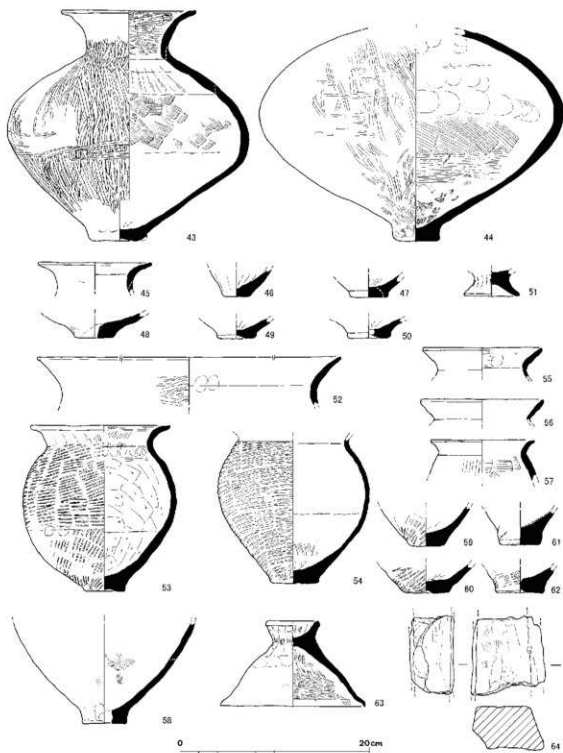
包含層出土土器(31~42) 31・32・35は沈線文を有する波状口縁土器である。35は口縁端にも沈線文を有する。後期初頭に属し、中津式と考える。34・37は磨消縄文意匠を施す波状口縁土器である。36はRLの磨消縄文土器で穿孔を行う。37は波頂部にキザミを有し、LRの縄文を用いる。38は双耳壺の突起部分である。沈線文を施し、両側面は指頭による押圧がみられる。中津式か。39は粘土隆帯に沿って沈線が施される深鉢である。口縁付近で内湾する器形から中津式のものと考えられる。40は縦位のRL熱糸文が施されており、破断面は擬口縁状を呈する。里木Ⅱ式と考えられる。41・42は平底深鉢である。41は底径約9.0cm、42は底径約9.0cmを測る。(大本明弥)

2) 弥生時代(第69図)

竪穴式住居跡 S H58出土土器(43~63) 43は広口壺でタマネギ形の体部にラッパ状に開く口縁部を有する。調整は、外面が縦方向のヘラミガキを、胴部で横方向のミガキを施す。体部内面はハケ状工具により斜め方向に掻き上げ、頸部に向かって絞り込みの跡をナデ調整している。器面に残るハケ原体の幅は2cmである。頸部から口縁にかけては丁寧な横方向のヘラミガキを施している。口径14cm、頸部径8.6cm、腹径25.5cm、底部径5.5cm、器高24.5cmを測る。44は頸部から上を欠損している。成形の技法、調整の手法ともに43同様である。腹径32.4cm、底部径3.7cm、残存高22.5cmを測る。45は口頸部のみである。口径12cm、頸部径7.9cm、残存高3.2cmを測る。底部には、大きく平ながら立ち上がるもの48~50と、細く開くもの46・47がある。また、ドーナツ状に中央部が凹むもの49・50がある。46は底部径2.6cm、残存高2.9cmを測る。47は底部径4.0cm、残存高2.3cmを測る。48は底部径4.0cm、残存高3.4cmを測る。49は底部径3.4cm、残存高2.0cmを測る。50は底部径3.9cm、残存高1.7cmを測る。51は脚台で底部径5.7cm、残存高2.7cmを測る。

壺には外面ヘラミガキを施す52と、外面ハケ調整する55~58と、タタキを施す53・54、59~62がある。52は甕口縁部で頸部外面に横方向のヘラミガキを施し、内面はナデ調整している。口径31.9cm、頸部径27.0cm、残存高4.9cmを測る。55は口径12.5cm、頸部径9.0cm、残存高3.1cmを測る。56は口径12.9cm、頸部径10.5cm、残存高2.4cmを測る。57は口径10.8cm、頸部径9.3cm、残存高4.3cmを測る。58は内外面にハケ調整を施す。底部径4.4cm、残存高10.6cmを測る。53は完形品で、体部外面の下半部は斜め方向のタタキを施し、上半部では横方向のタタキを施しており分割成形の可能性もある。内面は頸部下半までケズリを施している。口径14.5cm、頸部径11.2cm、腹径16.3cm、底部径4.3cm、器高17.5cmを測る。54は頸部から上を欠損している。体部外面は斜め方向のタタキを施し、内面はハケ調整の後ナデを施している。頸部径11.6cm、腹径16.0cm、底部径5.0cm、残存高15.3cmを測る。59は底部径3.0cm、残存高4.1cmを測る。60は底部径4.8cm、残存高3.0cmを測る。61は底部径3.5cm、残存高4.4cmを測る。62は底部径5.0cm、残存高2.5cmを測る。63は蓋で上縁径5.3cm、頸部径4.5cm、口径15.2cm、器高9.0cmを測る。

竪穴式住居跡 S H58出土石器 64は砂岩質の砥石である。残存長8.0cm、高さ4.6cmを測る。

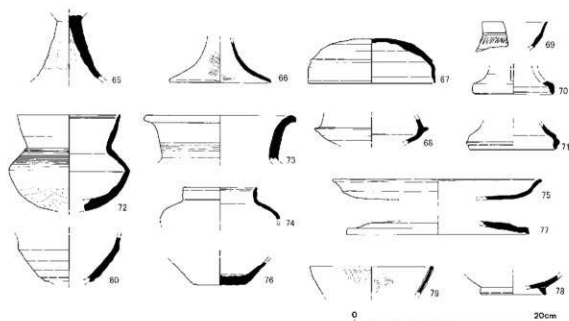


第69図 尾流地区出土遺物実測図(4)

2面が使用のため平滑になっている。

3) 古墳時代(第70図)

この時代の土師器は、柱穴内出土の高杯脚65・66の2点がある。須恵器は、土坑S K54出土の杯蓋67、杯身68、無蓋高杯69、高杯脚70、丸底壺72、広口壺73とピット出土の高杯脚71、包含層



第70図 尾流地区出土遺物実測図(5)

出土の短頸壺74などがある。

67は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。68・69は小片である。70は脚柱部に透孔の穿孔をもち、底部径8.2cm、残存高2.55cmを測る。71は底部径9.0cm、残存高2.7cmを測る。72は口径10.7cm、器高10.2cmを測る。73は口径8.0cm、残存高4.7cmを測る。74は口径7.4cm、残存高3.4cmを測る。

4) 奈良時代(第70図)

掘立柱建物跡S B60の柱穴S P21より土師器皿75、須恵器底部76、包含層中より須恵器杯蓋77などが出土している。75は口径26.0cm、器高2.1cmを測る。内外面ともナデ調整による。76は底部径5.5cm、残存高2.4cmを測る。77は宝珠つまみ部を欠くが口径19.2cm、残存高1.4cmを測る。

その他の遺物として包含層中、近世溝中より緑釉陶器碗78、青磁碗79、天目茶碗80等が出土している。78は軟質で灰白色の胎土に明るい緑釉を施している。底部径6.8cm、残存高2.1cmを測る。79は近世溝中より出土した龍泉窯系の鍋蓮弁の破片である。口径12.8cm、残存高3.0cmを測る。80はS P07の上面で出土した。口縁・高台部ともに欠損している。

4. 小結

今回の調査では、長岡京に関する遺構は確認できなかったが、縄文時代、弥生時代、奈良時代と各時代の遺構や遺物を確認することができた。

縄文時代の土坑の検出は、下海印寺遺跡の集落が現在の小泉川の付近まで広がっていることが明らかとなった。弥生時代の住居、奈良時代の建物跡の存在は、それぞれの時代の集落の広がりを考える上で大きな手がかりと言える。

(戸原和人)

3. まとめ

第二外環状線道路予定地は、小泉川の氾濫原から段丘にかけて存在している。そのため、試掘調査によって、河川による削平の有無を確かめることが1つの大きな目的となった。そのため、平成20年度の発掘調査も前年度に引き続き、試掘調査と、試掘調査によって遺構の広がり認められた地域の面的調査の2つの性格の調査を実施した。

試掘調査である樽井地区(7ANOTI-2)、下内田地区(7ANOOD-7)、菩提寺地区(7ANOBZ-2)、駿河田地区(7ANPSG-2・3)、尾流・方丸地区(7ANOOR-7)、荒畑地区(7ANPAR-3)では、遺物をわずかに含む河川跡や自然地形などの一定の知見を得ることができた地区もあるが、明確な遺構は検出できなかった。

同じく試掘調査である方丸地区(7ANOHR-10・11)、高山地区(7ANPTY-1、7ANPSH-1)、西条地区(7ANOSJ-3)の調査では、良好な遺構面や遺物を検出することができた。

方丸地区の右京第947次調査(7ANOHR-10)では、縄文時代の土坑や中世の遺物を含む落ち込みの一部を検出することができた。右京第956次調査(7ANOHR-11)では獣骨を含む土坑を検出するとともに、律令期の貴族の装束に用いられた黒色の石材を用いた巡方の未成品が出土した。装着時に必要な糸を通す穴は作り出されておらず、表面の研磨も途中段階のものである。この地域は京外に当たることから、周辺に石帯を作る工房があった可能性も指摘できる。

高山地区(7ANPTY-1、7ANPSH-1)の発掘調査では、2m以上の竹林の盛土の下から遺構包含層を確認することができた。古墳時代の須恵器・土師片が丘陵斜面に分布することから、周辺に古墳が存在する可能性が指摘できる。

西条地区(7ANOSJ-3)は現在の集落の一部が移転した跡地にあたり、微高地上に存在する。幅5.6mの近世から中世の遺物を含む溝や弥生時代末、古墳時代後期の遺構などを検出し、部分的に遺構面が上下2枚あることも確認できた。

平成20年度以前の周辺地域の調査結果を受けておこなわれた面的な調査は、上内田地区(7ANOKD-8)、伊賀寺地区(7ANOOD-7)、西条地区(7ANOSJ-4)で実施した。

上内田地区(7ANOKD-8)では弥生時代末から始まる流路跡と古墳時代の土坑群を検出することができた。

伊賀寺地区(7ANOOD-7)では、弥生時代末のベット状遺構を持つ大型の壑穴式住居跡を検出した。また、地層確認の断割りによって、調査区の遺構検出面が縄文時代後期以後に形成されたことがわかった。

西条地区(7ANOSJ-4)は平成17年度の右京第957次調査地に隣接する調査区で、古墳時代後期、平安時代末の遺構を検出することができた。

今回の調査によって考古学的な知見だけではなく、地形発達史を復原することも可能となった。地形と遺構の立地関係など多くの基礎的資料を得ることができた。西条地区、高山地区などは今後の第二外環状道路関連の発掘調査によってさらに遺跡の性格が明らかになってくるものと考えられる。

(中川和哉)

《引用・参考文献》

- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第113冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2005
- 岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」（「京都府遺跡調査報告集」第133冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2009
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第118冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2006
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第124冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2007
- 高野陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要（7ANSTE-18）」（「京都府遺跡調査概報」第77冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1997
- 長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1996
- 中川和哉「算用田遺跡」（「京都府遺跡調査概報」第53冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1996
- 中川和哉ほか「京都府遺跡調査報告書（下植野南遺跡）」第25冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- 中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」（「京都府遺跡調査報告集」第131冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2009
- 中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」（「京都府遺跡調査報告集」第126冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2008
- 藤井整・石井清司ほか「京都府遺跡調査報告書（下植野南遺跡Ⅱ）」第35冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004
- 増田孝彦「長岡京跡右京第910次（7ANOIR-5・NNT-3地区）・941次（7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区）・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」（「京都府遺跡調査報告集」第133冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2009

5.長岡京跡右京第971次(7ANSID-5地区)

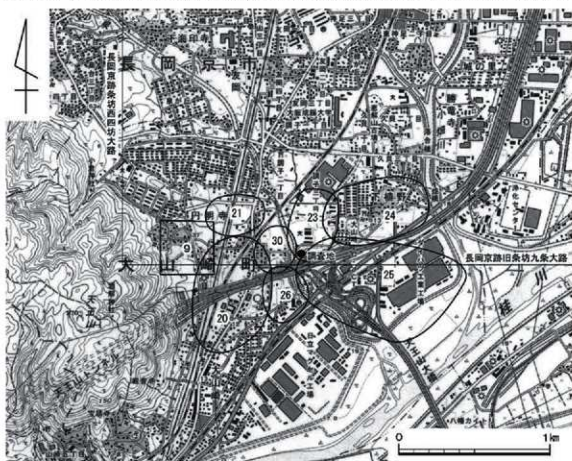
・松田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部の依頼を受けて、主要地方道大山崎大枝線の改良工事に伴い実施したものである。

調査対象地は乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田内にあり、長岡京条坊復原図の旧条坊によれば右京九条二坊十三町にあたるが、新条坊では長岡京外となる。また、京都府・大山崎町の遺跡地図では、縄文時代から中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれ、下植野南遺跡に接する位置にある。

この松田遺跡では、調査地北側の大山崎中学校が、第二外環状線道路建設に伴い改築されることになり、大山崎町教育委員会により新校舍建設の予定地内の発掘調査が平成20年に実施された



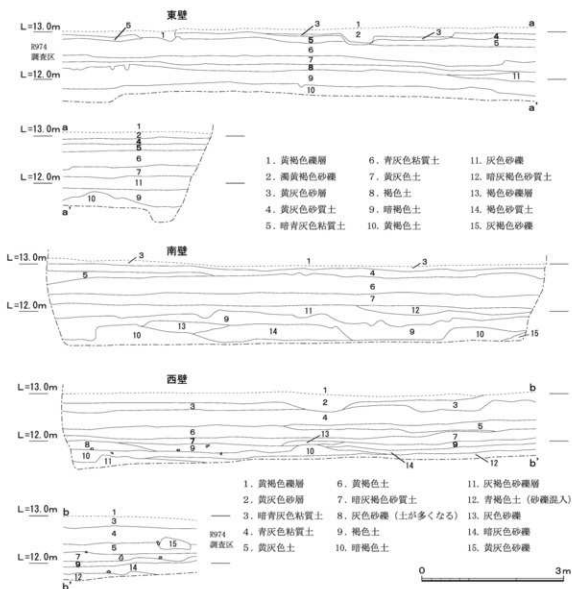
第1図 調査地位位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | |
|-----------|------------|----------|-----------------|
| 23: 松田遺跡 | 25: 下植野南遺跡 | 24: 宮脇遺跡 | 30: 金蔵遺跡 |
| 26: 算用田遺跡 | 21: 久保川遺跡 | 20: 百々遺跡 | 9: 円明寺跡(九条家屋敷跡) |

(長岡京跡右京第933次調査)。この調査では、縄文時代から弥生時代の流路跡、土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡10棟・掘立柱建物跡4棟・流路・溝・土坑、中世から近世の溝・掘立柱建物跡3棟などが検出されている。

当調査研究センターでは、平成21年1月から3月に、調査予定地内に遺構が存在するかを確認するため、長岡京跡右京第963次調査として確認調査を実施したところ、古墳時代の竪穴式住居跡と推定されるものを2か所で検出した。今回の調査は、右京第963次調査の調査地のうち、南側を中心に主要地方道大山崎大枝線新設改良工事に伴う発掘調査として実施したものである。

現地調査は、調査第2課調査第3係長石井清司、専門調査員石尾政信が担当した。調査期間は平成21年4月21日から6月10日までを要した。調査面積は150㎡である。現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げたい。



第2図 調査地土層図

なお、本報告書は石尾が執筆した。図に記した国土座標は日本測地系(旧座標)である。

2. 調査の概要(第3図)

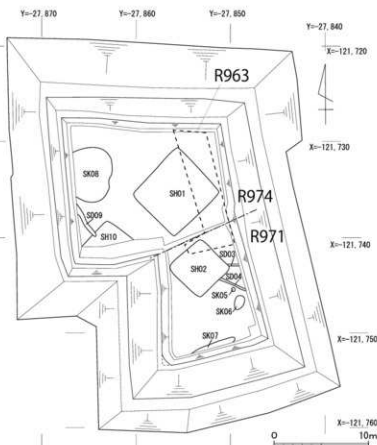
調査地は工場跡地のため、約3mの盛土層があり、その下層で小泉川の氾濫による砂礫層が約2m堆積していることが右京第963次調査で確認されていたため、これらの盛土層・堆積層を重機を使用して除去した。また、砂礫層の下に青灰色系の砂質土・粘質土が0.5m前後堆積し、その下の黄灰褐色土、褐色土も重機を使用して除去した後、暗褐色土の遺物包含層を人力で除去したうえで、遺構検出に努めた。その結果、調査地の東部は黄褐色粘質土をベースとして遺構が検出されるが、西部は黄褐色粘質土を挟り込んだ砂質土や砂礫混入土層面から遺構が検出された。小泉川の氾濫による砂礫層からは、近世の陶器、土師器、瓦などが若干採集できた。青灰色粘質土、黄灰褐色土からは土師器碎片がわずかに採集できたが、時期は不明である。

検出した遺構には、右京第963次調査で確認していた堅穴状遺構を古墳時代後期の堅穴式住居跡(S H02)として確認し、その規模を明らかにするとともに、新たに土坑2か所(S K05・06)、溝(S D03・04)を検出した。以下、検出した遺構について記述する。

3. 検出遺構

1) 古墳時代の遺構

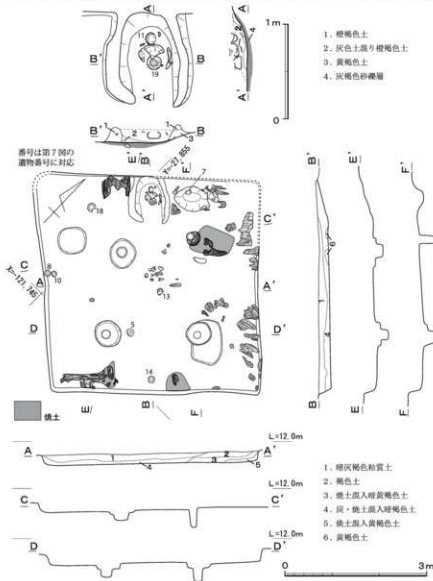
堅穴式住居跡 S H02(第4図) 検出面からの深さ約20cm、一辺約4.5mの方形堅穴式住居跡である。中軸線が約45度西に振れている。主柱穴を4か所で検出した。周壁溝はない。北西辺の中央部に土師器の壺を支脚として据え置いた竈が付く。竈は、遺構のベース面である砂礫層を掘り残し、その上に粘土を張り付けて周壁としている。竈は、長さ・幅ともに約1mを測る。煙出しは不明である。竈の東側には、0.7×0.5m、深さ約0.2mの貯蔵穴があり、中から須恵器杯身(第7図12)と、



第3図 調査地平面図

貯蔵穴の東辺沿いで土師器甕の口縁部が出土した。また、貯蔵穴の北側でも須恵器杯蓋(第7図6)が出土している。住居床面上では、土師器甕(第7図18)や完形品の須恵器杯身・杯蓋(第7図4・7~10・13・14)が散在しており、土師器は被熱を受けた状況であったが、須恵器は熱を受けた形跡は認められない。床面付近では数多くの焼土を検出し、住居跡の竈付近と北東辺・南東辺に沿って、多数の炭化材を検出した。このような炭化材・焼土の検出状況から、この竪穴式住居は焼失住居と判断できた。床面出土の遺物が被熱を受けたものと受けていないものがあり、特に竈周辺の土師器の甕の底部のみが明瞭に二次焼成されていた。住居の屋根が焼け落ちた際に、床面上に置かれた場所の違いで被熱しなかったのか、土師器は竈に置いて煮炊きに使用したのか、須恵器だけが鎮火後に置かれたのか、いくつかの可能性が考えられるが、特定できない。

土坑 SK05 (第5図) 竪穴式住居跡 S H02の南東で検出した土坑である。直径約1m、深さ14cmの円形土坑である。検出面で土師器高杯の杯部が逆転して出土した。埋土は褐色土である。この褐色土は竪穴式住居跡 S H02の東部で見られる第2層褐色土と類似している。



土坑 SK06 (第5図) 竪穴式住居跡 S H02の南東で検出した。長径32m、短径1.9m、深さ0.5mの長円形土坑である。埋土は3層あり、最下層に散乱して土師器の甕の底部片、須恵器片や土師器片が出土した。廃棄土坑と推定される。

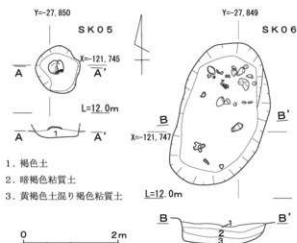
2) 時期不明の遺構
溝 S D03 竪穴式住居跡 S H02の北東辺の南部から東に延びる素掘り溝である。幅15cm、深さ5cmを測る。少量の焼土が出土した。

溝 S D04 竪穴式住居跡 S H02南東辺から南東に延びる素

第4図 竪穴式住居跡 S H02実測図

掘り溝である。幅20cm、深さ5～10cmを測る。溝S D03と同様に少量の焼土が出土した。土師器細片が出土したが、時期のわかるものはなかった。これら2条の溝は、焼土が出土しているが、竪穴式住居跡SH02とは関連しないと推定される。

溝S D07 調査地の南で検出した長さ4.8m、深さ0.2mの東西方向の溝である。遺物は出土していない。



第5図 土坑SK05・SK06実測図

4. 出土遺物(第6・7図)

小泉川の氾濫による砂礫層からは土師器片、陶器、瓦が出土した。青灰色粘質土・黄灰褐色土から少量の土師器片が出土したが、時期は不明である。褐色土・暗褐色土や西南部の黄褐色土を挟り込んだ砂質土・砂礫混入土からも土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。

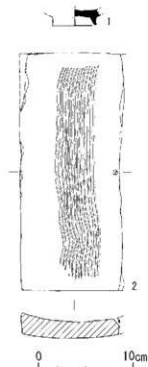
遺構に伴う遺物として、竪穴式住居跡SH02と土坑SK05から古墳時代後期の土器が出土している。以下に主な遺物について記述する。

1) 砂礫層出土の遺物(第6図)

1は陶器の底部である。底部径4.7cmを測る。内面に淡乳灰色の釉薬がかかり、外面は無釉である。2は平瓦である。凹面に櫛状の工具による幅4.2cmの掻線がみられる。長さ15cm、残存幅約10cm、側面の厚さ2.3cmを測る。中央付近に釘穴が見られるので近世の棧瓦と推定される。これらは江戸時代(近世)のものである。

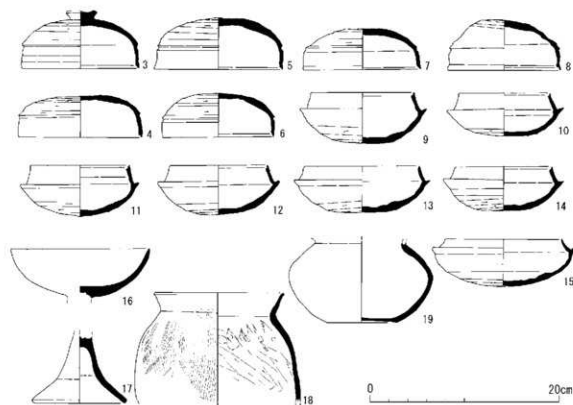
2) 竪穴式住居跡SH02出土遺物(第7図)

3はツマミが付く須恵器有蓋高杯蓋である。口径12.2cm、器高6.15cmを測る。胎土に砂粒を含み、焼成が良好で暗灰色を呈す。竈の北東から出土した。残存率は全体の60%程度で、混入の可能性がある。4は須恵器杯蓋である。口径12.9cm、器高4.35cmを測る。胎土に黒色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。竪穴式住居跡内の床面からやや浮いた状態で点在して出土し、ほぼ完形品に復原できる。5は須恵器杯蓋である。口径13.5cm、器高5.45cmを測る。胎土に2mm以下の白色粒子を含み、焼成が良好で暗灰色を呈す。住居内南西部の柱穴の北東の床面から出土した完形品である。6は須恵器杯蓋である。口径11.6cm、器高4.6cmを測る。胎土に5mm以下の砂粒を含み、焼成が良好で明灰色を呈す。貯蔵穴の北西部に接して出土した。ほぼ完形である。7は須恵器杯蓋である。口径12.3cm、器高4.3cmを測る。胎土に白色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。



第6図 出土遺物実測図(1)

す。竈の北東から出土した。ほぼ完形のものである。8は須恵器杯蓋である。口径11.7cm、器高5.35cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く灰色～暗灰色を呈す。住居跡南西辺沿いの中央近くの床面から出土した。完形品である。9は須恵器杯身である。口径10.8cm、器高5.4cmを測る。胎土がやや粗く、焼成良好で灰色を呈す。北東柱穴の近くの床面から出土した。ほぼ完形品である。10は須恵器杯身である。口径9.5cm、器高4.6cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く灰色を呈す。住居跡の南西辺沿いの床面で、8の須恵器杯蓋と並んで出土した。完形品である。11は須恵器杯身である。口径10.3cm、器高5.4cmを測る。胎土が良好で、焼成も良く灰色を呈す。竈の燃焼部北から出土した。完形品である。12は須恵器杯身である。口径10.2cm、器高5.25cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良く明灰色を呈す。貯蔵穴内から出土した。ほぼ完形品である。13は須恵器杯身である。口径12cm、器高4.9cmを測る。胎土に3mm以下の黒色粒子を含み、焼成がやや甘く淡灰色を呈す。住居跡の中央部で、床面より若干浮いた状態で出土した。完形品である。14は須恵器杯身である。口径10.1cm、器高4.65cmを測る。胎土に5mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成がやや甘く灰褐色を呈す。住居跡の南東辺沿いの中央付近の床面から出土した。ほぼ完形品である。15は須恵器杯身である。口径12.2cm、器高5cmを測る。胎土は密で、焼成も良好で灰色を呈す。住居跡東部の埋土上層から出土した。残存率は約60%である。17は土師器高杯の脚部である。底径9.6cmを測る。竈の内部から出土した。脚部の約半分が遺存している。18は土師器甕である。口縁部が「く」字に外反し口径13.3cm、残存高12.5cmを測る。体部外面にハケ目があり、内面はヘラ削りである。



第7図 出土遺物実測図(2)

体部外面は被熱して暗赤褐色を呈し、内面は暗灰色を呈す。竈の南西部約40cmの床面上で出土した。口縁部と体部下半を欠損する。19は口縁部を欠く土師器壺の体部である。体部径15.3cm、残存高8.75cmを測る。竈内に支脚として置かれていた。被熱して暗赤褐色を呈す。

3) 土坑 S K05出土遺物(第7図)

16は土師器高杯の杯部である。口径14.5cmを測る。土坑 S K05内から口縁を下に向けて出土した。胎土に8mm以下の黒色粒子を多く含み、焼成も良く黒斑があり赤褐色を呈す。脚部は失われているが、杯部は完存している。

5. まとめ

今回の調査で、わかったことは以下のとおりである。

小泉川の氾濫により大量の土砂が上流から運ばれ、この調査地に約2mの砂礫が堆積していることが判明した。砂礫層から出土した陶器・椀瓦から堆積時期は近世であることがわかった。

近世の砂礫層の下には、青灰色粘質土が調査地全体に広がることから、やや安定した時期があり、断面等観察から水田などの耕作地として利用されたと推定できる。この粘質土などから時代を特定できる遺物が出土しなかったため時期は明確にできなかった。

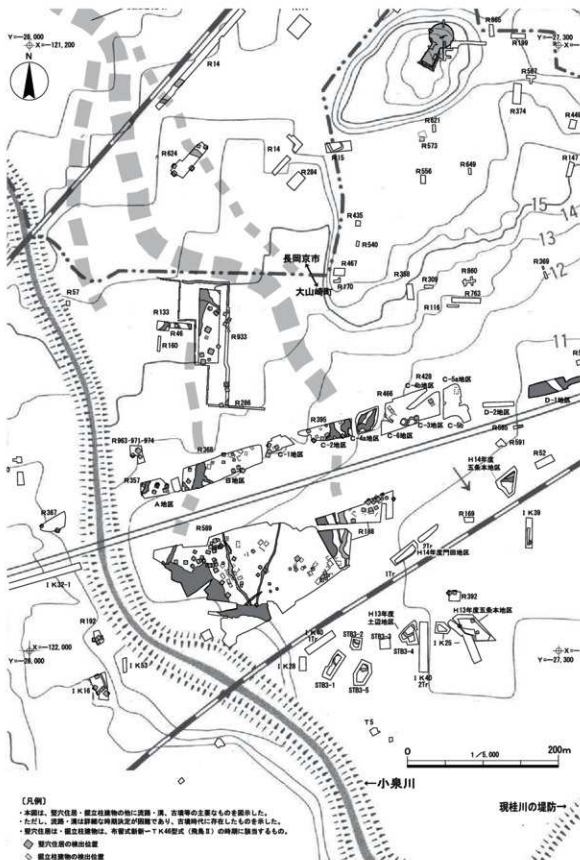
この調査では長岡京期の遺構・遺物は検出されなかった。粘質土等の堆積層で地盤が軟弱であるため利用されなかった可能性が高い。今回の調査地の東側約100mの名神拡幅工事における事前調査(右京第368次調査)では、平安時代前期の掘立柱建物群が検出され、平城宮式軒瓦をはじめ多量の遺物が出土しており、公に近い施設または官の施設と推定されている。また、山城国府跡の可能性も指摘されている。

下層では古墳時代後期の竪穴式住居跡 S H02が検出できた。竪穴式住居跡 S H02は、炭化材や焼土層が検出され、完形の須恵器杯類が住居内から点在して出土したことから、焼失住居と推定した。住居跡の時期は、床面から出土した須恵器杯類の特徴などから陶邑 M T 15の時期と判断した。遺構の項で述べたように、失火による火災なのか、廃棄に伴う火災なのか、不明である。

隣接地の右京第974次調査でも、古墳時代中期の竪穴式住居跡 2基を検出している。今回の調査地が縄文時代～古墳時代の集落跡である松田遺跡の南西端にあたり、縄文時代～古墳時代の集落跡である下植野南遺跡の西北側に隣接する場所である。古墳時代中期～後期にかけては、第8図に示すように、両遺跡とも多数の竪穴式住居跡が検出されている。両遺跡のほぼ中間地点で、同時代の竪穴式住居跡が検出されたことから、古墳時代中期～後期にかけて、松田遺跡と下植野南遺跡が一体となり、大規模な集落が営まれていたことがより明確となった。

注1 調査参加者 松元章徳・川原淳司・武本典子・福島厚子・近澤富美代・梶原恵子

注2 大山崎町教育委員会 林 亨・寺嶋千春・古閑正浩



第8図 周辺調査における遺構配置(古墳時代中期～飛鳥時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡の分布)

『パンフレット 連報展 倭人のムラを掘る——大山崎中学校新校舎の発掘調査から——』

(大山崎町教育委員会発行)を転載・加筆

6.長岡京跡右京第974次(7ANSID-6地区)

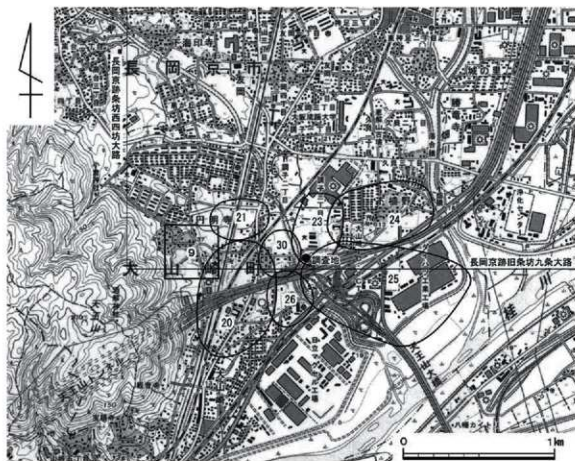
・松田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて、京都縦貫自動車道整備事業に伴い実施した。

調査対象地は、乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田内にあり、長岡京条坊復原図によれば、旧条坊では右京九条二坊十三町にあたるが、新条坊では長岡京外となる。また、京都府・大山崎町遺跡地図によれば、縄文時代から中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれ、下植野南遺跡に接する位置にある。

調査対象地北側の大山崎中学校が、第二外環状線道路建設に伴い、改築されることになり、平成20年度に大山崎町教育委員会により新校舎建設予定地内の発掘調査が実施された(長岡京跡右



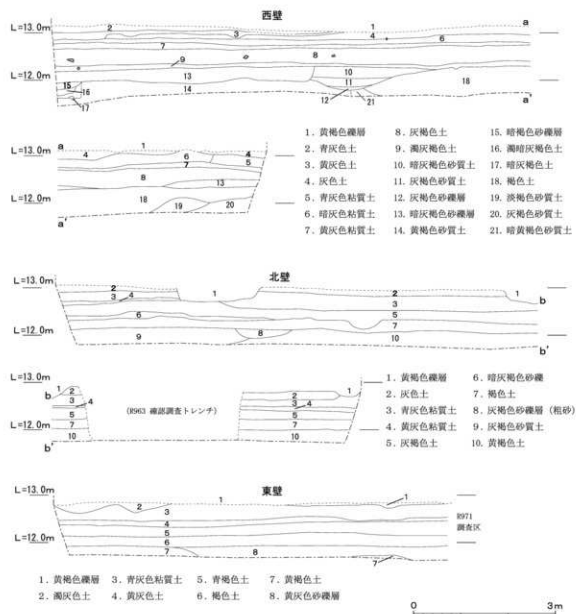
第1図 調査地位位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | |
|-----------|------------|----------|-----------------|
| 23: 松田遺跡 | 25: 下植野南遺跡 | 24: 宮脇遺跡 | 30: 金蔵遺跡 |
| 26: 算用田遺跡 | 21: 久保川遺跡 | 20: 百々遺跡 | 9: 円明寺跡(九条家屋敷跡) |

京第933次)。この調査で縄文時代から弥生時代の流路跡、土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡10棟・掘立柱建物跡4棟・流路・溝・土坑、中世から近世の溝・掘立柱建物跡3棟などが検出されている。

当調査研究センターでは、平成21年1月から3月にかけて、調査予定地内に遺構・遺物が存在するかどうかを確認するため、長岡京跡右京第963次として確認調査を実施したところ、古墳時代の竪穴式住居跡と推定される場所を2か所で検出した。今回の調査地は、右京第963次調査地の北半部分にあたり、右京第971次調査地の北側である。京都第二外環状線道路の橋脚が建設される地点にあたる。

現地調査は、調査第2課調査第3係長石井清司、専門調査員竹井治雄、同石尾政信が担当した。調査期間は平成21年6月1日から7月31日を要した。調査面積は300㎡である。現地調査および



第2図 調査地土層図

整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た^{※1}。また、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた^{※2}。厚くお礼申し上げます。なお、本報告書は石尾が執筆した。遺構図等に記した国土座標は、旧座標(日本測地系)である。

2. 調査の概要(第3図)

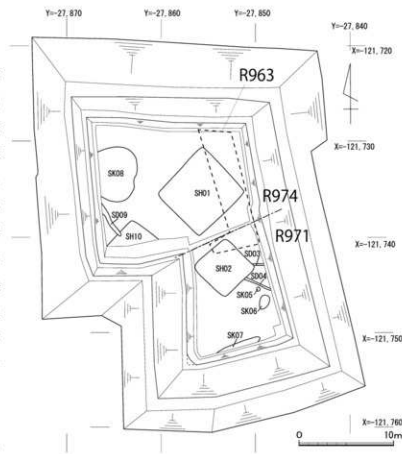
調査地は工場跡地にあたり、工場建設時の盛土層が約3mあり、その下には小泉川の氾濫による砂礫層が約2m堆積していた。まず、これらの上土を重機を使用して除去した。砂礫層の下に堆積する灰色土・青灰色粘質土と、その下の黄灰褐色土・褐色土、遺物包含層である暗褐色土の一部も重機を使用して除去した後、人力で掘削作業を行った。調査地の東部は、黄褐色粘質土をベースとして遺構が検出される。調査地の北部は、東から西へと黄灰色から青灰色に水分のために変色していく粘質土の上面で遺構が検出される。中央から南西では、黄褐色粘質土を振り込んだ砂質土や砂礫混入土の上面から遺構が検出された。小泉川の氾濫による砂礫層からは、近世の陶器や土師器が若干採集できた。青灰色粘質土・黄灰褐色土からは、土師器細片がわずかに採集できたが、時期のわかるものはなかった。

検出した遺構には、竪穴式住居跡2か所(SH01・SH10)、土坑(SK08)、溝(SD09)と若干の小土坑がある。以下に検出した遺構について記述する。

3. 検出遺構

1) 古墳時代の遺構

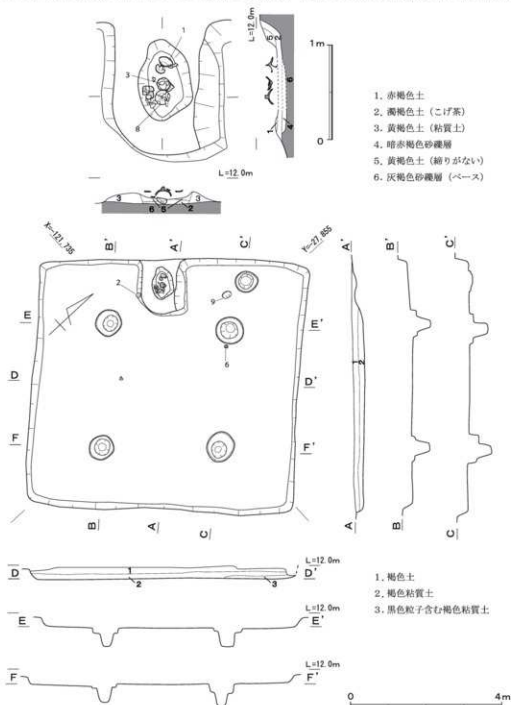
竪穴式住居跡SH01(第4図) 検出面からの深さ約30cm、6.6×7.1mの方形竪穴式住居跡である。中軸線が約43度西に振れている。直径約0.7mの支柱穴を4か所検出した。明瞭な周壁溝はない。北西辺の中央部に竈があり、竈の燃焼部中央から土師器高杯が長軸線に3個体が並んで出土した(第4図)。竈は北西辺側でベースである砂礫層を若干掘り窪め、その上に粘土を貼り付けて竈の壁体としている。竈は長さ1.5m、幅1.3mを測



第3図 調査地平面図

る。煙出しは不明である。竈の東側に直径約0.5mの浅い貯蔵穴があり、中から土師器片(第7図7)が出土した。竈の西側で土師器高杯(第7図2)や甕の体部片など、貯蔵穴の南で大型の土師器高杯(第7図9)が床面に接して出土したが、それ以外は土師器高杯(第7図6)などが点在する程度で、住居跡から出土した土器類は、右京第971次調査で検出した竪穴式住居跡SH02に比べ少なかった。

竪穴式住居跡SH10(第5図) 竪穴式住居跡SH01の南西で検出した。竪穴式住居跡の北東部分で、大半が調査地外に位置する。北西辺で3.8m、北東辺で3.5mを検出した。検出面からの



第4図 竪穴式住居跡SH01実測図

深さは0.25mを測り、周壁溝はない。調査範囲内で竈は検出してない。床面の北東部で直径0.4m、深さ0.3mの柱穴1か所を検出した。規模から主柱穴の一つと判断される。住居内の床面からは土師器高杯や須恵器が集中することなく、数多く出土した。この住居跡の北西辺は竪穴式住居跡SH01の北西辺と一直線に並んでいる。

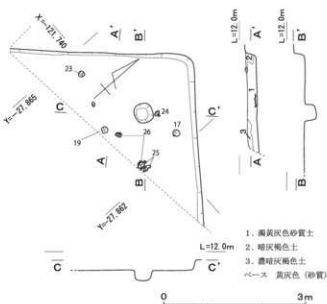
土坑SK08 (第6図) 竪穴式住居跡SH10の北側で検出した、南北5.6m、東西4.5m以上、深さ0.5mの円形土坑である。埋土の2層目である黒褐色土からは土師器甕(第7図10)・須恵器高杯(第7図13)などの多くの土器が出土した。中央より北に土器が集中する傾向が見られるので、北側から流入したか、投棄されたものと推定される。後者の場合は、廃棄土坑と判断される。

2) 時期不明の遺構

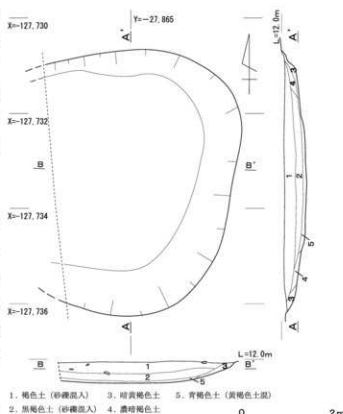
溝SD09 竪穴式住居跡SH10の北西辺の上位から掘り込まれており、北北西に延びる、幅0.4~0.2m、深さ0.1~0.2mの溝である。砂質土が堆積する。遺物は出土していないが、竪穴式住居跡SH10より後出するものである。

このほかに、竪穴式住居跡SH01と竪穴式住居跡SH10の間に、円形および不定形の土坑があるが、柱穴と推定できるものはなく、砂礫層・砂質土の窪みに流れ込んだ土砂堆積と思われる。土坑の一部には土師器・須恵器の小破片が混入していた。

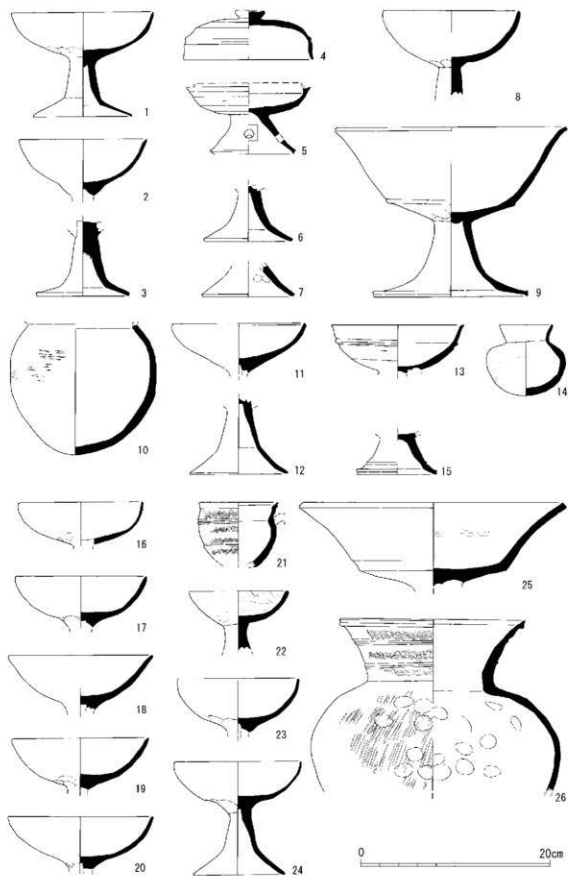
4. 出土遺物(第7図)



第5図 竪穴式住居跡SH10実測図



第6図 土坑SK08実測図



第7図 出土遺物実測図

出土遺物には、小泉川の氾濫による砂礫層から若干の土師器片などがあり、青灰色粘質土・灰褐色土などから少量の土師器片が出土したが、時期のわかるものはなかった。褐色土・暗褐色土からも土師器・須恵器が出土したが、図化できるものがなかった。南西部の砂礫混入土からは、古墳時代の遺物が出土している。竪穴式住居跡SH01・SH10と土坑SK09から古墳時代の土器が出土している。以下に主な遺物について概述する。

1) 竪穴式住居跡SH01出土遺物

1は土師器高杯で、口径14.8cm、器高11cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、元来は黄褐色であるが、被熱を受けて明赤褐色を呈する部分と煤が付着した部分が見られる。竈内の燃焼部から出土した。杯部は約70%残存しており、脚部は一部分を欠くだけである。2は土師器高杯の杯部で、杯部はほぼ完形で、口径13.4cmを測る。胎土に5mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。竈の西側で出土した。3は土師器高杯の脚部である。底径9.8cmを測る。胎土に白・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。竈の燃焼部内から出土した。4はツマミの付く須恵器有蓋高杯の蓋である。口径13.7cm、器高6.25cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良好で暗青灰色を呈し、天井部に自然軸がかかる。住居内埋土の上層から出土した。残存率は全体の約30%である。5は須恵器高杯である。受け部径13.2cm、残存高7.15cmを測る。脚部に円形の透孔がある。胎土に1mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良好で淡灰色を呈す。住居内埋土の上面から出土した。残存率は約40%である。6は土師器高杯の脚部で、ほぼ完存している。底径9.3cm、残存高5.8cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、淡黄灰色を呈す。住居内の北東柱穴の横で、床面から出土した。7は土師器高杯の脚部である。底径9.6cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、黄褐色を呈す。貯蔵穴の底面付近から出土した。脚底部は完形に復元できるが、上部を欠く。8は土師器高杯の杯部である。口径14.2cm、残存高9.05cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、外面が比熱して赤褐色を呈す。竈の燃焼部内から出土した。杯部はほぼ完形である。9は大型の土師器高杯である。口径24.2cm、器高18cmを測る。杯部はほぼ平坦な底部から45度程度に外方に立ち上がるもので、屈曲部外面に稜が付く。胎土に5mm以下の白・黒色粒子を含み、黒斑が認められるが淡赤褐色を呈す。口縁部内面の上半部に淡黒褐色の煤が付着し、口縁部外面の一部にも煤が付着する。貯蔵穴の南西で、床面から出土した。脚の約40%を欠くが、杯部はほぼ完形である。

2) 土坑SK08出土遺物

10・11・13は第2層中から出土した土器の実測図である。10は口縁部を欠く土師器甕の体部である。頸部径11.5cm、残存高13.8cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、外面底部は被熱を受けて赤褐色を呈し、体部外面の中央部を中心に煤が付着する。内面は淡黒灰色を呈す。体部外面に粗いハケ目が残る。体部はほぼ完存している。11は土師器高杯の杯部である。口径13.8cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡黄灰色を呈す。杯部の残存率は約40%である。12は土師器高杯の脚部である。底部径8.2cm、残存高8cmを測る。胎土に1mm以下の黒・褐色粒子を含み、明褐色を呈す。上層の褐色土から出土した。脚部の約80%が残存している。13は須

恵器無蓋高杯である。口縁部から2cmの位置に稜が付き、口径13.9cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く淡灰色を呈す。下層の黒褐色土から出土した。杯部の約60%が残存している。14は土師器小型丸底壺で、ほぼ完形のものである。口径5.5cm、器高7.55cmを測る。胎土に1mm以下の黒・褐色粒子を含み、焼成が良く乳白色を呈す。体部外面にタタキ目が残る。上層の褐色土から出土した。

3) 竪穴式住居跡SH10出土遺物

16は土師器高杯の杯部である。口径12.8cmを測る。胎土に5mm以下の白・褐色の粒子を含み乳黄色を呈す。ほぼ80%が残存している。床面から出土した。17は土師器高杯の杯部で、ほぼ完存している。口径13.8cmを測る。胎土に4mm以下の褐色の粒子を含み黄褐色を呈す。住居内床面の北東部主柱穴の東方で出土した。18は土師器高杯の杯部である。口径15.1cmを測る。胎土に4mm以下の白・黒・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。住居内床面からやや浮いた状態で出土した。19は土師器高杯の杯部である。口径12.3cmを測る。胎土に5mm以下の白・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。杯部はほぼ完存している。床面から出土した。20は土師器高杯の杯部である。口径15.2cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、黄褐色を呈す。住居内西部の床面付近から出土した。残存率は約50%である。21はコーヒークップ形で把手が付く須恵器である。把手は欠損している。口径8.2cm、器高6.85cmを測る。体部と頸部の境目と体部に低い断面が三角形の凸帯が廻る。頸部外面にハケによる波状文が1条、体部外面にも上段に2条の波状文と下段に1条の波状文が施される。胎土に1mm以下の黒色の粒子を含み、焼成が良好で灰色～暗灰色を呈す。残存率は全体の約70%である。床面からやや浮いた状態で出土した。22は土師器高杯の杯部である。口径10.3cmを測る。杯部の内面に粗いハケ目が残る。胎土に2mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。柱穴内から出土した。杯部の約90%の残存率である。23は土師器高杯の杯部である。口径12.6cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。住居内西部の床面から出土した。杯部の約80%が遺存している。24は土師器高杯の杯部である。口径13.3cm、器高12cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。柱穴の東に接して床面から出土した。残存率は全体の約60%である。25は大型の土師器高杯の杯部である。杯部は平坦な底部から大きく反外しながら立ち上がるもので、屈曲部外面に稜が付く。胎土がやや粗く3mm以下の白・黒色の粒子を含み、明黄褐色を呈す。住居内南東部の床面から出土した。残存率は杯部の約30%である。26は須恵器甕である。口縁部外面に断面三角形の低い凸帯が2段にめぐり、凸帯の間に櫛描きによる波状文が施される。口径19.4cm、残存高17.9cmを測る。胎土に1mm以下の黒色粒子、4mm以下の白色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。住居内南東部の床面から出土した。口縁部の約50%、および体部上半の約40%が残存している。

4) 包含層出土の遺物

15は須恵器高杯の脚部である。底径8.3cm、残存高4.4cmを測る。胎土に1mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良好で淡灰色を呈す。竪穴式住居跡SH01と竪穴式住居跡SH10の中間の小土坑

が検出された地点の砂礫混入層から出土した。

5. まとめ

小泉川の氾濫で大量の土砂が運ばれ、今回の調査地に約2mの砂礫が堆積していた。この砂礫層が自然堤防となり、現在のように小泉川が固定される要因となったと推定される。その時期は、右京第963次調査・右京第971次調査で出土した遺物から近世江戸時代と判明している。

下層では古墳時代の竪穴式住居跡SH01とSH10、土坑SK08を検出した。竪穴式住居跡SH01の埋土上面から須恵器高杯、埋土上層から須恵器杯蓋が出土したが、床面からは土師器類が出土したのみである。竪穴式住居跡SH10の床面からは須恵器甕と土師器高杯などが出土した。

土坑SK08からは、下層から須恵器高杯の杯部や土師器高杯の杯部などが、上層から土師器小型丸底壺と土師器高杯の脚部が出土した。これらの出土遺物を比較してみると、小型の土師器高杯の杯部は椀形によく似ている。土坑SK08は下層から出土した須恵器の無蓋高杯の杯部が陶邑TK208併行期にあたり、竪穴式住居跡SH10は、出土した須恵器甕と把手付碗の特徴から陶邑TK208～TK47の時期あたると見られる。竪穴式住居跡SH01は、出土した大型の土師器高杯と竪穴式住居跡SH10の大型の杯部外面に稜が付き、小型の土師器高杯の杯部も椀形で共通する部分が多いので、若干の時間差はあるものの、ほぼ同時期と見てよい。竪穴式住居跡SH01・SH10、土坑SK08は陶邑TK208～TK47の時期、5世紀後半で古墳時代中期の終末頃の遺構と判断される。

隣接地の右京第971次調査で検出された竪穴式住居跡SH02が古墳時代後期の6世紀前半のもので、右京第974次調査の遺構と大きな時間差はない。竪穴式住居跡SH01・SH10・SH02は方位を揃えていること、大山崎中学校建て替えに伴う右京第933次調査で検出された古墳時代～飛鳥時代の竪穴式住居跡群も住居跡に明瞭な周壁溝がないことや、住居跡の主軸が西に振れていること、竈が北側に付設する傾向にあることなど共通点が多い。また、下植野南遺跡で検出された古墳時代の住居跡群も周壁溝を持たないものがほとんどで、竈の北側に付設するものが多い傾向にある。遺構検出の標高も北から南へと地形に合わせて下がっていくことが判明している。今回の調査で、両遺跡のほぼ中間点でも同様の竪穴式住居跡が検出されたことから、古墳時代中期～後期にかけて、松田遺跡と下植野南遺跡が一体となり、大規模な集落が営まれていたことがより明確となった。

注1 調査参加者 松元章徳・川原淳司・武本典子・福島厚子・荒川仁佳子・梶理恵子・松崎聖子

注2 大山崎町教育委員会 林 亨・寺島千春・古閑正浩

7.女谷・荒坂横穴群第10・11次 発掘調査報告

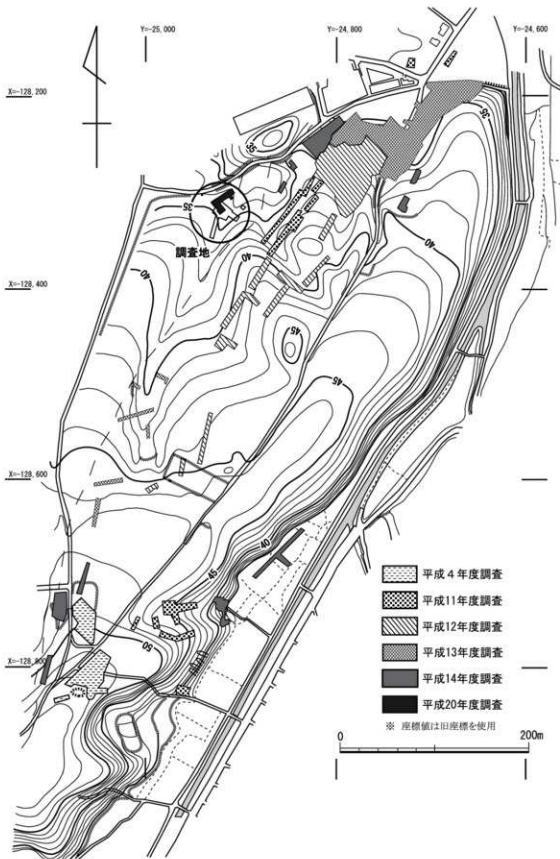
1. はじめに

今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社(NEXCO西日本)の依頼を受けて実施した。平成20年度には工事に先立ち、対象地内に小規模なトレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認するとともに、面的な調査を実施する範囲を策定するための資料を得ることを目的に調査を実施した。平成21年度には前年度の調査成果を元に谷の北斜面を中心に拡張し、面的な調査を実施しているところである。八幡市教育委員会と調整した結果、平成20年度



- | | | | |
|-------------|-----------|---------------|----------|
| 1 女谷・荒坂横穴群 | 9 内里池南古墳 | 17 金右衛門垣内遺跡 | 25 南山古墳群 |
| 2 御毛通遺跡 | 10 柿谷古墳 | 18 宮ノ背遺跡 | 26 南山遺跡 |
| 3 御毛通古墳 | 11 狐谷横穴群 | 19 西ノ口遺跡 | 27 山田遺跡 |
| 4 荒坂遺跡 | 12 美濃山横穴群 | 20 備前遺跡 | 28 山田東遺跡 |
| 5 荒坂古墳 | 13 王塚古墳 | 21 幸水遺跡 | 29 五反田遺跡 |
| 6 新田遺跡 | 14 小塚古墳 | 22 東二子塚古墳 | 30 ヒル塚古墳 |
| 7 美濃山廃寺 | 15 美濃山遺跡 | 23 西二子塚古墳 | |
| 8 美濃山廃寺下層遺跡 | 16 宮ノ背西遺跡 | 24 西山廃寺(足立寺跡) | |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

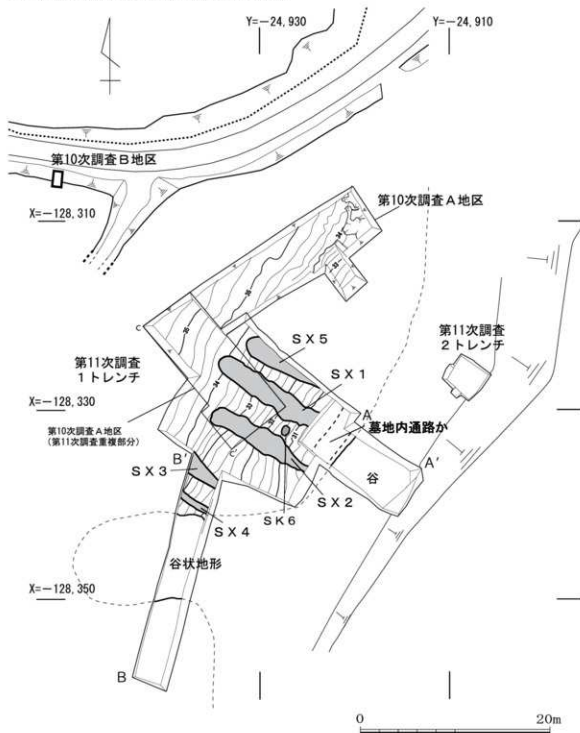


第2図 調査地トレンチ配置図

調査を第10次調査、平成21年度調査を第11次調査とすることとなった。なお、本報告では、第10次調査と第11次調査の前半期までの調査成果を扱う。

調査期間は、第10次調査が平成21年1月28日～同年2月26日で、第11次調査は平成21年7月10日～9月10日(前半期)、10月27日～平成22年2月25日(後半期)まで実施した。

調査面積は、第10次調査がA・B地区を合わせて250㎡で、第11次調査は、前半期の調査が400㎡、後半期の調査が1,600㎡、計2,000㎡である。



第3図 検出遺構配置図

現地調査は、第10次調査は当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長石井清司(当時)、調査員村田和弘が、第11次調査の前半期の調査は、調査第2課主幹事務取扱調査第3係長石井清司、調査員松尾史子が担当した。後半期の調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池 寛、主任調査員引原茂治、主査調査員柴 暁彦、次席総括調査員伊野近富が担当した。本報告では、第10次調査と第11次調査の前半期の調査成果について報告する。

調査に当たっては、京都府教育委員会をはじめ八幡市教育委員会などの関係諸機関のほか地元自治会の協力を得た。

なお、調査に係る経費は、全額、西日本高速道路株式会社が負担した。報告に使用したのは、過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第6座標系である。

2. 位置と環境

女谷・荒坂横穴群は、京都府八幡市大字美濃山荒坂に所在する、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての墓である。女谷B・C支群については、一般国道1号(第二京阪道路)の建設工事に伴い、平成11年度から平成14年度まで発掘調査が実施された。総数約50基に及ぶ横穴から人骨を含む多くの遺物が出土し、当時のこの地域の墓制を知る上で貴重な資料が得られた。今回の調査地は、遺跡の北西部にあたり、過去に調査された谷より南西方向にある別の谷に位置する。調査の結果、横穴が確認され、新たな支群と認められたので、女谷D支群と呼称することとなった。^{通1}

(松尾史子)

3. 第10次調査概要

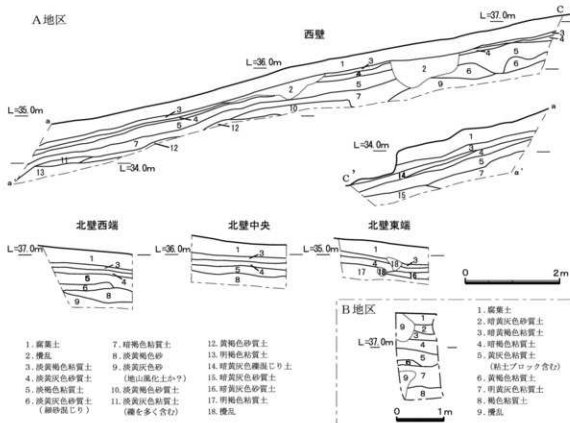
1) はじめに

第10次調査では、遺跡範囲の北西端部の谷筋に調査地点を2か所設定した。A地区は調査対象地内の南東に向かって傾斜する斜面に設定し、B地区は現在の里道となっている切り通し斜面に設定した(第2・3図)。

2) 調査の概要

(1) A地区 基本層序は、第1層として厚さ0.4mほどの腐葉土が堆積し、その下に第3層の礫が混じる淡黄褐色粘質土が堆積している(第4図)。この層は竹林の水はけ用の造成と考えられる。第4～8・10・14・15層については、竹林造成の盛土と考える。また、第11・12層については、硬質であることから、横穴の天井部が後世に造成によって削平されたものの残部とも考えられる。約1mの深さで、安定地層(第9層上面：地山面)を確認した。また第13層の明褐色粘質土は横穴の埋土と判断された。

調査は、着手する前に現存する竹の伐採を実施し、掘削は現地表面から重機による掘削を進めた。その後、人力による遺構・遺物の検出作業を行った。その結果、トレンチ南西部の斜面で暗茶褐色の溝状の土色変化を検出した。遺構は、大阪層群の砂礫層をくり抜き横穴状に掘り込まれており、その形状から横穴であると判断できた。また、その西側で同様の土色変化を検出し、



第4図 A・B地区土層断面図

同じく横穴と判断した。西側を横穴SX1、東側を横穴SX2とした。なお、今回の調査は遺構の確認のみで、遺構を完掘していないため、時期や内部構造については不明である。

(2) B地区 調査は、対象地内において、丘陵を切り通されてつくられている里道の西側壁面とその頂部に設定した(第2・3図)。精査の結果、現地表面から約1.6mで地山面に達したが、遺構・遺物は確認できなかった。

3) 小結

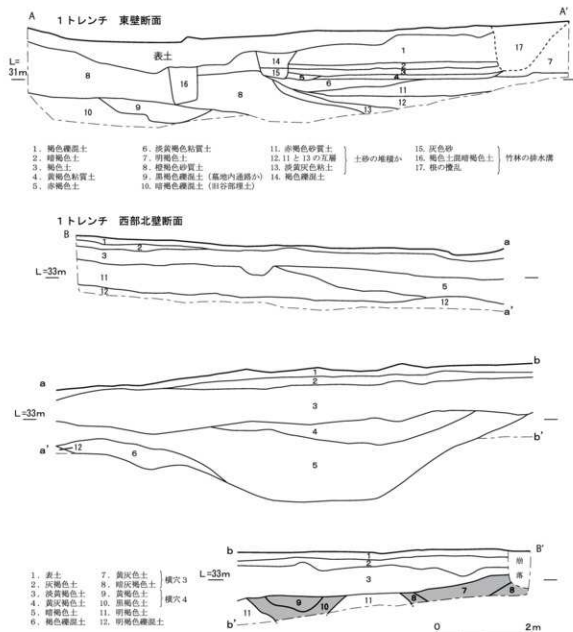
平成20年度の試掘調査では、調査地南西部の南斜面において横穴を2基検出した。この2基の横穴は、同一方向を向き南東に開口しているが、掘り込まれている高さが異なる。横穴SX1は、標高32.5mあたりから掘り込まれ、横穴SX2はさらに0.5m以上の低位置から掘り込まれていることから、横穴の埋葬面の高さが異なっていると考えられる。この傾向は、これまでの女谷・荒坂横穴群の調査でも確認されている。今回の調査で2基の横穴を確認し、この谷筋がさらに西側や北東側に続いていることから、さらに横穴が分布していることが予想された。

(村田和弘)

4. 第11次調査概要

1) はじめに

平成20年度の試掘調査の成果を受け、谷の北西側斜面で確認した2基の横穴部分(横穴1はS



第5図 第1トレンチ土層図(土層図位置は第3図参照)

X1、横穴2はSX2とする)を拡張して内部の調査を実施するとともに、さらに西側に拡張して横穴群の広がりを確認した(第1トレンチ)。また、谷の南側斜面の状況を確認することを目的に、第1トレンチの北東側に調査区を設定した(第2トレンチ)。

その結果、第1トレンチでは新たに3基の横穴と土坑1基、墓地内通路の可能性のある谷状地形を確認した。また、調査地西部中央付近では西に延びる小さな谷状地形を確認した。第2トレンチでは、谷の中央部に当たっていると考えられ、地表下約2mの深さまで掘削してもベースとなる土層に至らなかった。

第1トレンチにおいて新たに3基の横穴が確認でき、谷の北側斜面にさらに横穴群が広がること予想されたことから、平成21年度中に拡張して調査を行うことになった(後半期の調査)。

2) 調査の概要

(1) 第1 トレンチ

横穴が分布する谷は北から南西方向に向かう谷で、第1 トレンチは試掘調査において谷の北西側斜面を中心に設定されたA地区を拡張した調査区である。調査にあたっては、トレンチの中央部において昨年度調査で確認した2基の横穴の全体の輪郭を検出するため、竹林に伴う土層の下に厚く堆積する黄褐色系の土砂を重機で掘削し、明るい礫混じりの褐色土上面で遺構の検出に努めた。この斜面を形成するベースとなる土層は、標高の高い方は大阪層群であるが、横穴の墓道先端付近の低い方は、横穴群がつくられる前に谷部に堆積した暗褐色礫混土である(第10層)。谷の斜面の傾斜は約15度の急斜面である。横穴を覆う黄褐色系土は谷の中央に向かって厚く堆積しており、東壁の断面観察(第5図A-A')から谷の中央部ではその上に厚く橙色系の土砂が堆積していることがわかった。また、横穴と谷の間には幅2.4m、深さ0.4mの溝状の落ち込みが確認でき(第9層)、過去の調査において墓地内通路と評価された溝と同様の遺構ではないかと考えた。この通路状の溝はわずかに横穴SX2の墓道先端部と重複している。

トレンチ南東部は横穴SX1の開口部の延長にあたり、横穴と谷部の関係を把握することを目的とした。調査では、谷の北肩部分を確認した深さまで掘削し、谷の埋土は完掘していない。

トレンチの西部中央付近、横穴SX4の南側では、幅16m、深さ1.6mの小さな谷状地形を確認した(第5図B-B' 第5層)。この小さな谷状地形は、横穴SX2の開口部あたりで横穴が分布する中心の谷から分岐して西の方に続いており、調査区外へと延びる。北壁の断面観察では横穴との前後関係は確認できなかった。なお、谷状地形の埋土からの出土遺物は無かった。

また、図示していないがトレンチ南東部の南壁の観察により、谷の南斜面と考えていた傾斜地は現在調査区の東側に走っている第二京阪道路の側道を造成した時の盛土であることが明らかになった。本来の谷の南側斜面はもっと側道よりに位置すると考えられる。

なお、2基の横穴については、前半期の調査において、閉塞土を残した状態で一旦作業を中断し、後半期の調査を再開してから完掘した。そのため、閉塞土の下から出土した遺物については来年度以降に改めて報告する予定である。

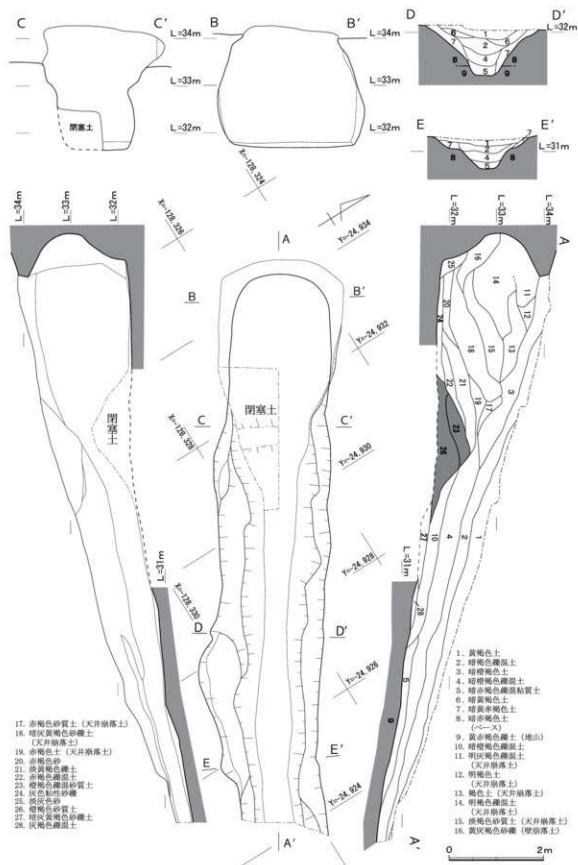
ここでは、前半期の調査で明らかとなった遺構と遺物について報告する。

①横穴SX1

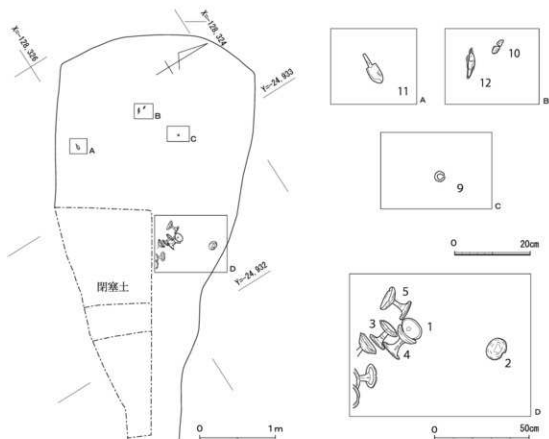
横穴の規模および形態(第6図)

南東方向に開口する横穴である。玄室長3.5m、玄室最大幅2.5m、墓道長8.2m以上、墓道の上幅2m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄門の位置には閉塞盛土が位置する(第6図23・26層)。羨道の有無は不明である。玄室床面は1面のみで、標高は31.9mである。床面は半分から奥は地山を利用しているが、入り口側から半分については土を入れて床面を平坦にしている。奥壁は、床面から0.5mより上の部分は大きく崩落している。天井はほとんど崩落していた。

土層の堆積状況は、第6図のとおりである。玄室内は、天井や壁の崩落土である明褐色系礫混



第6図 横穴SXX1実測図



第7図 横穴SX1遺物出土状況図

土または赤褐色系の土砂で埋まっており、墓道の埋土は暗褐色系礫混土(4・5・10層)であった。天井崩落後に表土化した2・3層が堆積していることから、墓道は入り口封鎖後もオープンであったのではないかと考えられる。なお、閉塞土は半分のみを掘削し、残り半分については後半期の調査で掘削したため、本報告では半分残った状態での報告となっている。

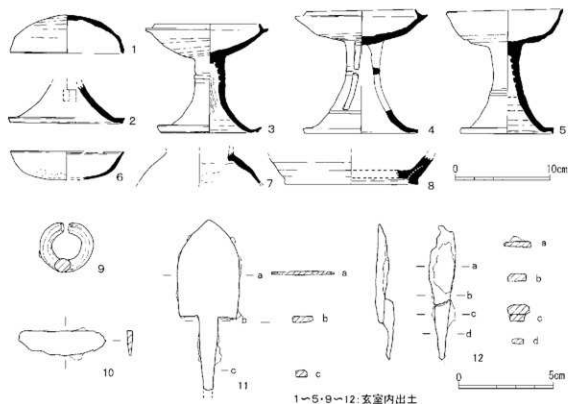
遺物出土状況(第7図)

玄室内からは須恵器高杯7点、杯蓋1点、金環2点、鉄鍬2点、刀子片1点が出土した。鉄鍬(11)は玄室中央の右側壁寄り、鉄鍬(12)と刀子(10)は、金環(9)と同じく玄室中央付近で出土した。他の金環は剥離した金メッキ部分のみで、玄室精査中に出土した。須恵器の杯蓋(1)と高杯(3～5)は、玄室の入り口付近で、様々な方向に倒れた状態でまとまって出土した。人骨や棺材は出土していない。

また、墓道掘削中に土師器(6・7)や、横穴より新しい時期の須恵器片(8)がわずかに出土した。

出土遺物(第8図)

1～5・9～12は玄室内から出土した。1は須恵器杯蓋で、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。2は高杯の脚、3・4は有蓋高杯、5は無蓋高杯である。4の脚部には方形2段透かしを施すが、3・5は透かしはなく、2条の沈線を巡らす。これらは概ねTK209～217段階の資料と考えられる。なお、須恵器高杯は、一部閉塞土に埋没していて取り上げていないため図示していないもの



第8図 横穴SX1出土遺物実測図

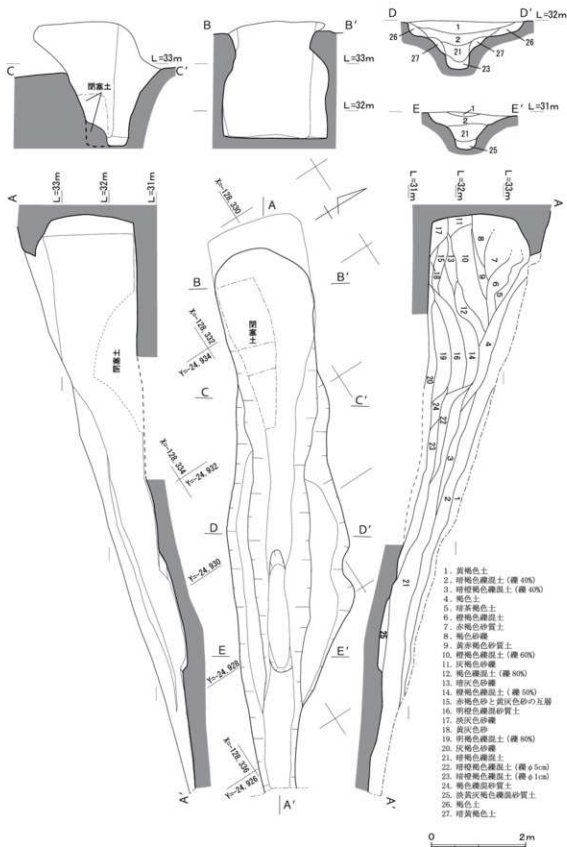
がある。9は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で長径8mm、短径7mmを測る。緑青が進行しており鍍金はわずかに認められる程度である。耳環は2点出土したが、もう1点は剥離した金メッキの部分のみであり、図示できなかった(図版第12)。10は鉄製品である。長さ4.5cm、幅1.3cmで、断面形から刀子と考えられる。11・12は鉄鏃である。11は平根系の鏃で、全長9cm、身部は幅3.3cm、厚さ2mm、頸部は幅1cm、厚さ2mmで断面形は長方形である。木質等の付着はみられない。12は全体形は不明であるが、断面の形状から鉄鏃と考えられる。身部については不明である。頸部は幅1cm、厚さ2~3mmで断面形は長方形である。図示したように途中で折れて食い違いに接合した状態で錆が進行している。木質等の付着はみられない。

6~9は墓道掘削中に出土した。6は土師器杯である。口径11.8cm、器高3.0cmを測る。墓道先端付近の検出面で出土した。7は土師器の壺もしくは甕の頸部である。頸部径7cm、残存高3.4cmである。墓道先端部付近の上層の埋土(第6図第2層)から出土した。8は奈良時代~平安時代の須恵器壺の底部である。墓道の埋土の最上層(黄褐色土)から出土した。

②横穴SX2

横穴の規模および形態(第9図)

南東方向に開口する横穴である。玄室長2.1m、玄室最大幅2m、墓道長9m以上、墓道の上幅2m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄室は墓道に対して大きく南に屈曲する。玄室床面の標高は31.5mである。玄室床面は、奥壁側半分は地山を利用しているが、入り口側から半分は土を入れて全体を平坦にしている。また、入口付近のみ敷砂が施されていたようである。



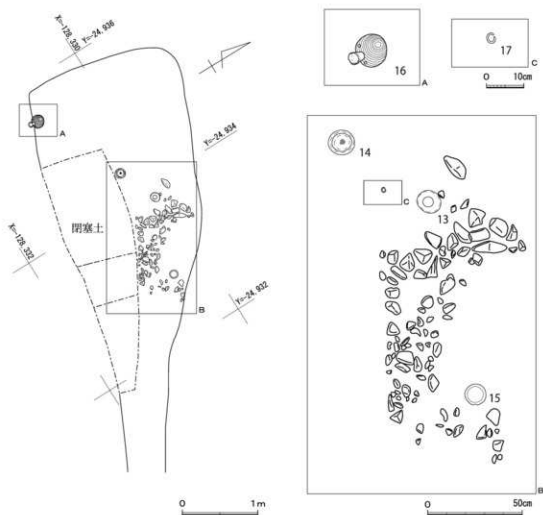
第9図 横穴 SX 2 実測図

玄門の位置には閉塞盛土が位置する。羨道の有無は不明である。

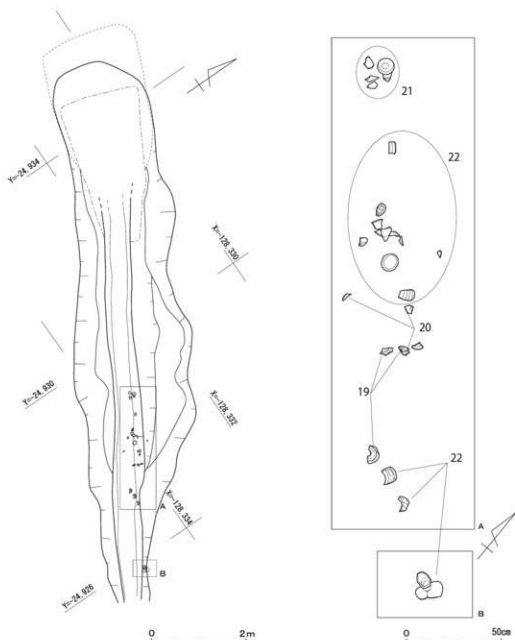
土層の堆積状況は第9図のとおりである。1～4層は天井崩落後に堆積した土層である。14・16・19層は玄門付近に山状に堆積しており、閉塞土の可能性がある。玄室内は天井や壁の崩落土(赤褐色系の礫混土)で埋まっていた。1～4層を掘削後、墓道内では21層が幅0.5m、長さ8.5m以上にわたって溝状に確認できた。この層からは須恵器がまとめて出土しており、横穴を再利用した際に掻き出された可能性が考えられる。過去の調査成果においては同様の遺物出土状況がみられ、墓道内通路出土遺物と評価している。今回も同様に評価しておきたい。また、1・2層の堆積状況から横穴S X 1と同様、墓道は入り口封鎖後ある程度オープンであったと考えられる。なお、閉塞土の西半部については、後半期の調査で掘削したため、本報告では半分残った状況で報告する。

また、墓道中央には長さ2.6m、幅0.4m、深さ0.2mの土坑が掘削されており、墓道の床面と同じ高さまで淡黄灰褐色礫混砂質土(25層)で埋められていた。過去の調査例と同じく水抜き用の施設と考えておきたい。

遺物出土状況



第10図 横穴S X 2 遺物出土状況図



第11図 横穴S X 2墓室内遺物出土状況図

玄室内からは金銅製耳環(17)や須恵器の提瓶(16)、杯身(13・14)、高杯(15)が出土した。提瓶は、玄室奥壁寄りの右側壁に立てかけられたような状態で出土した。杯身は玄室中央付近で、13が正位で、14は逆位で出土した。耳環は13と14の中間で出土した。高杯は玄室の入り口付近で出土しており、脚部は欠損していた。人骨や鉄器、棺材は出土しなかった。

また、前述のように墓道の埋土からは須恵器がまとめて出土した(第11図)。須恵器は墓道中央付近から先端付近まで広範囲に分布しており、破片化している率が高いことから追葬もしくは再利用の際に、玄室内にあったものが掻き出されたと考えられる。

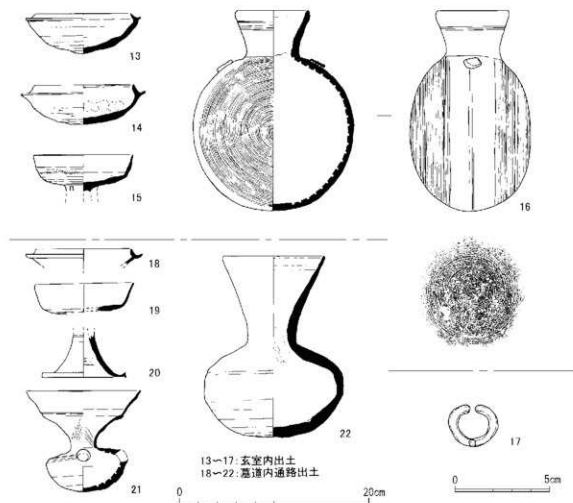
出土遺物(第12図)

13～17は、玄室内から出土した。13・14は杯身である。口径10～10.3cm、器高4.2cmを測り、

小振りで深みがある。15は高杯の杯部である。口径10.4cm、残存高3.9cmである。わずかに脚部の透かしの痕跡が残る。墓道出土資料と接合関係を確認したが、接合するものはなかった。16は提瓶である。口径7.4cm、体部径17cm、器高21.2cmである。体部にはカキ目が施され、片面に「×」のヘラ記号が認められる。把手は形骸化しており、肩部に円形の粘土板を貼り付けているのみである。これらはTK209～217段階の資料と考えられる。17は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で、長径4mm、短径3mmである。鍍金はほとんど剥落しており、薄い金箔がわずかに残っている程度である。

18～22は墓道内通路の埋土(第9図21層)から出土した。18は杯身である。口径10cm、残存高1.7cmを測る。19は高杯の杯部、20は高杯の脚部である。両者に接点はないが、同一個体の可能性がある。19は口径10.3cm、残存高3.1cmで墓道の先端付近で出土した。20は脚部径8.9cm、残存高4.8cmを測る。21は甌である。口径11.4cm、器高10.9cmである。22は長頸壺である。口径10.6cm、器高19.2cmを測る。墓道内でかなり広範囲に破片が分布していたが、ほぼ完形に復原できた。これらは横穴内の遺物とほとんど時期差はない。

③横穴S X 3



第12図 横穴S X 2 出土遺物実測図

横穴 S X 2 の西側で検出した南東方向に開口する横穴である。墓道の部分に相当する幅1~2.5m、長さ3.5m分を検出した。検出面の標高は31.5mである。玄室および墓道先端部分は調査地外に広がる。埋土は暗褐色礫混土である。後半期の調査で内部の調査を実施した。

④横穴 S X 4

横穴 S X 3 の西側で検出した南東方向に開口する横穴である。墓道の部分に相当する幅0.8m、長さ3m分を検出した。検出面の標高は31.7~32mである。玄室および墓道先端部分は調査地外に広がる。埋土は暗褐色礫混土である。検出時に土師器片が出土した。

⑤横穴 S X 5

横穴 S X 1 の東側で検出した南東方向に開口する横穴である。玄室から墓道にかけての最大幅2.2m、長さ9m分を確認した。東半分は調査区外に広がっており、今回は西半分を検出したことになる。埋土は暗褐色礫混土である。検出時に土師器片が出土した。10月以降に内部の調査を実施した。

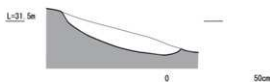
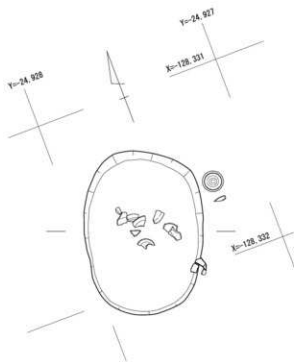
⑥土坑 S K 6 (第13・14図)

S X 1 の墓道と S X 2 の墓道の間で確認した浅い土坑である。土坑の規模は長径0.85m、短径0.65m、深さ0.1mである。検出面の標高は31.5mである。遺構検出時に須恵器がまとまって出土したため、掘形の検出に努めたがこの時点では確認できなかった。

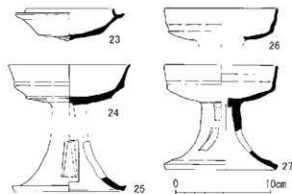
しかし、遺物取り上げ後に精査したところ浅い凹み状の掘形が確認できた。

出土遺物には、須恵器杯身・無蓋高杯・壺等があるが、図示できたのは4点のみであった(第14図)。無蓋高杯はいずれも脚部に方形2段透かしを施す。杯身(23)は口径9.1cm、器高3.4cmでかなり分量が小さい。T K 209~217段階の資料と考えられる。杯蓋は出土していない。

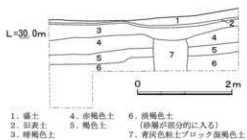
(2)第2トレンチ(第15図)



第13図 土坑 S K 6 実測図



第14図 土坑 S K 6 出土遺物実測図



第15図 第2トレンチ土層実測図

第1トレンチ東方の谷の南斜面の裾と考えられる位置に設定した調査区である。遺構・遺物は確認できなかった。重機で一部深さ2mまで掘削したが、表土の下には橙褐色土が厚く堆積しており、安定した土層にはいたらなかった。谷の南側斜面となる地形の変化も見られず、結果として谷の中央の深い部分に位置していることが明らかになった。

第1トレンチの南壁の状況と考え合わせると本来の斜面はさらに南東側にあると考えられる。

5. まとめ

今回の調査では谷の北西側斜面中央付近で横穴5基と土坑1基、墓地内通路、谷状地形を確認し、横穴については5基のうち2基の内部調査を途中まで実施した。2基の横穴は天井が完全に崩落していたため盗掘を受けていなかった。2基の横穴を比較すると、横穴SX1のほうが横穴SX2よりも玄室の規模が大きく、現状では副葬品等の種類や数量が多い傾向にある。横穴の時期は、出土遺物から6世紀末から7世紀初頃ごろと考えられる。

谷の南側斜面については、今回の調査区内で斜面自体を確認することができなかった。斜面はさらに南東に位置すると考えられる。

以上の成果から、先述のとおり拡張して横穴群の広がりや南東側斜面の状況を確認することを目的に調査を実施することとなった。今後の調査成果に期待したい。

(松尾史子)

注1 横穴の番号等については、今後の調査成果を待って整理していく必要がある。

注2 岩松保ほか「女谷・荒坂横穴群 京都府遺跡調査報告書」第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

圖 版

(1) 河守城跡からの遠景
(南西から)

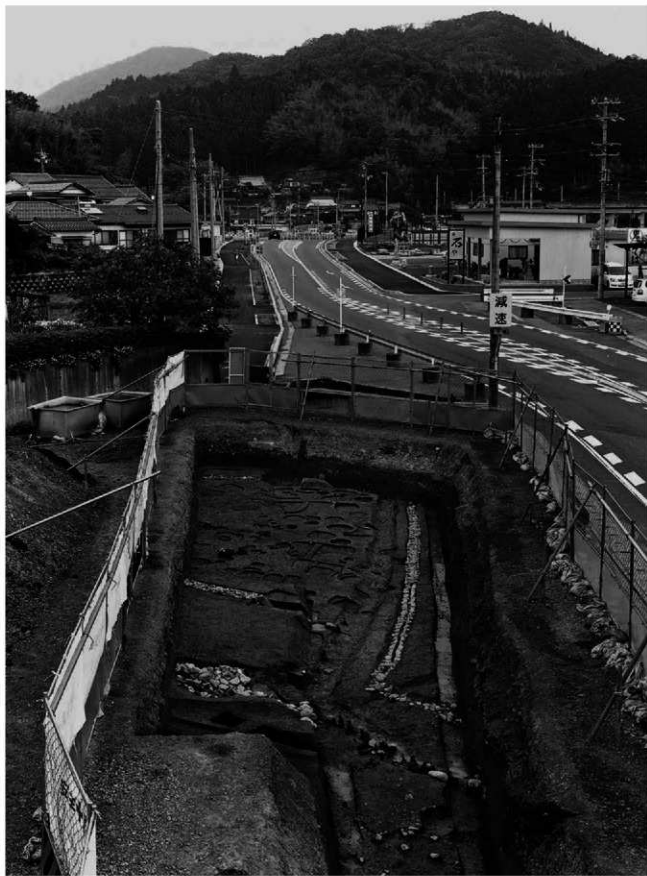


(2) 調査前の状況(北から)



(3) 掘削前の状況(北から)





主要遺構全景(南西から)



上層遺構近景(北東から)



(1) 土層堆積状況(北西から)



(2) 土層堆積状況(北西から)



(3) 土層堆積状況(北西から)

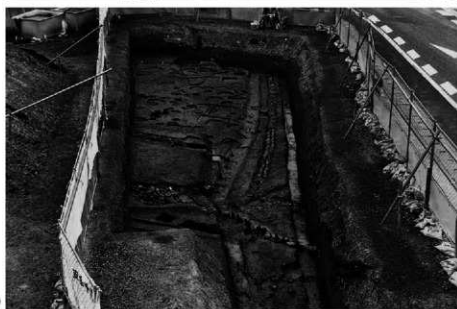
(1) 溝SD02検出状況近景
(北西から)



(2) 調査地全景(南西から)



(3) 溝・ピット検出状況(南西から)





(1) 溝SD01(右)および溝SD02
掘削状況(北東から)



(2) 検出遺構近景(北東から)



(3) 溝SD19検出状況(南東から)

(1) 溝SD19および溝SD20
検出状況(南東から)



(2) 溝SD18検出状況(南東から)



(3) 溝SD18蓋板検出状況
(南東から)





(1)溝SD18蓋石・蓋板除去後(南東から)



(2)溝SD19(中央)および溝SD20(左)の状況(南東から)

(1) 溝SD01杭列の状況(南東から)



(2) 溝SD01杭列の状況(北西から)



(3) 溝SD02完掘状況(北東から)





(1) 溝SD20断面状況(南東から)



(2) 溝SD03掘削状況(北西から)



(3) 溝SD02南半部の状況
(北東から)

(1) 溜め柵全景(北西から)

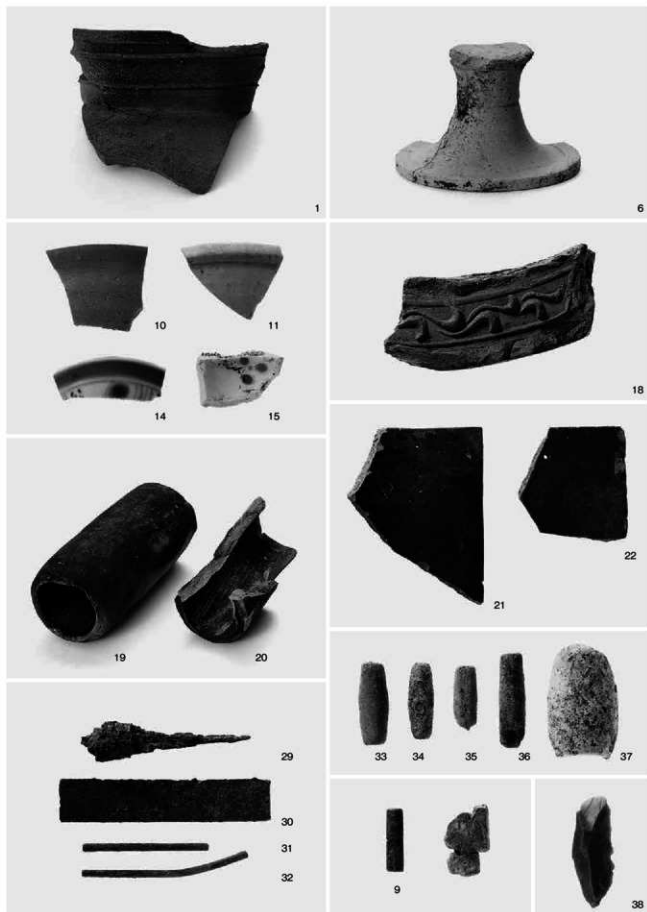


(2) 溜め柵近景(南西から)



(3) 溝SD02屈曲部近景(南西から)





出土遺物(番号は実測番号に対応する)

(1) 第 1・5 トレンチ調査前風景
(東から)



(2) 第 1 トレンチ全景(西から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD01
(西三坊大路西側溝、南から)





(1) 第 1 トレンチ溝 SD01
(西三坊大路西側溝)
土器出土状況(上から)



(2) 第 1 トレンチ溝 SD01
(西三坊大路西側溝)
土層堆積状況(北から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD25
(宅地内溝)検出状況(南から)

(1) 第 1 トレンチ溝 SD25
(宅地内溝)完掘状況(北から)



(2) 第 1 トレンチ土坑 SK18
土層堆積状況(北から)



(3) 第 1 トレンチ溝 SD01
偶蹄動物足跡





(1) 第2トレンチ調査前全景
(西から)



(2) 第2トレンチ西区西半部全景
(東から)



(3) 第2トレンチ掘立柱建物跡
SB05(北東から)



(1) 第 2 トレンチ西区東半部全景
(西から)



(2) 第 2 トレンチ西区掘立柱建物跡
SB06(東から)



(3) 第 2 トレンチ西区掘立柱建物跡
SB06-P3 検出状況 (上が西)



(1) 第2トレンチ中区全体
(西から)



(2) 第2トレンチ中区井戸 SE01 -
柱穴群検出状況(西から)



(3) 第2トレンチ中区井戸 SE01
完掘状況(東から)

(1) 第 2 トレンチ東区全体
(西から)

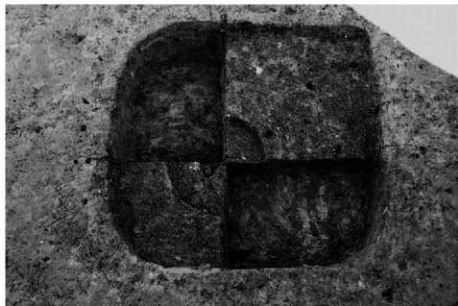


(2) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡
SB03・04 検出状況(東から)



(3) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡
SB03・04 完掘状況(西から)





(1) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡
SB03-P24 検出状況(上が北)



(2) 第 2 トレンチ東区 SK91
土層堆積状況(南から)



(3) 第 2 トレンチ東区掘立柱建物跡
SB06-P3 土層堆積状況
(南から)

(1) 第 2 トレンチ東区全体完掘状況
(東から)



(2) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡
SH26(東から)



(3) 第 2 トレンチ東区竪穴式住居跡
SH12-A・B、SH26
完掘状況(西から)





(1) 第2トレンチ東区竪穴式住居跡
SH12-A・B (南から)



(2) 第2トレンチ東区竪穴式住居跡
SH12-B (北から)



(3) 第2トレンチ東区竪穴式住居跡
SH12-B 土器出土状況
(西から)

(1) 第 2 トレンチ東区堅穴式住居跡
SH12-B 土器出土状況
(南西から)



(2) 第 2 トレンチ東区堅穴式住居跡
SH12-B 土器出土状況(部分)
(南から)



(3) 第 2 トレンチ東区土坑 SK91
(主柱穴)土器出土状況
(上が東)





(1) 第3トレンチ全景(南から)



(2) 第3トレンチ柱穴群検出状況
(上が南)



(3) 第3トレンチ溝SD44
(南西から)

(1) 第3トレンチ溝 SD44 南半部
土器出土状況(北東から)



(2) 第3トレンチ溝 SD44 北半部
土器出土状況(南から)

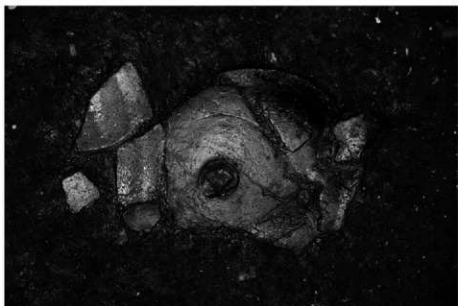


(3) 第3トレンチ溝 SD44 南半部
土器出土状況(部分、北西から)





(1) 第3トレンチ溝SD44 南半部
土器出土状況(部分、上が南)



(2) 第3トレンチ溝SD44 北半部
土器出土状況(部分、上が北)



(3) 第3トレンチ溝SD44 北半部
土器出土状況(上が西)

(1) 第3トレンチ溝 SD44 完掘状況
(北から)



(2) 第3トレンチ溝 SD44 完掘状況
(南西から)



(3) 第5トレンチ全景(西から)





(1) 第 4 トレンチ全景(東から)

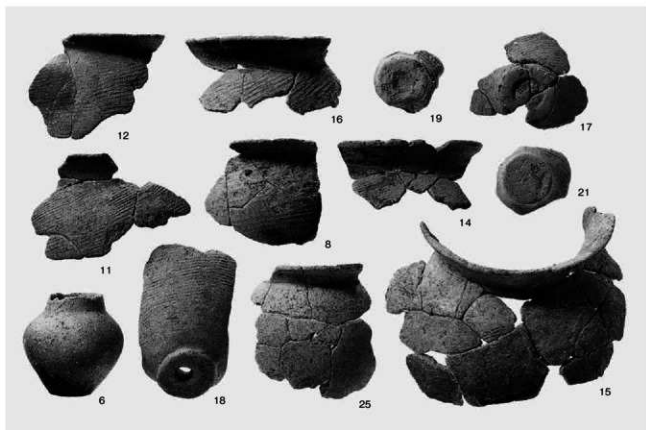


(2) 第 4 トレンチ溝 SD04 全景
(東から)

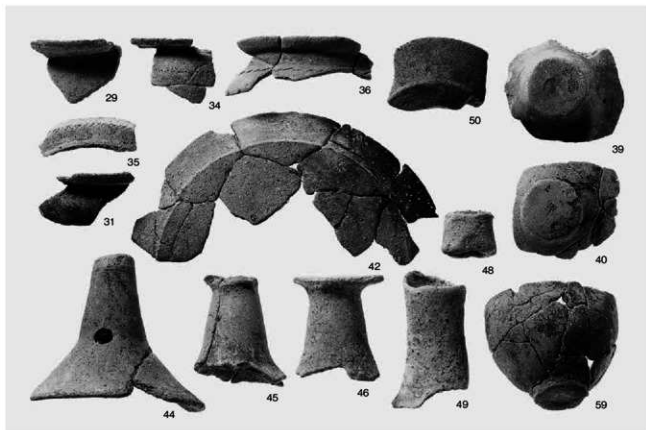


(3) 第 4 トレンチ溝 SD04 全景
完掘状況(北西から)

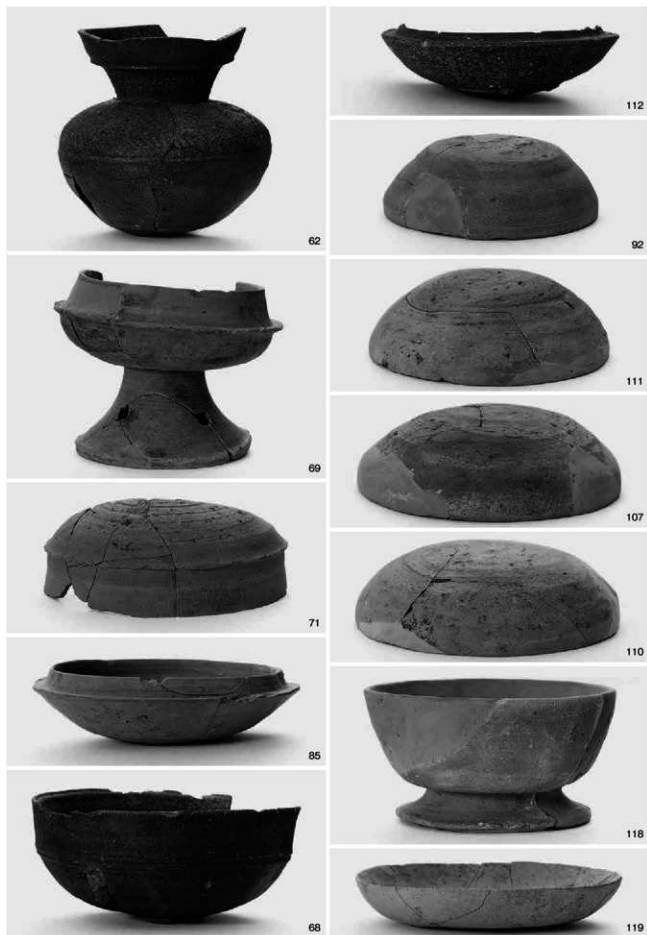




(1)出土遺物(2)



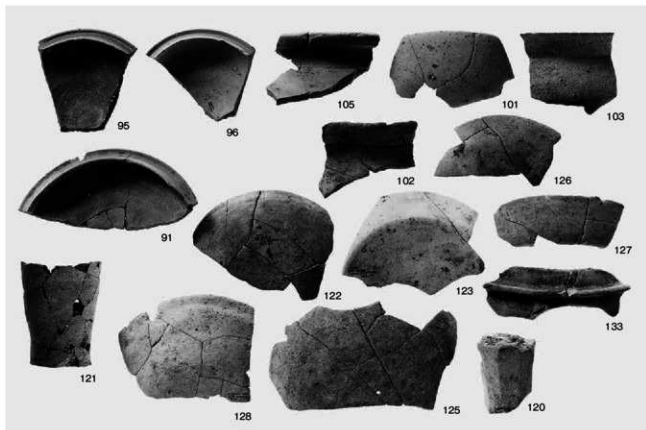
(2)出土遺物(3)



出土遺物(4)



(1)出土遺物(5)



(2)出土遺物(6)



(1) 調査地全景(上が北)



(2) 8トレンチ全景(上が南東)



(1) 上層遺構全景(北東から)

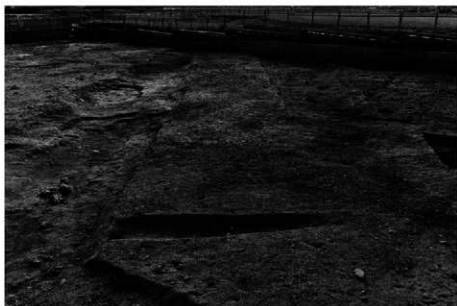


(2) トレンチ全景(北東から)

(1) 調査前全景(北から)

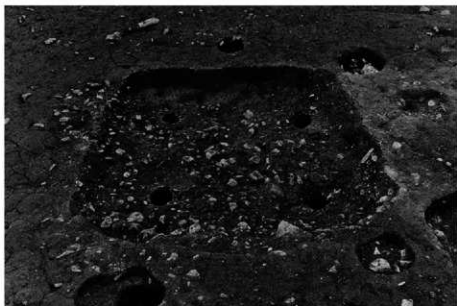


(2) 溝 SD368・369 全景(東から)



(3) 溝 SD368・369 全景(西から)

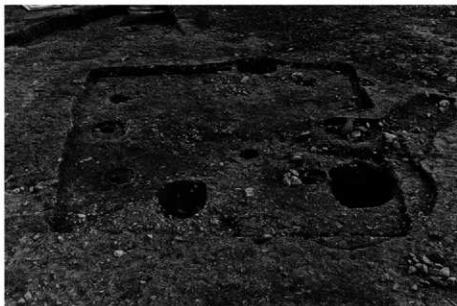




(1) 土坑 SK347(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH340
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH345
(北東から)

(1) 竪穴式住居跡 SH345 竈近景
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH350
(南東から)

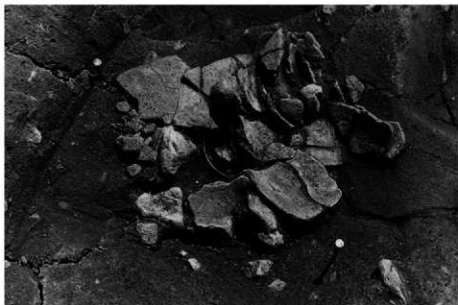


(3) 竪穴式住居跡 SH370-1・2
(南西から)





(1) 竪穴式住居跡 SH370-2 竈近景
(南西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH370-2
遺物出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH370-1
遺物出土状況(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 SH373(北東から)



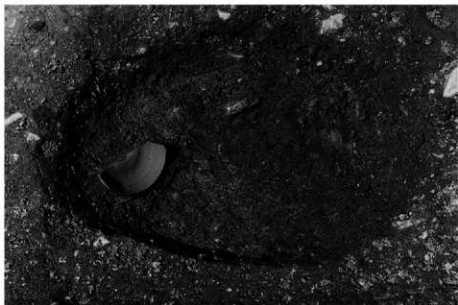
(2) 竪穴式住居跡 SH380(北から)



(3) 竪穴式住居跡 SH384(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 SH384 竈近景
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH384 柱穴遺物
出土状況(南東から)



(3) 掘立柱建物跡 SB490(北西から)

(1) 竪穴式住居跡 SH450、
500-1・2 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH450、
500-1・2 (北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH450
(北東から)





(1) 竪穴式住居跡 SH440・550・400、土坑 SK637(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 550・400
(東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH440
(南東から)

(1) 竪穴式住居跡 SH520、
土坑 SK544(南から)

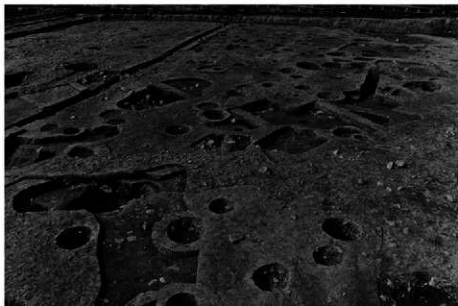


(2) 竪穴式住居跡 SH590、
土坑 SK588 (北東から)



(3) トレンチ南端土坑群
(南西から)





(1) トレンチ南端土坑群(東から)

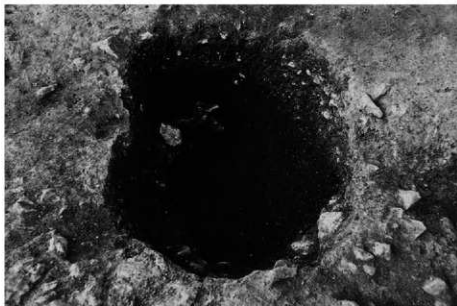


(2) 土坑 SK222 断面、
 竪穴式住居跡 SH520(南西から)



(3) 土坑 SK544・621 (南から)

(1)土坑 SK507(南から)



(2)柱穴 SP436 遺物出土状況
(東から)

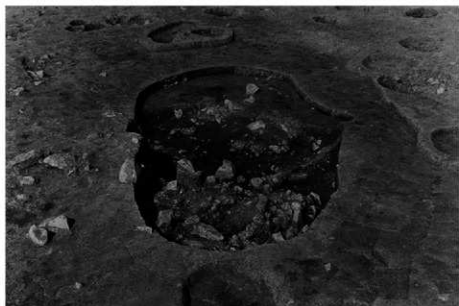


(3)柱穴 SP437 遺物出土状況
(南西から)





(1) 墓 ST545(南から)

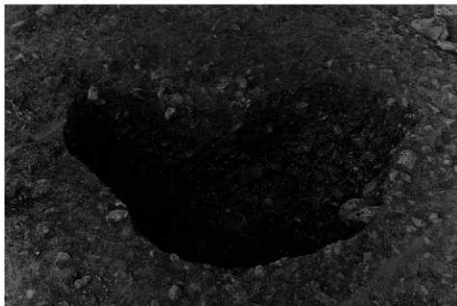


(2) 墓 ST620(南東から)



(3) 墓 ST554(南から)

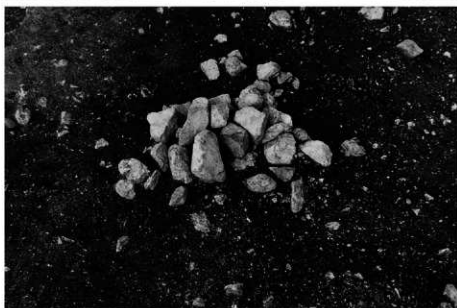
(1) 柱穴 SP559(南から)



(2) 土坑 SK540(南から)



(3) 不明土坑 SX346(南東から)





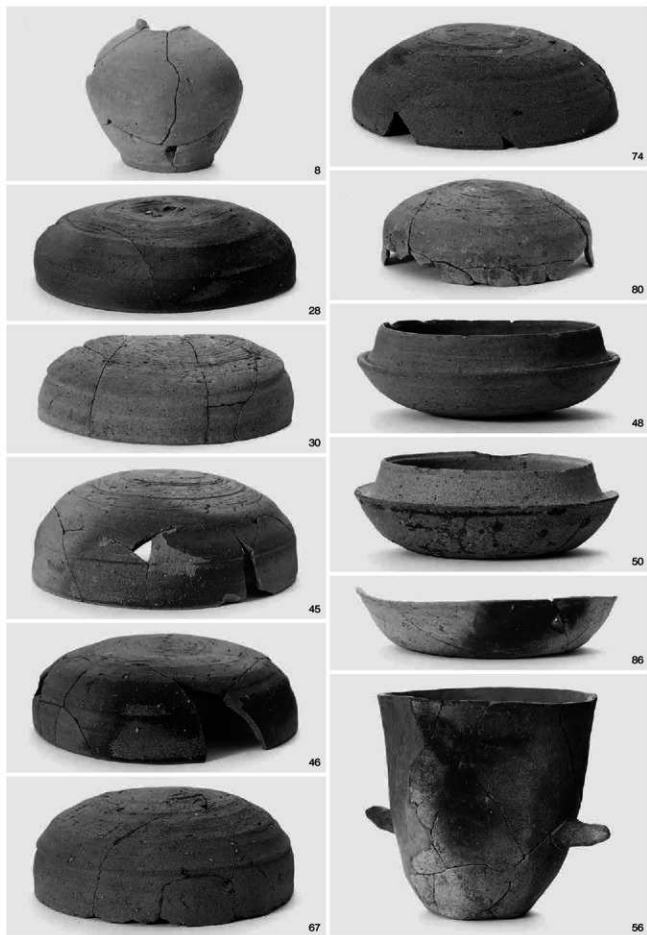
(1) 土坑 SK588 露検出状況
(北西から)



(2) 土坑 SK530 露検出状況
(南西から)



(3) 土坑 SP503 露検出状況
(南から)





15



212



118



77



101



155



217



217



155



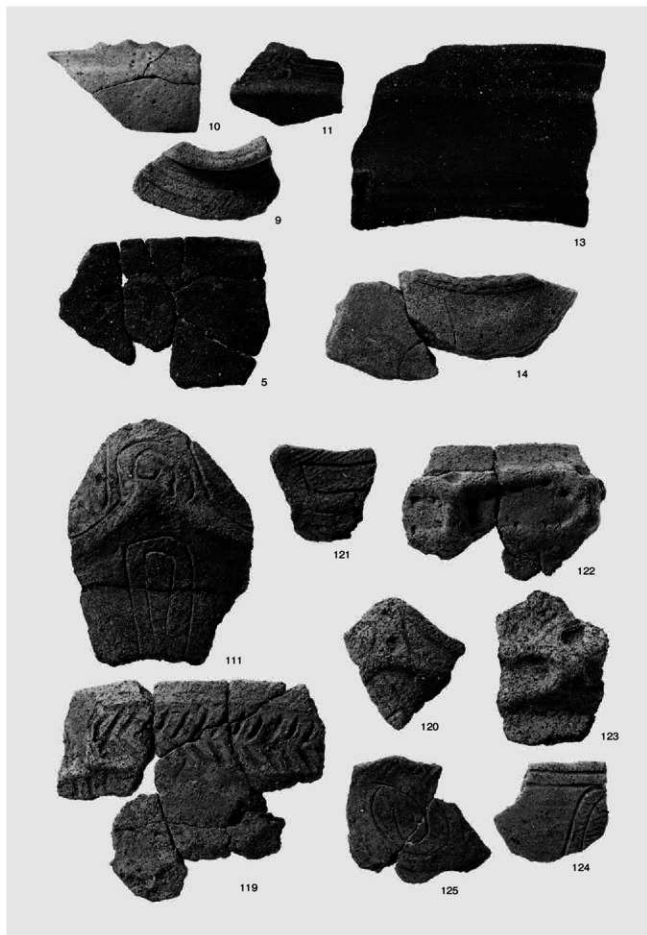
59

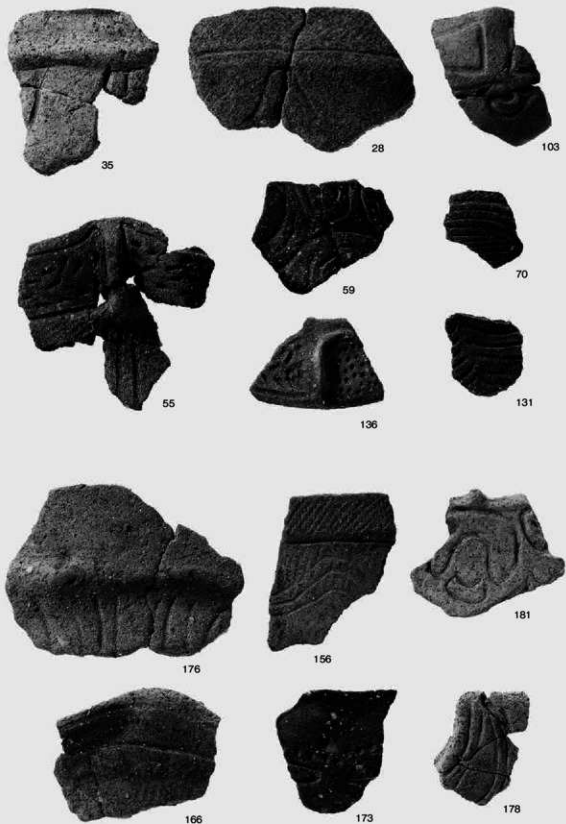


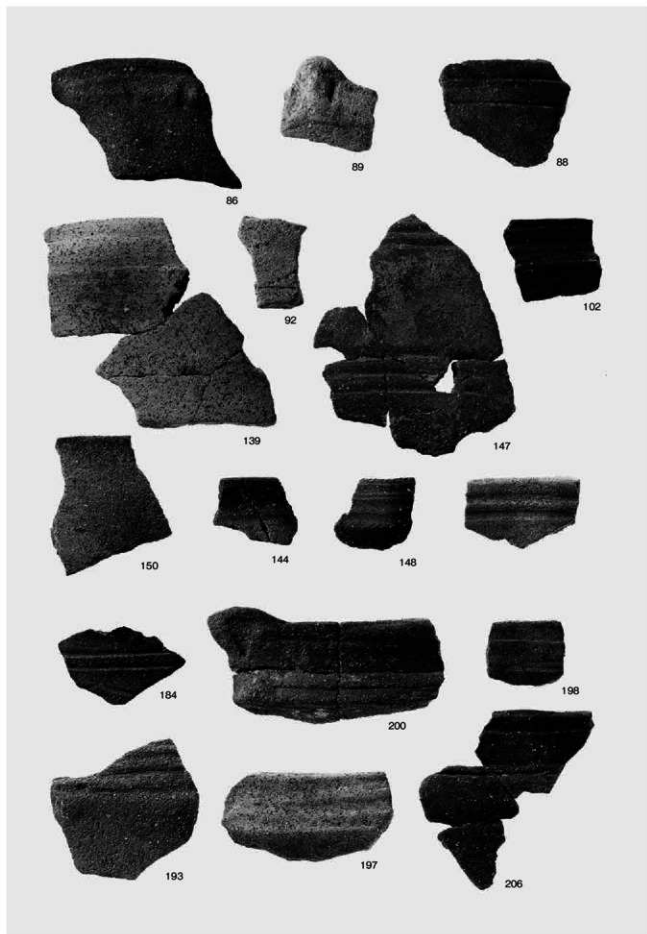
44

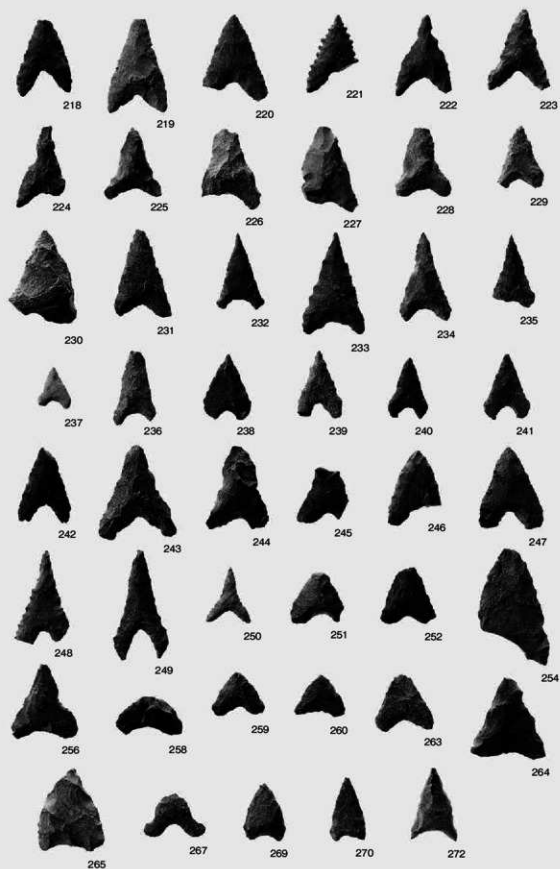


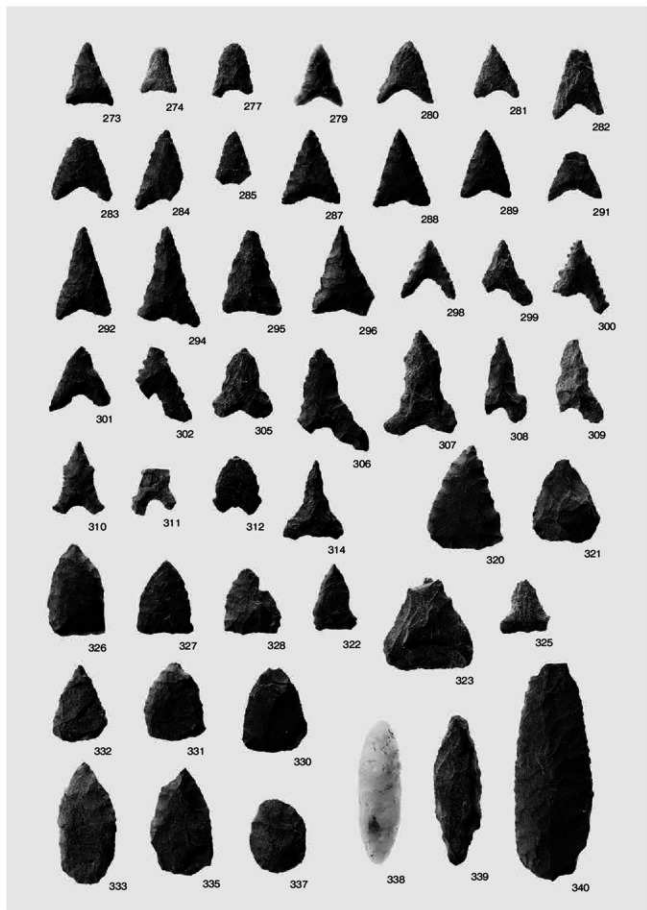
94

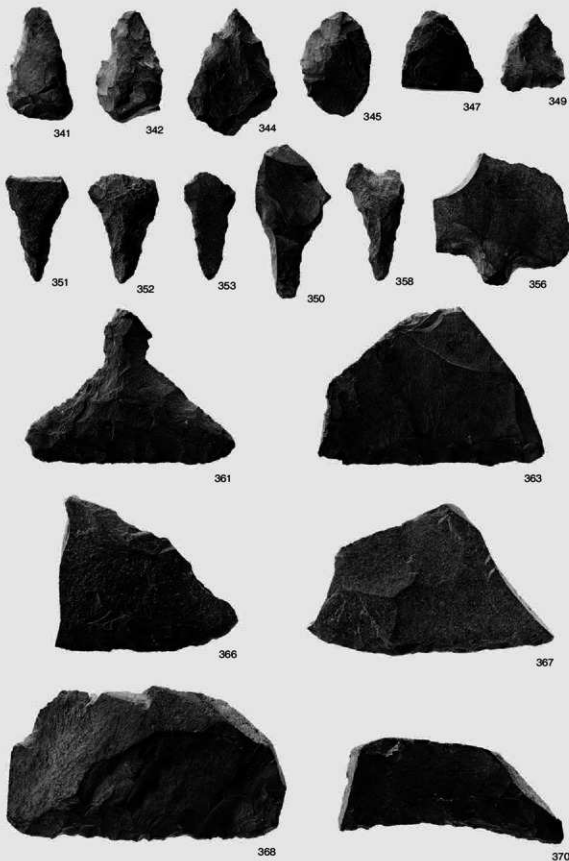


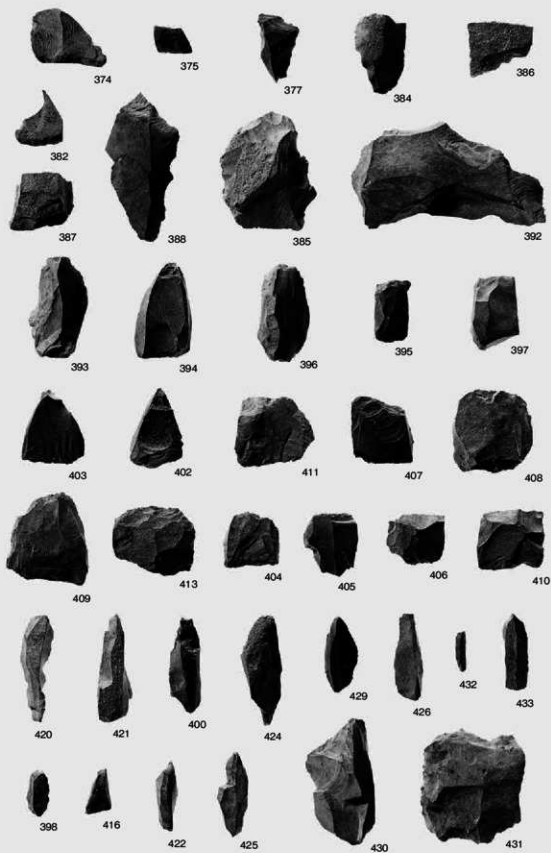


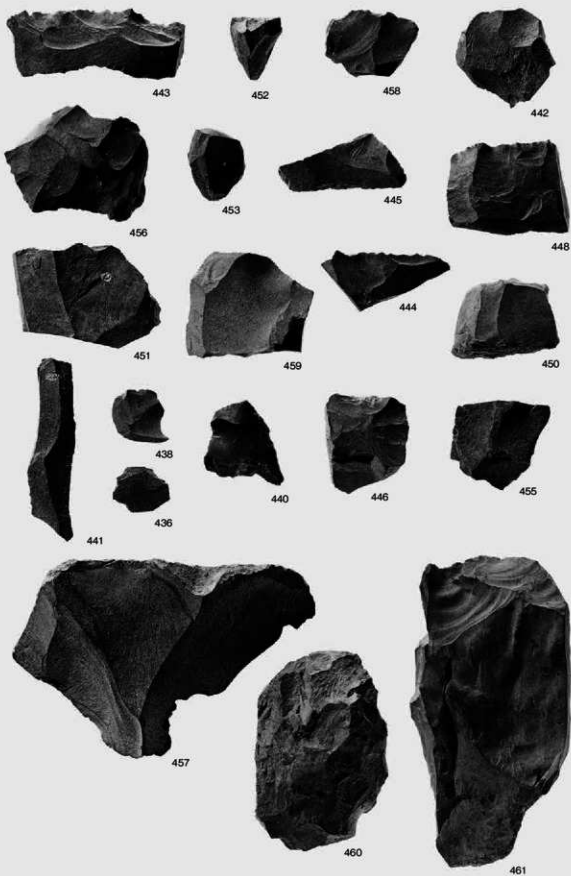


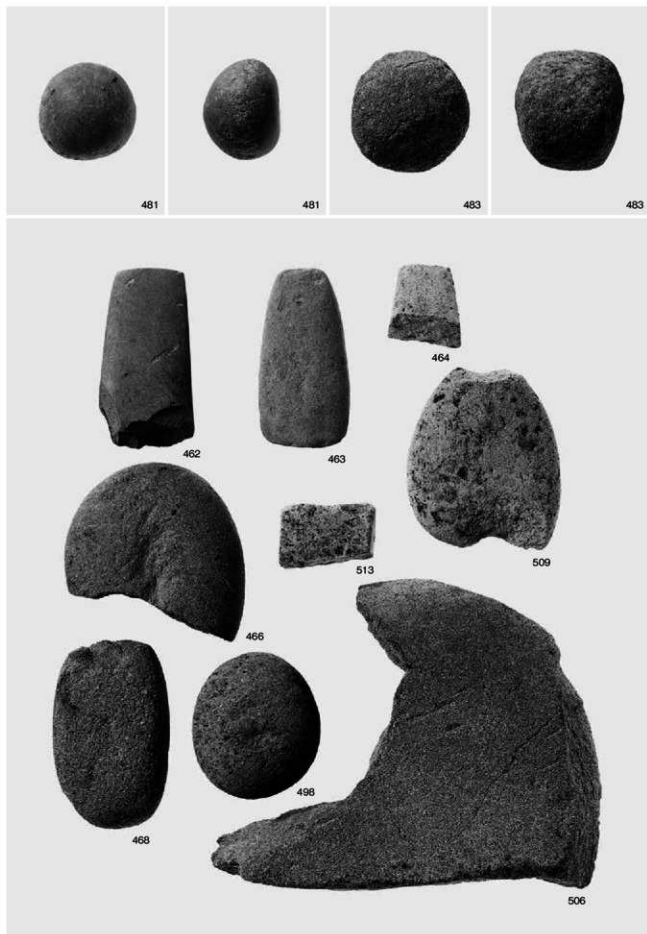


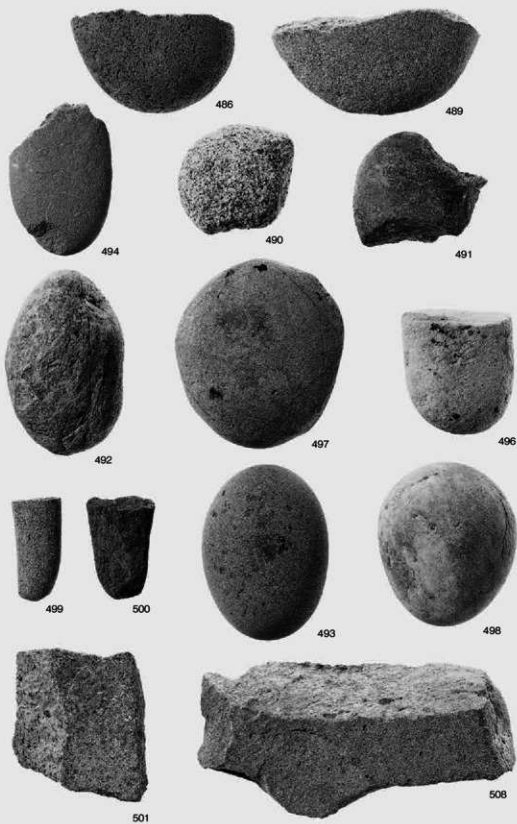












京都第二外環状道路関係遺跡 図版第 1

長岡京跡右京第 937 次・伊賀寺遺跡



(1) 上内田地区遠景 (北東上空から)



(2) 上内田地区全景 (上空から、右が北)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第 2

長岡京跡右京第 937 次・伊賀寺遺跡



(1) 上内田 - 1 地区土坑 SK1009 ~ 1015 近景(南西から)



(2) 上内田 - 2 地区溝 S D 2001 ~ 2004 近景(南西から)

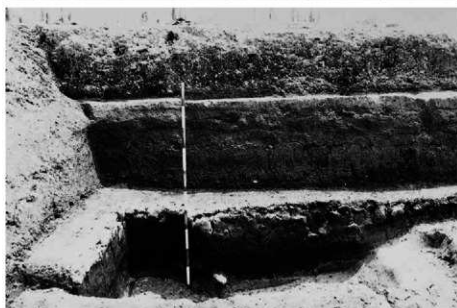
(1) 上内田 - 1 地区
素掘り溝群近景(東から)



(2) 上内田 - 1 地区
素掘り溝群近景(南から)



(3) 上内田 - 1 地区
溝 SD1001(C-C')
堆積状況(西北西から)





(1) 上内田 - 1 地区
溝 SD1001(B - B')
堆積状況(南西から)

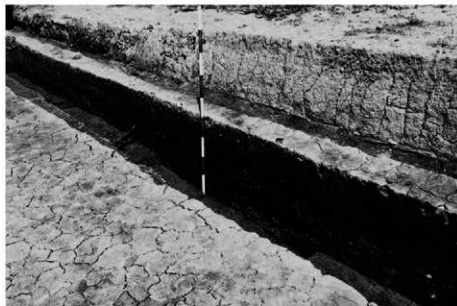


(2) 上内田 - 1 地区
溝 SD1001(A - A')
堆積状況(南東から)



(3) 上内田 - 1 地区
石包丁出土状況(東から)

(1) 上内田 - 2 地区
溝 SD2001 (G - G')
堆積状況 (南西から)



(2) 上内田 - 2 地区
溝 SD2001 (G - G')
堆積状況 (北西から)



(3) 上内田 - 2 地区
溝 SD2001 (E - E')
堆積状況 (北東から)





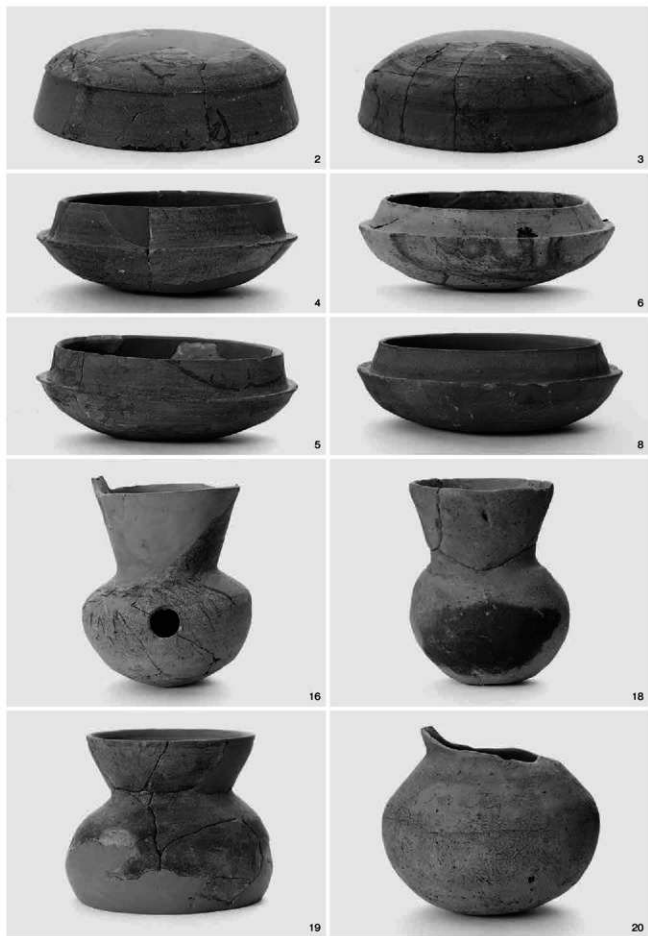
(1) 上内田 - 2 地区
溝 SD2001 (E - E')
堆積状況 (北東から)



(2) 上内田 - 2 地区
溝 SD2002 ~ 2004
柱穴群近景 (東から)



(3) 上内田 - 2 地区
柱穴群近景 (西から)





12



14



26



24



31



30



49



48



(1) 伊賀寺地区調査地全景(南上空から)



(2) 伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05(左)・SH02(右)(上空から、上が南西)



(1) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡SH05近景
(北東から)



(2) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡SH05袋状土坑
土器出土状況(北西から)



(3) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡SH05袋状土坑
完掘状況(北西から)

- (1) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡SH05
土器出土状況(北西から)



- (2) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡SH05
袋状土坑断面(北東から)



- (3) 伊賀寺地区
溝SD01近景(南から)





(1) 伊賀寺地区
土坑SK03断面(南から)

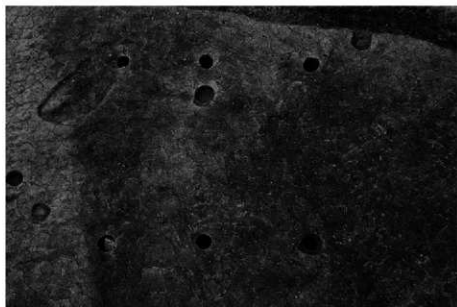


(2) 伊賀寺地区
土坑SK03近景(東から)



(3) 伊賀寺地区
竪穴式住居跡 S H02・
土坑SK03近景(東から)

(1) 伊賀寺地区
掘立柱建物跡SB06(東から)

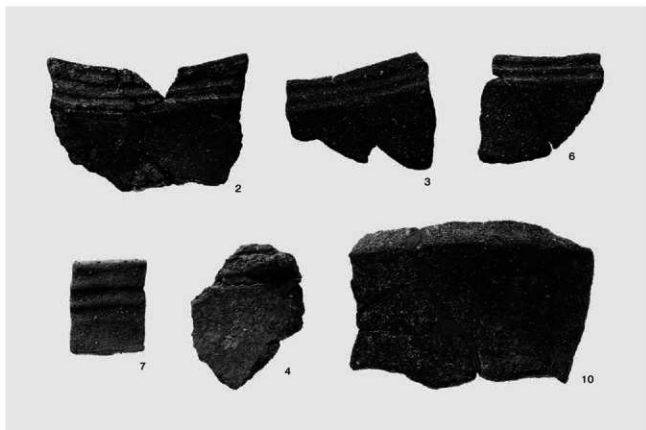


(2) 伊賀寺地区
トレンチ南壁断面・
溝SD04近景(北から)

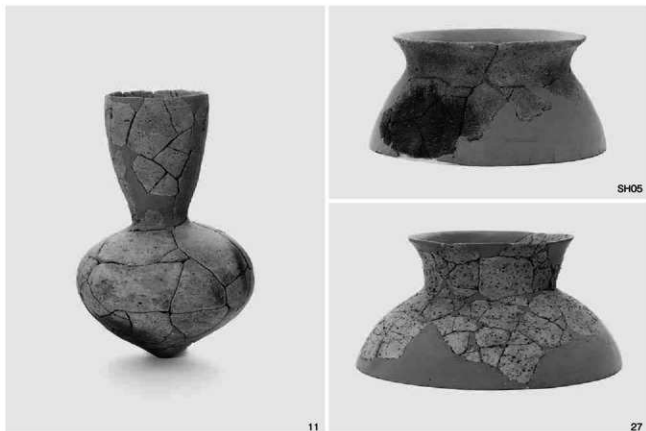


(3) 伊賀寺地区
トレンチ東部断ち割り断面
(南から)





(1) 伊賀寺地区出土遺物(1)



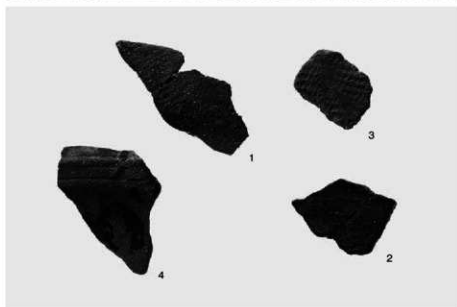
(2) 伊賀寺地区出土遺物(2)



(1) 樽井地区全景(北西から)



(2) 樽井地区北壁断面(南から)



(3) 樽井地区出土遺物



(1) 下内田地区
第 1 トレンチ近景(北西から)



(2) 下内田地区
第 2 トレンチ近景(北東から)



(3) 下内田地区
第 3 トレンチ近景(南から)



(1) 方丸地区調査地近景(南から)



(2) 方丸地区拡張後近景
(南東から)



(3) 方丸地区南東部近景(西から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第18
長岡京跡右京第947次・下海印寺遺跡



(1) 菩提寺地区調査地近景
(南東から)



(2) 菩提寺地区南東部近景
(北東から)



(3) 駿河田地区調査地近景
(北西から)

(1) 駿河田地区調査地全景
(南東から)

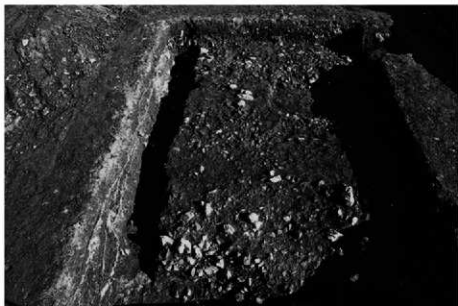


(2) 駿河田地区調査地近景
(南西から)



(3) 駿河田地区断面(B-B')
(南東から)





(1) 方丸地区調査地近景
(南西から)



(2) 方丸地区断面(A-A')
(東から)



(3) 方丸地区遺物出土状況
(南東から)

(1) 方丸地区土坑S K01近景
(南西から)



(2) 尾流地区調査地近景
(北西から)



(3) 尾流地区断面(A-A')
(北西から)





(1) 西条地区第5トレンチ・土塁状遺構全景(南東から)



(2) 西条地区第5トレンチ・溝S D01近景(南東から)

(1) 西条地区第1トレンチ近景
(西から)



(2) 西条地区第1トレンチ南東部
(北西から)



(3) 西条地区第2トレンチ近景
(西から)





(1) 西条地区第4トレンチ
拡張部近景(南東から)



(2) 西条地区第5トレンチ
東部近景(東から)



(3) 西条地区第5トレンチ
溝S D01内遺物出土状況
(南から)

(1) 西条地区第6トレンチ近景
(北西から)



(2) 西条地区第6トレンチ
溝S D01断面(北から)



(3) 西条地区第6トレンチ近景
(東から)



京都第二外環状道路関係遺跡 図版第26
長岡京跡右京第956次・奥海印寺遺跡



(1) 荒堀地区第1～3トレンチ
全景(東から)



(2) 荒堀地区第2トレンチ近景
(東から)



(3) 荒堀地区第2トレンチ
拡張部南壁(北東から)

(1) 荒堀地区第4～6トレンチ
全景(西から)



(2) 荒堀地区第4トレンチ近景
(西から)



(3) 荒堀地区第4トレンチ
池沼状遺構(南東から)





(1) 荒堀地区第6トレンチ近景
(西から)



(2) 高山地区トレンチ全景
(南東から)



(3) 高山地区トレンチ
断ち割り断面(北から)



(1) 西条-1地区近景(西から)



(2) 西条-2地区近景(北東から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第30
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡



(1) 西条-1地区西壁断面
(東から)



(2) 西条-1地区調査地断面
(A-A')(南東から)



(3) 西条-1地区調査地断面
(B-B')(東から)



(1) 西条-1地区不明遺構
SX95704近景(東から)



(2) 西条-1地区不明遺構
SX95702近景(東から)



(3) 西条-1地区不明遺構
SX95702焼土断ち割り
(西から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第32
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡



(1) 西条-1地区掘立柱建物跡
SB95706近景(北から)



(2) 西条-1地区掘立柱建物跡
SB95706近景(北西から)



(3) 西条-1地区横列SA95709
近景(西から)

(1) 西条-1地区溝SD95701
断面・遺物出土状況(東から)



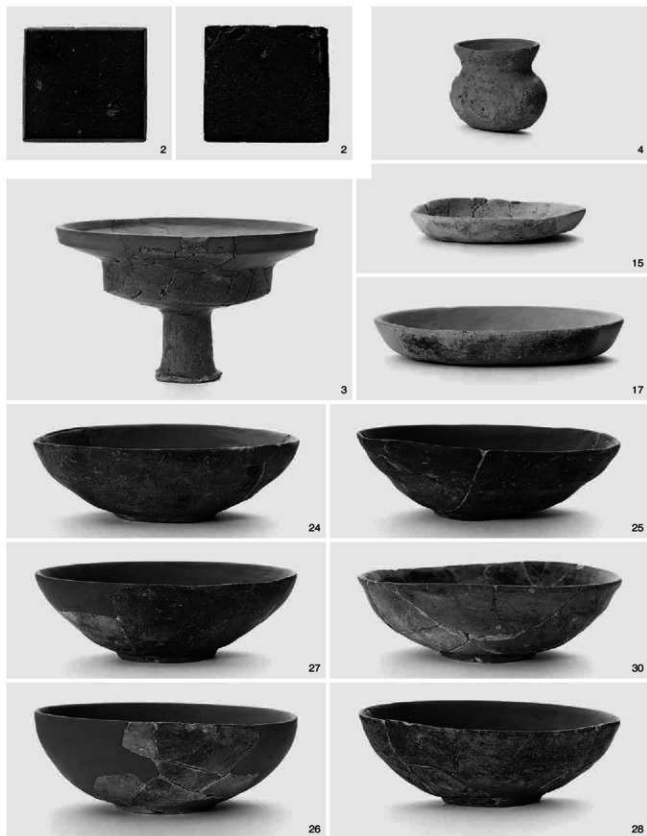
(2) 西条-1地区溝SD95701
近景(東から)



(3) 西条-2地区遺物出土状況
(東から)



京都第二外環状道路関係遺跡 図版第34
長岡京跡右京第956・957次・下海印寺遺跡

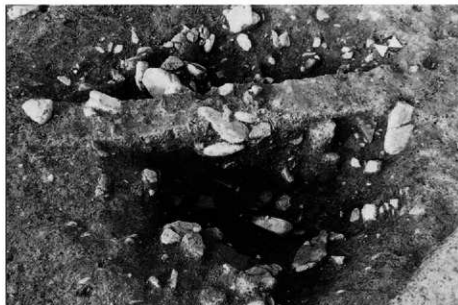


方丸地区・西条地区出土遺物(石製巡方のみ第956次方丸地区出土)

(1)尾流地区調査地西南部
土坑SK97検出状況
(北西から)



(2)尾流地区土坑SK80検出状況
(北から)



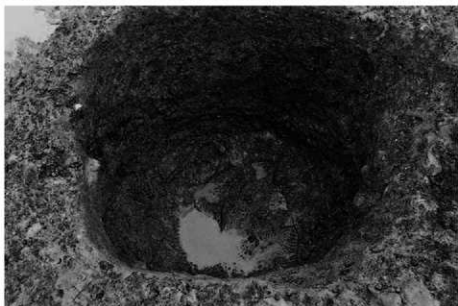
(3)尾流地区土坑SK80完掘状況
(南から)



京都第二外環状道路関係遺跡 図版第36
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



(1) 尾流地区土坑SK97検出状況
(北から)



(2) 尾流地区土坑SK97完掘状況
(南から)



(3) 尾流地区土坑SK105
上層検出状況(北から)

(1) 尾流地区土坑SK105
下層検出状況(南から)



(2) 尾流地区土坑SK93検出状況
(東から)



(3) 尾流地区竪穴式住居跡
SH58検出状況(東から)



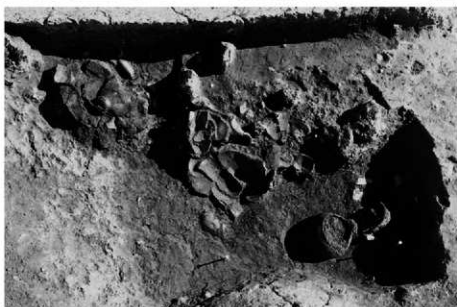
京都第二外環状道路関係遺跡 図版第38
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



(1) 尾流地区竪穴式住居跡
SH58完掘状況(東から)



(2) 尾流地区竪穴式住居跡
SH58内遺物出土状況
(北から)



(3) 尾流地区貯藏穴SK94
検出状況(北から)

(1)尾流地区壑穴式住居跡SH58
内炉跡SK93検出状況
(北から)



(2)尾流地区壑穴式住居跡SH58
内砥石出土状況(北から)



(3)尾流地区土坑SK54検出状況
(西から)



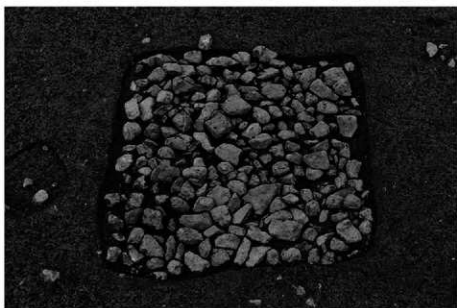
京都第二外環状道路関係遺跡 図版第40
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



(1)尾流地区掘立柱建物跡SB06
検出状況(西から)

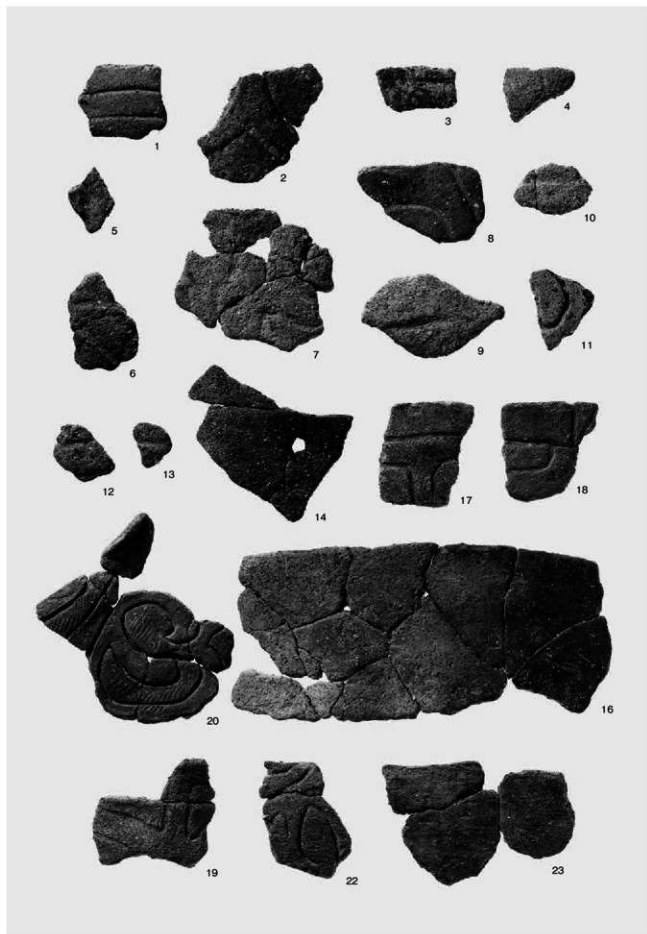


(2)尾流地区掘立柱建物跡SB60
検出状況(北から)



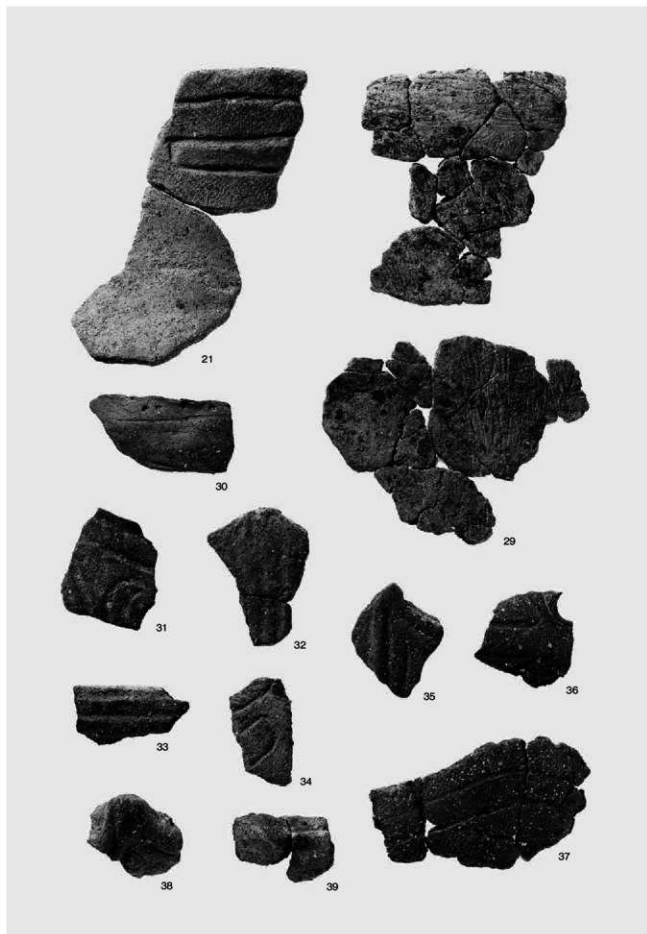
(3)尾流地区土坑SK05検出状況
(南から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第41
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



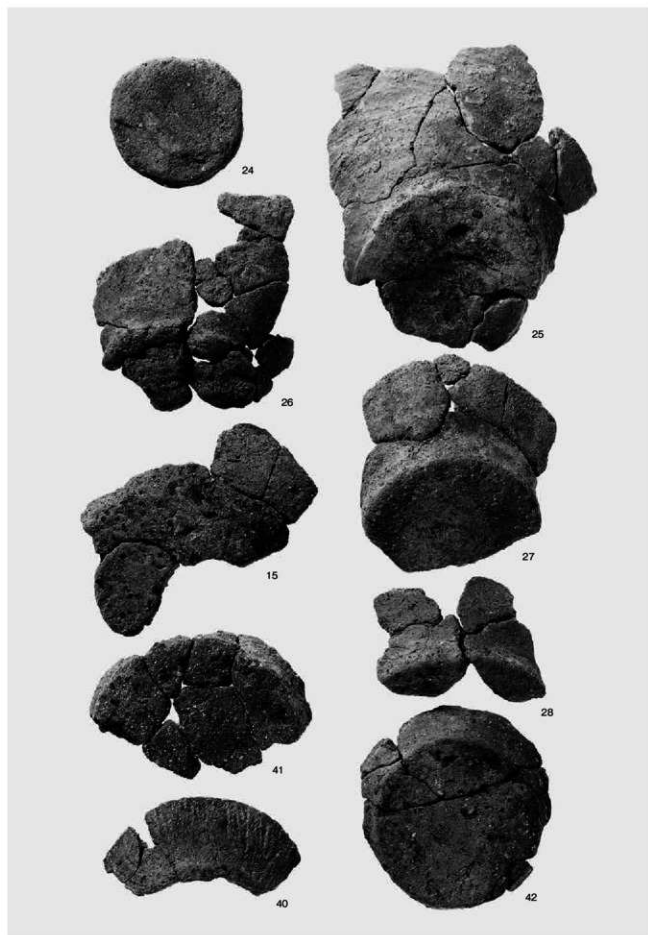
尾流地区出土遺物(1)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第42
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



尾流地区出土遺物(2)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第43
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



尾流地区出土遺物(3)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第44
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡



63



72



53



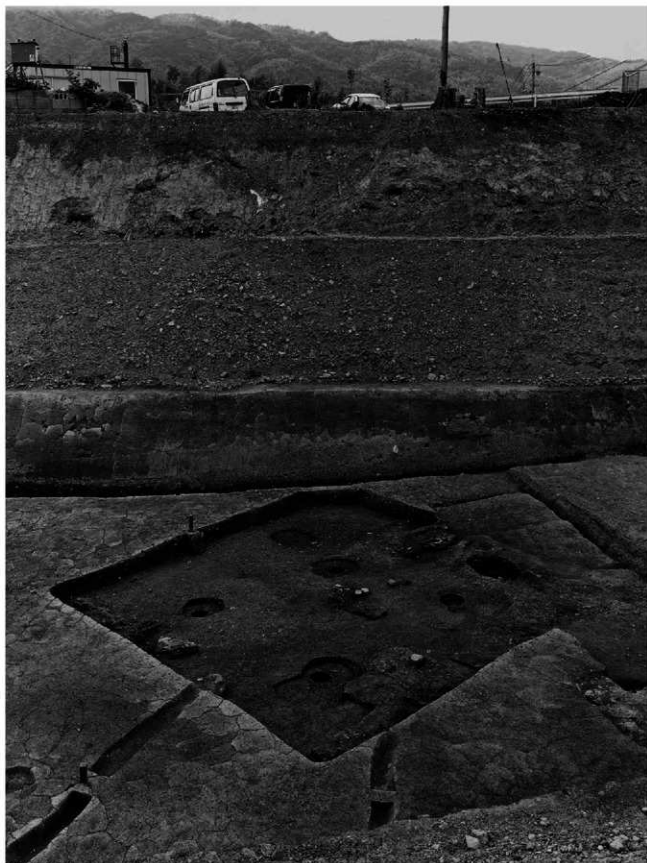
54



44



43



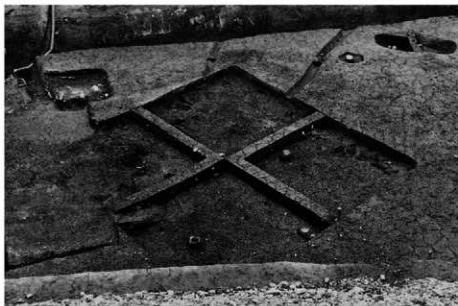
竪穴式住居跡 SH02 全景(東から)



(1) 調査前風景(南西から)



(2) 調査地全景(西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02 焼土層・炭化材検出状況(西から)

(1) 竪穴式住居跡 SH02
南東部の焼土層・炭化材
検出状況(南東から)



(2) 土坑 SK05 土器出土状況
(南から)



(3) 土坑 SH06 土器出土状況
(西から)





(1) 竪穴式住居跡 SH02
土器出土状況(北西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02
土器出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02
土器出土状況(南西から)

(1) 竪穴式住居跡 SH02
遺物出土状況(東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02
竈検出状況(南東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02
貯蔵穴土器出土状況
(南東から)





(1) 竪穴式住居跡 SH02 完掘状況
(東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02
竈断割り状況(南東から)



(3) トレンチ東壁断面(西から)



3



8



4



9



5



10



6



11



7



12



13



14



15



16



18



17



19



(1)調査地全景(北東から)



(2)トレンチ全景(上が北)



(1) トレンチ全景(北東から)



(2) トレンチ全景(南西から)



(3) トレンチ全景(北から)

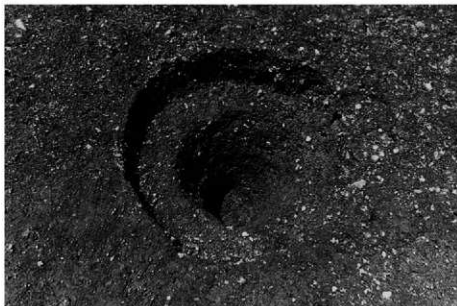
(1) 竪穴式住居跡 SH01 全景
(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH01
竈周辺土器出土状況
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH01
北西柱穴(南から)





(1) 竪穴式住居跡 SH01
土器出土状況(西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH10
土器出土状況(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH10
土器出土状況(南から)

(1) 竪穴式住居跡 SH01
竈検出状況(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH01
竈断面状況(南東から)



(3) 土坑 SK08 アゼ断面(北から)





(1) 竪穴式住居跡 SH10
アゼ断面(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH10
完掘状況(北東から)



(3) トレンチ西壁断面(東から)



1



9



8



19



2



16



7



12



17



14



23



21



22



13



15



10



26

(1)調査前状況(西から)



(2)横穴検出状況(南東から)



(3)作業状況(北から)





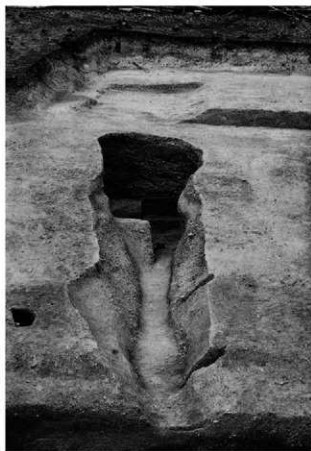
横穴 SX 1・2 全景 (東から)



(1)横穴 SX 1・2 全景(南東から)



(2)横穴 SX 1・2・5 検出状況(南東から)



(1)横穴 SX 1 全景(南東から)



(2)横穴 SX 1 玄室入り口(南東から)



(3)横穴 SX 1 全景(北西から)



(3)横穴SX 1墓道先端付近断面(南東から)



(4)横穴SX 1玄室内土器出土状況(北西から)



(1)横穴SX 1玄室入り口付近断面(北東から)



(2)横穴SX 1墓道中央付近断面(南東から)



(3)横穴SX 1鉄鑿(11)出土状況(北から)



(4)横穴SX 1鉄鑿(12)出土状況(北東から)



(1)横穴SX 1玄室内土器出土状況(北から)



(2)横穴SX 1耳環出土状況(北東から)



(1)横穴 SX 2 全景(南東から)



(2)横穴 SX 2 玄室入り口(南東から)



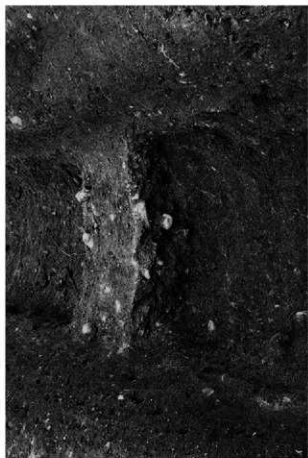
(3)横穴 SX 2 全景(北西から)



(1)横穴SX 2墓道内通路出口状況(東から)



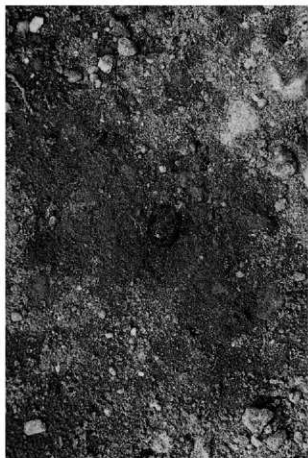
(2)横穴SX 2墓道断面(南東から)



(3)横穴SX 2墓道内土坑断面(南東から)



(4)横穴SX 2墓道内通路遺物出土状況(南から)



(3)横穴 SX 2 耳環出土状況(北から)



(4)横穴 SX 2 玄室内遺物出土状況(北西から)



(1)横穴 SX 2 遺物出土状況(南東から)



(2)横穴 SX 2 埴瓶出土状況(北東から)



(3) 横穴 SX 3・4 検出状況(北東から)



(4) 2 トレンチ全取(南から)



(1) 土坑から SK 6 検出状況(南西から)



(2) 調査地西部部検出谷部(南西から)





報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第137冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel.075 (933) 3877
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こうもりきたいせきだ いはちじ 河守北遺跡第8次	ふくちやましおお えちようこうもり 福知山市大江町河 守	26201 O19	35° 23' 34"	135° 8' 56"	20090430 ～ 20090616	150	道路建設
ながおかきようあとう きようだいきゆうひゃ くごじゆうにじ・いの うちいせき 長岡京跡右京第952次・ 井ノ内遺跡	ながおかきようし いのうちよこがは た・いまぎとご ちようめ 長岡京市井ノ内 横ヶ端・今里5丁 目	26209 15・107	34° 56' 21"	135° 41' 9"	20080924 ～ 20090129	680	道路建設
ながおかきようあとう きようだいきゆうひゃ くよんじゆういちじ・ ともおかいせき・いが じいせき 長岡京跡右京第941次・ 友岡遺跡・伊賀寺遺跡	ながおかきようし もかいいんじい がじ・しもうちだ 長岡京市下海印寺 伊賀寺・下内田	26209 96・97・ 107	34° 54' 58"	135° 41' 17"	20080424 ～ 20081031	2,200	道路建設
きょうとだいにそとか んじょうどうろかんけ いいせき おくかい いんじいせき 京都第二外環状道路関 係遺跡 奥海印寺遺跡	ながおかきようし おくかいいんじあ らぼり・たかやま・ するがでん 長岡京市奥海印寺 荒畑・高山	26209 68	34° 55' 18"	135° 40' 24"	20080617 ～ 20090226	300	道路建設
きょうとだいにそとか んじょうどうろかん けいいせき ながお かきようあとうきよう だいきゆうひゃくよん じゆうなな・きゆうひゃ くごじゆうろく・きゅ うひゃくごじゆうな な・しもかいいんじ いせき 京都第二外環状道路関 係遺跡 長岡京跡右京 第947・956・957次・下 海印寺遺跡	ながおかきようし しもかいいんじほ だいいじ・かたまる・ にしじょう 長岡京市下海印寺 駿河田・菩提寺・ 方丸・尾流・西条 海印寺遺跡	26209 95・107	34° 55' 11"	135° 40' 44"	20080617 ～ 20090226	830	道路建設

長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 都城	弥生 古墳 奈良 長岡京	溝 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡 掘立柱建物跡 溝	弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・須恵器	
長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	集落跡 集落跡 都城	縄文 古墳 長岡京	竪穴式住居跡・土坑・ピット 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑・ピット 溝・土坑	縄文土器(中・後期)・石鏃・石鏃・石匙・削器・翡翠小玉 土師器・須恵器・碧玉製玉 土師器・須恵器・瓦・釘	
京都第二外環状道路関係遺跡 興海印寺遺跡	集落跡 都城	古墳 長岡京期	溝・ピット 溝・ピット	土師器・須恵器 土師器・須恵器	
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第947・956・957次・下海印寺遺跡	集落跡 都城 集落跡	古墳 長岡京期 中世	掘立柱建物跡・溝・土坑・ピット 溝	土師器・須恵器 石製巡方 土師器・瓦器	
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡	集落跡 集落跡 集落跡	縄文 弥生 奈良	土坑 竪穴式住居跡・土坑 掘立柱建物跡・土坑	縄文土器(後期・晩期) 弥生土器 土師器・須恵器	
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第937・947次・伊賀寺遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡	縄文 弥生 古墳 中世	流路跡 竪穴式住居跡 流路・土坑群 素掘り溝群	縄文土器(中期～晩期) 弥生土器 土師器・須恵器 瓦器	
長岡京跡右京第971次・松田遺跡	集落跡	古墳	竪穴式住居跡・土坑	土師器・須恵器	
長岡京跡右京第974次・松田遺跡	集落跡	古墳	竪穴式住居跡・土坑	土師器・須恵器	
女谷・荒坂横穴群第10・11次	横穴	古墳	横穴・土坑	須恵器・土師器・鉄鏃・耳環	

所収遺跡名	要 約
河守北遺跡第8次	古墳時代中期の柱穴を検出するとともに、中世末期から近世前期の蓋石をもつ上水用の石組み溝や木組みの溝を検出した。河守城下の街道筋に形成された宿場町の新たな拡がりを確認した。
長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡	長岡京跡の推定西三坊大路西側溝のほか、弥生時代後期の溝、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物跡と竪穴式住居跡などを確認した。

長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	縄文時代後期の竪穴式住居跡8基、土坑・ピット約220基のほか、古墳時代後期の竪穴式住居跡8基・掘立柱建物跡1棟、長岡京期の溝2条・土坑を検出した。特に縄文時代後期の集落跡は、周辺での調査が進み、乙訓地域でも最大級の集落であることがわかりつつある。長岡京期の溝は真東西よりやや振れるものの、敷地を大きく区画する溝と判断され、長岡京の南西部における土地利用を明らかにする上で貴重な知見となった。
京都第二外環状道路関係遺跡 奥海印寺遺跡	奥海印寺遺跡では、古墳時代後期の土器が出土し、ピットなどの遺構を確認した。
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第947・956・957次・下海印寺遺跡	右京第947・956・957次調査では、古墳時代の掘立柱建物跡や中世の溝などの遺構を確認した。
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡	右京第957次調査では、縄文時代後期の土坑や弥生時代末の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡などの遺構を確認した。
京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡右京第937・947次・伊賀寺遺跡	右京第937・947次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡や土坑などを確認した。また、流路内堆積層から縄文時代中期から晩期の土器が出土した。
長岡京跡右京第971次・松田遺跡	古墳時代後期の竪穴式住居跡1基のほか、土坑2か所、溝2条を検出した。竪穴式住居跡には多数の炭化材が含まれ、焼失住居と思われる。
長岡京跡右京第974次・松田遺跡	古墳時代中期の竪穴式住居跡2基と土坑1か所、溝1条を検出した。竪穴式住居跡2基のうち、1基には北西辺中央部で土師器高杯を支脚に転用した竈が据えられていた。
女谷・荒坂横穴群第10・11次	古墳時代後期から飛鳥時代の横穴5基の存在を確認した。そのうち、2基の横穴を床面まで調査し、須恵器・土師器のほか、耳環・鉄鏝・刀子などが出土した。

京都府遺跡調査報告集 第137冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141